KAIZO

改造

三月號

1926

大正十五年三月一日發行（毎月一回一日發行）


松屋のお雛さま
日本の優美な國民性を象徴した典雅な麗はしいお雛さまを澤山に取り揃へて御座います
東京・銀座
松屋呉服店



改造三月號目次

一頁辯

創作

同館發行圖書新刊と增刷目錄

刊

曲　…としてのペスタロッ…

ペスタロッチを脚色せるものとして世界最初の書

本書は百年後の今日なほ禮讃渇仰措くあたはざるペスタロッチの全生涯を五篇に分ちて脚色せるものである。悲忻慘憺波瀾重疊の生涯の上にいみじくも一枚の花と薫ずる夫人アンナとの戀愛物語彼の人生の春は「魂の彈力」「金メッキの家」の二篇に七色八色の珊瑚珠の如く織込まれ。貧民學校の庭は「ノイホフの晩春」に於て乳色の眞珠の如く光つてゐる。彼の生立は「二葉の心」に晩年に於ける悲壯の運命のもつれは「イフエルテンの沒落」にしつとりと溶けこんでゐる。各篇とも眞に血あり肉あり情あり慾ありて讀み行くまゝに彼の神性にうたれて心臟をえぐり肺腑をつかれて涙なくしてはゐられぬのである。

定價金貳圓八拾錢　送料十八錢

書名	著者	定價	送料
カント哲學批判	大關增次郎	正價金貳圓	送料十八錢
カント研究（三版）	大關增次郎	七圓八拾錢	送料卅六錢
西洋哲學史講義	高橋敬視著	參圓八拾錢	送料十八錢
高尚な理論平易に講義 哲學概論	市川一郎譯	四圓八拾錢	送料十八錢
教育の基礎たる哲學	吉田熊次郎 市川一郎著	貳圓五拾錢	送料十八錢
タゴール哲學文藝	吉田絃二郎	貳圓五拾錢	送料十八錢
ベルクソンと現代思潮	野村隈畔著	貳圓五拾錢	送料十八錢
オイケンの哲學	稻毛詛風著	壹圓六拾錢	送料十二錢
最新哲學辭典	渡部政盛著	五圓八拾錢	送料廿七錢
エレンケイ女史原著 兒童の世紀	原田實譯	貳圓五拾錢	送料十八錢
ペスタロッチ全集	市川小關著	貳圓五拾錢	送料十八錢
大鏡活釋	小林榮子著	貳圓五拾錢	送料十八錢
竹取物語新釋	福永弘志著	壹圓參拾錢	送料十二錢
改訂古事記新釋	植松安著	貳圓五拾錢	送料十八錢
萬葉集 古今集 新古今集 選釋	石川誠著	正價金參圓	送料十八錢
太平記新釋	石田吉貞著	貳圓五拾錢	送料十八錢
現代詩歌新選	石川誠著	貳圓八拾錢	送料十八錢
現代田園文學新選	古屋利文著	正價金貳圓	送料十二錢

…田區…七地番
大同館發行
振替貯金口座 東京八七貳番

下・巻・出・來

駒澤大學長
文學博士
忽滑谷快天著

禪學思想史

▼禪家に未だ曾て思想史あらず、本書を以て嚆矢とす。著者は今春文學博士の學位を受く、本書は實にその博士論文である。

上下二巻總紙數壹千六百五十頁菊判總布製函入、肖像畫各三葉入

上巻 六圓五拾錢
下巻 六圓五拾錢

送料各―内地二十七錢 其他五十五錢

ラ・ス・キ・ン・著

此の後の者に	新刊	栗原古城譯	壹圓六拾錢 郵税十錢
鷲の巣	新刊	栗原古城譯	貳圓參拾錢 郵税十錢
胡麻と百合	六版	栗原古城譯	貳圓 郵税十錢
塵の倫理	三版	小林一郎譯	貳圓參拾錢 郵税十錢
永久の歡び	四版	栗原古城譯	壹圓八拾錢 郵税十錢
二ツの道	四版	小林一郎譯	貳圓參拾錢 郵税十錢

印度マドラス大學ナラス教授著
駒澤大學教授立花俊道譯

佛教の要諦

七版

▼佛教の智識を得んと欲する萬人の必讀書

▲釋尊彫像アジャンダ壁畫等の寫眞版十一頁入
▲四六判總布製・**價參圓貳拾錢**・郵税十二錢

全・三・巻・完・成

獨逸
ショーペンハウエル著
增富平藏譯

宇宙及人生

本書は獨逸の大哲學者ショーペンハウエルの大著『意志及び心識としての世界』の逐字的口語譯である、原書はニイチエ『一週日の間、二時に寢ね六時に起きて二千ページを讀破した』といった位深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有らゆる哲學書中の白眉を以て目さるゝ世界的名著である。

全三巻總紙數二千五百二十餘頁四六判九ポイント組、總布製、函入

上巻 四圓五拾錢
中下巻 各金四圓

郵税各十八錢

東京本郷西片町 **玄黃社** 電話小石川一三九番 振替東京七九九五番





眞正滋養
强壯食料品

家庭の幸福は
健康にあり
サナトーゲンは
保險に優さる

サナトーゲン

家庭の幸福は、まつたく懸つて、貴下の御健康にあります。なるほど、保險に依つて貴下が現在の財産を失ふことを防ぐことは出來るかも知れませんが**サナトーゲン**は保險以上に貴下の御爲めになります。卽ち**サナトーゲン**は貴下の健康を維持し活動力を增進して、從前よりも層一層の働をなし又此を樂しむことによりて、漸次その社會的地位を高めます。**サナトーゲン**は元氣と忍耐力の輝やかしい源泉を賦與することによりて、神經と頭腦とを强めます。貴下は事業を成功せしむるため、毎日規則正しく**サナトーゲン**をお召上りなさい。さあ、今**サナトーゲン**を御購求になつて、二三週間、御食事の度毎に御上り上さい。

貴下は必ず間もなくその恩恵的効果を經驗なさつて、すぐと往年の青春の氣力をまつたく恢復し、好き生活の悦樂を十分に御味ひなさることが出來るでせう。

二萬二千人以上の醫家が健康增進、元氣恢復劑として熱心に**サナトーゲン**を推奬して居ります。**サナトーゲン**は眞に恰適の强壯食料品です。

サナトーゲンは貴下の爲めにお役に立つばかりでなく、又貴下の御兄樣方にも、貴下の御家族にも御役に立ちます。

サナトーゲンは健康にして幸福なる家庭生活を建設します。

●全國到る處の藥店に販賣してゐます

興味津々たる
小冊子御要求
次第無代謹呈

サナトーゲン日本一手輸入元
神戸市海岸通一丁目英三番
ゼー、エル、タムソン株式會社
(神戸三宮郵便局私書函三十二號)

大林宗嗣著

セツルメントの研究

九ポイント組
四六判布装上製
函入三百頁

定價 壹圓八拾錢
送料十五錢

最新刊

大原社會問題研究所叢書第十一册

「東倫敦(イースト・ロンドン)――極貧勞働者町――はどうして救はるゝか?』とオックスフォード大學生等の一團が、エドワード・デニソンに質問した時に、彼は直ちに『西倫敦(ウエスト・ロンドン)――富豪住宅地――の破壞に依るのだ!』と答へた。東西の差別(人種)、貧富の隔離(社會階級)、それが當面の問題なのである。そして其處からセッツルメントが生れ出た。デニソンの激勵の言葉に感激して身を貧民窟に投げこんだ大學生等の一團を誰か安價なセンチメンタリズムに煩はされた青年等だと云ひ得やう。漫罵は何時の時代にもある。彼等はそうした冷評を聞きつゝセッツルメントの仕事を第一歩と築き上げて行つた。それが今日歐米に於て勞働者の教育運動並に社會改造運動の一傍系として嶄然頭角を顯はし來つたセッツルメントである。本書は出來るだけ廣い材料に依つて該運動の發達史を詳述し、又現狀を研究したものである。

瀧川政次郎著 ◇法制史より見たる**日本農民の生活**(律令時代) 近刊

エンゲルス著 竹内謙二譯 ◇**英國勞働者狀態** 近刊

發兌 東京神田西紅梅町 **同人社** 振替東京二七〇六五 電話大手五五八五番

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同しだと云ふ

煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部こ榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね！、驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね！全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸に近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷」を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

天下堂は銀座時事新報社の向つて左横通り左側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上**ニコチン**の中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生する時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（內地十八錢　臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（內地三十錢　臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引替小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店　**天下堂**

日本勞働總同盟調査部長 法學士 赤松克麿著 ◇新刊 ◇定價壹圓五拾錢 送料書留拾六錢

轉換期の日本社會運動

日本無産階級の指導原理!!

日本の社會運動は今重大な轉換期に直面してゐる。總同盟の共産主義狩りを目して日和見主義の誕生となし、或は評議會の主張をして極左傾的小兒病と稱し、近くは無産政黨樹立を控へて右翼左翼兩派の反撥排反等、日本社會運動は二つの分裂をなしつゝある。この分裂と混亂は果して社會運動が一定の階段に達するとき必然に經なければならぬ過程であらうかそれとも日本資本主義發達の特殊性に基づくものであらうか。本書はその間にあつて日本最大の勞働組合の鬪士として各地に蜂起する勞働爭議の戰線を馳驅して日本に於ける無産階級解放運動の現實性に根座せる原理と實際戰術とを確把せる著者の論文集である。彼の有名なる科學的日本主義の發生から最近に至る勞働總同盟の運動はこの著者の理論の影響する所、極めて大である。現下の日本社會運動を理解せんと欲する人々の貴重なる文献であり、轉換期の日本社會運動が生んだ。唯一の歴史的經典である。

發兌 東京市芝區八幡町二五 振替東京五九六〇〇番 厚生閣

經濟學博士 土方成美序 法學士 菱治勇譯 ロビンソン著

財政學

（われ／＼は用語の説明に過ぎない財政學書には飽いた。この欲求に適するのが本書

定價貳圓八拾錢 送料廿七錢

世界童話大系

—全二十二巻の要目—

第一 希臘、羅馬、伊太利、イソップ外
第二 獨逸(1) グリム童話集
第三 獨逸(2) ハウフ童話集
第四 北歐 アンデルセン童話集
第五 露西亞(1) アファナーシエフ
第六 露西亞(2) クルイロフ寓話集
第七 英國 ハートランド、ダグラス
第八 愛蘭 イエイツ、グレーブズ
第九 佛、和蘭、西班牙 ペロー外
第十 印度 ヂャータカ其外
第十一 波斯、土耳古 神仙譚外
第十二 亞剌比亞(1) 一千一夜譚
第十三 亞剌比亞(2) 一千一夜譚
第十四 亞剌比亞(3) 一千一夜譚
第十五 支那、臺灣童話集
第十六 日本、朝鮮、アイヌ集
第十七 世界童謡集上巻
第十八 世界童謡集下巻
第十九 童話劇 ペールギユント外五篇
第二十 童話劇 沈鐘外八篇
第廿一 童話劇 青い鳥外七篇
第廿二 童話劇 夏の夜の夢外十一篇

第二版 豫約募集

監修 松村武雄
　　 小山内薫

現代は童話の世紀＝萬家必備の書

あなたの御子さんの教養の爲にも、又、あなたの童心に培ひ、人間愛の本質に味到せしめんが爲にも必要です。

第一版締切後、久しい間御申込を斷つて居りましたが、今回第二版を刊行し、多數渴望せられた方々の御希望に添ふことに致します。此好機に於て御申込下さい。

實物見本提供

—親しく實物を知りたいといふ方々のために殊に實費で御頒ち致します—

『波斯土耳古篇』菊判七百五十頁。三色版凸版數多挿入。實費金五圓三拾錢（内地ハ郵稅不用 外國ハ二十錢要）

諸國童話集（三六版四十頁）及内容見本共進呈　郵券三錢封入の事

豫約締切 三月末日限

略規

▲豫約者にのみ頒つ。菊判洋布製每卷挿繪入天金八百頁頗美本▲申込金五圓。會費每月拂四圓八拾錢。一時拂壹百五圓也。（外に送本料を要す）四月より配本を開始す▲御希望の方は金五圓を添へ御申込み下さい。

發行所 京橋第一相互館 電話銀座四四六八番 振替東京六一一九八番 近代社

藤森成吉著

惱み笑ふ

定價一圓三十錢
郵送料十八錢

最新刊

惱みは暗く笑ひは明るい。藤森氏の此の作品集は實に明暗の接面、其處に綾なすユウモアの空氣色(エリアルチント)である。視點の角度によつて爆發の哄笑ともなり傷ましい生の惱みともなる。著者は曰ふ「現實の人生はあまりに不合理と悲哀を含む。笑ひでもするほか一日も過されないが、その笑ひは苦痛を母胎とする。惱みの影を伴はぬには世は矛盾に滿ちすぎてゐる。」と、讀め！老幼男女、惱める者、笑を欲する者、本書は吾人生くる日の淨化作用、寔に尊い藝術である。

藤森成吉著

東京へ

定價二圓三十錢
送料二十錢

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

菊池寛著

（卅五版）

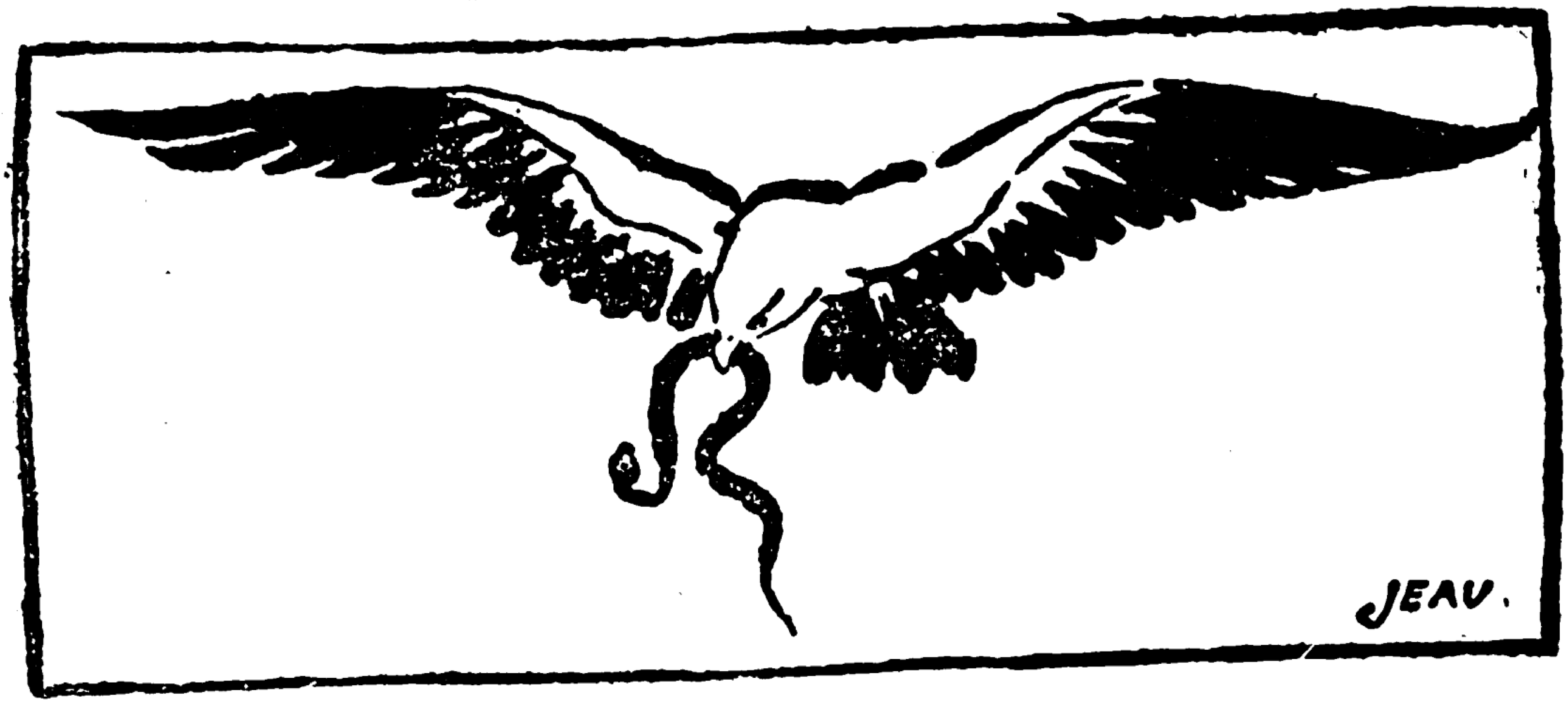
定價貳圓
送料廿錢

第二の接吻

In love between the pure and the foul, there is but a kiss.

戀愛に於て、淨きと淨からざるとの堺は、只一の接吻に在りと稱せらる。接吻すれば萬事休し、接吻すれば萬事始まる。接吻は戀愛の大轉機にして、間接に女性の運命の契機たり。二人の男女の最初の接吻に筆を起し、第二の接吻に筆を擱かんとす。まさに男女間の性愛の機微に筆を舞して、一個の戀愛爭鬪圖を描き來る。しかも前後二回の接吻共に誤れる接吻なりと云ふに至つては、作者の着想天馬を御して大空を馳けるが如し。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



（三月號）

幕間の休息と成長

見物と役者と實物ヒーローと、この三つの位置は社會思想及び社會運動にもある。ヨーロッパ戰爭、キルソンに象徴された政治的デモクラシ、またその戰爭に起縁した歐米の一般社會改造熱、これらは實物ヒーローだつた。これらに關しては、日本は比較的に役者及び見物だつた。

ロシヤ革命、それにまつはるマールクス主義、レーニン行動、これらは、前者の午後に午前の勢ひを示し來たつた新實物ヒーローだつた。

キルソンを浮彫とした第一社會黨的ヒロイズムは早くもヱルサイユ條約と共に、そしてレーニンを浮彫とした第二社會黨的ヒロイズムは早くも新經濟政策と共に、多少の錯愕と錯覺を發見させせられた。役者も前者のあとを追うて、奪魂的眩惑力あるものではなくなつて來た。

役者は、いかに眞劍に演じて見ても役者だ。見物は、どんなに懸命に感じて見ても見物だ。幕が引かれゝば、觀席でも、樂屋でも、人々は、多少、自然に平素及び本來の自己に歸る。

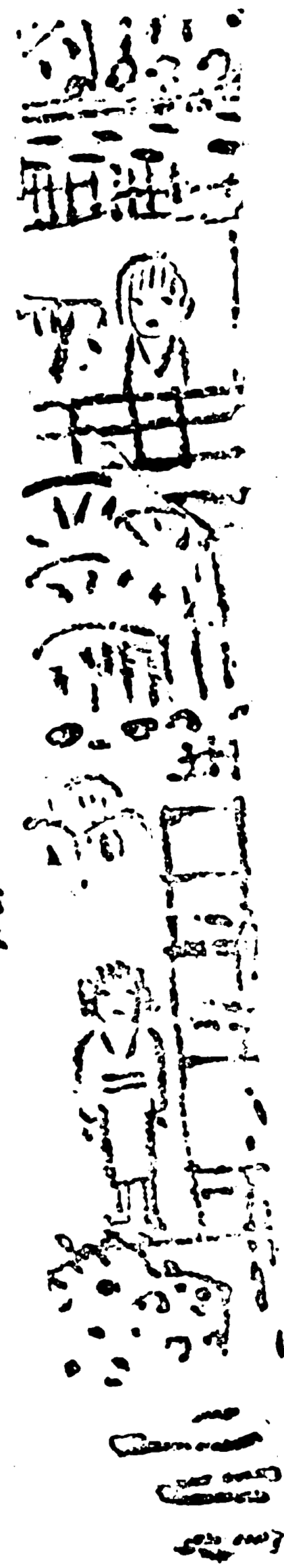
いろ〳〵の事情を考認させる最近の日本固有文化主義の一事情が、大小は別として、有樣のものでないとは考へられない。

同じく想源をヨーロッパにもつ産業文明倦怠の底流も、細いながらそれに助勢してゐるだらう。或人々は本居の窮策に歸するが、これなどは末梢因の一に過ぎまい。

第二維新を想ふ無意識衝動、そこで幕末の秘史やら平民俠やら、無論かういつた意味もそこには散見される。

現代日本がもつ人間性、それの各種離心事情と各種求心事情、本能深的習性としての傳統、民族、概念深的意識としての階級、普遍文化、さながら元龜天正の思想界は、雜多の亂舞象によつてすら揣測される。

模倣、自發、集、散、離、合、日本はいま運命によつて多少——否な最も劃時代的に試練されつゝある。



現實主義の陷穽

第二次無産政黨組織途上の障碍への警戒

大山郁夫

一 第二次無産政黨計畫の擡頭

昨年末に組織された農民勞働黨が、結黨式後數時間内に當局から解散を命ぜられたことは、所謂ブルジョアジーのディクテーターシップの完全な示現として、我國の無産大衆の血を沸き立たせたものであつた。が、それらの無産大衆が、當時一般世人から幾分か氣遣はれてゐたやうに、その熾烈なる憤激感を暴動の形式で外部に爆發させたやうなとはなく、その間よく堪へ難きに堪へ、忍び難きを忍んで、それを徐々に第二次無産政黨組織への熱情の方向へと轉換せしめて行つたのは、全く機宜に適した行き方だつたと言はねばならぬ。かうして彼等が、その際一點の取り亂した態度

をも見せないで、正々堂々と當面の事情の下に於て最善の途と見られた方向に就くことが出來たのは、一つには彼等が近年の惡戰苦鬪の中から得て來た貴重な經驗と訓練との成果――それは農民勞働黨の結黨式の圓滑なる進行の上にもその一端を見せた――のためであつたには相違ないが、しかし他面から見れば、それはまた同時に、我國の現狀の下に於て、無産政黨の成立といふことが、如何に我國の無産大衆の熱望と努力との焦點となつてゐるかを標示してゐるものでなければならぬ。

若し我國の支配階級が、農民勞働黨の禁遏といふが如き、××××××××××××××、××××權力の表示に對する、一時多少氣遣はれた全國的一大反抗運動が遂に沙汰止みになつたといふ一事に依つて、或ひは我國の無産大衆がその禁遏を是認して居るものであるとか、或ひはまた彼等が反抗の氣力を失つたものであるといつたやうな觀測を下し安心してゐるものとするならば、それは飛んでもない誤認だといはねばならぬ。尤も當時に於て、農民勞働黨の禁遏の不當を鳴らした聲は、少數の例外を別にしては、無産大衆の側から一齊に猛烈に擧げられたことであるから、支配階級にしても、よもやそれを聞き逃がしはしなかつたであらうが、しかし例の全國的反抗運動の勃發の懸念が具體化しなかつたのを見ては、彼等は或ひは、それに依つて幾分でも我國の無産大衆を見縊びるやうな氣持になつてゐないとも限らない。この點に關しては、彼等が當初それと反對の結果を見越して恐怖してゐたと否とは、問題ではない。由來支配階級が、或る場合には被支配階級の逆襲の脅威の前に戰慄することがあつても、それがそろそろ沈靜し始めると、却て反對に輕侮の念を發するやうになるものであることは、歷史的に證明されて來てゐる彼等の習性である。從つて我國の支配階級も、かうした傳統的心理から、彼等が懸念してゐた農民勞働黨の禁遏に對する全國的反抗運動の火の手の擧がらなかつたのを見て、恰もそれが無産大衆の戰鬪意志の減退を反映してゐるものでもあるかのやうに考へてゐる節

向が見えないのではない。が、若し彼等が果してさう考へてゐるものとすれば、それは既に示唆しておいた通りに、非常な速斷でもあれば、妄斷でもある。いかにも、農民勞働黨の組織計畫に參加した多くの人々の間には、政府が疾風迅雷の如き捷やさを以て、その成立したばかりの農民勞働黨を扼殺した暴狀に面して、抑へ難き憤激感の沸騰の餘りに、それに對する無産大衆の當然な反抗を表明するための全國的一大示威運動を提起する必要を絶叫したものが、少からずあつたことは事實である。けれども彼等は、間もなく彼等の瞬間的昂奮の鎭靜するに從つて、さうすることが畢竟、無産政黨の事實上の成立の時期を一日でも遲延させる結果を將來するにすぎないものであることを反省する餘裕を得るやうになつたのである。彼等は無産政黨の運命を、彼等の一片の感情――縱しそれは正當に『義憤』と呼ばれ得る感情であつたにもせよ――に繋がらしめようとするまでになるには、餘りに實際的であつた。彼等が過去幾個月に亘つて、無産政黨の出現のために骨身を碎かんばかりに盡瘁して來たのは、もとより一片の流行心理によつて導き出されたやうな、浮調子な出來心からではなかつた、否、それは實に、徹頭徹尾、我國の無産大衆の階級的利害感から出た眞の要求を具現しようとした熱情に依つて促されたものに外ならなかつた。だとすれば、彼等の計畫が縱し一時的に蹉跌したところで、無産政黨の實現がまだ最終的に絶望に歸したものと決まつてしまはない間は、彼等がさうした捨て鉢的行動に出ることは、斷じて許されるべきものではない。さうすることは、たとへ彼等の一時的感情を滿足せしめるには充分であつたにしても、そのために少しでも無産政黨の實現を妨げるやうなことがあつては、彼等の本來の目的が全然裏切られることになる筋合ひのものであらねばならなかつた。かくて彼等は、期せずして、一樣にその點に彼等の關心を向けるやうになつたのである。かうした事情の下に於て、當時農民勞働黨の成立までに主力となつて働いた日本農民組合が率先して發した無産政黨再興の聲明が、それ以來の無産政黨組織運動の進路を導く基調となるやうになつたのである。

二　單一無産政黨主義の意義及びその危機

若し私が上に述べた觀測が間違つて居ないものとするならば、農民勞働黨の解散後、無産大衆の側に於て絶望的な全國的反抗運動が起されたやうなことがなくて、却て非常に實際的な意味のある第二次無産政黨組織計畫が開始される運びに立ち至つたのは、決して我國の無産大衆の戰鬪意志の減退を反映してゐるものではなくて、寧ろその戰鬪意志の行使の堅實化を表示してゐるものである。我國の無産階級運動の指導者たちは、その階級鬪爭の戰術に於て、徒らに外觀上の花々しさを期するよりも、寧ろ實際上の具體的効果を狙ふやうになつて來て、そして無産大衆も大體に於てそれを承認し支持するやうになつて來た傾向が、近來に至つて益々著るしく目立つやうになつた。曾つてレニンがドイツの共産黨の左翼分子の上に加へた『小兒病』といふ言葉が、我國の無産階級運動の上に於ても、そのままの形で、一部の觀念偏重派に向つての否定的意味で用ひられることが一種の流行になり始めたやうなことは、明かにその風潮——それはすべての場合に好ましき方向に導くに限つてゐる風潮だといへないことは、後に言はうとしてゐることであるが——を指標してゐるものである。そして一面からいへば、それはいふまでもなく、現下の無産階級運動の世界的一般傾向に交渉してゐるものであるが、しかしそれの最も核心的な點に於ては、それは近年に於ける我國の無産階級運動の上に於て繰り返されて來た惡戰苦鬪の成果に外ならないものである。『知慧は苦痛から産まれる』といふことは、この場合に於ても、或る點までは眞である。

かうした意味に於て、我々は第二次無産政黨組織計畫が逸早く開始されたことを、衷心から喜んだものである。だが、事實をありの儘にいへば、我々のこの喜びは、その時からして、決して純粋なものではなかつた。それは少くとも、多

少の不安の混合して居たものであつた。しかもその不安の種子は、農民勞働黨成立までの過程の上に既に蒔かれてゐたものであつた。我々はそれを熟知してゐたが、しかし同時に我々は、我國の無産階級の眞の利害に對する尖鋭なる意識が、——及びその意識から生まれる情熱が、——それをそれの萌芽に先だつて取り除けるであらうことを希望してゐた。けれども、その後その計畫が進行するに從つて、それは取り除けられるよりは、寧ろそのままに放置され、しかもそれが段々と萌芽し成長するに任かされてある趣きが見え出して來てゐないとは言へない。少くとも、私たちの眼には、さう見られてならないのである。

この點を、今少し明らさまにいへば、詰まりかういふことになる。——初め農民勞働黨が一ト先づ成立した際に、日本勞働總同盟と日本勞働組合評議會との不參加を導き出した事情は、同黨の出現に至るまでの過程に於て始終それの指導原理として最も重要視されてゐた所謂單一無産政黨主義の上に、たしかに一大暗影を投じたものであつた。元來、この單一無産政黨主義といふものは、新たに結成されようとしてゐた無産階級の政治的勢力を、統一ある統制及び嚴格なる鍛錬規律の下に置くことの必要の意識から産み出されたものであつた。そしてそれは、一方に於ては、多少とも統制の分散を惹き起す虞のある地方政黨主義が將來不當に頑健に發展しないとも限らない形勢を示してゐたことに對する警戒の念慮からも、幾分かは促進されたものであつたが、しかし根本に於てそれは、近年に及んで資本階級の全勢力を舉げての攻勢が、特に議會に於ける立法行爲を通じて、益々露骨に、益々壓倒的に、無産階級に向つて迫つて來る樣になつたところから、無産階級はその政治行動の上に於ても、當然それに對して有効なる抵抗を揭げ得るために、強固なる共同戰線を布かなければならないといふとが、無産政黨運動に從事した人々の側に於て痛感されて來た事實に依つて、最も多くその主張の根據を強められるやうになつたものである。だとすれば、如何なる原因からにもせよ、その單一無産政

黨主義の上に龜裂が生ずるやうなことは、無産政黨運動の上から見て、極度に警戒されなければならないものである。「單一無産政黨主義といふやうなものは、畢竟一片の無内容の標語の問題にすぎないものだ」などと高を括るのは、全然皮相の見解である。實際上に於ては、それが實現されるか否かは、無産階級の政治行動の前途に對して、非常に重大なる關係を持つものである。それは何よりも先づ、資本階級の全勢力を擧げての攻勢といふ眼前の事實に對する認識及び實感が、無産階級の陣營に於てどれほどの程度及び範圍に於て普及してゐるかを指示する尺度となるものである。そして、當面の社會的及び政治的局面の下に於ては、無産階級の政治行動が、先づそこから出發すべきことが、最も痛烈に要求されるものである。更らにまた、無産階級の政治的勢力が單一政黨の大旆の下に勢揃ひして堂々と踏み出して行くことは、反對勢力に對して充分に反應のある脅威となることも出來れば、また無産階級の陣營の内外に於ける中腰の連中をその最後の決心に導く導火線となることも出來る筈のものである。

我々が以前から單一無産政黨主義を主張して來て、そして今日も尙ほそれを連呼することを止めないで居るのは、毛頭如何なるスローガンに對してもの愛着癖から來てゐるものではない。我々はそれを、我國の無産政黨の成立の先決條件として唱へ始め、そして今も尙ほさう確信しつづけてゐるのである。無論我々は、その主義が今や一大危機に瀕してゐることを、明かに見てゐる。そしてそのために、一層重大なる不安を懷いてゐる。しかも我々のその不安が重大なだけ、それだけそれの前途の運命に對する我々の關心が益々緊張して來るのである。

三　第一次無産政黨運動の敎訓

單一無産政黨主義の上に或る程度の龜裂が生じたことは、いふまでもなく、無産階級の陣營内に於て或る程度の分裂

が現はれたことを反映してゐるものである。しかもそれは、當面の社會的及び政治的情況の下に於ては、資本階級の全力的攻勢を前に控へて、その分裂が最も避けられねばならない潮時に際して、却てそれが忽然と表面に浮び上がつたことを物語つてゐるものである。もとより、さうした分裂の出現を促してゐた一種の暗流が、既に農民勞働黨組織の計畫の進行中に於て、異常の底力を以て着々と作用してゐて、そして、その結黨の間際に於ける總同盟と評議會との脫退に依つて、辛うじて全計畫の崩壞が防止されたほどに、それは相當の深みにまで進み入つて居たものであることは事實である。けれども、かうした經緯の下にやつと成立した農民勞働黨は、縱し一時的にもせよ、その分裂の彌縫の媒介者となるであらうことが、結黨に參加したすべての人々に依つて、一齊に希望された。少くとも、結黨の當事者たちは、近き將來に於て總同盟と評議會との再參加のために盡瘁するであらうことを、結黨式の壇上に於て特に誓約し、聽衆のすべてもまた、それの上に多大の期待を繋いでゐることを表明した。しかし、その農民勞働黨の成立の喜びは、數時間のうちに、過ぎ去つた夢となつた。かくて、結黨當事者たちの數個月に亘る血の滲じみ出るやうな努力の結晶は、官憲の一擧手一投足の下に粉碎しつくされ、無產大衆の熱心なる期待の目標は、一瞬間に跡方もなく撤去されたのであつた。

もとより、初めから幾多の困難に逢着することが豫想されてゐた無產政黨運動が、その際さうした運命に見舞はれたことは、如何にも言語に絕した悲痛事だつたには相違なかつたが、しかしそれは、前々から相當に覺悟されてゐなかつたことではなかつた。無產政黨運動は、一度や二度の失敗で挫折する筈のものでない。ただ、もともと如何なる種類の犧牲もがそれに許されてはならない無產階級運動に在つては、如何なる種類の經驗も、決して無益に終らせられるべきものではない。少くともそこでは、あらゆる失敗が、その次の勝利への飛石とならしめられなければならないものである。この意味に於て我々は農民勞働黨の解散からも、それが與へ得る限りの教訓を正當に學ばないまゝに、それを

遣り過ごしてはならないのである。

いふまでもなく、理論なき行動は盲目であり、行動なき理論は空虚である。從つて、無産階級の理論は、無産階級の行動から抽き出されたものでなければならない。と同時に、無産階級の行動はまた、無産階級運動の理論に依つて導かれなければならない。それ故に、同じ事をその裏側からいへば、無産階級運動の理論は、絶えず無産階級の行動に依つて嚴重に試驗され、且つまたその成果に應じて適當に訂正されなければならない。さうすることに依つてのみ、無産階級運動の理論の現實性——科學が科學であるために當然具備しなければならないその現實性——が、活きて維持されることが出來るのである。我々はもとより、我々の無産政黨運動は本來無産階級運動の理論が、我國の社會的及び政治的形勢の現狀の下に於いて、そこに赴くことを我々に強要した結果として出て來たものであることを知つてゐる。と同時に——否、それが爲めに一層——我々は、第一次無産政黨組織計畫の經驗の教訓を閑却してはならないことを痛感せしめらる。かくてこそ我々は始めてその經驗を活かすことが出來るものであつて、そして我々がその經驗を活かすといふことは、結局、我々が無産階級運動の直接の將來を指導すべき理論に、それが當然に持つべき科學的現實性を吹き込むために、それを直接の過去に於ける行動に依つて嚴密に試驗し適當に訂正することを意味するものである。

この見地から農民勞働黨の解散に對するとき、我々はそれが、當來の無産政黨組織計畫に於て、單一無産政黨主義を益々執拗に固守すべきことを、我々に力強く勸奬してゐるのを聞き逃がすことが出來ないのである。今日單一無産政黨主義の實現の可能性の影が益々薄れつつあるやうに見えてゐる際に當つて、我々が尚ほ依然としてそれを主張しつづけるのは、ややもすれば、恰も『必然』の理法を無視し、空想に淫し、標語に愛着する偏りにさうしてゐるものであるかのやうに思はれるかも知れないが、實は全然その反對である。即ち單一無産政黨主義の實現が、現下の無産階級の政

治行動に於て最も喫緊の必要事であるにも拘らず、それが非常な危機に遭遇してゐることが見えてゐればこそ、我々は層一層の努力に依つて、それを擁護しなければならない必要を感じるのである。我々は『必然の理法』といふ言葉の濫用に對して、適度に警戒しなければならない。如何にも、無產階級の理論は、それが科學的である限り、『必然』の理法の認識から出發するのが當然である。けれども、『必然』の理法の認識から出發するといふことは、一切の成り行きを自然に任かせて傍觀すると言つたやうな、一種の消極的、受働的態度を取るといふことと同意語ではない。さうした消極的、受働的態度に依つては、無產階級の終極の勝利は、到底望み得られないことである。ただ、必然の理法に即して意識的統制を正當に行ふところにのみ、それの前途への自由の展開が期待し得られるのである。

農民勞働黨の禁止は立憲政治の下に於けるブルジョアジーのディクテーターシップの行使の露骨なる表示として見られたものである。殊にそれは、ブルジョアジーの總括的攻勢の壓力の加重に關して、我々に一の活きた實物教訓を與へたものであつた。かうした事情が眼前に展開せしめられてゐるにも拘らず、萬一無產階級側の政治行動の上に於て、強固なる共同戰線の必要が意識されるやうなこともなく、從つて無產階級の陣營内の分裂が收容されない混亂狀態のままに打ち遣つておかれるやうな始末にならうものならば、農民勞働黨の解散といふやうな高價な犧牲が、何等の結果を齎らさないで、そのまま空に消えることにならうではないか？　無產大衆の膏血に依つて維持されるべき運命にある無產政黨運動の上に、どうしてそんな贅澤が許されていい道理があらう！

四　資本階級の攻勢への對抗の準備

以上の論點に關聯して、我々は自然と、マルクス・エンゲルスが、『各個の階級鬪爭は、しかし政治鬪爭だ』と言つた

あとで、『無產大衆を階級に、そしてそれと同時に政黨に、糾合するこの組織は、勞働者それ自身の側に於ける爭鬪に依つて、刻々幾度となく破壞される』といつて居る有名な言葉を回想する。けれども、彼等はすぐにそれに續いて、『それ（その一旦破壞された組織）は常に繰り返し繰り返し復興し、その度ごとに、より有力に、より鞏固に、より強大になる。それはブルジョアジー側の分裂に乘じて、勞働者らの個々の利益に對する立法上の認識を強制する』と附け足してゐる。我々は無產階級の陣營が、そこに絶え間なく起つて來る内訌のために際限もなき分裂を重ねてゐる光景を眼前に見るとき、右の引用文の一部の裡に於て、それの驚くべく精確なる豫言に接したことを痛感しないではゐられないのである。けれども、さうした分裂は、將來の再融合の機緣となり、より有力な、より鞏固な、より強大な大組織の形成の前驅となるのであらうか？　いづれにしても我々は、この事柄をそれの自然のなり行きに放任することは出來ない。我々はそこに、全無產階級の意識的協力の必要を見る。特に我々はそこに、『單一無產政黨主義は、それが現在辿りつつあるやうに見える崩壞への道程から、遮二無二引戻されなければならない』といふことを、この際一層強調して主張しなければならない根據を發見するのである。

更らにまた、我國の現在の社會的、政治的形勢の下に於て、資本階級側の上に現はれてゐる分裂狀態は、無產階級に向つてそれに乘ずる隙を與へて居るほども根本的なものだとは考へられない。否、事實は寧ろそれと全然反對を指してゐるやうに見られるのである。即ち、無產階級の陣營内に於てこそ、却て不斷の離合集散が演ぜられてゐる間に、資本階級側は、その内部に於ける樣々の葛藤や軋轢にも拘らず、無產階級に向つては、その全勢力を糾合して猛然推進的攻勢の態度に出てゐるのである。そして彼等は、單に立法及び行政上に於て全然比較にならない程に有利な地位から縱橫無碍に行動して居るのみならず、また彼等が擁してゐるその經濟的及び知識的優越に依つても、無產階級に向つて、威

時、懷柔、誘惑、買收などを試みるための、ありとあらゆる手段を具備し、且つ行使して居るのである。資本主義が内治外交上の政策に於て、自由と平和との招來に努力してゐた時代は、世界的に見て既に過去に屬してゐる。しかも我國の資本主義は、さうした時代をさへも、充分に展開せしめないで、既に早くも、所謂金融資本の支配を代表する帝國主義時代の特徴を發揮するやうになつて來てゐるのである。それ故に近來に及んで、政治的に、經濟的に、社會的に、——乃至思想的、學術的にも、——無產階級に對する總括的壓迫の手が、各種各樣の直接的及び間接的の形式に於て、急に未曾有の鋭鋒を示すやうになつて來たのも、決して偶然だとは言へないのである。かういふ譯で、無產階級の全勢力を、統一ある統制及び嚴格なる鍛錬と規律の下に置く必要が、今日ほど切實に感じられたことは、過去の何れの時代に於ても、未だ曾てなかつたことである。無產政黨運動の出現も、當初は一部分、この事實に對する認識——若しくは少くとも無意識的感觸——に依つて促進されたものでないとは、誰れにも言はれないであらう。だとすれば、その無產政黨運動の初期から既にそれのための一の指導原理として提供された單一無產政黨主義の如きも、何よりも先づ、この事實を基準として、それの當否を論定されなければならないものである。

マルクス・エンゲルスはまた、右に引用した一節よりも少し後の方で、『すべての從來の運動は、少數者の利益のための少數者の運動であつた。ところが、無產階級運動は、不測の大多數者の利益のための、不測の大多數者の自主的運動である。……』とも言つてゐる。いづれにしても、無產政黨が無產大衆の階級的政黨であり、またそれの行動が無產階級運動の主導的要素であることを眼目とする限り、それが如何なる組織形態を取ることを最も合目的のものとすべきものであるかは、理義極めて明白なことだと言はねばならぬ。如何なる點から見ても、無產階級の陣營が收拾ができない程度に分裂しつづけて行く限り、『不測の大多數者の利益のための不測の大多數者の自主的運動』が起り得ないことだけ

は、たしかな筋道であらねばならぬ。

五　單一無産政黨主義に對する批評の批評

我々は屢々、單一無産政黨主義に關して、一種の奇怪極まる評言が行はれてゐるのを發見する。それは畢竟、次の一點に歸着する。——即ち、單一無産政黨の主張は、主として無産階級運動の左翼にある諸分子の側から來るものであるが、それは彼等が單獨に政黨を組織することが出來ないところから、單一無産政黨の裾に縋りついて、その政治行動の中へ割り込まうとする動機から來たものである。と、大體かういふのである。我々は必ずしも、この評言が事實無根のものだとは言はない。しかし、單一無産政黨主義の主張が理論上正當だと認められるものである限り、それは、それを主張するものの動機の如何に依つて、その取捨を決定されるべき筈のものでないことは、無論のことである。のみならず、今假りに單一無産政黨を主張するものが、事實上果して右に揭げられたやうな動機に驅られた上でそれを高唱してゐるものであるとしても、しかも單にその動機だけに就いて見るときは、それは必ずしも本質的に不純なものだとは言へないのである。現在に於て左翼側の諸分子が單獨に政黨を組織することが出來ない狀態にあるのは、純粹の無産階級的見地からいへば、必ずしも彼等の主義綱領が間違つてゐるためからだとは言へないのである。もとより、彼等の主義綱領が純粹の無産階級的見地から不當なものと認定され得る種類のものである場合には、彼等を無産政黨の列外に追ひ遣るのが當然である。縱しまた、彼等の主義綱領が必ずしも純粹の無産階級的見地から不當なものと認定し得られない場合にもせよ、若し彼等が結黨に參加しては、肝腎の無産政黨そのものの成立がそのために不可能なものとなる事情が實在してゐるならば、一時的若しくは永續的の便宜上の問題として、矢張り彼等を黨外に止まらしめることも、また已

むを得ないことだといへよう。しかし、いづれの場合にせよ、單一無産政黨主義そのものは、彼等のそれを主張する動機から是非されるべきものでないことには、變はりがないのである。否、單一無産政黨主義の當否は、まづ第一には、純理論上の問題として、無産階級運動の理論から批判されなければならないものである。次にそれは、當面の實際上の問題として、一方に於てはそれを、地方政黨主義と比較し、他方に於てはそれを、勞働黨及び農民黨などの小黨分立主義と對照して評價されなければならないものである。

更らにまた、我國の無産階級運動の上には、相互的に兩立することも調和することも出來ないやうに明確に區分されてゐる左右兩翼の二大潮流があるから、その間に單一無産政黨主義の實現の可能性の存在する餘地が絕對的にない、といふやうな論點が、その右翼側から持ち上げられて居ることが、次に我々の注意に上つて來る。けれども我々は、この場合にも、容易にその論旨に首肯することが出來ないのである。といふのは、我國の無産階級運動の上に、そのやうな二大潮流があるといふことまでをも否定する意味ではない。が、實際上の問題として見れば、左翼側の諸分子が、少くとも政治行動の上に於ては、縱し當面の可能不可能の問題に對する打算からにもせよ、可なりの點までに妥協點を引き下げることに依つて、自發的に右翼側と提携し同行しようとする用意を持つてゐることは、農民勞働黨の瞬間的成立の際に見られた事實に依つても、充分に證明されてゐるところである。もとよりあの場合に於ても、兩側の提携は寧ろ一時的のものに終るかも知れないといふことが、多くの人々に依つて、相當有力に見えた根據の上から氣遣はれてゐたことは事實である。がしかしさうした危虞が絕對的に取り除き得られないものとは、本質的に決まつてゐる譯のものではないのである。少くとも、さうした危虞を取り除かうとする試みが毛頭行はれない前から、さういふ一片の憶測を楯に取つて、單一無産政黨主義の理論上の當否如何に頓着なく、頭ごなしにそれを排斥するやうなことは、純粹な無産階級的見

地からは、どう見ても決して正しい行き方だとはいへないのである。

最後に、我々は屡々、所謂右翼側の一部の人々から、『若し將來左右兩翼の二大潮流を抱合する單一無產政黨が成立した曉には、左翼側がその內部を攪亂する陰謀に出る危險は免れられないであらう、』といつた樣な、いささか泣き言のやうに響く言葉が發せられるのを聞くことがある。だが、如何なる動機から產まれた論難にもせよ、それがかうした低調にまで成り下がつて來ると、最早や一も二もなく唾棄するより外に途がないものとなるのである。我々が資本階級側の人々の口から、『若し將來無產政黨の代議士たちが議會へ侵入して來る樣になると、その內部の生活は、必ず彼等の悪辣なる言動に依つて大混亂に導かれるやうになるに違ひないだらう、』といふやうな言葉が漏らされるのを聞くときには、我々は無論それを階級的反感の一表現として解釋するだけで、別にそれに對して奇異な感じを起さないのである。けれども、若しこれに反して我々が、同じ無產階級の陣營內の一部から、他の一部に向つて、それと同巧異曲の罵聲が浴びせかけられてゐるやうな光景に接するときは、我々は最早、同樣の無關心的態度を以てそれを聞き流すことが出來ないのである。それは畢竟、さうした罵聲の主人公が、自己の主張の無產階級的見地からの妥當性に對して確乎たる自信を缺いてゐることから來てゐるものか、但しは、同階級內の一派の活躍を、敵對階級の攻勢以上に、恐怖若しくは忌避することから來てゐるものかである。若しくは萬一それでもなければ、それは、さうしたこと以上に卑劣な動機から出てゐるところの一片の感情論に外ならないものでなければならない譯である。

我々はもとより、現在の政情から察すれば、縱し近き若しくは幾分遠き將來に於て無產政黨が成立する日が到來しようとも、當局から異常の猜疑の眼を以て睨まれてゐる一部の左翼諸分子のそれに參加するとが許容されないかも知れないといふ事情を遺憾ながら認識してゐるものである。といつて、その場合に彼等が別に單獨に彼等自身の政黨を組織す

るやうなことは、尙ほ更ら望み得られないことである。それ故に、若しその場合に地方政黨主義や、農民黨及び勞働黨などの小黨分立主義が行はれない限り、そこに右翼の諸分子を中心勢力とし、左翼の一部の分子を除外して成る單一無產政黨だけが出現する結果になるであらうことは、殆んど必然の成り行きであらねばならぬ。現在に於て理論上の單一無產政黨主義を否認してゐる人々――殊に右翼側の多くの人々――でも、さうした實際上の單一無產政黨ならば、双手を擧げてその出現を歡迎するであらう。否、彼等がこの頃理論上の單一無產政黨主義を排斥することに全力を擧げてゐるのも、實はさうした實際上の單一無產政黨の出現を要望してゐるからであるに相違ないのである。何れにしても、さうして出現する無產政黨は、縱し形式上は單一無產政黨であつても、理論上は單一無產政黨主義の具現でないのだから、それが成立した曉には、理論上の單一無產政黨主義そのものの如きは、さうした狀態の下に於ては、一見恰かも問題にすべき價値がなくなるべきものだと思はれようが、實は決してさうではないのである。我々から見れば、さうした場合にも、單一無產政黨主義の精神がその政黨の間に活きて維持されてゐるか否かは、無產階級運動の前途の上に極めて重大なる關係のあるものである。といふのは、單一無產政黨主義の精神がその政黨の內に活きつづける限り、それとそれの列外にある左翼諸分子との間の協調の可能性がそれだけ多く維持される譯であるばかりでなく、それから先きの事情の展開次第によつては、彼等のそれへの再參加の機會もそれだけ多く期待し得られるであらうからである。無論、事情がさう展開して來ると、その時には、既成無產政黨の列外にある左翼諸分子が別に獨自の政黨を組織し得ることも全然不可能事でなくなるかもしれないし、またさうなると、その無產政黨と既成無產政黨との間に永續的聯合關係、若しくは時々の問題に依る一時的提携關係も可能になるかも知れないことは、一應は考へられる。けれども、さうした場合に於ても尙ほ、いやしくも資本家階級の攻勢の鋭鋒が鈍らない限りは、單一無產政黨の組織が、右の聯合關係若しくは

提携關係よりも望ましきものであるといふ根據は、依然として存續するに違ひないのである。要するに、無產階級の陣營內の政見の衝突は單一無產政黨の內部で解決されるであらうことが、二三若しくはそれ以上の無產政黨と資本階級諸政黨との間の多角關係若しくは多角關係の下に於て解決されるであらうことよりも、無產階級運動の立場から見て、根本的により合理的のものとされるべきものであることは、改めて說明するまでもないことである。少くとも我々が、無產階級運動の本質を『不測の大多數者の利益のための不測の大多數者の自主的運動』と見る限り、我々はさう結論すること以外の途を知らないのである。

六　無產階級陣營內の分裂の原因

既に久しき以前から萌ざして居た無產階級の陣營內に於ける分裂狀態は、農民勞働黨の成立及び解散の前後に於て極めて明瞭に表面に現はれるやうになり、更らにそれ以來益々顯著の度を進めるやうになつたものである。しかもそれが單に一時的の現象に終るであらうか否かは、もとより、ただ未來だけがそれを斷じ得る問題である。だが、それを單に一時的現象に終らしめるべきものであるか否かの段になると、それは無產階級運動の理論からは、一も二もなく容易に即答し得られる問題となるのである。

農民勞働黨の禁止は、ブルジョアジー側からの壓倒的攻勢の一表徵であつたことは無論だが、同時にそれは、無產階級側の分裂を反映してゐたものでもあつた。若し當時その分裂狀態が生じてゐなかつたなら、同黨の運命は或は幾分好望のものでなかつたらうか否かを憶測するやうなことは、今からいへばそれをするだけが野暮な話だといふことには、我々に於て毛頭異論はない。けれども、その分裂が同黨のああした結末を早めることに貢獻した一要素だつたといふ一

事だけは、爭ふべからざる事實である。と同時に、その分裂狀態の現はれが、一轉して或ひは近き將來に來ることが望ましいものと見られ得る種類の再融合の契機とななならしめられるものであらうか否かは、無產階級運動の指導者たちと大衆との側に於ける、目的を意識して協同的努力の上に繫がることの多い問題であるといふことも、誰もが疑ふことのできない論理上の結であらねばならぬ。

だとすると、さうした協働的努力の出發點として、且つまたその先決條件として、現在に於て無產階級の陣營內に現はれてゐるその分裂狀態の因つて來るところを討究することは、決して無益な閑事業だといふ譯には行かないのである。尤もそれは、少くとも我々の立場から、その分裂狀態の促進者を見究めた上で、その道德的責任を問はうとする動機から來たやうなものでないことは、斷るまでもあるまい。さうした企てに乘り出すことこそ、全く餘計な暇潰ぶしである。過去に起つた一切のことは、完全に既成事實となつてしまつてゐるものである。從つて、それの起つたことに對する何人の道德的責任を、その事後に於て質して見たところが、始まらない話である。けれども我々は、リープクネヒトに倣つて、未來は我々の手にあるものだといふことが出來る。そして、その未來に對しての我々の意識的能動の基礎として用ひ得られる範圍內に於てのみならば、我々は過去を有益に顧望し、討究することが出來るのである。

かうした心境から、現在の無產階級の陣營內に於ける左右兩翼の二大潮流の衝突が顯著に惹き起してゐる渦卷に對するとき、我々は、その原因が均等に兩側の上に潜在して來たものであることを、明かに見ることが出來るのである。ただ、現實にその渦卷の中に捲込まれてゐるものは、ややもすれば、互に責任を相手方になすりつけることに沒頭する餘りに、適當に自己批判を試みることを忘れがちになる虞れがある。レニンは屢々、何人も一度は過ちを犯すことを免れないものだが、ただ聰明な人々は、適當に自己批判をすることによつて、その過ちの結果から脫出し得るものだ、とい

つたやうな意味の言葉を繰り返したかに、私は記憶してゐるが、いづれにしても、さうした聰明な自己批判の缺乏が、常に無用の紛爭の端をなすやうなことは、無產階級運動の上にもまた、一樣に目擊し得られる日常の事實である。

我々はこの頃の左右兩翼の爭論に於て、屢々聞き苦るしき惡口が、兩側から無制限に交換されてゐるのを見る。しかも時として、その一方から他方に向つて浴びせかけられてゐる千種萬樣の罵詈讒謗の言葉の端々には、彼等の共同の敵としての資本階級に向けられるもの以上に深刻な憎惡感が含まれてさへ居る跡が現はれる。と言つたやうなことは、決して稀れに起つて來る事柄ではないのである。無論、それが自然の感情の發露であるか否かは別問題ではある。がしかし、それが如何なる意味に於ても、無產階級運動の上の一現象として見て忌ましいものであるといふことには、間違ひはないのである。

殊に、左翼側の一部は右翼側の任意の一部に對して、或ひはその團體的利己心の丸出しの弊を言ひ立て、或ひは幹部の墮落腐敗を高唱し、或ひはそれと官憲との秘密の提携を揣摩し、或ひはその勞働貴族振りの傲慢を罵倒する。すると、右翼側の諸分子も、一ッぱしそれに負けない氣になつて、左翼側の個人若しくは團體に向つて、或ひはその過度のセンチメンタリズムを嘲り、或ひはその口舌に勇敢な割に行動に卑怯なことを責め、或ひはその『卑劣なる陰謀』の常習を糺彈し時としてはロシア共產黨の手先きといつた烙印をその上に押し附けたり、時としては更らに一歩を進めて、その間に於ける金品の授受を諷したりなどするやうなことすら敢てし、そして始終の慣行としては、『現狀無視』とか、『左翼小兒病』とかの標語をそれに向つて投げつけるやうなことを、無際限に繰り返してゐるのである。

我々は決して、兩側の言ひ分が一から十まで見當外れのものだとは考へないが、しかしそれと同時に、その間には事實無根の當て推量から出たお座なりの感情論にすぎないものも少くないことをも認めないで居られないのである。しか

も、さうした感情論が無産階級運動全體の上に何等の悪影響を及ぼさないものならばまだしもだが、しかし事實上に於ては、その或るものは、屢々、單に相手方に深傷を負はしめることに終るだけに止らず、延いて無産階級運動全體を多少の程度に世間的に不信用なものにならしめるやうな結果にさへ導いてゐることもあるのである。

もとより、無産階級の陣營の内部に於て、何等の假借するところのない鋭き各種の検討や批判が、絶えず敏活に行はれるやうなことは、絶對的に必要なことである。それは、無産階級側の各個人についても、各團體についても、左右兩翼の各々についても、階級全體についても、一様に適切に言ひ得られることである。それは、同一の過ちが再三繰り返されるやうなことがないためにも必要であるが、それと同時にまた、無産階級運動の現狀に於て特に必要視されなければならない統一ある統制、鐵の如き鍜錬、水も漏らさぬばかりの規律が行はれ得るためにも必要である。若しくは換言すれば、それは、無産階級の陣營に於ける各種の個人的野心及び團體利己心を溶解し盡すに充分な程度に、無産階級意識の熾烈なる燃焼を促進するためにも必要である。若しくは最も手短かに要約していへば、それは、階級戰に於ける無産大衆の戰鬪力を醇化するために最も必要なのである。

かうした意味に於て、無産階級の陣營内の各部に於て、そこにある限りの腐敗が摘出され、墮落が豫防され、缺陷が補塡され、活力が増進され、一切が浄化される爲めに、毫も假借するところのなき検討や、捜索や、探照やが、間斷なく行はれることは、極めて望ましきことでこそあれ、毛頭忌避すべきことではない。それは、階級的自己批判上の一の作業だといふことも出來る。けれども、それは何等の個人的若しくは團體的私心及び偏見の伴はれない透徹した心境に於て、訓錬された眼と手に依つて行はれるのでなければ、有害無益な摘發とか、聞苦しい責任轉嫁とか、醜い悪聲濫發とかに墮し易いものである。かくて、正當なる検討と陋劣な摘發とは、屢々混同され易いものとなるのである。けれど

も、よく訓練された政治家的才幹——よき意味での——を具へた指導者たちに取つては、個々の場合にそれら兩者を見分けることは決して困難ではないばかりでなく、或る有利な狀態の下に於ては、大衆の無產階級的本能がそれを明敏に味識することすら、決して稀有のことではないのである。ただしかし、一般的原則としてそれを言へば、或る檢討なり摘發なりの當否の判別の標準は、それが無產階級意識の熾烈なる燃燒を促進するか否か、及び無產大衆の階級的鬪爭意志を醇化するか否かの上に存するのである。

現在無產階級運動上の左右兩翼の間に盛に交換されてゐる罵詈雜言の大部分が、そのいづれのカテゴリーに屬するものかは、それを始終注視してゐるものに取つては、甚だ容易に判別し得られるものであらねばならぬ。我々から見れば、必ずしもそのすべてが陋劣な摘發の部類に屬するものだとは決して言ひ得られぬもせよ、しかも正當な檢討として見られない分もその間に少らず介在してゐることが、殆んど疑ひを容れる餘地のないことのやうに考へられるのである。

七　左翼の言動の功過

前に言つた通りに、我々は初めから、過去の既成事實に就いて、その促進者の道德的責任を問はうとして掛つたものでないから、從つて左右兩翼のいづれに對しても、濫りに批難のための批難の言葉を向けようとしたものではない。ただ我々は、『不測の大多數者の利益のための不測の大多數者の自主的運動』であることをその本質とする無產階級運動の前途への健全なる進展に役立つものと我々に考へられた範圍内に於てのみ、右の兩側が過去に於て犯した過ちを忌憚なく指摘したまでである。そのうち左翼側の過ちは、大體に於ては、本質的のものであつたよりは、寧ろ場合々々の狀況から見て當を失してゐると言はれるべき種類のものが多かつたやうに、少くとも我々には見られる。現實的政治行動——

最も廣い意味での——の進路は、決して平坦な大道ではない。從つてそれの上での我々の歩みは、當面の場合々々の情況に應じて、適度に緩急の度を調節されなければならないのである。でなければ、我々は不當に——若しくは無用に——屢々轉覆する危險に陷ゐるばかりである。無論我々は、いつでも我々の目標を見失つてはならないが、しかしそれと同時に、我々はまた、我々の足許を注意することを忘れてはならない。そこで我々の見たままのことを率直にいへば、從來に於ける左翼の過ちは、その目標を見失ふことよりも、寧ろその足許を注意しないところに存してゐた。我々は屢々、左翼側の諸分子が、官憲及び公衆から故意若しくは偶然に投げかけられたところの、あらゆる邪推と、惡聲と、攻擊との下に於て、不斷の健鬪を續けて來たことに對して、充分の敬愛——時としては深き感謝をさへも——を捧げたくなる氣分に誘はれたこともある。更らに我々は屢々、彼等の行動の上に現はれた勇氣や、克己心や、全無產階級に對する奉仕的若しくは犧牲的精神を、或る程度の感歎を以て見守つたりさへしたこともある。が、それにしても我々は、彼等が動々もすれば過度の燥狂的氣分に驅られつつ、場合々々の情況に頓着なしに、餘りに輕擧妄動に走り過ぎるやうな傾のあつたことを、無關心的態度に默過することは出來なかつた。殊に、彼等が第二次無產政黨組織運動進行中に際して取つた樣々の言動の裡にも、更らにまた、その同じ運動に於ける彼等の同行者らの或るものに對して取つた糺彈的態度の裡にも、たしかに適當といひ得られる程度を遙かに越したものを少からず見た。かうした點から我々は、右翼側の一部が彼等に向つて、或は『現實無視』とか、或ひは『小兒病』とかの評言を頻りに放つてゐるのを見るとき、縱しその全部を承認することが出來ないまでも、少くともその一部を否定する根據を見出すことが出來ないことを意識せしめられるのである。

八　現實主義の兩面

しかし我々は、左翼に對してから言つてしまつた後に、今度は右翼に向き直つて、また相當に苦言を述べなければならない衝動を感じる。それは決して、抽象的公平の態度を裝はうとするやうな、さもしい了簡から來てゐるものではない。我々が無産階級運動の見地に立つことを自ら意識する限り、我々がさうした抽象的公平の態度を取るとか取らないとかは、決して先決問題ではない。我々は今、他の何事を考へるよりも先きに、我々が無産階級運動全體の立場から見て正當と信ずるところに從つて、主張すべきことを主張しなければならないことを痛感せしめられる。かうした心境から我々が右翼の方面に向ふとき、我々はまづ第一に、少くとも無産階級の陣營内に於ける分裂の現狀に關聯しては、右翼側の或る一部が從來に於て犯した過ちは、より根本的のものであつたやうに我々に見られる。といふことから口火を切らない譯に行かないのである。

我々は既に、右翼側が左翼側に向つて、頻りに『現實無視』とか『小兒病』とかの評言を加へてゐるのを見て、その幾分を否定することが出來ないことを言つたが、それはその反面に於ては、その全部を擧げて肯定することが出來ないことを意味したものである。彼等はさういふことに依つて、彼等自身が堅實なる現實主義の踏襲の上に立つてゐることを氣取つてゐることは無論であるが、しかし彼等の現實主義は、決して如何なる批評の齒も立たないと言つた種類のものではないのである。この點に關聯して、論述の順序を逆にして、便宜上結論から先に言つてしまへば、それは結局。正當に解釋されたときに有意義である現實主義といふ言葉にも、その裏には、極めて巧妙な陷穽が仕掛けられてあることが認められるものであり、また、左翼の『小兒病』は、それだけのものとして見れば、何としても決して結構なもの

だとは言へないが、しかしそれは、他の更らにより根本的な疾患に比べられるときには、遙に治療の容易なもの――時としては單なる時日の經過のまにまに自然的に癒えることさへあるもの――だ、といふことに歸着するのである。

曾て無産階級運動が始めて政治行動への轉向を決したとき、我々はそれを『現實化的傾向』と呼んで、その裡に含められてゐた現實主義を、我々の意味に於て肯定した。で、その我々の意味に於ては、現實主義とは決して、我々の終極目標に頓着なく、與へられたままの現實に盲從することを言ふものではなくて、寧ろ反對にそれは、我々の終極目標に向つて確實に視線を結びつけながら、同時に我々の周圍の現實的關係を顧み、それに立脚しつつそれを突破して、一歩一歩と中間的諸障碍を排除しつつ、出來得る限りの最短距離を辿つて、その終極目標に向つて猛進することを指すものである。それ故にそれは、現實に立脚して我々の行動を律することを重要視してゐると共に、その現實を能働的に征服することに依つて更らに新しき現實に向つて躍進することを、より多く重要視してゐるものである。それ故に、我々の現實主義は、與へられた現實に立脚することを我々に勸奬すると同時に、それに立脚することを、新らしき現實への躍進の道程とすることを我々に督促するのである。與へられたる現實は、我々の意識的努力を以て如何ともすることが出來ない『必然』の理法に依つて、我々の眼前に現出せしめられてゐるものであるが、しかし新らしき現實は我々の意識的努力の對象であり得るものである。この意味に於て、『未來は我々のもの』である。ただしかし、與へられた現實に立脚し（『必然』の理法に即し）てでなければ、その新しき現實に到達することが出來ないといふことは、自明のことである。それ故に我々は、與へられたる現實に立脚する必要を無視することが出來ないのである。けれども同時に、それは新らしき現實への躍進の道程としてのみ重要視されるべきものである。で、若し我々がその程度を越えて與へられた現實を尊重することを學ぶときには、それは我々をして新らしき現實への躍進に對する不安恐怖の餘りに、與へられた

る現實に安住することを甘んぜしめる結果に導くことは必然である。さうなつてくると、それは最早現實に對する盲從的態度であつて、我々の現實主義とは何等の交渉のないものとなつて來るのである。

ところが、現實無視の否認を極力連呼しつつある右翼側の少くとも或る部分は、意識的に若しくは無意識的に、與へられた現實に對する盲目的態度に深入りしつつあるやうなことがないか？若しくは彼等は、左翼の小兒病を皮肉に嘲笑しながら、自分等はそれ以上の根本的疾患に侵されつつあるのを顧みないでゐるやうなことがないであらうか？ いづれにしても、さうしたことの徴候が既に餘程の點まで進んでゐることを認めないものが、縱し幾人かはあつても、それに對して嚴重なる警戒の必要のあることまでを否定するものは、よもや一人もありはしないであらう。

九　現實主義と階級道德

現實主義といふ言葉は、妥協といふそれと同樣に、それを無制限の意味に濫用することは危險である。或る點から見れば、妥協といふとは、その善惡兩方面とも、現實主義の內容を構成してゐるものである。從つて妥協は、現實主義と同樣に、許されるべき一面と、許されるべからざる一面とを共に具備してゐるものである。で、與へられたる現實の場面の上に於て、新らしき現實への躍進のために、不測の困難と障碍との重圍のうちに不斷の戰ひを戰ふ運命から免れることが出來ない無產階級運動に於ては、或る場合に或る種の妥協が許されることもあるものとすべきことは、それの不可抗の運命である。レニンは屢々、共產主義のロシアが、帝國主義のドイツとブレスト條約を結んだことを、許されるべき妥協の場合の一例として算へた。我々は今そのことの當否を問はうとしてゐるものではない。我々はただしかし、如何なる事情の下に於ても、如何なる種類の妥協もが許されてならないといふ見解は、實際上の個々の場合に於て徹底

的に押し通すことが出來ないものだといふことが、我々の現實主義の立場からも認められるものであることを言はうとしてゐるだけである。

が、それにしたところで、無產階級運動の上に於ては、許されるべき妥協の範圍が極度に嚴格に限局されなければならないものである。そしてそれは、個々の具體的の場合に於て精細に討究されるより外ないものであるが、しかし一般的原則としては、この場合でも、それは無產階級意識の熾烈な燃燒を助け、階級戰に於ける無產大衆の戰鬪力を增進する結果が明かに看取される場合のみに限つて、正當なものとされるのだ、といはなければならないのである。

この標準からいふときには、曾て無產階級運動に於て、政治行動への轉向が肯定され、ブルジョア議會への侵入が決意されたときは、許されるべき妥協が行はれた場合の一例とすることが出來るのである。更らにまた、無產政黨組織の當事者たちが、當面の四圍の政情に對する適當な顧慮から、その綱領や政策や宣言の上に、或る程度の緩和を加へるやうなこともまた、許されるべき妥協の範圍内に屬する場合の他の一例として見られることが出來るのである。けれども一般的原則としては、無產政黨の綱領や政策や宣言の上に或る種の緩和が加へられる場合に於ては、その緩和の程度が極度に嚴密に限局されなければならないのである。それは殊に、その政黨の階級的性質が失はれる點まで引き下げられてはならないのである。無產政黨はその出發點から、無產大衆の階級的政黨としての特徵を提げて打つて出るのでなければ、何等の意義の伴はないものである。しかるにも拘らず、その結黨當事者及び支持者たちが、その功を急ぐ餘りに、その政黨の階級的性質が失はれるまでにその綱領や政策や宣言を曖昧模糊としたものにするやうになつては、それは最早や許さるべき妥協の限界を越したものといはなければならなくなるのである。無產政黨の成立の一日も早く實現されるのが望ましいといふことは、それの階級性をなくしてまでも、その結黨を急がなければならないといふことを意

味してゐるものとは、斷じて言はれないのである。

また無產政黨の成立後に於てこそは、殊に許されるべき妥協の限界が、幾倍も嚴密に固守されなければならないのである。無產政黨はそれの議會での行動に於て、或る場合——たとへば、より多くの言論・集會・結社などの自由の獲得のために努力する場合のやうな——に於ては、少くとも既成政黨中の急進的諸分子と提携することを必要と——少くとも有利と——するやうな境遇に逢着するであらうことも、全然考へられないことではない。けれどもさうした場合に於ても、その提携の條件が無產階級運動全體の上に些かの惡影響を及ぼす危險が認められるときには、それは最早、許されるべき妥協の範圍内のものとして見られることが出來ないものである。殊にさうした行動の結果が、無產階級の陣營内に或る程度の混亂を惹き起す原因となるやうな虞れのある場合には、それはそれから生ずることが豫期され得るすべての利益を擲つても、決然と斷念されるべきことを原則としなければならないものである。

無產階級運動の上に臨む極度に嚴重なかうした諸條件のすべては、畢竟無產階級意識の熾烈な燃燒及び階級戰に於ける無產大衆の戰鬪意志の維持及び增進の重要性の認識から、當然のこととして提起されるものである。疑ひもなく、それらの諸條件が完全に具現され得るためには、その運動に從事する各個人及び各團體から、全無產階級に對する純眞なる奉仕的若しくは犧牲的精神の無留保的提供が要求されなければならないものだといふことは眞である。そして、さういふことの認識は、結局は必然的に階級道德確立の必要の主張に流れ込むのである。

正當な意味に於ける現實主義は、無產階級道德との兩立を拒むものではない。ただ現實主義と言ふ言葉の淺薄なる解釋のみが、無產階級道德確立の必要の認識を容れないのである。だが、我々は我々の現實主義の立場から、さうした誤

薄な意味に解釋された一派の現實主義をこそ、現實無視の罪名に於て、極力排擊しようとするものである。

最近に於ける無產階級道德蹂躪の最も顯著なる——そして最も忌はしき——一例として、我々は右翼側の或る一部が官憲及び公衆間の陋劣な態度に雷同して、或ひは寧ろそれに率先して、左翼側の或る一部に對しロシア共產黨の手先といふ烙印を押し附けることによつて、それを殆んど救ふべからざる窮地に陷れようとした行動にまで出てゐるやうなことを擧げることが出來る。しかも、若しそのことが幾分でも自分達の安全を謀らうとする動機から出たものとするならば、彼等のその心境の陋劣さは、到底無產階級運動の風上に置けぬものとしなければならないものである。それは自分たちの汚れたる安全的存立のために、同志を敵に賣るユダ的行爲である。それ故に、さうした恥づべき行動をしてゐるものの頭上にある限りの批難を積み重ねることは、決して無產階級の陣營を故意に擾亂することと同一視することが出來ないのである。我々は第二次無產政黨組織計畫のために熱心に且つ誠實に盡瘁してゐる人々に向つて、何よりも殊にこの點に對して充分な警戒を行ふことを希望して已まないものである。(完)

獨逸戰後の經濟と經濟政策

堀江歸一

獨逸經濟に對する悲觀——爲替と通貨とに依つて判斷する——通貨價値の低落と其對策——通貨整理の一段落——經濟狀態の一斑——戰後の金融——將來に對する希望——基礎產業の狀況——海運業——農業對外取引——企業聯合——外國貿易の狀況——保護政策の適用——英獨經濟上の關係——獨逸勞働者の賃銀

一

歐洲戰時數年間の久しきに亘つて、獨逸が經濟上に苦しめられたことは、少なしとしなかつたが、斯る苦惱は戰後に於ても、尙ほ獨逸を襲つて已む所なかつた。戰時に於ける聯合諸國の對獨經濟的封鎖、戰敗に伴ふ物質的並に精神的打擊、媾和條約の下に、物質の形態に於て、金錢の形態に於て、課せられる負擔並に經濟上の關係を遮斷する束縛、聯合國軍隊の領土占領に據る軍事上の行動は相重なつて、獨逸の經濟を疲憊せしめる所以と爲り、殊に媾和條約の勵行は日に月に獨逸に對する苛責の鞭と爲り、此勢を以つて進んだならば、結局獨逸は經濟的に破滅の運命に陷る。軍事上の力に依つては、滅亡せずして、經濟上の壓迫に依つて、亡國の悲慘事を演出するであらうと云ふことが考へられたのである。固より通貨とか、外國爲替とか云ふことは、一國に於ける經濟上の一方面であつて、其れのみに依つて、經濟的國運の全斑を判斷するのは、正しきを得ないかも知れないが、是等の點に於て、如何に獨逸が破天荒とも云ふ可き混亂狀態に陷つたかを見たならば、自ら他方面の事情をも類推するを得ることゝ考へる。元來紙幣馬克の金貨に對する價値の低落の如き、早くも千九百十四年十月から始まつた事實であるが、其勢は年と共に加はり、千九百十五年以來各年に於ける最高最低兩極の相場を示すと、

金馬克に對する紙幣馬克の價値

	最高	最低
一九一五年	一、二八四	一、〇八三

一九一六	一、四八一	一、二九四
一九一七	一、八九一	一、四五八
一九一八	二、〇八三	一、三八九
一九一九	一〇、八〇五	二、〇五六
一九二〇	二三、五八二	九、三二二
一九二一	六二、六四一	一四、六〇二
一九二二	一、七五〇、八六六	四七、九一一

と爲り、更に進んで千九百二十三年と爲るや、金馬克に對して紙幣馬克は四千九百九十七馬克から、一、〇〇〇、四九四、九七一、〇〇〇馬克即ち萬億馬克以上に至る間に於て變動し、世人をしてその下落の甚だしきに驚倒せしめた。一方に爲替相場は如何と云ふに、四百馬克に對して、九十五弗を以つて、平價とする對米爲替相場は相次いで下落し、遂に千九百二十四年一月下旬に於ては、弗〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇、〇九四、五と云從來の記錄を破る低落を見るに至つた。斯の如きは單に通貨並に外國爲替の方面に於ける事相に過ぎないとしても、自ら獨逸經濟上の狀況の如何に慘憺たるものであつたかを示すに足ると共に、其影響の如何なるものであつたかを想像するに餘りあらしめるのである。斯る通貨價値の低落並に爲替相場の下落に就いては、從來種々の調査が行はれ、又之を基礎とする報告も發表され、就中其有力なるものとして、千九百二十二年四月並に五月に於けるゼノア會議報告書の附錄冊子、同年十一月七日並に八日に於て伯林に會合した聯合諸國專門家の勸告意見である。而して是等の意見に於ては獨逸に於ける通貨價値の低落を以つて、其原因を財政上に於ける狀態の壞敗と國際支拂の不權衡とに歸したが、本來是等二個の事情は互に關聯する所厚く、其一を取つて、他の一から引離すことを許されないのである。蓋し獨逸の貿易は戰前から年々輸入超過の狀態に居り、所謂逆勢を續けて居つたが、戰後に於ては、(一)食料品並に原料品を產出する重要領土の喪失、(二)媾和條約に依つて獨逸の貿易に課せられた制限、(三)諸外國の採用した保護關稅策、(四)聯合諸國に對する獨逸物資の無價引渡、(五)聯合諸國軍隊の境界占領(六)土地の荒廢、政治的不安に基く生產の減少等種々の事情に依つて、貿易の逆勢を甚だしからしめた一方に、戰前國際貸借に於ける受取勘定として、獨逸の收め得た運賃、外國放資、國際金融取引等に依る收入は多く消滅し、却つて償金の支拂、占領軍の軍費等獨逸の負う所を大ならしめた。既に銀行券の增發之に基く、通貨の膨張は財政の困難に胚胎するものであるのに、右の諸原因に依つて、通貨價値の低落するに於ては、其低落が外債の募集を不可能ならしめる爲めに、勢政府を驅つて、中央銀行に就て、通貨の增發、信用の大なる設定を求めしめ、然も既往に於ける通貨價値低

落の結果として、其の求める所を大ならしめる結果益々通貨價値の低落を甚だしからしめざれば、已まないのである。

二

斯る通貨制度の破壞が中央併に地方の財政を攪亂したのは勿論であるが、國民經濟に現はれた各種の弊害亦之を輕々に付するを得ない。即ち（一）馬克を以つて代表された總ての債權に減價を惹起し、（二）資本を減却し、又は滅消し、（三）賃銀に關する爭議の續出する結果として、産業の發達を妨害したのは勿論、社會諸方面に於ける道德を頽廢せしめ、（四）資本家をして馬克價値の低落に依つて、蒙る損失を嫌厭するの餘り、目前の快樂に空費するに至らしめ、（五）政府の禁令に拘はらず、馬克價値の低落から生ずる損失を避ける爲めに、資本の國外逃避は盛に行はれ、爲めに國内に於ける資本の供給を匱乏ならしめることの諸點は通貨價値の引續いて低落しつゝある際、獨逸の經濟を苦しましめた所の重なるものである。

之に對する救濟策は固より獨逸政府の閑却した所ではなかつた。然も通貨價値低落の原因たる、前述の如く國庫收入の不足と、對外支拂の加重とに存するのである以上は、政府としては、是等の根本問題に對して施設しなければならない道理であるが、當時の政府の實力を以つてしては、問題の餘りに大なるに對して、實力の餘りに乏しきの嘆なきを得なかつた。斯る政府は根本に亘る矯制策を施さず、單に枝葉の點に趨つたことが政府の爲す所をして不成功に終らしめたものに外ならない。即ち政府が通貨價値恢復の目的を以つて、行つた所は第一、輸入を出來得る限り制限して、一方に輸出を增進すること、第二、外國から輸入する食料品並に原料品の代價を支拂ひ、又價金の支拂に應ずる方便として、政府の手に外國貨幣を得ることを必要とし、輸出業者に對して、外國貨幣の最高標準のものを受取る場合の外、外國に物資を輸出するを禁止し、右貨幣を以つて代價を受取つた場合には、其三割を中央銀行に引渡す可き義務を課し、外國貿易監督委員會にして必要と認めた時には、何時に於ても、右金貨引渡の率を引上げ得ること、第三、外國貨幣の貯藏併に資本の外國逃避を妨遏する法令を勵行したこと、第四、政府の公債發行に際し、外國貨幣を以つて應募金を支拂ふ者には、有利なる條件を認めたこと、第五、國民に確實なる支拂方便を供給する暫定的手段として、政府自ら金貨拂公債を發行し、特に其額を小にし、（米價一弗の十分の一に當る）以つて支拂方便に充てしめたことの如き、即ち之に當るものであり、更に年の進むに隨つて、政府の方針は愈々專斷的分子を加へ來り、現に千九百

二十三年九月七日の大統領令に於ては、特別委員會を組織し、同會に總ての外國支拂方便、外國通貨を以つてせる手形、證劵、貴金屬を收用する權限を與へ、右權限を實行する爲め、何人をも喚問し、又何事をも檢査し、或る事件に關して、人の申告を徵し、之に宣誓せしめるを得ることゝするの甚だしきに至つた。而して一方には千九百二十三年九月には、少なくとも計算の基礎に充てる目的を以つて、所謂金馬克の稱呼を復活し、四金馬克二十を以つて、合衆國の一弗金貨に相當するものとし、紙幣馬克に對する金馬克の割合は日々紐育宛の爲替相場に依つて、決定するの方法に出でた。斯の如くして國民は物價算出の基礎に充てる或る標準を得たものゝ、時々刻々通貨價値の低落する影響に對しては、何等保護される道を求めるを得なかつた。斯して此影響を回避する爲め、生産業者と卸賣業者との間に於ては、外國通貨を以つて、支拂を行うことゝしたり、外國通貨を手に收めるを得ざる小賣業者や、其他の階級の間に於ては、貨幣價値の低落から生ずる損失に當る爲め、普通の代價に或る割合を加へた金額の支拂を相手方に求めるの風を生じ、斯の如くして內國に於ける物價は異常に高き程度に上り、國民間の不平は金馬克の制度の布かれる以前に比較して、却つて其甚だしきを告げ、レンテン馬克の制度の行はれるまで、遂に一の效果だも擧げるを得なかつたのである。

故に通貨價値恢復の政策として、政府は必ずしも緩怠なるものではなかつた、否其爲す可き殆ど總てを爲したと云へるかも知れないが、其爲した所が問題の根本に觸れるを得なかつた爲めに、多く徒勞に屬する嫌を免かれなかつたのである。本來馬克價値の低落の彼の如く甚だしかつた場合に、之を漸次騰貴せしめて、戰前と同じき金馬克に復興せしめんとするが如き、百年河淸を待つの愚に類する、寧ろ價値の低落した馬克は低落した儘、之を銷却することを以つて、通貨整理法の捷經とする。千九百二十三年十一月新にレンテン銀行が設立され、其發行するレンテン馬克銀行劵をして戰前の馬克即ち金馬克を代表せしめて、從來の紙幣馬克と絕緣する方法に出でたことの如き、即ち紙幣馬克を其低落しつゝある當時の價値に於て銷却する方針に出でた第一歩であると云へる。而して此點於て更に歩を進めたものは、千九百二十四年の倫敦會議並に同會議に於て成立したダウズ計畫の適用に外ならない。

獨逸の經濟社會に取つて、困難とする所は財政に於ける不均衡と國際貸借の逆勢とに關聯すること、曩に述べた所である。而して是等の兩者は何れも或る程度まで、償金の負擔、其支拂に伴う金貨拂債務の加重に關聯するものである以上は、今、ダウ

ズ計畫の下に於て、償金の負擔が獨逸に取つて緩和され、輕減されれば、自ら獨逸をして其窮境から脫出せしめるに資する所以と爲るや、論を俟たない。斯くて同計畫の適用以來殊に金貨公債の諸外國に發行され、之を機會として外國に或は資金を獲得し、或は信用を調達する道の開かれて以來、獨逸の經濟社會は次第に其面目を新にし、振興の機運の見る可きものあるを得ると云ふことが多くの人々に依つて認められた。而して此國民の期待に副うたものは千九百二十四年十月の新貨幣法であつて、ライヒス馬克を單位とする新通貨制度が採用され英貨一磅に對する二十ライヒス馬克四三を基準として、爲替相場の公定される一方に、從來の紙幣馬克萬億を以つて、一ライヒス馬克と同價とし、以つて通貨價値の確定を謀つたことの如き、獨逸經濟の改善された實績を誇るものとするに憚らない。

然しながら通貨の價値や、爲替相場は施すに或る方法を以つてすれば、其恢復を期圖するの必ずしも至難の案件でないことは、獨逸の事例に依つても、之を知るを得るのである。換言すれば一般經濟上の狀態を改善し、國内に金貨を蓄積したり、有利なる國際貸借に依つて、金貨の增殖を謀ると共に、外國に債權を獲得したり、又斯る狀態の現出するを得るまでに、内國の生產が振興したりして、通貨の價値が上騰し、爲替相場が恢復したものとすれば、其根柢の頗る薄弱なるを認めなければならない。斯の如きは啻に通貨爲替と云ふ狹き方面に限られず、國民經濟全體に亘つて、改善を行ふものであつて、其方法頗る正則に適へりと云へるが、斯る全體の改善から離れて、通貨爲替と云ふが如き、一局部のみに就て、或る施設を講じ、然も其施設の時宜に投じて、一局部だけに就て、效果の擧げられるものなしとしない。獨逸の所謂經濟的改善なるものが如何なる種類のものであるか、抑も亦戰後に於て、如何なる經濟政策が行はれて、以つて一時の疲弊困憊から遠ざかるを得たのであるか、是れ吾人の注目を要する問題である。私は今千九百二十四年獨逸政府が賠償委員會の任命に係る專門委員會に提出した「獨逸の經濟、通貨並に金融」に關する報告書、英國產業並に貿易に關する委員會の調査した「外國市場調査報告」中の獨逸經濟に關係ある部分等を涉獵して、本論の材料を收め、右問題を研究する一端に充てようとするのである。

三

今日の獨逸が千九百十四年當時の獨逸に比較して、經濟上不利の狀勢に居ることは、疑を容れざる所である。如何なる狀勢に於て、獨逸經濟上の不利なる所を見るかと云へば、アルサス

の纖維工業、上部シレジアの製鐵製銅業を始めとして、主要の産業を失つたことの如き、戰前自國の領土から供給を求めるを得た鐵、鉛、亞鉛、石炭等産業の基礎的原料の大部分を外國市場に於て他國と競爭して、獲得しなければならないことの如き、何人の眼底にも映ずる所である。

然らば斯る不利の狀勢の下に、獨逸の産業は壞滅の已むを得さるに至つたかと云へば、必ずしもさうではなく、斯る狀勢に對抗して、産業經營の方針に變更を加へ、以つて環境の變化に順應することに勉めた跡が見出される。例へば戰前獨逸に經濟的繁榮を齎す基礎となつたものは、製鐵製鋼の二業であり、而して二業共に原料品並に半製品を大なる數量に於て、輸出したのであつたが、今や是等の輸出は著しく減少し、將來に於ては、獨逸製鐵並に製鋼の輸出は既製品を重なるものとすることが一般に想像されるに至つた。即ち獨逸は原料品の産出に於ては、不利の地位に陷つたが、戰爭當時から千九百二十三年十一月まで繼續した通貨膨脹時代に於て、馬克價値の低落に乘じて、各種産業の經營者をして外國に比較して、低廉なる費用の下に、物資を産出し、其輸出に就て、有利なる地位に立つを得たのであつて、國内に於て鐵道、港灣、運河、電氣事業其他一般工業の設備に復興の行はれたのも、此點に負うもの少しとしないのである。

然しながら馬克價値の低落は獨逸の製造事業者をして世界的市價よりも、低き價格を以つて、物資を産出し、之を諸外國に輸出せしめるを得たが、同時に此通貨價値の低落は國内勞働者の間に不安を惹起すもの甚だしく、之を放擲したならば如何なる事變の釀成されるや、測る可からざるの危險あるに至らしめた。

蓋し勞働者にして、一日又は一週間の勞働を終了し、之に對する報酬として、若干の馬克銀行券を領收し、之を自己の勞働力に對照して、正當なる賃銀であると考へて居つた。然も其價値の相次いで低落する場合には、次日に於て、次週に於て、價値低落の爲にその購買力に低落を來して居るとすれば、彼等は通貨政策の爲めに、自己の勞働力の一部を搾取された感を懷かさるを得ない斯くて彼等の爲す所は進んで事業に向つて、賃銀の增額を請求し、爭議を賭して、其貫徹を期するか。退いて其得た所は之を得るに隨つて、費消し、將來價値の低落する馬克の形態に於ては、毫末の貯蓄を行はず、自暴自棄の生活を送るか、孰れかの一に出づるは、當然であつて、通貨問題は進んで社會問題と爲り、國民道德の問題とならざるを得ない。獨逸が急遽短時日の間に幣制の整理に着手し、手段に於て專制、方法に於て急燥の嫌あつたとしても、通貨價値の確定を謀つたのも、

此點に於て、事情の諒とす可きものありと云へる。

四

然らば戰後に於ける金融上の變動から見て、今日の獨逸は如何なる狀態に居るであらうか。此點に於て、第一に擧げなければならないのは、國債增加であつて、千九百十三年四十八億五百八十萬馬克に過ぎなかつた獨逸の確定公債は千九百二十三年九月末に於て六千六百十億七千五百萬馬克に膨脹するに至つた。然も此間馬克價値に著しき下落を惹起して居るのであつて、隨つて右の金額を金貨馬克に引直せば、二萬馬克に過ぎない勘定と爲るし、其後千九百二十三年十一月レンテン馬克の制の布かれる當時まで、引續き馬克の價値に低落を告げたのであるから、金貨馬克を以つて、測れば、獨逸の內國債は有名無實のものと爲つたと云へるかも知れない。然しながら之を以つて獨逸國民全體の負擔が輕減されたと考へたならば、大なる誤解であつて、獨逸の國債所有者が國債價格の低落に依つて、蒙る所の損失の大なることは、何としても之を免かれるを得ない。啻に然るのみならず、ダウズ計畫の下に、獨逸は外債を募集するに隨つて、其元利金支拂に伴ふ負擔の頗る確實なるものがある。

獨逸の金融市場が戰後引續いて緊縮の趨きを更めないのは、通貨膨脹時代に其原因を發するのであつて、第一馬克價値の變動に伴ふ影響を回避する爲めに、資本の所有者は外國に向つて、資本を逃避せしめたこと、第二國內に於て通貨の形態を以つて流動資本を所有する者が之を固定資本に變形し、通貨價値の低落に依る價格騰貴の利益を收めようとしたことの二點こそ、其原因の重なるものを以つて目される。是等の事情に依つて、獨逸に於ては、流動資本の供給に著しき不足を生じたのであつて、現にマッケンナ委員會は千九百二十三年十二月末に於て獨逸資本の在外高を以つて、三億三千七百五十萬磅に上ると計算した。此數字にして大過なきものとすれば、獨逸に於て、戰後資本に減損を來したことも、亦當然であると考へられる。

斯くて戰後獨逸の產業界を擧げて、苦惱とした所は金融難の一事であつて、之に加ふるに馬克價値の低落は外國に於ける物資の購入を困難にし、生產費並に物價の算出に不便を來し、殊に資本や、當面の利益金を固定的資產に變更するの風は資本の不足を甚だしくし、金融緊縮の勢を大ならしめた。唯ダウズ計畫の實施以來資本の不足が諸外國殊に英米兩國の與へる財政上の援助に依つて、多少補充されるに至つたことは、蔽ふ可からざる事實であつて、此種の援助は或は外債に對する應募に依つ

て、或はクレヂキットの開始に依つて、或は獨逸株式の購入に依つて實現され、一方に通貨制度の恭固と爲つたことは、獨逸國內に於ける信用の供給を自由にし、貯蓄の習慣を復興し、在外のバランスを國內に囘收するに至らしめるを得た。是等の諸點は獨逸經濟の現狀を樂觀し、其將來に對して、多少の光明を認めしめる所以と爲るが、同時に現在に於て暗黑面を以つて、見る可きものも亦少なしとしない。第一、賃銀が旣に高率である上に、更に相次いで上進せんとする勢に居るが如き、第二外國のクレヂキットも貸付金も共に短期であり、其利子亦戰前に行はれたものに比較して、頗る高く、近き將來に期限到來して、借換の必要に接したならば、利子の增加の免かれざるが如き、第三國際貸借も亦現在獨逸に取つて、不利なる狀態に居り、隨つて外國借入金を償還するには勿論、其利子支拂に就ても、獨逸の財力に對して、大なる壓迫を加へるが如き何れも獨逸現時の經濟が如何に難境に陷りつ丶あるやを語る資料と爲るのであつて、是等の事實を考へるときは、獨逸の將來に對して、經濟上の見地から、樂觀するのが正しいか、悲觀するのが當つて居るか、判斷に迷はざるを得ないのである。

五

然しながら今日獨逸産業上の能力の增進して居ることは、明瞭の事實であつて、而して此事たる、燃料、動力、鑛物資源の利用に就て、改良の行はれた結果であり、其改良は戰時に於て收めた敎訓の一であるとも見られる。蓋し褐炭の使用されるものの頗る盛であつて、褐炭並に水力から得られる電力は到る所に普及し、一方に科學的利用に依つて、石炭、石油其他劣等の燃料から得られる火力も亦次第に其度を加へ來つた。斯の如きは畢竟獨逸が海路に依る原料品の供給を遮斷され、之に對抗する爲め、全力を擧げて、自國の天然資源を利用することに力を致し、其努力が、戰後の今日に於て、其效果を及ぼしつ丶ある證左とす可きである。以下各種物資の生産狀態若しくは之に關聯する事項に就て、戰前戰後の數字を比較し、數字の得られざるものに對しては、單に一般の狀況を說明する。

石炭其他の燃料に就て、最近の産額、千九百十三年に於ける獨逸戰後の領土の産額、千九百十三年に於ける獨逸全領土の産額を揭げる。(單位一千米突噸)

	一九二四年	一九一三年獨逸戰後領土の産額	一九一三年獨逸當時の領土の産額
石炭	一一八、八二九	一四〇、七五三	一九〇、一〇九
褐炭	一二四、三六〇	八七、二二八	八七、二三三
骸炭	二三、七二〇	三一、六六八	三四、六三〇
石炭ブリケット	三、七四三	六、四九〇	六、九九三

褐炭ブリケット	二九、六六五	二一、九七七	二一、九七七

石炭の產額に於ける減少は褐炭並に褐炭ブリケットの產額增加に依つて、補足されて居るとは云ふもの丶、戰前獨逸の全領土から產出された所と今日の產額とを比較すれば、石炭の如き著しき減少があるは勿論、今日の縮少された領土に於ける戰前の產額と現在の產額とを比較しても、後者に遜色の著しきは、獨逸產業の恢復の不充分なるを示すものであつて、其燃料に於て然るもの丶あるは、諸多の產業に影響を及ぼすとの少なからざる所以と爲るのである。

銑鐵製鋼事業並に鐵、鋼鐵の產出は獨逸が戰前に於ける經濟的發展を達成するに就て、重大なる關係を持つて居つたのであるが、鐵鑛の產額は千九百十三年に於ける二千八百六萬七千九百三噸から、千九百二十四年には七百八十一萬噸に減少し、銑鐵並に鋼鐵の產額にも亦左の如き異動を生じた。（單位一千米突噸）

	銑鐵	鋼鐵
一九一三年	一一、五二〇	一三、二三二
一九二二	九、三九六	一一、七一四
一九二三	四、九三八	六、三〇五
一九二四	七、一九〇	九、一五〇

戰前の產額中から、アルサスローレン、ルクホムブルグ、ザール地方の分を除外す。

鹽酸加里の國內產出高の豐富であつたことが獨逸化學工業の發達を助けたことは、世人の知る所であるが、戰後鹽酸加里を產出する領土が外國に割讓されて、此點に於ける獨逸の地位に大なる不安を及ぼしつ丶あるのであつて、現に千九百二十四年獨逸に於ける鹽酸加里の供給高は八十四萬米突噸を數へたが、其內の四割三厘は實に外國の供給に係るものであつた。

海運業が戰爭の打擊、媾和條約に伴う負擔に依つて、著しく衰微したことは、世間公知の事實であるが、獨逸としては其海上國たる地位を利用し戰前に於けると同樣、海運業を盛大にして、輸出貿易の發展を助長すると共に、運賃の收入に依つて、國際貸借を有利なる狀態に導かなければならない。此點に就て、獨逸は船舶の隻數を增加することを計畫し、戰前（一九一四年六月）蒸汽船モーター船二千九十隻、五百十三萬四千七百二十噸を數へたものを千九百二十四年六月に於ては、千九百六隻、二百八十七萬二千二百噸にまで、恢復するに至らしめた。一方に獨逸政府は失業者を救濟し、他の一方に造船業獎勵の目的を達する爲め、造船業者と契約を結び、失業救濟基金一億八千萬金馬克の內五千萬金馬克を造船業者に貸出すこと丶し、一個の造船業者に對して、其建造に着手した船舶價格の半額に相當する金額を五個年の期限に於て貸付け、利子は建造中年五厘、

引渡後の第一年四分、第二第三年五分、第四、第五年六分とするが、如何なる場合に於ても、中央銀行の公定利率よりも一分以上低からざることゝした。

農業亦獨逸の主要産業であるが、小麥、大麥、燕麥、馬鈴薯、甜菜等總ての産物は戰後に於て、著しく其産額に減少を來し、今日未だ恢復するに至らない。是れ戰時に於ける土地の荒廢、勞働者の不足の然らしめたものと云へる。玆に於てか千九百二十四年七月獨逸鹽酸加里シンヂキケートは九月一日以前の人造肥料の注文に對しては、十一月十五日まで無利子の手形取引に依つて、之に應ずる旨を公表し、農業者の肥料購入に便宜を與へて、以つて農業奬勵の實を擧げようとした。然も鹽酸加里シンヂキゲートの爲す所は其力に限りがあつて、到底廣く利益を農業者に及ぼすを得ない。斯くて千九百二十五年に入るや、獨逸政府は農業の復興に依つて、食糧供給の問題を解決し、又外國の競爭に對抗し得るが如くに、内國農産物の價格を低廉ならしめるには、農業者に信用を與へることを必要であるとし、農業者の農業機械並に種苗買入れに對して、總て政府に於て金融上の援助を與へる政策が確定したのである。

六

戰爭直後獨逸が經濟上の關係に於て、甚だしく苦痛とした所は海外に對する殆ど總ての關係を喪失した一事であつたが、其後諸般の努力に依つて、此種關係を復興することが實際に試みられ、輸入免許の制度を利用して、内國商業に對する保護の行はれたことの如き、何れも此點に資する力あつたと思はれる就中效果の著しかつたのは、カールテル制度の利用であつて、當業者の聯合、合併、協定等は到る所に其行はれるを見たが、大體から云へば、所謂平面的聯合が廢れて、立體的聯合の之に代れることを認める。平面的聯合と云ふのは、獨立の所有並に管理下に在る幾多の當業者が中央販賣機關の媒介若しくは代價に對する支配を通じて販賣高を増加せしめようとするものであり、立體的聯合と云ふのは、聯合に屬する當業者が獨立を保つと否とを問はず、全體の支配權を一の中央機關に託すのである。立體的聯合は原料品を生産する事業を支配するに始まり、次いで製造の各段階を通じて、原料品を取扱ふ事業の支配に及び、結局販賣を中央機關に移すに終るのである。而してカールテルの運動が平面的から立體的に移つたのは、何故であるかと云へば、戰後に於て原料供給の淵源たる領土を失ひ、獨逸に殘された源泉から供給の道を付けなければならない窮迫した事情に胚胎したのであつて、斯の如くして各種事業に於ける利害關係の緊切

なるを得るに至つたのである。而して此風潮に順應する爲めに、或るカールテルは解散し、他のカールテルは改造され、改造の爲めに、一時組織の半途に居るものもある。例へば以前の鋼鐵組合に代つて、組織された鋼鐵インゴット組合の如き、鋼鐵インゴットの製造高を制限して、其需要に調節せしめることを重なる目的とし、組合全體の生産高と所屬當業者の生産率とは之を協定するが、組合としては販賣又は賣價に就て、何等の交渉を持たず、生産高に對する管理を通じて、間接に賣價を支配し得るものとするのである。然も此種の團體の組織は需要供給を調節する手段の第一歩を以つて、目されるのみならず、製鐵製鋼事業に關して、他の聯合を組織する基礎に充てることが期待されるのであつて、此方面に運動の進み來つた事實の認められるものがある。

カールテル、其他の企業者聯合が戰前に於て、獨逸輸出貿易の振興を助けたことは、著明の事實であつたが、戰後に於ても、カールテルが輸出貿易と離る可からざる關係を有することは、吾人の注目に値する所である。例へばワイヤロープ製造業者の組織したシンヂケートに於ては、其組合に屬する一當業者の外國から受けた註文は總て組合に告知し、註文額の四分の一は直接の註文を受けた當業者自ら之に當ると共に、他の四分の三の註文は殘る組合員全體に當初協定された比率の下に、分配し、輸出の註文に應ずることに就て、遲滯し遺漏することのないと共に組合所屬の事業家をして生産上に全力を盡さしめることを期した。

斯くて是等の努力は酬ひられて、獨逸の輸出貿易を助長し、諸外國の市場に於て、外國の物資に對する獨逸物資の競爭力を旺盛ならしめると共に、獨逸國内に於ても、次第に外國の物資を排斥するに至らしめたのみならず、戰前に於ける對外的關係を復興することの必要から、獨逸は諸外國に向つて、自國物資の販路を求めるに當つて、直接貿易に依ることに勉め、其結果英國の再輸出貿易の如き、多少の打撃を蒙つた趣きなきを得ないのである。

七

然らば實際の數量から云つて、獨逸の外國貿易は幾何の恢復を告げるを得たであらうか。今戰前と最近とに於ける外國貿易を見るに、(單位百萬金馬克)

	輸出	輸入
一九一三年	一〇、一九九	一一、二〇六
一九二四	六、五六六	九、三一六

と爲り、更に之を物品に就て、類別すれば、左表の如く爲るの

である。（單位百萬金馬克）

	一九一三年		一九二四年	
	輸入金額	百分率	輸入金額	百分率
輸入品				
動物	二八九、七	二、六	九二、四七	一、〇
飲食物	二、七九六、五	二四、九	二、六七六、九三	二八、七
原料品	四、九九七、一	四四、六	三、六八六、七九	三九、六
半製品	一、二六三、三	一一、三	八九七、六五	九、六
全製品	一、四二二、一	一二、七	一、七八一、二一	一九、一
金銀	四三七、四	三、九	一八一、七九	二、〇
合計	一一、二〇六、一	一〇〇、〇	九、三一六、八四	一〇〇、〇
輸出品				
動物	七、四	〇、一	一三、七一	〇、二
飲食物	一、〇六八、七	一〇、五	四一九、一四	六、四
原料品	一、三〇〇、一	一二、七	四六八、〇九	七、一
半製品	九三九、八	九、二	四三九、〇九	六、七
全製品	六、七七八、九	六六、五	五、一九一、四二	七九、一
金銀	一〇三、七	一、〇	三五、四〇	〇、五
合計	一〇、一九八、六	一〇〇、〇	六、五六六、八五	一〇〇、〇

戰前に比較して、戰後の今日に於て、輸出入の金額の共に減少して居ることは、獨逸經濟の充分に恢復せざる狀況を顧みれば、已むを得ざる所としなければならない、輸出入品の內容は百分率から云つて、著しき變化を見ない、唯獨逸に取つて戒心す可き一事がある。即ち戰前確固たる國際貸借上の受取勘定あつて、其れを決濟資金として、輸入超過が生じたのであればこそ、之に對して、何等疑惧の念を懷くを要しなかつたのであるが、戰後の今日、國際貸借に於ける受取勘定の超過するものなくして、然も戰前に比較して、更に大なる輸入超過を示して居る。即ち金銀を除き、一般商品のみに就て、輸出入額を對照すれば

	輸入	輸出	輸入超
一九一三年	一〇、七六八、七	一〇、〇九四、九	六七三、八
一九二四年	九、一三五、〇	六、五三一、四	二、六〇四、五

と爲る千九百二十四年に於て、右の如き巨額の輸入超過あり、而して之を決濟する貿易外の收入の存在せざるに拘はらず、尙若干の金銀入超を見るを得たのは、要するに千九百二十四年下半季に於て、ダウズ計畫の一端として、外資輸入の行はれる結果としなければならない。然も外資輸入には限度がある、或る年に輸入された外資に對しては、次年度から利子の支拂を要し、更に幾年の後には、元金の償還を要し、結局對外支拂を增加して、國際貸借を不利の狀態に導かざれば已まない、之に對抗して、輸入された外資が生產資本として、活用されることに依つて、貿易上に於ける狀勢の不利を轉回するに足るや否や、此般のことに至つては、一個の問題とせざるを得ない。

玆に於てか獨逸の關稅政策が內國產業保護の一點に邁進し、

依つて以つて輸入抑制、輸出奬勵の目的を達しやうとする傾向を持つに至るのは、其傳統的信念から云つて、當然のことゝ解される。獨逸の關稅政策が戰前多年に亘つて、嚴酷なる保護政策を以つて、終始したことは、世人の知る所であるが、此點に就て、何等變更の加へられる跡を認めない。開戰以來獨逸保護關稅の方略に一段の加へられるものと爲つたのは、輸入制限の制度であつて、此制度の下に於て、總ての物資輸入は政府の特許に依り、而して內國の事業に對して、競爭する外國物資の輸入特許には、種々の條件を付し、成る可く之を局限する方針に出でたのである。而して關稅則に於ける改正は輸入制限の廢棄と相俟つて、行なはれ可きであるが、新關稅則の下に於ける稅率の增加が或る程度まで、輸入制限の廢止に代つて、內國產業に保護の效果を繼續する用を爲すことも、亦一般の期待する所である。輸入制限の外に、輸出特許の制度も亦戰後獨逸に依つて採用され、或る物資の價格が監督官廳の定めた標準價格以下に、下落しない場合には、當該物資に對して直に輸出特許制度を適用し、其輸出を制限する方法に出で、同時に輸出稅の賦課も亦採用された。其後代價の監督と輸出稅の賦課とは廢止されたが、輸出特許の制度は專ら食料品原料品に適用され、自ら獨逸に於ける戰後經濟策の一特色を以つて、目されたのである。

八

歐州戰前英獨兩國の國際經濟關內に於ける競爭の熾烈であつたことは、今日尚ほ世人の記憶に新なる所であつて、歐洲戰爭の如き、兩國の經濟的把權に對する爭奪が有力なる原因と爲つたことは、疑を容れないのである。然らば戰後の今日、此點に於て如何なる變化が起りつゝあるであらうか。今貿易上の方面から、戰前戰後に於ける英獨兩國の關係を見ると、左の如くである（單位百萬磅）

	英國の對獨輸出	輸出總額に於ける同上百分率	英國の對獨再輸出	再輸出總額に於ける同上百分率
一九一三年	四〇、七	七、七	一九、八	一八、一
一九二二	三二、一	四、五	一七、〇	一六、四
一九二三	四二、六	五、六	一八、三	一五、四
一九二四	四二、六	五、四	二八、九	二〇、六

千九百二十二年に於て、英國の對獨輸出の約半額は纖維業製品並に同原料品であり、三分の一は石炭であり、殘る六分の一は他の諸物資であつたが、ルール占領に伴ふ狀況の變化は千九百二十三年に至つて、英國石炭に對する需要を大ならしめ、其輸出は千九百十三年に於ける九百二十萬九千五百四十三米突

噸、千九百二十二年に於ける七百七十九萬三千米突噸から千九百二十三年に於て千五百四十一萬九千米突噸に上らしめた。然し水力並に褐炭に依る發電、汽船に於ける重油の使用の相次いで行はれる以上は、獨逸に於ける英國石炭の販路は千九百二十四年に至つて六百一萬四千米突噸に減少した如く、衰微することを以つて、當然とする。戰前獨逸に對して英國が原料品半製品を供給した勢は大體に於て維持されて居る。唯對獨輸出の減少した物資としては、絹織物と機械との二者が擧げられる。前者に就ては、獨逸國民の消費力の減退したことを以つて、其原因に充てる外に、道はないが、後者に就ては獨逸に於ける輸入の制限と、國產品の代用とを以て、重なる原因とする。獨逸に輸入される英國機械の數量を米突噸に依つて、示せば、

一九一三年	二七、九一六	一九二一年	三五五
一九二二年	五五八	一九二三年	三八五
一九二四年	三、七七三		

と爲る。右輸入機械の重なるものは、紡績紡織機である。如何に國產の機械に依つて、輸入の不足を補ふ道があるとしても、右の如き數字は獨逸紡績業に於ける衰微の如何に甚だしかつたかを示す所以であり、而して千九百二十四年の增加は恢復の兆として、世人をして聊か愁眉を開かしめるに足るのである。

英國の對獨再輸出は專ら原料品並に食料品より成るのであつて、其重要の程度に於て列記すれば、羊毛、生護謨、生皮、生革、珈琲、ジユート、錫、棉花、肉、穀物、石炭等である。是等商品に就ては、獨逸は直接貿易を營まうとし、原產地の輸出業者、亦之を希望して居るが、容易に行はれないのである。加工輸入貿易に就ては、戰後統計の徵す可きものを得ないのであるが、戰後獨逸の賃銀の低廉なることは、綿布、毛織の無地物に就て、獨逸に對する加工輸入の行はれるもの、盛なりと云はれる。

獨逸產業の將來に就ては、之を豫想するに困難であるが、ダウズ委員會の如きは、大に望を屬し、獨逸產業の長所として、(一)勤勉なる人民並に其增加、(二)大なる技術上の熟練、(三)豐富なる天然資源、(四)國內農業の漸進的發達、(五)科學の優秀等を擧げたが、就中獨逸の依賴する所は優秀なる勞働者を有することである。勞働時間に就ては、八時間制が表面上有效であるが、其後の命令に依つて、幾多の點に於て、潤色されたし、賃銀に就ては、之を引上げる運動甚だ盛であるが、尙ほ英米兩國に比較すれば、其頗る低きを見るのである。今、戰前戰後に於ける一時間の賃銀を金プフェニツヒにて示せば、左の如くである。

	熟練		不熟練	
	一九二四年十二月	一九一三—一四年	一九二四年十二月	一九一三—一四年
坑夫	九〇	七八	五三	三八
大工	八六	七一	七二	五六
木材工	七八	六一	六五	四四
金屬工	七三	六六	五一	四三
纖維工				
男	五六	四七	四五	三八
女	四〇	三一	三二	二六
化學工業工	六八	五七	五九	四六
製紙業工	五三	三三	四八	三〇
印刷工	八〇	六三	六八	四六
鐵道現業員	六七	六二	五二	三九、五
平均	七五	七〇	五三	四一

一方に生活費に就ては、千九百十三年から同十四年に至る分を百として、其後の變動を見れば、

	一九二五年一月	一九二四年一月
食料、燈火、衣服、住宅	一二四	一一〇
食物	一三七	一二七

であつて、他の一方に賃銀の變動上記の如くであつては、國民生活の不如意は已むを得ざる所であるとしても、同時に產業の經營者が此賃銀の低廉を利用して、對外競爭上に利益することは、察するに餘りありとするを得るのである。

之を要するに獨逸が彼の如き敗戰の苦惱に直面し、一時幾多の悲觀す可き事相に顚倒されながら、之に堪へ忍んで、今日の如く恢復の曙光を仰ぎ得るに至つたに就ては、或は戰時自國の領土の敵國に依つて、蹂躪されなかつたことが一の原因として、擧げられるかも知れないが、私は此事よりも獨逸國民の不屈不撓の精神の經濟的發展の原動力と爲つて居ることを閑却するを得ないのである。

カール・マルクスの地代論

——リカルド及ロドベルトス說と比較しつつ——

高畠素之

一　地代の意義

地代とは土地賃貸料のことであるが、この概念は、土地を以つて一定の貨幣價値を有する資本と認め、地代は此資本に對する利子に外ならないとする俗說に依つて曖昧にされる。

何故斯かる見解が生ずるかといふに、元來地代なるものは、土地所有者に對し年々一定額の貨幣を以つて支拂はれ、而して如何なる一定の貨幣收入も資本化し得るものであり、假想的な一資本の利子と見做し得るからである。假りに世間普通の利子率が五分であるとすれば、二百圓といふ年地代は四千圓なる一資本の年利子と見做し得る。斯樣に資本化された年地代こそ、土地の購買價格又は地價を構成するものである。勞働價値說の立場からすれば、土地に價値があるとする見解の誤りなることは一目瞭然である。なぜならば土地は勞働の產物ではなく、隨つて何等の價値をも有するものではないからである。然しこの不合理な見解の背後には、一つの現實的な理由が存してゐる。

若し或る資本家が一年に二百圓の地代を齎す土地を四千圓で購買したとすれば、これ取りも直さず、彼れが四千圓を

以つて年五分の平均利子を得ることに相當する。即ち彼れがこの資本を以つて五分利付公債證書を購買するか、又は同じ資本を五分の利子で小商人に貸付けた場合と異なる所はない。要するに彼れは、年々五分の利を生む四千圓なる資本を所有することゝなるのである。然しこの四千圓なる土地價格は、最初に二百圓といふ地代があつたからこそ生じて來たのであつて、四千圓といふ土地價格が最初に存在してゐたから、二百圓なる地代が生じたのではない。地代の資本化は、地代を前提することなくしては、決して說明し得るものではないのである。

この關係は、地價昂騰の一原因を見れば容易に明らかとなるであらう。社會の發達に伴ひ資本が益々豐富になると共に、平均利子率は次第に下降して行く。然るに地代なるものは大抵の場合、低落することがない。今、通例の利子率が五分から四分に低下して、而も地代には變化がないとすれば、二百圓なる地代は、もはや四千圓ではなく五千圓といふ一資本の一年間における價値增殖を代表することゝなり、斯くして同じ土地の價格は四千圓から五千圓に增進することゝなるであらう。されば、土地の價格なるものは、地代そのもの及び土地生產物の價格の變化から離れても、尙不斷に昂騰する傾向を有してゐるのである。

以上の說明に依つて、地代なるものは資本に對する利潤でも利子でもないことが明かになつたと思ふ。然らば地代の本體は何であるか。それは本論が展開されるに從つて明かにされることであるけれども、豫め先驗的に簡單な暗示を與へて置く。

マルクスに依れば、地代とは土地所有者に對して借地資本家が支拂ふ所の餘剩利潤である。土地それ自身は、何等の利潤をも生むものではない。土地に對して資本を投下し、一定の生產を營むとき、その資本に對して利潤が生ずる。而かも土地に投下される資本（農業資本によつて代表されるもの）は、他の生產部面に投下される資本よりも多くの利

潤を生ずる。何故ならば、農業上の資本組成は工業上の資本組成よりも一般に低位(不變資本に對する可變資本の比率が平均以上に高いこと)であり、而して低位組成の資本は高位組成の資本よりも高い利潤率を有するからである。工業界に於て自由競爭が行はれる結果、組成を異にした各種の資本は平均利潤率を有することとなるが、農業上の利潤はこの平均化の傾向に關與しない。なぜならば土地は獨占されるものであつて、需要供給の作用に支配されることがないからである。

それ故、等しく一萬圓の資本を投下するとしても、これに對する利潤率は農業の方が工業に於けるよりも一般にヨリ高いこととなる。その差額が即ち餘剩利潤と稱するものである。斯く農業上の利潤率が他の企業の利潤率よりも高い以上、多くの企業家は競つて農業に從事しようとするやうになる譯であるが、然し企業家は大低、土地を持たない。そこで餘儀なく他人の所有に屬する土地を賃借することとなるのであるが、土地所有者はこれに對して一定の代償を要求する。ところで若し、農業上の利潤が他の平均利潤と相等しいとすれば、支拂ふべき地代に相當した分だけ他の企業よりも利潤が低くなる譯であるから、土地を賃借して農企業を營むものはなくなる。けれども若し前述の理由に依つて、農業上の利潤率が二割、他の企業の利潤率が一割であり、斯くして一割の餘剩利潤を生ずるとすれば、農業企業家は地主に對して餘剩利潤の全部を與へても、尙ほ一割といふ平均利潤を獲得しうる譯である。農企業者間の競爭は、必然的に地主をして平均利潤を超過した利潤分即ち餘剩利潤の全部を要求するに至らしめる。これを絕對地代といふ。

更らに土地の豐度が高ければ高いほど、又土地が市場に對して好位置を占めて居れば居るほど、その土地に投ぜられた資本から益々大なる餘剩利潤が生み出される譯であつて、斯かる餘剩利潤も亦、悉く地代として地主の所有に歸する。斯く土地柄に依つて差等づけられる地代は、これを前の絕對地代から區別して對差地代と呼ぶ。

マルクスは此等兩種の地代について、彼れ獨特の深邃精緻なる學說的論究を展開してゐるが、殊に彼れの絕對地代に對する考察は殆んど前人未發の觀がある。

二　リカルドの地代說

以上は、地代の性質について概括的な暗示を與へたに過ぎないのであるが、地代に關する學說は、一般經濟學說の中でも比較的新らしく完成されたものである。英國正統派の流祖アダム・スミスも地代に關して言及するところはあつたが未だ首尾一貫した考察を與へるには至らなかつた。その後約五十年を經て、デヴヰツド・リカルドが『經濟學及租稅原理』の中で地代を論じたのが、地代論として定形を與へられた最初のものである。而してリカルドの後にはリカルド說に對抗すべき有力な地代學說が現はれず、マルクスの出現した當時にはリカルド說は殆んど一般的の定說となつてゐたのである。そこでマルクスの地代論は、勢ひリカルド說の批評といふ形を採らなければならなかつた。そこでマルクスの地代說を研究するに當つては、豫めリカルド說の大體を理解して置くことが必要となる。

リカルドは地代の定義を下して、『地代とは土地に固有するところの不滅なる力の使用に對して、地主に支拂はれる土地生産物部分である』と謂ふ。これが即ち地代といふ言葉の本來の意義であつて、『農夫が地主に對して年々支拂ふところの、資本利子及び利潤をも含む一切のもの』といふ如き通俗的な地代からは嚴密に區別されなければならないと說く。然らば、この定義に示す如き嚴密の意味の地代は、そもそも如何にして生ずるものであるか。

リカルドに依れば、初めて一國が開かれたとき、その國土内に肥沃豐饒な土地が澤山あつて、現在の人口を維持するのに此等の土地の極小部分の耕作を以つて事足りるといふやうな狀態の下には、地代なるものは決して存在しない。な

ぜならば、未だ何人にも占有されない土地が澤山あり、隨つて何人でも勝手に土地を耕作し得るといふ狀態の下に於いては、土地使用の代償を支拂ふ如き人は存在し得ないからである。若し一切の土地が地味を等しくし、且つ面積に限りがないとすれば、ただ有利な位置に在る土地を使用する場合の外は何等の代償をも要しないであらう。土地の面積に限りがあつて、地味が不等であり、且つ人口增殖の結果、地味のより劣等な、又は位置のより不良な土地が耕作されるやうになつたとき、玆に初めて土地の使用に對し地代が支拂はれることとなるのである。人口增殖の結果、最良の土地の耕作だけでは充分に食物を供給し得なくなり、第二位の土地が耕作されるやうになつたとき、第一位の土地からは忽ちにして地代が生ずることとなるのであるが、この地代の大小は、これら二種の土地間の自然的生產力の差異に依つて決定される。更らに第三位の土地が耕作されるやうになると、右の第二位の土地からも直ちに地代が生じ、而してこの地代の大小は、前の場合と同樣に第二及び第三の土地間の自然的生產力の差に依つて決定される。同時に、第一位の土地の地代は增騰して來る。即ちそれは今や、第三位と第二位との間、及び第二位と第一位との間の自然的生產力の差の總和に等しくなるのである。

何故さうなるかといへば、元來土地生產物をも含む一切商品の交換價値は、極めて有利なる事情の下に立つところの、特殊な便宜を有する生產者が支出する比較的少量の勞働に依つて決定されるものではなく、斯かる便宜を持たない、不利なる事情の下に生產に從事する者の比較的多量な支出勞働に依つて決定されるとリカルドは見てゐるからである。それ故、劣等な土地が耕作されるやうになると、土地生產物の交換價値は昂騰して來る。なぜならば、その生產にヨリ多量の勞働を支出しなければならなくなるからである。一方、優良な土地からは、從前と同一量の勞働を以つて同一量の生產物が得られるであらう。而もこの生產物の交換價値は、劣等の土地の生產物に含まれる勞働量に依つて決定

されるのであるから、必然的に過剰の價値を齎らすこととなる。この過剰の利益が、即ち地代を構成するものとなるのである。

これを市場の側から見れば、次の如くになる。

土地生産物の價格は、その生産に著手してから市場に持ち來たすまでの間、最も多くの費用を要する部分に依つて決定される。この生産物部分の價格は、それを生産して市場に送り出すまでの間に要する一切の費用を償ふ上に、尚ほ充用資本に對する普通（平均）の利潤をも含まなければならない。さもなければ、この生産物は市場に供給されないであらう。けれどもその價格はこれ以上には昂らず、隨つて地代を提供するに至らない。然かるに、ヨリ大なる便宜を以つて生産する者は、ヨリ小額の費用で得た生産物に對して同一の價格を要求し、過剰の價値を獲得することとなるが、この價値部分は競爭に强制されて、彼等の手から地代として地主の手に移轉される。

以上の説明に依れば、地代は先づ土地の豐度の差、次ぎにはまた土地の位置の差から生じて來る。然らば此等の地代は如何にして成立するか。これを示すため、リカルドに倣つて一つの例解を掲げよう。先づ左に豐度の相異なる三種類の土地を假定する。

第一位の土地——一定の經營方法の下に一定の資本及び勞働を投下するとき、百石の米を産出する。

第二位の土地——第一位の土地と同面積にして、且つ同一の經營方法の下に同一量の資本及び勞働を投下するとき、九十石の米を産出する。

第三位の土地——右と同面積にして、且つ同一の經營方法のもとに同一量の資本及び勞働を投下するとき、八十石の米を産出する。

かく三種の土地を假定した上で、更らに米の價格が一石當り三十六圓であるとき、第一位の土地の耕作者は彼れの投下資本及び勞働に對して普通の利潤と勞銀とを獲得すると見る。米の價格が斯く三十六圓であるとすれば、第一位の土地は何等の地代をも生ずることなく、僅かに平均利潤と普通の勞銀とを齎らすに過ぎない。人口が增殖して米の需要が多くなつても、自由に占有し得る第一位の土地が存在する間は、米の價は依然として三十六圓を維持するであらう。ところで人口が益々增殖し、第一位の土地の穀物供給量のみを以つてしては、もはや需要に應じ切れなくなり、その結果米價が騰貴して例へば一石四十圓といふ如き相場に達すると、玆に第二位の土地の耕作が開始される。なぜならば米價が四十圓となれば、第二位の土地の產額九十石を以つてしても、從前第一位の土地で獲得してゐた所と等額なる三千六百圓といふ總價格を獲得して、第二位の土地の耕作が引き合ふこととなるからである。斯くて第二位の土地が耕作圈內に引き入れられるやうになると、一等地の地主は米價四十圓と三十六圓との差四圓を、一石當りの地代として收納する。而して更らに人口が增殖して、第一位及び第二位の土地のみを以つてしては米の需要を充たすことが出來ず、米價は昂騰して一石當り四十五圓となり、八十石の產額を以つてしても尙ほ三千六百圓といふ總價格を獲得し得るやうになるとすれば、この場合には第三位の土地の耕作も引合ふやうになつて來る。斯樣に第三位の土地が耕作圈內に引き入れられると、第二位の土地の地主は一石當り五圓の地代を得、第一位の地主は一石當り九圓の地代を得ることとなる。

以上は土地の豐度の差から生ずる地代であるが、地代は更らに、市場に對する位置の便否の差からも生じて來る。尤もこの位置の差から生ずる地代に就いては、リカルドは何等明確な說明を與へて居らないのであるが、然し彼れは決してこれを認めなかつた譯ではない。

今、第一、第二、第三位の各土地が、いづれも同一なる豐度を有し、隨つて同一量の生產物を齎らすに拘らず、第一

位の土地は中心市場に隣接してゐるため米の販賣に運送費を要しないに反し、第二位の土地は中心市場から可なり隔つてゐて一石當り二圓五十錢の運送料を支拂はなければならず、また第三の土地は更らに著しく隔つてゐるため、一石當り五圓の運送費を支出しなければならないと假定して見よう。然るときは、これら三種の土地は豐度が相等しいとしても、尙ほ此運送費の差から地代が成立して來る。即ち位置の便を占めてゐる第一位の土地の地主は一石當り五圓の地代を得、第二位の土地の地主は一石當り二圓五十錢の地代を得るが、第三位の土地は總一文の地代をも齎らさず、僅かに普通の利潤と勞銀とを生ずるに過ぎない。

以上の考察は、豐度の場合にしろ、位置の場合にしろ、いづれも相異つた空間に存在する土地を對象としたものであるが、地代は更らに、同一の土地に重ねて資本を投下する場合、後から投下する資本は前に投下された資本よりも少額な生産を齎らすといふ、謂はゆる收穫遞減の法則からも成立するものである。この點に關するリカルドの說明の曖昧なることは、マルクスの指摘してゐる所であるが、今、斯かる地代成立の過程を示せば次の如くである。

假りに、一萬圓の資本を第一位の土地に投ずるとき百石の米が獲られ、同じく一萬圓の資本を第三位の土地に投ずるとき八十石の米が獲られるが、重ねて一萬圓を一等地に投ずるときには八十五石しか獲られないとし、且つ二萬圓の資本を第一位の土地にのみ投ずるも、又は第一位及び第三位の兩者に投ずるも、自由であるとすれば、斯かる場合には、何人も第一位の土地にのみこれを投下するであらう。なぜならば、さうする方が五石だけ多くの産額が得られるからである。この場合には、最初の投資に對しては百石の收獲があり、第二次の投資に對しては八十五石の收獲しかないのであるから、玆に第一次の資本と第二次の資本との間には十五石といふヒラキが生じて、第一次の投資からは十五石の地代が生じて來る。更らに穀物の價格が昂騰して、第三次の投資も引合ふやうになるとすれば、第二次の投資からも同様

にして地代が生じて來る。要するに、同一區劃の土地に累次的に投ぜられる各資本間の收獲のヒラキからして、地代が生じて來るわけである。

リカルドに依れば、地代なるものは常に上記の三原因のいづれかから生ずるものであつて、いづれから生ずるにしろ、その性質が對差的である點は相共通してゐる。この見地からすれば、如何なる地代も常に對差的地代である。投下した資本に對する世間普通の利潤と、勞働に對する世間普通の賃銀とを供給するに足るだけの收獲しか齎さない土地が、常に耕作の限界となるのであつて、それ以下の收獲を齎らす土地は耕作されることがない。而して此限界に立つ土地は、毫も地代を齎らさないのであるが、些少でもそれ以上に出づればそれだけ地代が生じ、出づること著しければ著しきほど、益々多額の地代が生じて來るのである。

三　マルクスの對差地代説

リカルドの地代説は大略以上の通りであるが、マルクスはこれに對して如何なる批評を下してゐるかといふに、大體に於いてリカルドの見解を容れてゐる。尤もそれは對差地代に關する範圍内だけの話であつて、リカルドが絶對地代（苟くも耕作される土地からは、必らず生ずべき地代）を認めなかつた點については激しくこれに反對し、マルクス獨特の深刻精緻なる學説的見解を披瀝してゐる。我々は此特色ある絶對地代論を研究するに先だち、順序として先づ、マルクスがリカルドに依つて先鞭づけられた對差地代に關し如何なる見解を示してゐるかを見なければならない。

マルクスに依れば、對差地代なるものは一つの餘剩利潤に過ぎない。マルクスはこれが説明に、一つの例解を掲げてゐる。いま一國に於ける工場の大多數は蒸氣機關に依つて運輸され、而して或る少數の工場のみ自然的の落流に依つて

運轉されてゐると假定し、更らにこの工業上の生產に於いて、一百圓といふ小資本を投じて生產した商品の生產價格（支出資本と平均利潤の和）が一百十五圓であると假定する、然るときは市場を規制する此商品の生產價格は一百十五圓であつて、その中には一割五分の利潤が含まれてゐるのであるから、自然的の落流に依つて機械を運轉する工場の生產物も同樣に、一百十五圓といふ、市場價格を規制するところの平均價格で販賣されるであらう。ところが自然的落流に依つて運轉せられる工場に於いては、蒸氣機關や燃料などに要する資本が節約されるのであるから、その資本は一百圓に達することなく恐らく九十圓で十分であらう。かくして落流の利用者は九十圓の資本支出を以つて一百十五圓といふ市場平均價格を得ることとなり、二割五分の利潤を擧げるであらう。即ち彼は一割五分といふ平均利潤を超過すること、正に一割なる餘剩の利潤を得るのである。何故斯かる餘剩利潤が生ずるかといへば、それは彼れが生產商品を生產價格よりも高く販賣するからではなく、寧ろ市場平均價格で販賣するからであり、且つ彼れの商品は、この產業部門に普通となつてゐる條件の水準を越えた例外的に有利な條件の下に生產せられるからである。

而してこの餘剩利潤は、一般的意味の餘剩利潤から區別せらるべき何等の特殊性をも有するものではない。それはヨり有利な條件のもとに生產せられる商品の個別的生產價格と、市場を支配するところの、一般的な、社會的な、當該生產部門全體を通じて平均してゐる生產價格との間のヒラキから生じて來るものである。斯かる餘剩利潤は、未だ一般に普及して居らないヨリ優良な機械や秘密的な技術などを應用する場合にも獲得される。ただ、此等の場合には、餘剩利潤は直接生產者の懐ろに納められて地代を形勢するに至らないといふ相違があるのみである。然らば上例に示す如き、資本家が自然的落流の利用に依つて得る餘剩利潤は、何故地代に轉化されるのであらうか。

先づ第一に問題となることは、この餘剩利潤の生產には優良な機械や秘密な技術を應用する場合とは異なるところ

の、自然の力が關與してゐるといふことである。だが自然力の利用は、必らずしも地代の原因となるものではない。蒸氣機關を應用する工場主も同樣に自然力を利用する。而してその自然力は、彼れに鐚一文の費用をも負擔せしめずして、彼れの命令の下に立つ勞働をヨリ生産的ならしめる。斯く勞働の生産力が增進せしめられる結果、生活必需品の價値が低落して、勞働力の價値低減を來たし、これがため餘剩價値が增大して利潤の增大を來たすといふことはあり得る。けれども斯かる自然力は、同一の生産部門に於ける一切の資本家が利用し得る所である。

然るに落流といふ自然力は、同一の生産部門における一切の資本家に依つて自由に利用せられ得るものではない。これを利用し得るのはただ、落流のある特殊な土地を支配し得るところの人々にのみ限られる。蓋し落流といふ自然力は、特殊の人の手に獨占せられてゐるものであつて、他の人々が自由に之れを利用することを許されない。之れを利用すれば餘剩利潤を獲得し得るけれども、利用しなければ何も得られない。さればといつて、この餘剩利潤は資本から生れるものでもない。それは、獨占し得べき自然力が資本に依つて利用されるといふ事實から生ずるものである。斯かる事情のもとに、餘剩利潤は地代に轉化されて、落流の所有者の手に歸することとなるのである。

以上說くごとく、マルクスは同一生産部門の內部に於いて、ヨリ有利な條件のもとに投下せられた資本と、有利ならざる條件のもとに投下せられた資本との間の、豐度の差に地代の發生原因を求めてゐる。斯種の原因に依つて生ずる地代が、常に對差地代たることは明かである。なぜならば斯かる地代は常に、獨占的のヨリ有利な條件のもとに生産せられた個別的の商品價値と、當該生産部門における一般的の商品價値との間のヒラキとしてのみ存在するからである。

そこでマルクスは、リカルドに同意を表して次の如く述べてゐる。「リカルドが左の如く主張したのは全く當を得てゐる。「地代(對差地代を指す。彼れは對差地代以外には何等の地代も存しないと假定してゐるからである)とは常に、二

つの等量なる資本及び勞働の使用に依つて得られる生産物間の差額を意味する。」玆に問題となるものが地代であつて餘利利潤一般でない限り、彼れは「常に」の次ぎに「同一量の土地に於ける」といふ一句を追加すべき筈であつた』と。

この言葉の後に、マルクスは又次の如く述べてゐる。『リカルドは更らに次の如く主張してゐるが、これ又、對差地代に就いて言ふ限り當を得てゐる。「同一の土地若しくは新たなる土地に依つて得らるべき生産物間の不等を減ぜしめる原因は、總べて地代を低減せしめる傾きがある。而してこの不等を大ならしむる原因は又總べて、必然的にその反對の結果を齎らすものであつて、地代を增進せしめる傾向を有つてゐる」と。而して斯かる原因の中には、單に一般的のもの(豐度及び位置)のみではなく、また(一)租税の配分(即ち租税が全國に均等に作用するか否かといふこと)や、(二)種々異つた土地部分に於ける農業發達上の差異に基く不等や、(三)小作農業者間に行はれる資本配分上の不等などが含まれることを、マルクスは附言してゐる。

以上は、マルクスが對差地代の細密な考察に入るに先だつて、豫備的に與へたところの基礎概念である。マルクスはこの豫備的概念を與へた後ち、リカルド其他の學者の所論から區別した彼れ自身の所說の敍述に入つてゐる。

前節でリカルドの地代說を攻究した折り、對差地代が三つの原因から生ずることを述べた。即ち第一は豐度の差から生ずる對差地代、第二は位置の便否から生ずる對差地代、第三は收穫遞減の法則から生ずる對差地代である。マルクスは右のうち、豐度及び位置の差から生ずる對差地代をば『對差地代の第一形態』となし、收穫遞減の法則から生ずる對差地代をば『對差地代の第二形態』となし、而して此第二形態の中に更に第一、第二、第三の副次的形態を區別した。即ち第一次の副次的形態は生産價格が不變なる場合、第二は生産價格が低減する場合、第三は生産價格が增進する場合に成立するものであつて、此等の各場合に地代が如何に相異つた運動を示すかを、マルクスは詳細に論究してゐる。

然し玆では、マルクスの全研究に手をつける餘裕がないから、對差地代の第一形態に關するマルクスの見解を述べ、それがリカルドの所論に比して如何なる特色を有するかを見るに止める。

いま、マルクスに從つて、甲、乙、丙、丁なる四種の土地を假定し、而して一石の米の價格が三十圓であるとする。玆に問題となる地代は對差地代のみであるから、この三十圓といふ價格は、最劣等の土地について言へばその生産價格、即ち支出資本と平均利潤の和に等しい譯である。

いま、支出資本（即ち消費した不變資本と可變資本との和――費用價格）を二十五圓とすれば、一石の米を生ずる最劣等の土地甲は、五圓といふ二割の利潤を生む。なぜならば、一石當りの生産價格を三十圓と假定するからである。

次に乙の土地からは、同一の支出資本を以つて二石（六十圓）の米が得られる。隨つてその總利潤は三十五圓となり、三十圓といふ餘剩利潤を齎らす（餘剩利潤とは、總利潤の中から平均利潤を差引いた殘額に等しいから。）

次に丙の土地からは、同一の支出資本を以つて三石（九十圓）の米が作られる。隨つて總利潤は六十五圓、餘剩利潤は六十圓となる。

最後に丁の土地からは、同一の支出資本を以つて四石（一百二十圓）の米が作られ、隨つて九十圓といふ餘剩利潤が供給される。

リカルドの述べてゐる如く、豐度の高い土地から低い土地へと順次に耕作の限界が押し擴められて行くとすれば、その行程は次の如くになるであらう。價格は七圓五十錢から漸次三十圓に昂騰して行くとする。豐度の最も高い丁の土地から供給される四石（四百萬石としても構はない）を以つてしては、最早總人口を養ふに足りなくなつたとすれば、その不足分を丁よりも一段豐度の劣つた丙の土地から生産し得る程度に比例して、米の價格が昂騰して來る。即ち米の價

格は、一石當り十圓に昂騰しなければならない。これが更に昂騰して十五圓となつたときには、乙の土地も耕作せられ、三十圓となつたときには、甲の土地も耕作せられる。而して此最後の場合に、甲は二割の利潤を獲得するのである。されば丁の土地の地代は、最初は一石當り二圓五十錢であつて、産出總額四石に對しては十圓であつたが、これが一石當り七圓五十錢（四石總計三十圓）となり、最後に一石當り二十二圓五十錢（四石總計九十圓）となる譯である。

けれども上例に示すが如き、豐度の高い土地から低い土地に耕作が順次に押し擴められるといふ場合のみが、理論的にも實際的にも可能とされる唯一の場合だといふ譯ではない。甲から丁へといふ風に、反對の順序を踏む場合も同樣に可能である。この場合には、新たなる農地の耕作が必要となつたとき、一石の價格は最初三十圓以上に騰貴する。けれども必要なる供給量が、次に開拓された乙なる土地から生産されるやうになつたとき、價格は再び三十圓に下落する。乙の供給量が二石であつて僅かに不足分を補充するに過ぎないとすれば、その支出資本は一石當り十五圓であつても三十圓で販賣される結果、そこで乙の土地には三十圓といふ地代が成立して來る。而して丙の土地に對しても、丁の土地に對しても、これと同樣の過程に依つて地代は成立し得るのである。尤もこの場合には、丙及び丁がそれぞれ一石當り十圓及び七圓五十錢といふ低い生産價格で米を生産するに拘らず、總需要に應ずるためには依然甲の供給する一石を必要とし、市場平均價格が依然甲の生産價格たる三十圓に依つて規制されてゐると假定するのである。

耕作地の擴張順序は劣等の土地から優等の土地に及ぶことも可能であるといふ、マルクスの主張は、全く新たなる一發見であつた。リカルドを初めとしてマルサス、ウェスト等はいづれも、對差地代が必然的に豐度高き土地から豐度低き土地へ向ふところの進行のみを認め、對差地代は農業生産力の間斷なき低減を前提するといふ假定を支持したものであるが、斯かる前提から出發した結果として、リカルドの如きは次の結論に達しなければならなかつた。即ち一國の富

が増加し、人口が増殖するに從つて、食物生產のために益々多くの勞働が必要となり、地代は益々昂騰して來る。然し耕作の改良、穀物輸入の増進等によつて、この自然的傾向は一定の期間阻止せられるといふのである。然るにマルクスに依れば、農業生產力が間斷なく進歩しても、對差地代は必ずしも變化を受けるものでない。現在の優良なる土地の生產力が、將來、最劣等な土地生產力に轉化される如きことがあつたとしても、地代は依然として成立する。對差地代なるものは畢竟するところ、諸種の土地間の豐度の不等を根本的原因とするものであつて、凡ゆる土地の豐度が一齊に生產力を増進するとしても、これがため各種の土地間の豐度の不等が消滅しない限り、地代は依然として存立し得るのである。

四　ロドベルトスの絶對地代說

リカルド說に對するマルクスの反對論旨は、大體次の三點を含んでゐる。第一は、リカルドが對差地代の外に絶對地代の存在することを看過した點、第二は同じ對差地代の中にも、土地の豐度の差から生ずるものと、累次土地に投下せられる資本の生產力が不等なる所から生ずるものとの二種あることを明確に區別しなかつた點、第三は土地生產物の價格が昂騰する場合、不變の場合、下落する場合等に展開される地代法則を充分に研究しなかつた點である。然し對差地代に就いては、大體に於いてマルクスがリカルドと同樣の見解を抱いてゐたことは、既に說明した通りである。然るに上記の第一點に關しては、マルクスは全くリカルドと反對の立場に立つたものであつて、この點こそ我々の研究にとつて最も興味深いものである。

リカルドの地代說は從來各方面から批評を受けたが、土地の豐度の差はただ地代額の差を說明するに止まり、地代の

發生それ自身を說明するものではなく、地味に肥瘠の別がなくても地代は發生すべき理由があるといふ見地から、リカルドを批評した者は、マルクスとロドベルトスとの二人のみであるといふも過言ではない。ロドベルトスはマルクス及びリカルドと共に勞働價値說を支持するものであるが、彼れの說く所に依れば、同一量の價値を生産する爲に投ずる資本額は、土地の場合には工業上の生産に於けるほど大なるを要しない故、その當然の結果として、投下資本に對する新たに造り出された價値の比率は、農業と工業との間では差異を來たすことになる。茲に絕對地代の原因が存すると、彼れは見るのである。この見解は、マルクスの所論と重要な點に於いて相似る所があり、これを知ることは、マルクス說の理解を容易ならしめる便があると信ずるから、左に聊か立ち入つて以上の命題を考察することにする。

ロドベルトスの地代論は、彼れの勞働價値說を前提する。彼れ自身の言葉を以つてすれば、單に完成生産物のみでなく、原産物それ自身、及び製造品それ自身も亦、費用勞働に應じて交換せられると假定する。即ち一例として、原産物には製造産物に比して二倍の勞働……が支出されたとすれば、その價値も亦二倍の大さを有するものと假定するのである。[二]この假定は個々の場合に一々事實と一致するものとは限らないが、現實的の交換價値が少くともこれに歸着しようとする傾向あることは、彼れの認めてゐる所である。而して一國に於ける生産總價値の中から勞働者に支拂はれる賃銀總額を控除すると、あとには彼れの謂ふ賃子（マルクスの謂ふ餘剩價値）なるものが殘される。この賃子は、農産物と製造産物との價値に比例して、農産物の所有者たる地主と製造産物の所有者たる資本家との間に分配せられる。一例として、農業と工業とに等數の勞働者が使用されるとすれば、賃子は兩者の間に均分せられることとなる。

ところで、製造業に歸屬するところの賃子は、製造業に投下せられた資本財産に對する利潤を直接構成することとなるが、農業に歸屬するところの賃子は、その全部を以つて直ちに地代と見做すわけに行かない。なぜならば、農業にも

資本に投ぜられてゐる故、農業に歸屬する賃子の中から此資本に對する利潤を控除した後に初めて、地代の有無多少が定まるからである。この利潤控除の標準となるものは、製造業に投ぜられた資本と製造業に歸屬する賃子との比率に依つて決定される通例の利潤率に外ならない。

ところで、農業に歸屬するところの賃子から、農業資本に對する利潤を控除した後には、果して何ものかが殘るであらうか、否か。これが殘るか殘らないかに從つて、地代の有無は決定されるわけであるが、ロドベルトスは必らず何ものかが殘らねばならないと主張する。なぜならば、農業に於いては工業に於ける如き原料を必要としないからであると說く。即ち工業勞働は必らず原料の上に加へられなければならないのであるが、農業勞働はこれに反して直接土地の上に加へられる。そこで若し双方に同一量の勞働が投下せられて、等額の賃子を收めるとしても、製造業にあつては原料價値を資本の一部として計算しなければならないから、それだけ不利益な立場に立つ譯である。隨つて普通の利潤率を農業賃子に適用して利潤を計算するとすれば、これを差引いた後に必らず殘るものがなければならなくなる。これが即ち地代だといふのである。

要するに、物の價値はその生産に支出された勞働の量に依つて決定されるのであるが、等額の資本を以つて働かし得る勞働量は工業と農業とでは同一でない。農業に於いては、原料に資本を投ずることを要しないだけより多くの勞働を働かして、それだけ多くの價値を生産することが出來る。此兩者の差額が、即ち地代を形成すると見るのである。

以上示す如き、ロドベルトスの地代說に對して加へられる批評の中で最も致命的なものは、地代を成立の要件たる、一切の生産物は含有勞働量に應じて交換されるといふ彼れの命題と、他方に彼れが利潤率平均の事實を認めた見解とは相容れないといふ非難である。ロドベルトスに、生産物の價値はそれに投ぜられた勞働量に依つて決定せられ、而して

農業資本と工業資本とは其有機的組成を異にするから（暫らくマルクスの術語を借用していへば）、そこに地代が生ずるといふのであるが、若し果してその通りであるとすれば、同じ工業生產についても、工業の種類如何に依つては資本組成を異にする譯であるから、利潤率も相異なることとなり、隨つて地代が成立しなければならなくなる筈である。ロドベルトスはこれに對して、資本間の競爭のため平均利潤率が成立し、個々の工業の生產物は夫々の個別的價値に應じて交換せられることなく、生產價格を以つて交換せられるやうになるから、上記の如き利潤率の異同は消滅に歸すると說いてゐる。だが、工業生產物が斯く生產價格を以つて賣買されるとき、ひとり農業生產物のみが反對に勞働費用（價値）を以つて賣買されるとは、そもそも如何なる理由に依るのであるか。ロドベルトスの所說からは、その理由は見出されない。そこで若し利潤率が農業全體を通じて平均に歸し、農產物も亦他の生產物と同樣に生產價格で賣買されるといふことになれば、斯かる場合には對差地代は成立し得るとはいへ、絕對地代は必然的に消滅しなければならなくなる。

ロドベルトスの言ふ通り、工業に投ぜられる資本は農業に投ぜられる資本よりも必らずより低い利潤を受くべきものであるとすれば、資本家は資本を工業方面から引き上げて農業方面に振り向けることとなるであらう。若し資本の斯かる移動が行はれるとすれば、その必然の結果として農產物の供給は增加し、工業生產物の供給は減少する。而してこの增減は、資本が新たに農業に振り向けられても、もはや普通利潤以上の賃子を齎らさない點まで達し得る。一方に於いては、工業生產物の供給が減少して、その價格は昻騰し利潤率は高められるが、他方に農產物の供給は增加して、その價格を低下せしめ、遂には農業に歸すべき賃子を農業資本に對する利潤との差は消滅してしまふ。その結果として、資本の立場から見た農工業の利益は相互平均に歸する。即ちリカルドの主張する如く、最後に土地に投ぜられた資本は利潤のみを生じて、何等の地代をも齎らさなくなるのである。

五　マルクスの絶對地代說

農工業資本組成間の異同に絶對地代成立の根據を求めた一點に於いて、マルクスとロドベルトスとが相似た地位に立つてゐることは、前節に述べた通りであるが、然し兩者の所說には本質的に重要な相違點があることを注意しなければならない。ロドベルトスに依れば、餘剩價値（謂ふところの賃子）の生産に影響するものは、生産上に投下せられた資本の中、賃銀（直接の勞働）と機械及び道具（間接の勞働）とを代表する資本部分のみであつて、原料を代表する資本部分は新たなる價値の生産には關與しない。然るに、工業生産に於いては必らず原料を要するけれども、農業生産に於いては原料を要しないのであるから、等額の投資を以つて得られる餘剩價値は、工業に比べると農業の方が多額に上るわけであつて、そこに地代發生の原因が存すると言ふのである。この說を聽いて我々が直ちに氣づくことは、機械や道具は餘剩價値の生産に關與するとされるのに、何故原料だけはそれに關係しないかといふことである。機械や道具が間接の勞働を代表するといふけれども、その點は原料との間に區別がある筈はない。過去の勞働の結晶たる點に於いて、兩者の間には何等の差異も存しないのである。若し機械や道具の使用及び消費に依つて新たなる價値が造られるとすれば、原料の使用及び消費に依つても同一の結果が得られないといふ道理はない。この點、ロドベルトスの主張には錯誤があるとされる。

マルクスに依れば、資本の組成要素は不變部分と可變部分の二つに區別され、機械や道具や原料などの類は前者に屬し、賃銀は後者に依つて代表される。而して新たなる價値の生産に關係があるのは可變資本のみであつて、不變資本は豫め存在してゐる價値を生産物に移轉するに過ぎない。故にマルクスの立場から見れば、餘剩價値の生産に影響した

いのは單に原料の價値のみではなく、機械や道具の價値もこれに影響するところはない譯である。マルタスの此見地をロドベルトスの上記の所論と比較するとき、いづれがヨリ正しいかは贅言を要しないであらう。

次に注意すべきことは、ロドベルトスが農工業資本組成間の異同を永久的なものとしたに反し、マルタスは之を歴史的なものと認めた一點である。ロドベルトスに從へば、農業の資本組成が工業のそれよりも低位にあるのは、後者が原料を要するに反して、前者は原料を要することがないからである。これは産業の性質から來る相異であつて、普通に謂ふところの原料なるものが農業上殆んど不必要であることは、過去に於いても將來に於いても變化はない。然るにマルタスの説に依れば、農業の資本組成が低位にあるのは、單に原料が不必要であるといふ理由にのみ依るのではない。農業には肥料や種子が使用される。これらの物は工業上の原料（助成材を含む）と性質を等しくするものであるから、ロドベルトスが農業には全く原料を要することがないかの如く論じてゐるのは誤りである。資本組成の高低は原料の有無に懸るものではなく、不變資本（機械及び原料）と可變資本（賃銀）との組合はせの割合如何に懸る問題である。不變資本が多い割りに可變資本が少なければ資本組成が高位であるといひ、反對の場合には資本組成が低位であるといふ。而して發達の進んだ産業ほど、機械や原料に要する資本部分は多くなり、資本組成は益々高位に赴くのである。

農業に於ては、現在のところ、機械及び道具や肥料に投ずる資本に比し、勞働者に投ずる資本の方が大なる範圍を占めてゐるけれども、これは農業本來の性質に依るものではなく、寧ろ農業の産業的發達が工業のそれに比して著しく遲れてゐる結果に過ぎないのである。何故斯く農業の發達が遲れてゐるかといふことについて、マルクスは次の一事項を指摘してゐる。即ち他の事情は暫く措き、工業は比較的古くから發達した機械原理を基礎としてゐるのに、農業は地學や生理學の如き極めて新らしく生れた科學を基礎としてゐるといふ一事である。然しながら農業と雖も日々進歩して

止まないものであるから、その技術上の進歩とともに、使用勞働者の數に比して機械や肥料の充用が益々多くなつて來る。かくして農業上の資本組成の程度が工業上の資本組成の程度に追ひつく時が來ないとも限らない。即ち農工業の資本組成間に、異同のなくなる狀態が現はれないとも限らないのである。

資本組成に關するロドベルトスとマルクスとの見解の相異は以上述べた通りであるが、相異の第二點たる、農工業資本組成間の異同の永久性に關する見解についても、マルクスの所謂の方が正しいことは、農業の機械的發達を現實に目睹しつゝある我々にとつて、容易に承認し得るところである。さて、以上の識別を念頭に置き、最後にマルクスが絕對地代の成立を如何に說明してゐるかを見ることにしよう。

前にも述べたごとく、マルクスに依れば、餘剩價値は可變資本のみから生ずるものである故、勞働の搾取程度が同一であるとすれば、不變資本に比して可變資本の多い產業ほど多くの利潤を獲得する譯である。今、甲の企業の資本組成が不變資本八〇可變資本二〇より成り、餘剩價値率（可變資本に對する餘剩價値の比率）が五割であると假定すれば、生產物の總價値は一一〇であつて、利潤率（總資本に對する餘剩價値の比率）は一割といふことになる。然るに乙の企業の資本組成は更らに低位であつて、不變資本六〇可變資本四〇からなり、而も餘剩價値率には差異がないと假定する。さうすると、生產物の總價値は一二〇であつて、利潤率は二割といふことになる。

若し上記の兩企業が、夫々その生產物を價値通りに販賣するとすれば、甲は總資本に對して一割の利潤を得、乙は二割の利潤を得て、兩者の間には一割のヒラキが生じて來る。けれども資本の自由競爭があるところには、斯かる事情は永續することを許されない。資本は利潤率の低い產業から利潤率の高い產業に流入して、生產物の供給量に增減を來たすから、結局利潤率は平均に歸して、如何なる組成の資本を以つて生產せられる生產物も、みな一樣に費用價格（消費

不變資本と可變資本の和)と平均利潤との總和より成る生産價格を以つて販賣せられるやうになる。

ところで、農業の資本組成は他の産業のそれよりも低位にあるから、等額の資本を以つて農業から獲得されうる餘剩價値は、右の乙企業に見られる如く、他の産業部門から得られる餘剩價値よりも多額に上るべき筈である。今、右の假定を共に採用して、工業の平均的資本組成が不變資本八〇可變資本二〇、而して農業の平均的資本組成が不變資本六〇可變資本四〇であるとし、更らに兩者とも餘剩價値率が五割であると假定すれば、農業では工業に於けるよりも一割だけ多くの利潤が獲得されるわけである。ところで、農業及び工業の資本間に自由競爭が行はれ、上記の甲企業と乙企業との間に見られる如き利潤率平均化の作用が行はれるものとすれば、農業生産物も終局に於いては價値通りに販賣せられることなく、生産價格を以つて販賣せられ、これがため農業の特殊利潤は消滅に歸するであらう。この場合には、農産物の價格は支出資本とそれに對する平均利潤との外には何ものをも含まず、隨つて絶對地代なるものの生ずる餘地はなくなる譯である。

我々は前節の終末に於いて、ロドベルトスの所論が此點で破綻を來たしてゐることを見た。彼れは農工業相互の間には、利潤率平均化を生ぜしむべき資本の自由競爭が行はれないといふ事實を認めるに至らなかつた。マルクスは此事實を明らかに認め、これを基礎として絶對地代の成立を論究してゐる。マルクスに依れば、土地に對する資本の自由移動は、土地所有權に依つて阻止される。地主はその土地所有權に依つて、如何なる場合にも彼れの土地を他人が無償で使用することを拒絶し得るのである。隨つて土地は、其處に投ぜられた資本に對して單に平均利潤を齎らすだけであるとすれば、耕作せられることを得ない。(勿論、地主みづから其所有地に於いて農企業を營むといふ場合には、平均利潤率を收めるだけでも農企業は行はれ得べき理屈であるけれども、土地の私的獨占が一般に行はれ、土地の賃貸が通則となつ

てゐる狀態の下に於いては、地主みづから農企業を行ふ場合と雖も、その利潤の中には、彼れ自身に對して支拂ふべき地代をも加へて計算するであらうから、結局、平均利潤率のみでは不充分となる譯である。）農產物の價格が、支出資本を回收する上に、資本に對する平均利潤と、更らに地主に對する地代とを提供し得るまでに昂騰しなければ、地主は決して彼れの土地への資本投資を許さないのである。即ち土地が地主に依つて獨占されて居らないとすれば、農產物は當然に生產價格で販賣されることになるであらうが、地主なるものが存在して居て地代を要求するため農產物は勢ひ生產價格以上の價で販賣されなければならなくなつて來る譯である。

マルクスは以上の關係を概括して次の如く述べてゐる。『要するに、絕對地代なるものの本質は、左の事實に存するのである。即ち種々異つた生產部面における等量の各資本は、餘剩價値の率が相等しく、換言すれば勞働搾取の程度が相等しいと假定すれば、その平均組成の差異に應じて種々異つた量の餘剩價値を生產するといふことがそれである。農業以外の產業に於いては、かやうな相異つた量の餘剩價値は相互平均化されて平均利潤を形成し、宛ら社會資本の各可除部分間に配分される如く均等の比率を以つて個々の資本間に分配されて行くのである。農業を目的とするにしろ、又は原料の抽出を目的とするにしろ、兎にかく生產上に土地を要することとなるや否や、土地所有は土地に放下された資本が斯かる均等化に關與することを妨げて、本來一般的利潤率への均等化に參加すべき筈の餘剩價値部分を搦捕してしまふのである。要するに地代なるものは、商品の價値（ヨリ嚴密にいへば餘剩價値）の一部が、これを勞働者から吸取した資本家階級のものに歸せずして、それを資本家から吸取するところの土地所有者の有に歸して行くものに外ならないのである。尤も、これに就いては、農業資本に依つて運轉される勞働の量が、農業以外の方面に於ける等額の資本部分に依つて運轉される勞働の量よりも大であると假定するのである。この差が果して如何なる程度に達するか、又はこれが

事實に於いて存在してゐるか否かは、工業に對する農業の相對的發達程度の如何に懸る。資本の不變部分に比して可變部分が低減して行くところの比例が、農業資本におけるよりも工業資本における方が依然大であることのない限り、農業の進歩につれて、右の差が益々減少するに至らねばならないことは論を俟たない。』

以上の引抄に依つて知られる通り、マルクスの絶對地代論の上に最も重要な役割りを演じてゐるものは、土地所有の事實である。尤もこの土地所有それ自身にも、種々なる形態があつて、土地の所有者が耕作者を兼ねるといふやうな場合もあるけれども、斯樣な形態は、此際問題とならない。問題となるのは、土地所有と耕作とがおの〳〵別個の人々に屬し、耕作者は厭でも應でも地主から土地を賃借りしなければならないといふ場合である。マルクスは斯かる土地所有を以つて、資本主義的農業生産の前提となし、隨つて彼れの研究主題たる資本主義社會における地代の前提となしてゐる。

マルクスは更らにいま一つ、前提を與へてゐる。それは即ち、小作農業者と農業勞働者とがおの〳〵別個の階級に屬してゐることとである。前者は資本家階級に列し、後者は勞働者階級に列するといふ前提である。約して言へば、典型的なる資本主義農業生産には、地主と小作農業者と農業勞働者とがおの〳〵相對立して出揃ふのである。小作農業者は農業勞働者を使用して、後者の勞働から餘剩價値を搾取する。而も彼れの資本の組成は低位なるものであるから、等額の資本を以つて工業上の生産に於けるよりも多額の餘剩價傳を搾取し得るのである。ところで若し、土地に對する資本の投下が自由であつて、何人も制限なく農業上に投資し得るとすれば、遂には農産物の供給が増大して、その價格は生産價格に一致する點まで下落し、彼れが農業勞働者から搾取した餘剩價値の一部(地代に相當する部分)は暗から暗に葬られてしまふ。

ところが玆に地主なるものが存在してゐて、地代を要求するから農産物の價格は生産價格の點まで下ることとなく、農

業勞働者から搾取した餘剩價値は地主が存在しないと假定した場合よりもヨリ多く價格に實現され、その平均利潤以上に出づる部分は地代に轉化されるのである。若し農産物の供給量が餘りに増大して價格が著しく下落し、もはや地代を生ずる餘地がなくなるとすれば、地主は小作農業者に土地の使用を許さず、農業上の生産は縮小されて農産物の供給量は制限されることとなるであらう。

されば農産物なるものは常に、地代が存在しない場合に行はれるであらうところの生産價格よりも高い價で販賣されるのであるが、然しこの事實は決して、それが價値よりも高い價で販賣されるといふことを意味しない。マルクスは特に此點を強調して曰く、土地所有に依つて供給制限が行はれるため、農産物の市場價格は、地代を支拂ひ得る程度、即ち生産價格以上に、騰貴したければならなくなる。けれども農業資本に依つて生産せられる商品の價値は、工業生産物に於けるよりも高率の餘剩價値を含むから、つねに生産價格よりも大となつてゐる。農業資本家に依つて支拂はれる地代は、かくの如き生産價格以上に出づる價値超過分の全部又は一部に相當するものである。地代が果して斯かる超過分の全部に等しいか、又は一部に等しいかは、農業それ自身の内部における競爭に依つて決定される。新たに耕作し得る廣大な地域が存在する如き場合には、農産物の市場價格は著しく低下せしめられ、隨つて地代も同樣に低下せしめられる譯であるが、然し何づれにしても、絶對地代なるものは、價格が價値以上に出づる所に生ずるものではなく、寧ろ價格が價値に等しいか、又は價値以下ではあるが生産價格よりは以上である所に生ずるものである。而して農産物の市場價格が、他の生産物の市場價格の如く生産價格の水準に平均されることとなくして、常にその水準よりも高い獨占價格を有してゐるのは、土地所有といふ特殊の事情が存在する結果であると。

以上の説明によつて、マルクスの絶對地代説の骨子は略ぼ明かにされたと信ずる。リカルドに依れば、地代なるものは單に土地生産力の不等からのみ生ずるもののみであるが（對差地代）、マルクスに於ては、土地生産力の不等に依らずしても地代は生じ得る。而してこれには、農業上の資本組成が工業上のそれよりも低位にあるといふ事實と、土地が地主に依つて獨占されてゐるといふ事實とが、互ひに折り重つて原因を成してゐるのである。ところが、リカルドに依つ

て提唱されマルクスに依つて更らに發展された耕作地代の方は、等しく低位組成の資本を以つてする農業生活に於いても、或る土地は生産力が高く、或る土地は生産力が低いといふ如き土地柄の不等から生ずるものであつて、絕對地代とは全く別個の法則に支配されてゐるのである。

六　附言

本論を終るに當り、尙は二つの事項について注意を促して置かなければならない。

第一はマルクスの說明は工業方面に於ける如く農業に於いても、つねに主として英吉利の現實的事情から出發してゐる。英吉利に於いては、土地の大部分は少數貴族に依つて獨占せられ、資本家は小作農業者として此等の地主から土地を賃借し、みづから勞働者を雇傭して農企業を經營するといふ狀態に在る。隨つて英吉利で小作人といへば、即ち此等の農業資本家を意味することになつてゐるのである。

この情勢は、地代の法則を展開する上には極めて好都合であるが、然し地主と農業資本家と農業勞働者との相互獨立化は、如何なる國に於いても斯く分明に行はれてゐるといふ譯ではない。現に我が國の如きでは、小作人といへば直ちに農業プロレタリヤを意味する位ゐであつて、彼等は地主の所有地に於いて農業を營むとはいへ、彼等自身また農業勞働者として耕作に從事し、他人の勞働を利用することは極めて微々たるものである。更に自作農と稱する者もあれば、また自作のみでは糊口することが出來ず、同時に小作を兼ねて漸く生活の眞似事をするといふ如き狀態に在るものもある。斯かる事情に對して、マルクスの地代說を直接單純に適用することは困難であるが、然し推論と抽象を働かせれば、終極に於いて同一の適用を與へ得るのである。

第二に、如上の地代法則は專ら農作地についてのみ展開したものであるが、農業以外の方面に於ける地代は、農業地代が基本形態となつてそれから派生したものと考へ得るから、農業上の地代法則は結局、他の地代についても同一の適用を見出し得る譯である。（了）

若槻内閣と政界の前途

原敬に匹敵する若槻首相

馬場恒吾

若槻禮次郎氏が愈々首相にたつた時、私は故人原敬の如き名宰相になるだらうと思つた。と云へば、政友會の人々は、ナニ若槻が原大宰相の眞似が出來るものかと云ふだらう。憲政會の人々も亦、原のやうな綱紀紊亂の親分に我等の總理を比較する奴があるかと云ふであらう。私は若槻新首相が原敬氏の如き綱紀肅正問題を惹起する惧れがあるとは毫も思はぬ。彼が謹直端厳な性格は寧ろ原總理とは反對の傾向を有してゐると信じてゐる。只若し原敬氏を名宰相と云ふべくんば、其名宰相たる點に於てのみ原敬氏と匹敵すべき力量、手腕、性行を若槻新首相に於て發見するのである。

殊に議會の討論の鮮さに於て兩者に似た處がある。平凡な理屈を尤もらしく、熱心に述べるので、聽くものはツイ釣り込まれて成程そんな事もあるかと合點する。曾つて原内閣の時代今井嘉幸博士が總豫算委員總會で原首相と普選論を戰はした事があつた。今井博士は當時の制限選擧法に依る選擧は財産本位の選擧であるから根底に於て腐敗してゐると云つた。原氏は直ちに立つて、自分は今の選擧でも腐敗してゐると思はぬ。現に今井君が代議士として此所に出て來ておられるのも、腐敗した選擧で出て來ておられるとは思はぬと答へた。これは一つの詭辯であるが、議會ではかうした詭辯が屢々勝利を占める、其後、私は或席上で原首相の傍に居たから、此事を思ひ出して、

『私はつく〲感心する。あなたが腹にもない事を、さも〱

さう思つてゐるかのやうに、眞面目に熱心に説いてくると、聴く者はうつかり其氣になつてしまう』

と云つた。すると原氏は笑ひながら、

『そんな事があるものか、矢張り腹からさう思つてゐるのだ。普選は余り早く行ふと國家に危險だと思つてゐるんだ』

と云つた。

若槻氏のは原敬氏の如く詭辯を弄してゐるのではあるまい。併し其答辯の尤もらしく上手であることは好一對である。

去年の議會で普選案が貴族院で討議せられた時、私は殆ど全部傍聴してゐた。そして貴族院の頑迷連中が、普選に對する反對論を聞かされてすつかり憤慨してしまつた。或者は恒産なきもの恒心なしといふ數千年前の支那人の言つた事を引いて、大正の日本人を律せんとする。或學者は希臘羅馬の歴史を述べて日本に普選の不可を論じた。或者は只演壇に立つて愚圖々々云つてゐるのみで、少しも理路が通らず、傍聴席では『あれは白痴だ』と云つて批評するものさへあつた。それを當時の若槻内相は、丁寧懇切に、嚙んでくゝめるやうな調子で答辯してゐた。

其晩であつたか、私は加藤首相に會つて、

『何んだつて、内務大臣はあんなに叮寧に答辯するのでせう。貴族院の愚論なんかは、傍聴して居ても腹が立つ、頭からガアンとくらわしてやればよいに』

と云つたら、加藤首相は

『いや貴族院はあれでなくてはいかぬ。わしが出ると喧嘩になるから、若槻に任かしておく。若槻が旨くやつて呉れる』

と云つた。これほど、若槻内相は貴族院に答辯した。愚論を愚論だとも云はず、暴論を暴論だと云はず、輕蔑した顔もせず、怒つた色も見せず、只叮寧と懇切を旨として答辯してゐた。此點は原敬氏がともすれば喧嘩腰になり、或は相手をして二の句が次げないほどギヤフンと云はしめる程の痛快味はないにしても、相手を怒らせずして、しかも自分の主張を飲み込ましめる技術は或は亡き原敬氏以上と云ふ事が出來る。若しこれが、只辯舌が巧みとか、或は頭が良いとか云ふ爲めでなく、苦節十年の間の修養の結果、如何に目に余る愚物でも輕蔑せぬ雅量が付き、さうした叮寧懇切で、而かも理路明白な議會の答辯が出來るものとすれば、吾々は若槻新首相に將來偉大なる政治家を期待することが、無理でなくなる。

——政治資本を何うする——

吾々は人物と技倆とでは歴代有數の首相を若槻氏に得たと信ずる。併し現代の政黨首領は人物と技倆のみでは勤まらぬ事情

がある。それは今更云ふ迄もなく、金の問題である。若槻首相がどれ丈けの財産を有してゐるかは私の知る所でないが、彼が富豪でない事丈けは確かである。此點に於ても、彼れは原敬氏程度であると云へるだらう。彼に比べれば加藤前首相は富豪であつた。加藤首相が總選擧に自分の金を出すほどの富豪であるか否かは判らぬが、兎に角も彼は總選擧に際して、憲政會の爲めに何百萬圓かの軍資金を集め得た。其外に黨の費用として每年十萬圓、補欠選擧がある每に幾許かの支出を負つて來た。それは加藤總裁に限らず、何の政黨の何の首領でも金の心配を免れることは出來ぬ。幸に加藤伯は自分の手で融通を付ける力があつた。而かもそれが、政權を取つた時に支拂ふべき約束手形でなく、又政權を利用して仰せ付ける御用金的のものでなく、全く彼れ一個人の力で拵しらへる金であるが故に、彼は良心に恥ぢずして綱紀肅正を叫ぶ事が出來た。加藤首相に對して種々の批評はあつたにしても、筋の悪い金を取つたと云ふ批評はなかつた。珍品五個の問題すら、政治資金に寄付を受けたのが何處が悪るいと云ふ所の、ザックバランの態度に出た爲めに、問題はそれ丈けで終つた。政治資金を貰く人に對しても傲岸であり得た事が、彼の特長であつた。彼が富豪である事それ自身が罪悪であると云ふ議論は、議論として成立するとしても、現在の政界に於ては不正に終始する貧乏政治家よりは、不正を働かぬ金持政治家の方が、時弊を矯正するに適切な利目を有つた。

然るに若槻新首相は加藤前首相の如き富豪でない。そして彼が加藤首相の如く政治資金を集めうる手腕があるや否やは未知數に屬する。例へ又そのやうな政治資金を集め得たにしても、それが加藤首相の場合に於けるが如く首相、個人の信用、若しくは縁故の故を以て集め得られる金であつて、其處に何等の政治上の義務若しくは利權的の約束なしに集め得られるであらうか。それが首相としての彼の前途に一抹の暗影を投げる所以である。

元より賢明なる若槻氏は何んとかして此難關を切抜ける成算を有つてゐるであらう。併し只賢明なるだけでは、金は天から降らず、地からも湧かない。賢明なる點に於ては若槻氏に劣らぬ原敬氏も、政友會を二百八十名の多數になす爲めに必用とする金の爲めには、終に原内閣時代の滿鐵問題、大連取引所問題、瓦斯問題などの疑獄の起ることを防ぎ得なかつた。私は其當時から政治の百弊の元とは政治に金のかゝる事であると思つてゐた。殊に代議士の選擧運動費に一人前數萬圓を必要とするやうでは政界の淸淨になることはない。だから政治を改めんとすれば、金のかゝらぬ政治を理想とせねばならぬと思つた。そ

れで原敬氏に會つたとき、金のかゝらぬ政治を行つたらよいと云つた。すると原氏は言下に答へて、

「そんな馬鹿なことを云つたつて實行出來るものでない。社會の人々は皆んな金を欲がつてゐるではないか。金を欲しがらない人間の社會を拵しらへて來い。さうしたら、金のかゝらぬ政治を行つて見せる」

と云つた。僕は顧みて、成程現代の社會には金を欲しがる人間が充滿してゐる。原の云ふ事も一理はあると思つて、其時は抗辯しなかつた。一寸議論に負けた形であつた。併し後で考へると私の方にも未だ云ふべき事はあつたのである。併しそれは社會の改造に觸れる議論であるから、原敬氏の如き實際政治家に云つても駄目だとあきらめた。

其頃からは余程時勢が變化した。併し變らぬのは政黨維持に金がかゝると云ふ事である。選擧に莫大な運動費を必要とすると云ふ事である。政治に金が要ると云ふ此事態が變化せざる間は、若槻首相――それは憲政會總裁としてゞある――如何に賢明で、如何に圓轉滑脫の妙を得てゐても必ず一つのヂレンマに捉らへられる。それは主義を曲げて金を拵らへるか、然らずんば金を拵らへ得る人に其地位を讓るかである。主義を曲げて金を拵らへにかゝれば、彼は自分に財力なくして政黨首領となつた他の多くの政黨首領の好ましからざる覆轍を踏まなければならぬ。されば首相として、或は憲政會總裁として地位を他に讓らんとしても、憲政會中に、其人を求むれば誰れしも先づ濱口藏相に指を屈するであらうけれども、金を拵らへる點に於て、濱口藏相が、若槻首相よりは好都合の地位にあるとは思はれない。故に此ヂレンマは何れを採るにしても容易に實行され得べき事でない。

さらば、此ヂレンマから脫がれる唯一の途は、矢張以前から問題になつてゐる所の金のかゝらぬ政治を行ふと云ふ外はない。加藤前首相も、政治に金がかゝらぬやうにするのが先づ第一步だと云つてゐた。何の第一步であるかはよく聞き訊して見なかつたが、政治上の種々の弊害が政治其者が莫大な金を喰ふといふ事情から生れる處を痛切に感じてゐた如く見へる。

普選法も實は選擧運動費のかゝらぬやうにすることを一つの目的として作られた。一人の候補者の運動費を約一萬二千圓程度に制限する規定、戶別訪問の禁止、一回の郵便物を無料にした事、學校を演說會場に使用せしめる規定、これらは何れも選擧運動費を節約せしめる目的を以て制定せられたのである。

さらば選擧運動費は果して節約せられるであらうか。理論としては今迄の運動費より節約されねばならぬ。處が實際次ぎの總

選擧に必ず候補者として打つて出づべき所の現在の代議士に聞いて見よ。誰れでも必ず今度は今迄よりは非常に多額の運動費が要る。有權者の數が增加した丈け、運動費が增加すると云ふ。それは彼等の異口同音に答へる所である。それでも運動費は一萬二千圓程度に法律で制限されてゐるのではない乎と反問して見よ。實際政治家は、そんなこと、幾らも拔道があるから駄目さと云ふ。そして彼等は選擧費の法律的に制限されてゐる事を賴みにせずして、現金を用意して現實の當選を摑まんとする。それを實際政治家の行くべき途だと心得てゐる。

現在の代議士がかうした心理狀態に居る所以は、彼等が普選實施の選擧に臨むにも今迄の選擧に臨んだ時と同じ方法、同じ形式で選擧を爭はうと決心してゐるからである。今迄の選擧の方法と云へば、各自の選擧區の有力者即ち市町村議員縣會議員、府會議員などを集めたる地盤を基礎として、それに多額の運動費を與へて有權者を說かしめるのである。元より今迄も演說と文書に依る運動は行はれたけれども、それは選擧の實戰に於ては寧ろ第二義の重要性を付せられてゐる。今の各政黨中で、憲政會に屬するものが比較的最も多く言論戰の効果に依つて選出されてゐるが、それでも情實因緣、其他の言論戰以外の方法に依つて當選してゐるものも少くない。それ等の連中は金なしに選擧に臨むと云ふことは夢想だもなし得ない所である。

若槻首相が若し此際大勇猛心を發揮して、金なしの選擧を勵行するとしたならば、それは政界革新に向つて非常な貢獻をするのである。現に普選に依る新興階級、即ち勞働黨若くは無產政黨を標榜して立候補せんとするものは、何れも徒手空拳で選擧に臨まんとしてゐる。それが果して相當の當選率を上げうるか否かは疑問であるが、それが從來の選擧界に一生面を開き、所謂選擧界の弊害を少くする効果のある事は爭はれない。憲政會內閣が金なしの政治を樹立する事を以て其根本方針とし、捨身の決心を以て次ぎの總選擧に臨むときは、日本の政治史に劃時代的な功績を擧げうるであらう。併しそれは一種の冒險である。それが爲めに憲政會代議士の多數が犧牲とせられる危險がある。若槻首相はさうした冒險政治家ではない。彼れは飽くまでも現實に立脚する實際政治家である。殊に現在の代議士を相手にして、金なしの政治を樹立すると云ふが如き理想に向つて政府若しくは政黨の首領が邁進出來るものでない。已むを得ず、若槻新首相、新總裁も成るべく彼の主義を曲げざる程度に於て、問題を起さゞる範圍內に於て、政治資金を拵らへる事を余儀なくされるであらう。其間に彼れの煩悶があり、其苦衷が

あるであらう。元より原敬氏に似たる彼れの性行から云へば、彼れは決して其煩悶や苦衷を顏に現はさず、何時も何事もないやうに、ニコ〱した平氣な顏色で居るであらう。併し此所に總選擧が何日來るかもしれぬと云ふ事が目の前にちらつき、而して總選擧と云へは數百萬圓を拵らへることが、首相兼總裁の當然の責任であるかの如く、今迄の習慣からして、一般に思はれてゐる。此事情を考へれば、どんな局外者でも、首相及總裁になつた若槻氏の立場を推察することが出來る。加藤前首相であつたならば、例令此政治資金を作ることが、世間で思ふほど容易でなかつたにしても、スワ總選擧と云つても、それほど狼狽せずに濟んだであらう。加藤首相あつたが爲めに、憲政會の中には親船に乘つた氣持ちで、普選實行の爲めの議會解散などゝ云ふやうな事も唱へ得たものもあつた、加藤首相死後はさうした呑氣な事を云つてゐられない氣分がある。されば結論はどうなるかと云へば、政府は今迄も議會解散を好みはしなかつたが、今後は一層それを避けるであらうと云ふことになる。

――政界當面の形勢――

されば解散があるか、ないかと云へば世間では一般に解散なしと見てゐる。政府と政友本黨との妥協氣分が漸次議會に現はれて來るに從つて、此議會は無事であらうと云ふ觀測が力を得て來る。然るに玆に此議會を解散せしむるや否やといふ鍵は今は恰かも大藏大臣濱口雄幸氏が握つてゐるかの如き形勢になつて來た。私は『改造』前號で、此議會に於ける最も重要な問題は稅制整理案と義務教育國庫補助であり、そして政府案の地租一分減を止めにしてそれから九百萬圓の金を浮かせてこれを一千萬圓にして義務教育費の方に廻はす。即ち政府案二千萬、本黨案四千萬、其折衷の三千萬圓增額と云ふことにして妥協が出來そうなものだと云ふことを書いた。本黨は此折衷案で承諾しさうであつた。加藤前首相も死ぬる少し前まで、先づそんな邊で折り合は付きそうなものだと云つてゐた。此折り合が付けば、議會は無事である。それが付かなければ解散の可能性がある。

所で濱口藏相は政府案を固執する一つの主張を有つてゐる。元來稅制整理案なるものは現在の收入を增減しないと云ふ原則の下に組立てられたものである。地租一分減は此れ丈け國民の負擔を輕減すると云ふ獨立の計畫ではなくして、他に國民の負擔を增加する計畫に對して相殺的の役目を有つてゐるものだ。他の負擔增加のみを殘して、負擔輕減の方丈けを中止することになれば、稅制整理案が實質に於て增稅案となる。だから、若し義務教育費を一千萬圓增加する必要があるならば、そ

れは他に財源を求むべきものであつて、それが爲めに地租一分減を犠牲にすべきものでないと云ふ主張を有つてゐる。此主張は相當道理のあることであつて、藏相はかなり眞面目にこれを固執するものと見られてゐる。すると政府と本黨との妥協が困難になり、議會は解散の危險に瀕する。

若しそれが加藤首相が生きてゐた時ならば、首相は高壓的に濱口藏相をして自説を捨てしめ得たであらう。或はさう露骨に高壓的でなくとも、首相の節度に服すると云ふ名目の下に、濱口藏相は妥協案を承諾する事に大いした苦痛を感じなかつたであらう。然るに加藤首相が死んだ今日になつては、濱口氏が如何にして自説を捨て得るかと云ふことが問題になる。若槻首相は藏相に向つて高壓的に妥協を要求する事をしないであらう。從つて、濱口氏が自發的に本黨と折り合ひ得る案に贊成すればよし、若し折り合はずに、何處迄も議會解散迄行くならば、それも致し方がないと云ふ態度を採る外はないだらう。殊に議會解散になつて、直ちに起るべき總選擧費用の問題になれば、さつそく、濱口、仙石、其方面の力を借らなければならない事情に照らして、寧ろ解散の鍵を濱口氏の手に任かして置くことを以て當然とするであらう。

併しそれが直ちに若槻首相の地位に影響すると見るは早計である。所謂憲政會内に若槻派、濱口派、安達派があると云ふ所の形勢はそれは多くは彼等の輩下の云ふ事であつて、若槻、濱口に、安達と云ふ如き首領株自身は苦節十年の辛勢を共にした關係から、其内に和衷協同の精神が濃厚であると見るべきだ。現に仙石氏が加藤首相の後繼者として若槻氏を推した時、若槻氏は濱口氏を推し、濱口氏が固辭したに依つて、若槻氏が憲政會總裁となり、首相となつたと聞く。それであるからして、濱口藏相にしても、無暗に自説を固執して、若槻新首相をして困難の立場に置かうとは考へられない、濱口藏相が飽くまで主張に忠實である所の所謂ライオン藏相である事は世間周知の如くである。併しそれと同時に彼れは朴訥な人情と、案外な如才なさを持つてゐる。結局は憲政會出身の關係が、一心同體になつて若槻首相を助け、そして彼をして圓轉滑脱の妙技を振はしめると云ふ所の、極めて美くしき場面を演出することに勉めるのではないかと想像される。

――資本主義に對する反逆――

さう行けば憲政會の市は榮へる。或は末には原敬氏時代の政友會の如く、衆議院に於て絶對多數になるかもしれぬ。しかしそれはブルジョア政黨の榮へ行くのであることを忘れることが出

來ぬ。私は議會再會の日に衆議院を傍聽して、若槻首相（其時は内相）が失業問題に關して、松田源治氏の質問に答へるのを聞いた。若槻氏は失業者を救濟する爲めに六大都市では或程度の公債を募集することを許るしそれで職を與へる方法を講ずる。併し失業問題を根本的に解決する爲には、矢張國の産業を振興して、自然に失業者のなくなるやうにしなければならぬと云つた。これは誰れが聞いても尤な說だと思はれる。併し彼が云ふ所の産業振興、政友會の所謂産業立國、其他日本の上下が唱導する所の産業政策、それらすべては、個人が營利主義で繁盛すれば、國は自然に富むといふ思想の上に立つてゐる。此思想には欠陥がある。個人が大に富を集中すれば、他方にはそれに比例する貧困が生れる。片方に滿潮があれば片方に干潮があるやうなものだ、失業者の出ることは營利主義の事業營營に免かれざる現象である。如何に産業が振興されても、それが營利主義で行はれる限り失業問題は解決されない。此自由主義の經濟學を信仰してゐる所に、現在の政黨が何れもブルジョア政黨たる特色を有つてゐる。

若槻首相は憲政會の議員總會に於ける演說の中に、憲政會は國民の政治上の生活狀態を安定せしめた（それは普選實行の事を云つたのであらう）これからは社會生活の改善に努力せねばならぬと云つた。此演說が、憲政會が過去に於て政治上のデモクラシーに努力した如く、將來に於てはソーシャルデモクラシーの爲めに奮鬪すると云ふことならば、吾々は若槻首相の將來を刮目して見る價値があると思ふ。併し彼れは過去に於ては治安維持法の起草者であつた。最近に於ては農民勞働黨の解散者であつた。現在に於ては資本家的修正を多分に加へられた勞働組合法を提出せんとしてゐる。それは政治的デモクラシーに匹敵すべき所の社會的的デモクラシーの樹立を目的とする人としては、余りに平仄の合はぬレコードである。

若槻首相が進歩的にしてデモクラテツクな思想の持主であることは、彼を知つてゐるものが誰れでも否定せぬ所である。それと同時に彼れは有り余る程の常識を有つた所の實際政治家である。現代の實際政治が、莫大な金を喰ふ動物である以上、實際政治家に向つて、資本主義の謳歌を止めよと云つた所ろで、それは純粹に無駄な話しである。吾々の任務は先づ金を喰ふ動物を退治してかゝる事から始まらねばならぬ。さうしなければ、若槻内閣に向つて、資本主義に對する叛逆を企てよと云つても、それは無理な注文たるに止まる。（一五、二、四、）

何處に光明を認め得るか

有馬頼寧

「除々とすることの避くべからざること」又「理想家たるが故に、白痴者であらねばならぬといふ理由が何處にあるか」と言ふ、シドニー・ウエッブの言葉に私は共鳴する、總ての事、殊に政治が、種々の異つた思想を持つ處の、多數民衆の意思を基調として行はれるものである以上、それが除々と進められなければならぬものであるといふことは、認めないわけにはゆかない、又吾々が理想を持つて居るからといふて、今直ちにそれを實現しやうとするやうな白痴者のやうな望みを抱くものでもない、が併し吾々は少くも日本の政治が、除々になりとも進みつつあるといふことを認めたい、又吾々の持つ處の理想に向つて、歩一歩つゝたりとも近寄りつゝあるといふことを認めたいと思ふ、そう考へる時に、日本の政治が果して進みつゝあるであらうか、又理想に向つて歩一歩近寄りつゝありや否やといふことを考察せずには居られないのである。

日本の立憲政治、議會政治、政黨政治が三十餘年の間に於て除々に進み來つたといふことは、私も決して之れを否定するものではない、名は立憲政治であつて其實は專制政治、少數政治、官僚政治であつた過去に比べれば、少くも立憲政治の完成に向つて歩一歩近寄りつゝあることは私も之れを認める、さり乍ら、所謂普選なるものが、憲法布かれて三十餘年の今日始めて實施され、加之も其普選たるや、單に納税資格による制限を撤廢したに止つて、二十五歳以下の青年に選擧權を附與せず、又婦人に對しては全然參政權を與へないところの、極めて不完全なるところのものであり、又殊に立憲政治の原則ともいふべき、政黨を基礎とする内閣の出現が、やゝもすると中間内閣の出現に依つて脅かさるゝといふが如きことあるに至つては、其進歩の餘りに遲く、其理想に遠ざかること餘りに甚しきを嘆ぜざるを得ないのである。

政黨を基礎としない非立憲内閣の出現は清浦内閣をもつて其最後とした。第一次加藤内閣、第二次加藤内閣、若槻内閣と

いふやうに、恐らく今後は政黨を基礎としない內閣が出現するやうなことはあるまいと思ふ、が併し、政權が甲の政黨より乙の政黨、乙の政黨より丙の政黨へ移るといふことだけで滿足することは出來ない。其外形は政黨內閣のやうに見へても其內容に於て、其實質に於て、官僚的要素を多分に持つなら、吾々はそれを以て完全なる政黨內閣とは思はない。苟くも非立憲政治の絕滅を期す以上、吾々は單に外形に於てのみならず、其實質に於ても、眞の政黨政治の確立を期さなければならない。從つて何れの政黨が政權を握つた場合に於ても、眞の立憲政治を確立することが政黨の共通的責任であり、現代政治家の事務であるなら、そうした汚點を我憲政史上に印することは、絕對に之れを避けなければならないのである。

第二次加藤內閣は純然たる政黨內閣であつた。然るに第二次加藤內閣に於ては、閣僚にこそないが、政務官には貴族員議員にして政黨に關係のなきものを採用した、それには止むを得ない事情もあつたであらう。又政治の運行を滑かならしめる爲めには必要でもあつたであらう。が併し、これが爲めに護憲內閣に依つて爲された眞の政黨政治が、再び非立憲なものになつたといふことは、單に憲政會の爲めのみならず、我立憲政治の爲めに惜みても猶餘りあることである、此時に當り若槻內閣の出現は、此汚點を拭ひ去るべき絕好の機會を齎したものである、若槻首相の明敏なる頭惱と、國民の輿望を擔ふ憲政會の威勢とは、必らずや此汚點を一掃し、此に再び護憲內閣の當時に遡つて純然たる政黨內閣に改造し、以て立憲政治の確定を期するであらうといふことを吾々は期待したのである。

然るに何ぞや、貴族院との提携は依然として繼續せられたのである。此に於て吾々は若槻內閣の出現によつて遂に何物をも期待し得ないといふ悲運に逢着したのである。若槻內閣成立の當時貴族院出身の政務官に依つて提出せられた辭表は、必らずや若槻內閣の受諾する處となり、それによつて貴族院と提携したる汚名は一掃されるであらう。而して若し之れが爲めに貴族院の反對に遇ひ、政策の遂行を妨げらるが如きことあれば、進んで解散を斷行して普選の下に總選擧を行ひ、國民の間に於ける憲政會の信望に依頼し、以て新しき議會に多數を制し確實に政權を掌握するの擧に出づるであらう、是れ民衆政治を絕叫せる憲政會の採るべき當然の進路であると信じたのである。然るに何ぞや現內閣は吾等の期待を裏切り、依然として貴族院との提携を放棄せず、政權の維持に是れ務むるに至つては、吾等は政治の光明何處に在りやと叫ばさるを得ないのである。

現代の政治家中頭腦の明晢なる點に於ては恐らく若槻氏の右

に出づるものは無いであらう、が併し、吾々が若槻氏に期待することのものはさうした明快なる答辯ではない、吾々が反對黨の首領たる若槻氏に對し偽らざる讚辭を呈する所以のものは、唯此絶好の機會に於て、我立憲政治上に一道の光明を認めたいのである。然るに今や其希望は消へ、其期待は裏切られた、恐らくは同感の士の憲政會内にも少なからざるべきを信ずる、最早政界の將來には何等の光明もなく、何等の期待もない、唯殘る處のものは不滿と失望あるのみである、憲政會が今日政權を掌握し得たる所以のものは、多年普選を唱導し、而して多數國民に選擧權を附與したるが爲めではない、普選の實現はこれによつて民衆政治を確立するのであるといふ、其精神に共鳴したる國民後援の力である、然るに一度政權を握るや政權維持の爲めに**敢て非立憲的行動を爲し、立憲政治完成の進路を阻止するに至つては、國民の信頼と信望とは遂に之れを贏ち得る理由なき**に至るであらう。

民衆政治確立の抱負なく、政黨内閣實現の意思なき普選は、**單なる選擧權の擴張に過ぎない**、斯の如きことに對して國民は恐らく共鳴し得ないであらう、既成政黨の間に於ける此の如き政權の轉移は、遂に國民をして失望の淵に陥らしむるのではなからうか、政治に對する失望、政黨に對する不信、それはやがて**議會政治の××、××××の導因となる**の虞れはないであらうか、政策の如きは要するに末である。制度組織の改革、議會其物の完成を期圖するのでなければそれは要するに何等の價値をも齎來さないのである、普選を前にして無産階級の利益を高唱するもの漸く議場に多い、さりながら多數民衆は現代政治家が云々するほどしかく愚でないのである、社會政策的政治、其聲や甚だ善い、が併し、民衆は果してそれに對して多大の感謝と共鳴とを捧げるであらうか、社會政策を必要とするが如き社會組織、經濟組織、其者の改革を斷行せざる限り、民衆の信望は到底永く現存政黨の上に留らざることを知らなければならない。

活氣なく、惰れ切つた今議會の議場を見よ、更に多數國民が議**會に對して持つ期待と興味との如何に少きか**を見よ、既成政黨**恃むに足らず、議會政治は遂に行詰れりとの聲野に充ちたるの**時、其處に悲しむべき幾多の事變あり、變動生じたりとせば、其責任を負ふべきものは**正に現代政治家たることを覺悟せねばならぬ、吾々は若槻首相によつて**、近來稀れに見る明快なる答辯を聽き、濱口藏相によつて力强き確信ある演説を聽く、さり乍ら吾々はそれを以て到底滿足することは出來ない、吾々はこの快哉なる政治家の出現によつて、我議會政治の根本的改革を期待

し、國家社會の安寧と幸福とを望むのである、稅制の整理、產業の振興、それらは何れも皆同巧異曲のものである、そうした政治の枝葉にのみ力を注ぎ其根本を蔑にするが如き態度に對し吾々は果して何物を期待し得るであらうか、政治の何處に光明を見出し得るであるか。

現內閣は速かに貴族院との提携を斷て、而して普選斷行の旗幟の下に議會を解散せよ、これ憲政會の生きる最善の道であると同時に我議會政治を完成する所以である、そこに或は政黨の離合集散も行はれるであらう、今日の如く何等明確なる主義の上に立たざる我政黨は、分離結合すべき當然の運命を擔ふものである、今や我政黨は因緣と情實の結合より解放され、主義と信念とに依つて結合せらるべき時機に際會して居る、國民をして政治に失望せしめてはならない。國民をして希望と期待とを失はしめてはならない、時代は今や偉大なる政治家の出現を熱望して止まない、我國の政治に於て爲さるべき最大最要の事柄は、眞の國民政治を一日も早く確立することである、多數國民による多數國民の爲めの政治を行ふといふこと唯それだけである。此簡單にして明白なる仕事を爲し得る識見と抱負と智力と勇氣を有つ唯一人の政治家の無いと言ふことは、我國家社會の爲め遺憾に堪へざる處である。

首相急死に因る政變に直面し我政界の前途を想ふ

淸瀨一郎

一

大正十五年一月二十一日より、第五十一議會は開議をなしつつあつたが、翌二十二日以來、加藤總理大臣は微恙ありとして引籠つて居つた。世間一般には尋常一般の風邪であらうと思はれて居つたが、二十八日午前八時四十分、首相薨去と聞いては

驚かぬ者とてはなかつた。首相、急死に因る政變の記錄は左の通りである。

○一月二十八日午前八時四十分首相死亡。

同日より同月卅一日迄四日間、帝國議會は停會を命ぜらる。

同日、内相若槻禮次郎氏一旦臨時内閣總理大臣に親任せられたる後、他閣員と共に辭表を捧呈す。

○一月二十九日、若槻禮次郎氏、憲政會總裁に就任す。

同日夜、西園寺公は入江侍從長を經て上奏を爲す。

同夜、組閣の大命、若槻禮次郎氏に下る。

○一月三十日、若槻氏大命拜受を奉答し、同日午前十一時二十五分同氏に對し、内閣總理大臣親任の式を行はせらる。

之と同時に他閣僚の辭表は却下せらる。

○一月三十一日、日曜（停會期間滿了）。

○二月一日、新内閣は前内閣の豫算案を撤回すると同時に、

同一内容の豫算案を議會に提出す。

若槻首相、濱口藏相議會に於て施政の演說を爲す（前内閣の政策套襲）。

世間では、從前、長き間の我國の政變の記憶を呼び起し、此間或は復た化け物が飛び出しはせぬか。不純なる運動が起りはせぬか。即席の第一黨運動（政本合同の類）が捲き起り、政界の混亂を來しはせぬかと、相當に心配したものであつた。一月三十日に新首相に對する親任式が濟むや否や、日本中の新聞紙といふ新聞紙は盡く、政權が常道に依りて推移した事を慶ぶ旨の社說を揭げた。事實、今回は、中間内閣運動、超然内閣運動も起つて居らぬやうである。此種の内閣は、山本内閣、清浦内閣が最後であつて、最早、其再發の虞は事實上なくなつた模樣である。乃ち世間でいふ所の政黨政治なるものは完成したやうである。今は實に既成政黨の全盛期である。過去三十年の間、ブルジョア政治家の夢寐にも忘れなかつた、資本主義政黨の交替、廻り持ちに依る政權授受は完成した。今回の政變に安堵の氣持を感じた人々の心はこれである。又、事實、此政變の政治**史上の意義を求むるならば、此外には何ものもない。**

二

シヤトウ・ブリヤンは「**社會上の總ての制度は必ず三の階段**を經過する。それは、效用（ユチリテー）の時代と、特權（プリビレーヂ）の時代と、濫用（アブユース）の時代とである」と言つた。これを我國の政黨制度に當てはめて見て、思ひあたるものがある。自分は今日の政黨を難ずる點に於ては人後に落ちぬ。然し、翻て考ふるに、今日の政黨といへど

も効用はあつたのである。封建的專制思想の權化たる、彼の藩閥政治を打破するために奮鬪したものは實に既成政黨であつた。政治には無關心たる我國民の間に在りて、あれだけの自由主義的運動を爲すには相當の骨であつたらう。政黨は此効用(藩閥及官僚政治の打破)に成功した時に於て急轉直下、特權及び濫用の時期を開展した。自分は茲に新めて某黨、某官吏の腐敗事件を待ち出すのではない。たゞ民衆を背景とし、普選を高唱することに依つて政權を獲得したる政黨內閣は其施政の手始めとして何事を爲したか。(1)普選法を通過せしめると同時に、治安維持法を通過せしめて、普選實施に依る新興勢力の結合を妨害せんと計劃したではないか。(2)現に無稽の口實を設けて農民勞働黨の結社を禁じ無產大衆の政治運動を妨害したではないか。(3)壓迫的勞働組合法を提案し、勞働運動を制限せんとしつゝあるではないか。(4)干涉的爭議調停法を提案して一部勞働者の罷業權を剝奪せんとして居るではないか。(5)その上暴威取締法といふものを作つて、勞働爭議を暴力團扱にしやうと目論んで居るではないか。彼等が往年、官僚政治なりと痛擊したるものと寸分相違せぬ政治を以て、彼等は今や自己保存に汲々たるものである。是れシヤトウ・ブリヤンの所謂アブユースに非らずして何ぞや。

三

最近數年間の政治運動の中心は、いふまでもなく普選運動であつた。普選はいふ迄もなく手段である。選擧法は死物だ。選擧法の改革に依り求めんとしたる所のものは何であつたか。分て普選は「ナイフ」と「フオーク」の問題を解決する爲めに必要なのだと唱へられたといふ。普選に依つて求めんとしたる實體は、生活に卽したる政治そのものでなければならぬ。

昨春、普選は通過した。普選通過に依りて易々と「生活に卽したる政治」なるものが獲られると思ふ人があるか。新政治の實現の爲めには第一に制限選擧制の打破は必要であつたが、此が爲めに更に打破せなければならぬ第二の障害物がある。それは外ではない。今、完成の頂點に在るブルジョア政黨其ものである。

明治十年代青年政客は「自由民權」を標語とした。之が爲めに憲法が必要だと考へた。今日の民衆が「生活實卽の政治」を標語とし、之が爲めに普選が必要だと考へたのと同巧異曲である。彼等は、明治二十二年に憲法が發布、實施せられたに拘はらず、自由と民權が伸長せぬのを見て、目醒き、且失望した。警察網は益々密である。官權獨り張り、民權は土塊の如し。議

會は議會の意味を以て解散せられ、選擧は干渉せられた。彼等はそこで憲法だけでは自由を伸ぶるに足らぬ。吾々は更に自由を無視、蹂躙してゐる勢力、即ち閥族なるものを打破せねば本來の目的は達せられぬと語つた。是れ最近まで引續いた閥族打破、憲政擁護運動なのである。——歴史は繰り返すとか。今や、普通選擧法が通過しても、國民生活を無視するブルジョア政黨なるものが政權を壟斷する以上は普選論者の夢想した政治の實現は絶對に不可能である。治安法を制定し、無產黨を禁止した政府や政黨を其儘に見逃して置いて、新社會秩序を求めやうといふのは泥棒を警官に採用して、夜番を託するやうなものである。普選の同志は更に武器を磨き直してブルジョア政黨打破の十字軍に從はねばならぬ。

四

首相急死に因る政黨は、資本主義政黨の全盛期を證明した。然るに普選法は既に發布せられてゐる。普選に依り解放せられ**たる大衆の目標は此全盛期に在る既成政黨の打破であらねばな**らぬ。今後十年間の局は既成政黨と新興勢力との間の爭鬪を以て主潮とするものであらう。此爭鬪の結果新勢力が勝を占むれば、我民族にも光明が見舞ふ。此爭鬪の結果、やはり舊勢力萬歳ならば、我民族より不滿と陰鬱の空氣は去らぬ。昔「ルイ」十四世は其死後には大洪水來らんと揚言した。識らず、閣黨首相沒後に來るものは何ものなるか。

五

新政黨の樹立、大衆勢力の結合。言ふに易くして行ふに難い。獻身の努力、不斷の精進、了解、同情、純潔、而して確乎不動の信念。之を以て之に臨まねばならぬ事は勿論である。然し乍ら、春になれば花は自ら開く、昨年、普選法の通過以來全國の形勢を觀察するに、從來政治圏外に在つた青年團體の政黨化も相當著しい顯象である。言ふまでもなく、農民組合、勞働團體は擧つて政治運動の方向を採つて居る。本文發表の頃には**或は第二無產黨の成立を見ることもあらう。冀くは其健全な**る發達を祈る。

既成政黨は外觀は尨大であるが、其內實に於て重大なる弱點を包藏して居る。第一、彼等には指導的政治思想がない。元來政權獲得といふ事のみを目標として集まつた政治家の集團であるから、此集團に一貫したる共通信念がない。將來、問題らしき問題に遭遇するときは彼等は之に處する定見を定むる事を得ない。右と決すれば左派は去らざるべからず。左と決すれば右

派は留まる能はざる窮地に置かれるであらう。かゝる組織でも今日迄、兎も角、持ち來つたのは、今日迄は藩閥的舊勢力といふ敵國があつたからである。之なき後は彼等の分解は比較的速であらう。第二に彼等には會計組織がない。黨費は何所から流れ出づるか、一向に判らぬ。然るに共通信念なき群集を結束するには黄金の鎖を以てするの外はない。そこで黨幹部や、黨總裁は、自ら金力あらば格別、自ら金力を擁せざる以上、無理算段を必要とする。諺に、隠すより顯はるゝはなしといふ。無理算段は時々馬脚を露はす。玆に民衆の侮蔑を招來する。今回の某黨三百萬圓事件の如きも其片鱗であらう。既成政黨が此組織で進む以上、年々歳々此種の風聞の種を蒔き、彼等の信用は益益地に墜ちるであらう。外觀が雄大であり乍ら、案外脆かつたのは徳川の末路であつた。我國政黨の變化も案外早いかも知れぬ。（一五、一、二）

政黨首領としての若槻氏

中野正剛

新に内閣總理大臣となり憲政會總裁となつた若槻禮次郎氏を中心として、政界の今後を推測評論せよと云ふ改造社からの御頼である。自分は此の御依頼に應じて執筆する前に、自分自身は若槻氏を總裁に頂く憲政會に黨籍を置く者たることを御斷りして置かねばならぬ。贔屓眼はあらう、愛黨心も交へられやう、さりながら世間一般の眼から見て、首肯し得ないやうな依怙な言辭はしないつもりである。

若槻氏は桂公の下に其の大藏省を預かつて居つた時から此のかた、其の頭腦手腕力量に於て、天下に定評ある出來者である。世界の大勢には通曉して居る、財政經濟は御手のものである、其上鋭どい受感性と柔軟なる頭腦の彈力とを有するので、物に凝滯せず世と共に推し移ることが不可能でない。随つて若槻氏は今日の實際政治家中最も進歩的な人物として何人も之を承認するであらう。

保守頑冥の徒から云へば、定めて不安な所があらう。現にブルジョアの一角からは、どうやら若槻君は便りないやうに思はれると評せられて居る。併しカチ〱に固まつた保守黨や、我利我利に凝まつたブルジョアから、全然頼もしく思はれたり便りにされるやうでは、渦卷を流るる現代人心の潮に掉して、政界に舟を行るとは、到底不可能であらう。

若槻氏は或る場合には貴族院の長袖者流とも懇談する、實業家とも應酬する、妥協もやるであらう、互讓も試みるであらう、其の癖場合によりては堂々として大に理想を高調する。此點からすれば機會主義者（オポチユニスト）のやうに見受けられ、幼稚な理想論者からは非難を加へらるゝことも少なくないであらう。さりながら我日本の今日の世相は甚だ複雜である、習慣の力、因襲の力は可なり强大である、而して民衆一般の理解力なるものが甚だ不充分である。此間に元老、貴族、軍閥、金權の勢力が煩さく相作用し、そこに淺薄なるジンゴイスト、輕跳なる煽動家などの力が社會を混ぜかへすので、單調な人では迚も、面倒な社會に善處して抱負經論を實行することは覺束ない。たしかビスマルクであつたか『主義を提げて社會を渡るは、犬が棒を啣えて竹籔を渡るやうなものだ、棒を横に啣えて歩けば、すぐにぶツつかつて一寸も進まれない、縦に啣えてうねりくねりして歩けばこそ、始めて通りぬけが出來るものだ』と言ふて居る。若槻氏はちやんと理想を有して居る、其の進むべき傾向もきまつて居る、唯棒を横に啣えて竹籔を渡らぬだけの聰明がある。難關を開き、波濤を凌ぎ、假令絶望の淵、困難の谷に陥れらるゝも、到る所に進路を求め、滾々として盡きざる窮通の資源を腦裡に收めて居る。若槻氏の長所は高き理想と進歩的傾向と、而して此の理想を指さし、此の傾向に随ひて進む際に、決して行き詰らざる窮通力を有する點にある。

若槻氏が總理大臣となり、憲政會總裁となると共に、若槻氏の前途は種々の希望と掛念とを以て見られて居る。自分が若槻氏に就て最も多く受ける質問はこうである、『若槻氏は頭腦と手腕に於ては立派なものであるが、あれで金が出來るだらうか、政黨總裁として金が出來ねばどうすることも出來ないじやないか』と。如何にも卑近な恥かしいやうな質問であるが、現在政界の裏面の消息を捉へて居る。金が要るからこそ高橋前政友總裁が引退を迫られた、金が要るからこそ田中政友會新總裁が三百萬圓事件を惹起した。金の因縁に絡まればこそ革新倶樂部が不自然にも政友會に併呑せられた。併し政界は決して金ばかりでは旨く行くものでない。若槻氏は融通自在なやうに見えて、あれで非常に潔癖である、従來のボス政治家が川ひたやうな常

套手段で金を作るとは、試みもすまいが、到底出來もすまい。若槻氏を總裁に推薦した憲政會の領袖連はちやんと之を知悉して居る。併も憲政會が金の融通力はないとを知りながら若槻氏と總裁に推したのは、金よりは其の人格力量識見に於て同氏が憲政會を率ゐるに適當なりと信じたからであらう。自分が斯く言へば人々は實情に迂遠なりとして笑ふであらう。さりながら實力は確かに金以上の有難味を有して居る。是に選擧に際し候補者は數千の金を出して貰ふより、其の選擧區に來て立派な應援演説を一つして貰ふ方がどれほど有難いか知れない、若槻氏が中央政界にあり、或は議會の壇上より、或は新聞記者とのインタアビユウにより、屢々發表する其の政見は、是れ實に不斷の選擧應援である、更に政綱の確立、政策の遂行に於て總裁にへマなどをして貰はぬとは、實に根本的の黨勢擴張である。若槻氏は金錢の調達以外、その頭腦手腕により、政務に貢獻するとに於て、天下の信賴を繋ぎ、黨勢の擴張に資するとが出來るであらう。

金錢關係によりて繋がる、政黨の親分子分の關係は、それは舊式である、情實的である、内密の問題である、堂々と天下に公表するとが出來ぬ。乃ち暗黑の裏面は罪惡の伏在する所で、暗黑裏の力のみを以て政界を左右せんとする政黨首領は最早や時代遅れであり、普選を前に控へた今日の社會に適應しない。今まで金錢の調達力で以て政黨を率ゐるとが、日本の政黨の實情であつたとすれば、若槻氏は人物識見を以て政黨を率ゐんとする新らしき領袖の進み方を試驗するものである。而して若槻氏の總裁ぶりが人物本位にありとすれば、政黨の内輪にも情實關係、親分子分關係は動かずして、人物本位が認めらるゝに至るであらう。自分は我國の政黨革新の爲に之を歡迎する。

若槻内閣に濱口雄幸氏が大藏大臣たるとは内閣の權威である。幣原喜重郎氏が外務大臣たるとは、國際的に内閣の進歩的なるとを色彩づくる。議會開會の劈頭には、慣例的に總理大臣、外務大臣、大藏大臣の施政演説が試みらるゝが、此の三國務大臣はどうしても内閣の花形であり、議會の立役者である。今日内務の椅子は若槻氏の兼任であるが、之が專任大臣を置く場合には、堅實老練の士を擇ぶべきである。内務大臣は副總理格であるから濱口氏を推さねばならぬなど宣傳せらるゝが、それは舊式の見解である。副總理格といふものがありとすれば、それは閣臣其人の人物の然らしむる所であつて、内務大臣が副總理格でなければならぬと云ふ理窟はない。濱口氏はまた所謂副總理格とならんが爲に閣臣に列するものでない、其の專門たる財政上の主義主張經綸抱負を實現せんが爲に大藏省にあるの

である。濱口氏をして大藏省を去らしむるとは、內閣の權威を失ふ所以であり、又濱口氏自身の肯んぜざる所であらう。

新總裁が定まつてから、憲政會內の勢力の中心が移動するであらうと取沙汰する者がある。若槻氏は公平であつて、併も腹の底はなか／＼嚴肅であるから、私の嬖によつて所謂中心勢力を形づくるとはしないであらう。概して謂へば親分子分本位でなくして人物本位であり、情實本位でなくして大勢本位でにるから、現在黨員は固より、新しく普通選擧によりて擇ばれて來る新議員新黨員でも、其の人格、手腕、力量によりて容易に憲政會の中心勢力の核心に觸るゝとが難事でないであらう。此點に於て若槻新總裁は天下の新人物を吸收するに足るであらう。

政界の中心人物も段々若くなつて行く、

加藤憲政總裁と高橋政友總裁と對立して居たが、高橋氏去り、田中義一氏が政友總裁となるに及びて、田中氏の方が若く見えたが、今度若槻氏が憲政會總裁となるに及び、同じく若き床次本黨總裁と對立し、田中氏は何程か老く感せらるゝ。三人の競爭の勝敗は決して金錢によりては決せられぬ、三總裁が如何にして天下の輿望を保ち、如何にして天下の人材を吸收するかによりて決せらるゝ。既に人材が集まれば金錢は隨つて集るであらう。人あれば是に財ありとは古人の言であるが、今日に於ても眞實である。金から先に集めて人を集めやうとすれば、臭い物に蠅がたかるの類で鷄鳴狗盜の輩ばかり集まつて來る。乃ち小人が比周すれば、君子は之と齒するを愧ぢて決して近寄らないであらう。三百萬圓問題が傳へらるゝと共に、如何に多くの小人が其の暗の陰に翺翔することよ。

憲政會內に內輪モメが起ると傳へて興がる者がある。併し其の勢力爭ひの親分に擬せられて居る濱口雄幸氏は公明正大にして少しも私心を交へざる君子人である。如何なる小人が細工しても之に乘ずるやうな男でない。それから安達謙藏氏は老練にして用心深き苦勞人である。一意憲政會を以て社稷となす外寸毫も他意はない。憲政會は決して政友會の轍を履まぬであらう。

若槻内閣に望む

堀江歸一

若槻内閣が成立したことを機會として、世間には此内閣に對して、種々の希望を繋ぐやうであるが、私は此内閣は何處までも加藤内閣の延長されたものであり、又依然憲政會を基礎として成立して居るものであることを認め、特に之を新内閣扱ひにして、希望を陳ずる必要ありとしない、只加藤内閣時代の方針を繼承して行くことを望む、強いて希望する所ありとすれば、從來の方針を今少し大膽に敢行することの一事あるのみである。

過般加藤伯の逝去に際し、所謂内閣乘取りの目的を以つて、何等か盲動を試みる者や、試みやうとする者も政界に出沒するやに傳へられたが、斯る運動の表面に露出しない内に、若槻氏が内閣の首班と爲り、世論も亦之を以つて政權の當然歸着す可き所に歸着するものと認めた。私は之を以つて我國政治の進歩した一の證左とするに躊躇しない。蓋し加藤内閣の基礎とする所は憲政會であつて、内閣組織の大命が一度ならず、二度までも加藤伯に下つたのも、要するに加藤伯の個人としての閲歴才能と云ふことよりも、憲政會の總裁であり、而して其憲政會が衆議院に於ける第一黨である事實に據るのである。然らば今、加藤伯が長逝した所で、若槻氏が代つて總裁として、憲政會を率ゐる以上は、同時に内閣の組織者と爲ることも、當然の道理であつて、斯くてこそ政權の移動が個人に依つて支配されずして、政黨の勢力に依つて定まり、政黨内閣の實が擧がれりとするを得るのである。往年超然主義の加藤友三郎内閣が加藤首相の長逝と共に、瓦解したのは、超然内閣として已むを得ざる所であつて、斯る例は現在の如き政黨内閣に適用されることを許されない。兎に角總理大臣は急死しても、其れが政變の原因と爲らず、黨の領袖が代つて總裁とも爲れば、首相とも爲つて、政治上の安定を得ると云ふのは、政黨内閣の齎す利益の著しきものと考へられる。

若槻内閣に對して、世人の滿足を表したのは、其政黨内閣制

の實現の立證された故であるが、更に他の一理由として、私の擧げたいのは、多數の世人が憲政會の標榜する消極政策に贊意を表し、遠き將來は兎に角、今後一兩年の間、此政策の下に、我國經濟社會に充分の整理が行はれ、他日に於ける景氣恢復の基礎の築かれることを希望する一事である。斯る希望の國民に懷かれて居る際、假に加藤伯の長逝が政權の移動を惹起す原因と爲り、從來の消極政策が事の半途に廢棄されるに至つたならば、經濟社會に收拾す可からざる混亂を生ずるのは、何人の想像にも上る所である。多數の國民が若槻內閣の下に、政界の安定を希望したのは、消極政策の續行を必要とする信念に據れるものと斷じなければならない。

斯の如く考へ來つたならば、吾人が若槻內閣に望む所の何ものであるかは、**之を細說するを要しないであらう。何處までも消極政策の續行することとは、其第一に數へらる可きものであつて**、之を除いたならば、若槻內閣の使命は求められないであらう、現に經濟社會は一年前と今日とを比較すれば、多くの點に**於て、改善緩和の跡の少なからざる**ことが認められる。此事たる、消極政策の下に國民經濟に對する財政の壓迫の除却されつゝある結果であつて、**始め消極政策が行はれたならば、經濟社**會は不景氣に不景氣を重ねて、再起の望みなきに至ると云ふが如き議論を唱へて、此政策を半途に變更せしめようとした政友會の輩の如き、今日に至つて、不景氣の勢は加重せられず、却つて其次第に稀薄と爲ることを知つたならば、故意に消極政策を傷けんとしたことの如何に誤まれるものであつたかを認めるに至るであらう。

憲政會が若槻氏の下に、能く一絲亂れずに統制されるか、其れとも內部に內訌を生ずる恐れなきか、在野黨の攻擊に對して、假に今後衆議院を解散した曉に、能く總選擧に於て、憲政會の勢力を今日以上に大ならしめるを得るか、此種の勢力擴張に必要なる政戰資金は今後若槻氏の手に依つて、如何に調達さるであらうか。是等の問題は黨首としての若槻氏の技倆を試みる準繩であつて、氏の人物を批判する上から云へば、興味の**津々たるを覺えるであらうが、氏が黨首として、又政治家として適するや否やは私に取つては、別に大した利害の關係はな**い。私の若槻氏に對して望む所又は若槻內閣を爲さしめんとする所は加藤內閣以上に、**憲政會の政綱を實現する**ことである。**消極政策の**

今や人氣恢復策は色々の方面から案出されて居る。消極政策の從來主張された手前から云つて、露骨なる政策の變更は望まれないとしても、尙ほ或る方法の下に、經濟社會に刺戟を與へて、景氣恢復の到來を速ならしめる說もあり、日本銀行其他特

殊銀行の増資問題の如き、此點から近來擡頭しつゝあるやに認められる。或は是等を導火線として、若槻内閣の經濟政策に多少の變調を告げ若槻氏の世間に傳へられる圓轉滑脫なる性格を政策の上に反映せしめるに至りはしないかと云ふ推察の下されることもなしとしないが斯るデリケートの問題に對しては、餘程緻密の考慮と判斷とを要するのであつて、一歩を誤まれば、却つて内閣の致命傷と爲りはしないかと云ふ懸念もある。政府が財政上に於て消極政策を取るとしても、之を取ること、兩三年に亙る其間に於ては必ず國民經濟上に餘裕を生じ、餘力を養ひ、自ら民間の積極的行動に依つて、經濟社會の狀勢に一變化を見るに至る。政府としては巧智に任せて、小策を講ずるが如き、大なる禁物である。

内閣總理大臣と云ふ官職は始めは維新の元勳が之を獨占し、明治三十年代から大正の初年に掛けても、西園寺桂と云ふ政界に特殊の地位を點め、維新の元勳に對する後繼者たり、相續人たる者が之に當り、寺内山本と爲つて、聊か閥歷の光りは薄らいだが、尙ほ軍閥の勢力を背後に荷う特殊の事情があつた。原が政黨の首領として、内閣を組織して以來、何人でも政黨の首領であれば、内閣の首班たるを得る例が開かれ、加藤若槻に至つて、愈に此事實の確立し、内閣組織者に對する門戸の解放されたことは我國政治の一進歩として、私の喜ぶ所である。

子弟の職業選擇に就て

末弘嚴太郎

一

諸學校の入學期卒業期も最早一二ヶ月の先に差迫つて居る。青少年諸君は素より、父兄方に於ても、入學難の爲め又就職難の爲めに定めし種々苦慮せらるゝ向が少くないであらう。殊に、知識階級の失業問題が漸次に慢性的症狀を呈するに至りつゝある今日、今後子弟を高等諸學校に向はせやうとして居る諸父兄の中には、定めし將來を想ふて不安の念に驅らるゝ向が少くないであらうと考へる。

私は平素教職にある關係上、直接學生乃至父兄の方々からその種の問題に就て相談を受ける機會が甚だ多い。又中央職業紹介委員會の一員になつて居る關係上、失業問題殊に最近に於ては知識階級の失業問題に付て實際の事情も調査し又色々考へねばならない立場に置かれて居る。加之、教育者の立場よりすれば、小學卒業者にして既に中學入學難あり、其れより順次高等學校其他諸專門學校大學等に至る迄、極度の入學難が青少年の頭腦を苦しめて居る結果、教育のすべては全く入學準備の手段たるが如き狀況を呈するに至り、又大學專門學校等の學生が在學中既に就職問題の爲めに苦慮して學修の態度亦自ら之れに依つて左右せられつゝあるが如き現狀を見るとき、教育制度の根本問題として我國將來の爲めに考慮研究せねばならない事柄が頗る多いと考へるのである。

この故に、私は以下本文に於てこの問題に關して平素から抱いて居る感想の一端を書き記したいと思ふ。さうして一方子弟をもたるゝ父兄方の考慮講究を煩はすと同時に、他方朝野識者に訴へて一日も速にこの問題の根本的解決を見得るやう共々に努力せんことを希望したいと考へる。

二

この問題に就て先づ第一に考ふべきは、抑も父兄は子弟の職業選擇に就て果してどれだけの權利と責任とをもつて居るかの問題である。

我國には今尙子を親の所有物なるが如くに考へて居る人が少くない。其の結果、子の職業選擇に就ても全く親一個の意見を押し通して全然子の意思を顧みざるが如き親が甚だ多い。無論それは一面子を可愛いゝと思ふ親心の現はれには違ひないけれども、親が其の子の能力性格生れつき等を仔細に研究することなく、又本人の意思をも確むることなくして、無暗と子供の將來を決めやうとするが如きは頗る亂暴であり又甚だ危險である。世の中には抑々最初の職業選擇を誤つた爲めに一生不遇の地位にある人々が澤山ある。殊に、親が無理强ひに不向きな職業を選び與へた結果、一生を全く不遇の中に過ごし、終世終に天賦の才を發揮し得ざるが如き人は、其例決して稀ではない。又親が無理强いに不向きな職業を選び與へようとした結果、親子の間に激しい感情の衝突を惹き起し、甚しきに至つては見るに忍びざる家庭悲劇を呼び起すやうな例も少くないのである。而かも其の原因が多くの場合親其の子を以て所有物なりと考ふるの點に存することを思ふとき、私にどうしてもこの點に關する社會一般の思想に對して其の根本的變革を切望せざるを得ないのである。

凡て各人には總て其の特色がある。向き不向きがあり、適不適がある。社會は、各人をして各其の最も適する所に向はしめ、其の最も得意とし長所とする所を發揮せしむるに依つてのみ、能く其の進步と繁榮とを計ることが出來る。此故に、今日の制度上子弟の教養が專ら父兄の責任になつて居る以上、子弟各自をして社會の爲めにその最大能力を發揮せしめるのは正に父兄各自の責任であつて、この責任に背くことは獨り子弟其の人の人格の尊嚴を冒瀆する所以なるのみならず、社會に對しての誠に許し難き罪惡なりと言はねばならない。勿論、誰れは何に向くかといふ問題を正確に見極めることは頗る困難である。併しながら、親が或は自己の單なる虛榮心から世間態を憚つて子の職業問題を考へたり、或は全く子の向き不向きなどを考へずに何でも親と同じ職業をやらせやうとするが如き態度をとつたり、或は自らの學術藝術乃至は社會運動等に對する無理解から、全く何等の理由もなく、子弟のその方面に向はんとする意思を無下に抑へやうとしたり、又甚しきに至つては單なる自己の小さい趣味から、例へば長男は陸軍に次男は海軍に三男は又官吏にしたいなどと勝手な方向を獨り極めにして、無暗と子をこれに當てはめやうとするが如きは、明かに子其の人の人格に對する侵犯であり、又社會に對して父兄たるの責務を誤まるの罪誠に重しと言はねばならない。

父兄は宜しく平素より一々子弟の性格能力等に付て仔細なる觀察を怠らざると同時に、各種職業に付て正しき理解を得ることを努め、子弟の職業選擇に付ては寧ろ先づ本人の意思に重きを置いた上、虛心以て親切なる相談相手となるが如き態度を執らねばならない。

三

次ぎに又、子弟の養育教養を以て一種の投資事業のやうに考へ、總て利益を回收すべき將來を豫期して教育を施すが如き親は、不幸にして今日尚多數に存在する。而してそれが職業選擇の問題に付ても甚だ遺憾なる結果を生み出して居ることは、吾人の又最も注意せねばならぬ所である。

昔は、親が其の子を所有物として取扱ふことを社會上も又法制上も正當視して居た時代が諸國に存在した。又今日でも、教養なき無智なる人々の間に於ては、其の子を財產と考へて收益の爲めに養育し又賣却する例は決して稀れでない。所が、之れと類似の思想が――「親孝行」なる美名に包まれつゝ――相當教養ある人々の間にも今日尚引續き存在しつゝあることは吾人の最も驚きとする所である。この種の考へ方を有する人々は、子の爲めに教育費を投ずるを以て恰も投資事業の如くに考へ、將來子より利益の回收を受けんことを豫期して教育を施さうとする。其の結果、これ等の人々は子の職業選擇に付ても、全く本人の適不適乃至は其の意思等を顧みることなく、唯手近な利欲心から甚だ不都合な職業を子に强制せんとする例が極めて多いのである。

現に例へば大學を出てから、或は藝術的方面に向ひたいとか、又或は健氣にも社會運動に身を投じて一生を奉仕の生活に捧げんとするが如き學生ある場合に於て、父兄の中には、全く其學生の向き不向きを考へず、又藝術の價値社會運動の意義等に付て何等の理解を有することなく、唯多年資本を投じて教育した子弟が、金にもならず又位階勳章を貰つて所謂「出生」する見込もない方面に向つて行くのを、如何にも惜しいことのやうに考へて、頭から反對する人が少くない。而して甚しきに至つては、其れが原因となつて勘當其他の家庭悲劇を惹き起す例が少くないのである。

しかしながら、斯くの如き教育思想は抑々子を所有物と考へることに其の根底を有する。子を養ふことは恰も雞豚を飼ふに均しとするの考へである。社會に向つて其の子の最大能力を發揮せしむべく努力せねばならない親として、最も忌

遂ざけねばならない卑しい考へ方である。然るに、明治時代に成人した人々の中には、今尚徒らに手近かな物質的の出世熱成功熱成金熱にのみ捉はれて、子供の職業選擇に付ても右様の悲難すべき態度を示さるゝ向が少くないのであつて、是れ亦吾人の最も注意して排斥せねばならぬ所のものである。

四

終に、以上にも增して最も眞面目に考慮せねばならない問題は知識階級の失業問題と職業選擇問題との關係である。

知識階級の失業問題乃至就職難は、今日吾人の等しく惱みつゝある社會病の一つである。折角長年高等の教育を受けて苦心の末學校を出ても容易に就職すべき口が見付からない。多少口があつても思はしい口は殆んどない。其結果失望落膽の淵に沈んで居る青年及び父兄の多いことは昨今極めて顯著なる事實である。

然らば、この種知識階級の失業問題は何に由つて來れるか。勿論目下世の中一般の不景氣に伴ふ事業の不振が差し當つての最大原因であることは言ふまでもない。併し其れよりも一層根本的の原因として考へねばならないのは、明治此方一般に行はれ來りたる教育思想の根本的誤謬である。

今でも世の中多數の人々は教育を以て出世成功の手段なりと考へて居る。教育さへ受ければ勳章を貰つたり金持ちになれるものと考へて居る。教育は卽ち世間的に「エライ」人になる方便なりと考へて居る。從つてこれ等の人々は、高等の學校教育を受けたるにも拘らず容易に思はしい職業にあり付くことの出來ない現狀を見て甚だ悲觀するのである。併しよく考へて見ると、例へば大學を卒業したるが故に當然誰れでも「出世」することが出來たのこそ反つて全く一時的の變態現象でなければならない。明治維新の結果として世の中が全然一變し、聊かたりとも泰西文明の知識を有する

者は朝野各方面から重用せられ、其の結果誰れ彼れの區別なく容易に「出世」することが出來た。併し斯くの如き現象は社會大變革の後何れの國に於ても均しくこれを見得るのであつて、獨り我國のみならず過去二十年の支那は亦明かに其好適例を我々に示して居る。所が、この一時的變態に眩惑された人々は、自ら出世成功の熱に捉はれて色々と藻掻いたのみならず、子弟に付ても亦同樣に其の「出世」を熱望し、其の手段として之れに高等の教育を施さんが爲めに種々苦心を爲し、甚しきに至つては父祖傳來の田畑を賣り盡して子の教育に資金を投ずるが如き風を馴致するに至つたのである。乍併、所謂「出世」には數に限りがある。世の中が漸次に落ち着いて來るにつれ、最早學校卒業者の總てが昔と同じやうな「出世」を望むことは全く不可能となつた。從つて、今日學校卒業者の就職難乃至失業問題を仔細に觀察して見ると、全く職なしと言はんよりは寧ろ自己又は父兄が兼々期待した程の職の得難きに過ぎない場合が多いのであつて、「失業」と言はんよりは寧ろ「失望」と言ふを當たれりとするやうな場合も少くないのである。

勿論かくの如きは子弟の立身出世を期待して教育の爲め多大の費用と勞力とを費した父兄にとつては誠に氣の毒な現象である。併し所詮斯くの如きは、一方政府が世の中の出世熱に迎合して無暗と高等諸學校を建設すると同時に、世の中の人々も誤つた教育思想無考へな成功熱出世本位の考から之れに入つて行くことを奬勵した當然の結果であつて、今更ら如何とも出來ない過渡時代の「犠牲」である。

玆に於て、私が此の際特に朝野一般の考慮を煩はしたいのは、教育に關する一般思想を根本的に建て直すことである。元來教育の本位は飽く迄も「人格の完成」に置かれねばならない。之れを以て「出世」の手段なりと考ふるが如きは抑々の誤りである。如何なる職業に就き如何なる地位にあらうとも、人間一人前として何處に出しても恥しからぬだけの知識と教養とを備へ、又國民一人前として何處に出しても退けを取らぬだけの見識と實力とを有つて居りさへすれ

ば、我々は人として又國民として何等恥づる所なき立派な人格者である。而して教育は實に斯くの如き人間として國民として立派な一人前の資格を作り與へることに本位を置かねばならないのであつて、國家教育制度も亦實にこの基礎の上に築かれねばならないこと、素より言ふを俟たない。

然るに現在吾國の教育制度を見るに、徒らに學校教育にのみ力を集中して所謂「國家有爲の材」を養成することにのみ熱中し、學校に入らず否入ること能はざる多數民衆の爲めに人一人前としての教養を與へんとするが如き努力は從來殆んど試みられて居ない。さうして農村の隅々に至るまでも專ら成功本位出世萬能の教育を施し、無暗と少年の成功熱を煽つて所謂「向上心」を起さしめ、又所謂「青雲の志」を立てしめやうとして居る。今日農村に於ける病弊の一つとして一般に苦慮されて居る農民離村の傾向、殊に有爲の青少年がとかく農村に落ち付くことを嫌ふが如き弊風は、一面經濟自然の然らしめる當然の結果ではあるけれども、同時に如上誤りたる教育制度並に思想の結果であることを忘れてはならない。人間一人前として何處に出ても恥しからぬだけの教養があるならば、職業の種類に依つて人に貴賤の區別あるべき筈はない。從つて如何なる境遇に生まれ又如何なる職業にあらうとも、斯くの如き人間一人前としての教養を――特に學校教育によらずして容易に――得られるだけの設備が教育制度として一般に完備して居るならば、誰れか好んで學校教育の爲めに無用の費を費すものがあるであらう。現下の急務は實に教育思想の根本より成功出世の主義を追ひ出すと同時に、廣く完全なる社會教育を擴充するにあると云はねばならない。

私は、文政の局に當りつゝある人々に對しては素より、社會一般の人々に對して、この際速かにこの點に着眼せんことを希望する。さうして卑近なる成功熱を教育の根本より驅逐すべく努力せんことを希望して已まないものである。「成程明治新政の當初に於ては、新政の局に當り得べき新知識を養成することが正に國家教育の急務であつたに違ひない。」

併し其れは其の局に當り得べき「國家有爲の材」を作ることが――當時として――正に國家の急務なりしが故に行はれたただけのことであつて、決して其の新知識其の人を個人的に出世せしむることを目標として行はれたものではない。個人の個人的出世を目標とするならば、國民全部の負擔に依つて學校教育を維持せねばならない理由は少しもない。國民全部の負擔に依る國家教育は決して個人的目的の到達を目標とすべきに非ずして、眞に國家の爲め社會の爲め必要なる者を養成する爲めにのみ設けらるべきものである。然らば今や明治新政の時代既に遠く過ぎ去つて、最早國家の奬勵助力なしと雖も政治經濟の局に當り得べき人々を得るについて何等苦しむ所なきに至りたる現在に於て、國家教育の目標を依然として明治時代の其れと同樣の點に置かんとするが如きは甚しき誤りである。今日吾人の最も必要とするものは、國民の總てをして人一人前としての教養を得せしむることである。陋巷にあるも尙志を改めざるの自信と教養とを有する國民を一人も多く作り出すことである。然らざる限り、一將功成りて萬骨空しく枯れ、一二の秀才國費により て幸に個人的「出世」を爲すと雖も、一般國民は長く其の教養低くして常に何等人間としての自信を有することなく、職業問題の如き終に到底其の解決を見るの日がないであらう。

嘗て教育調査會の際、故菊地大麓氏の發案によつて人格完成を主たる目標とする學藝大學案が提唱されたとき、出世主義教育思想に溺れて居た當時の人々は笑つて終に之を受け容れなかつた。乍併今にして想へば、一般社會の出世熱尙甚だ盛なりし當時に於て既に斯くの如き發案が氏に依つて爲されたことは時勢を洞察するの慧眼識に驚くべきものありと言はねばならない。私は今日社會教育の必要が熱心に唱へられつゝある現狀に鑑み、文政の當局者が一日も速かにかの學藝大學案の中に示されて居たやうな教育思想の價値を悟ると同時に、一には社會教育を盛にして一般國民の教養を充分ならしめ、二には又他方學校教育に就いても其の根本精神を太々的に改革して徒らに僅少なる人々の個人的出世

を計るが爲め無用の國費を浪費するが如き制度を根本的に一掃せんことを希望して已まないものである。勿論私は、國家の爲め眞に必要なる人々を國費によつて養成する制度のすべてを排斥せんと欲するのではない。乍併、かくの如き制度が個々の國民の個人的出世を目標として設けられて居る限り、國費により全國民の負擔によつて之を維持すべき理由は少しも存在しないのである。

今日國家教育のすべては只管出世熱成功熱に犯されて全然誤つた途を辿りつゝある。小學教育は中學入學の手段として、中學教育は高等諸學校への入學手段として、又高等諸學校の教育は大學入學の方便として、而して更に大學教育は就學の手段出世の方便として、廣く一般に考へられつゝある。人を作るが爲めの教育にあらずして、すべては唯手段である。かくの如くにして何所に眞の教育があり、何所に眞の人間が生まれ又國民が生まれるであらうか？

勿論罪は獨り教育制度そのものにのみ存するのではない。同時に——否更に一層——改革を要すべきは父兄の教育思想である。私は、一般父兄はもとより子弟自らに於ても、宜しく現在の就職難に鑑みて一日も速かに成功主義教育の迷夢から目醒めんことを、諸君自らの爲め又國家將來の爲めに心より切望して已まないものである。

（本文は先日東京放送局の依賴によつて放送した講演の筆記に多少の筆を加へたものである）

労働組合法案を難ず

青野季吉

一

労働組合法を政府が制定するといふことは、早い頃からの噂であつた。公然隠然にこれを聲明した内閣も、一つや二つではなかつたやうに記憶してゐる。しかしいつも噂だけで終つた。ところが憲政會内閣は、それを重大政策の一つとして標榜してゐるほどで、いよいよ本氣でやり出してゐる。

いつたい労働組合といふ組織は、國家の權力とは無關係に、自然な理由によりて、それ自身の生長の法則にしたがつて、國家内に發生した一つの社會的組織である。その意味では謂ゆる『國家内の一國家』である。さういふ發生の歴史を持つだけに、労働組合が社會的に持つ意義も、國家が持つ意義とは違つたものであるのは言ふを待たない。であるから國家權力が、労働組合にたいして、何等の理由をもつてするにしても、或は補導、或は拘束を加ふ可きものでないと、私は考へてゐる。モシ労働組合の行動において反社會的要素があれば、それは組合の自律的統制になつて、自ら解消す可きもので、他の權力組織からそれを強いらる可きではない。しかも組合にこの自律的統制の厳として存在してゐることは、これまでの組合の發達の歴史がよく示してゐる。モシこれが全然か又は極く僅かしか無かつたならば、直接間接の障害と戰ひながら、組合が今日の如く、國家權力が默して居れぬまでに生長發達はする筈はないのである。

そんな理由で元來が私は、組合對組合の關係を規定調整するため、組合の協議によつて或る基準以外に、政府によつて裁定される法の不必要論者なのである。が然しながら國家權力によつて、否でも法が設けられるとすれば、せめても組合の自然生長の法則を害さないやうなものであつて欲しいと願つてゐたの

であつた。政府によつて本統に組合の『健全な發達』が促進されやうなどとは、少くとも甞に法安維持が制定され、勞働爭議調停法案が工夫されたことを記憶してゐる者は、何人も予期しないかことだらである。

その意味において、昨年八月に社會局が發表した同局の最後の勞働組合法案は、よほどの點まで滿足してよいものであつた。とにかく今日まで自然生長的に發生した組合が認められ、その生長の法則が認められてゐた。この法案は官僚の手に成つたものには相違ないが比較的資本家の直接の影響が加へられず、組合の社會的必然性の理解の下に成つたものであつた。これならば我慢が出來るといふのが、一般の勞働組合の意嚮でもあつたし、私などもさう考へた一人であつた。

ところでそれが行政調査會にまわつて、『修正』せられ、更に閣議によつて最後の斧鉞が加へられやうとしてゐる。その段階的に進んで行く途中で、その法案から失はれるものは實に私が先に指摘した『組合の自然生長の法則を害さぬやうな』點であり、それに加へられるものは國家權力の強制の高度と、資本家の利益の反映の濃厚とである。かくして法案はその途絕において變質してしまつて、いまや『勞働組合の發達のための法案』でなく、『勞働組合の發達を阻止しやうとする法案』と化してしまつたのである。

その事實は後でその中の二三重要な點を指摘するであらう行政調査會の案に、最も決定的に現はれてゐる。しかもこの案こそ最後的の政府の案とも言つてよいのである。

いまこそ日本の勞働組合運動における一大危機であるといふ叫びが、組合の内部からも識者の間にも起つてゐる。まことに日本の勞働階級——勞働組合運動が、それ自身の生長の法則によつて、發展をつゞけることが出來るか、それとも國家權力の強制によつて、その法則を亂され、階級としての成熟が妨げられるか、いまこそその分れ目である。

二

勞働組合法案の一一の項目に亘つて、勞働階級の苦痛とするところは、旣に組合側からも表明されて居り、識者の間にも定說に近いものが出來上つてゐる。いまそれを要約して見ると次の通りである。

(一) 同法案が職業別組合及び產業別組合を本體として、合同組合及び聯合組合を放棄するといふのは、明らかに組合の發達をその幼芽において摘み取らうとするものである。

(二) 勞働組合を法人として取扱はうとする同法案は、煩瑣な

る法的手續を組合に强いて、組合の生長を害し、且つ組合にたいして法人としての責任を課して、組合の實質的勢力を左右しやうとするものである。

(三) 組合員たるの故をもつて資本家が雇傭を拒絶するか又は解雇することを禁示しながら、資本家がそれを犯した場合、何等の實質的懲罰を規定してない同法案に、勞働者の團結權保護、組合加入權保護を標榜しながら、實質に於てそれを裏切つてゐるものである。

(四) 組合の監督、解散までも國家權力に與へてゐる同法案は、組合の活動を拘束し常に威嚇をもつて組合に臨むものである。

(五) 官吏、軍人、軍屬、農業、漁業の勞働者は勞働者の範圍に非らずとした同法案は、組合員の範圍の自由裁定を政府に許すものであつて、組合の發達を阻止することを直接の目的とするものである。

勞働組合法案の末節にいたつては、まだいろんな不滿があるであらうが、勞働階級の最も苦痛とするところ、私が嚢に述べた『組合の自然生成の法則』を攪亂するところが、主として右の諸點にあることは改めて言明するまでもなく明かな事である。いまその一二の苦痛について、簡單に理由を述べておく。

我國で最も有力とされて居り、政府も既に實際の場合に於いて同樣に扱つてゐる勞働總同盟にしても、或はまた勞働組合評議會にしても、いづれも各種職業や産業の合同態又は聯合態組合である。この形態の組合は實に、職業別組合、産業的組合の母體であつて、前者の發展なくしては、後者の文化はあり得ない。しかも日本の組合運動はいまだこの形態の組合を極力發展さす可き段階にあることは、何人も承認するところであらう。この種の組合を放置して、直接間接の危險脅迫にさらして顧みぬといふのは、實に不合理である。これでは全然、組合發達の法則を無視したものである。

勞働組合が民法上の法人と異ることは、單なる常識でも分ることである。既にイギリスの組合法なども、組合を法人として取扱つてゐない。これを無視して强いて法人として取扱はうと言ふのであるが、それはただ組合に對する外的拘束を濃厚にするのみで、現實の場合司法官によつて、それがいかに解釋されるかは危險に堪えぬことである。

團結權の保護は組合法中の礎石であり、せめてもこれが十分であれば、組合法の社會的意義は幾分認めてよいわけであるが、團結權を無視した資本家に課するに何等實體的な懲罰をもつてしないと言ふことが、その表面上の保護を無効ならしめる

に十分であることは、誰が見たつて明白である。資本家が道德的拘束、社會的制裁によつてよく左右し得られるものであれば、そもそも法によつて資本家對勞働者の關係を規定する必要はないのである。法は道德的制裁の無効性から出發することは言ふまでもない。もしこの法案が法となり、資本家がそれを惡用しようとすれば、彼等が組合員を自由自在に處理し得ることは、大した思考をめぐらさずして明らかである。この法案は勞働者の團結權を保護すると言ひ乍ら、實際は團結權を資本家の手に渡すものであると言はれても仕方がないと思ふ。

幾度びも言ふ如く、勞働組合は勞働階級の必要に應じて、自然的に生長した組織である。故にその行動の内容は階級の必要によつて發展す可き約束を、前初から持つてゐる。しかもその階級の必要は、階級對階級の關係によつて注意される。いま勞働階級の監督權、解散權が國家權力によつて掌握されるとすればどうであるか？組合はあらかじめその發展を局限されたことになる。これは組合にどつて最大苦痛である。組合の社會的機能が幾分でも認めるならば、組合の發展を他から抑壓する如き規定を最初から設く可きでは斷じてない。

勞働組合は勞働者の自發的意志によつて組織されるもので、その加入不加入が假りにも他から强制さる可きものではない。もしそれが强制されてよいものであれば、勞働組合の意義は全然失はれてしまふ。勞働者の自覺に基く自發的組織、それであればこそ組合が社會内の一組織として、社會肝要な機能が果されるのである。それが官吏にせよ、軍隊にせよ、農漁業の勞働者にせよ、自ら勞働者と自覺し、共通の利益と共通の要求によつて組合に結付かんと意志すれば、組合員たる要件は滿たされたと言はなくてはならぬ。それを國家權力によつて勞働者に非らずと規定することは、全然意味を爲さない。組合員たらんと意志する者を强制的に排外して、よく『組合の健全な發達』な誘導し得るだらうか。

勞働者の從事する職業の種類によつて、或は勞働者と認められ、或は非勞働者と認められるとは、不合理も甚だしい。しかも今日經濟的必然にしたがつて、工業勞働者と農、漁勞働者との區別が刻々に消滅してゐることは、何人も認めずには居れまい。實に今日職業の種類の如きは、一個の偶然に過ぎなくなつてゐる。その偶然によつて勞働者が團結を左右されねばならぬと言ふのは、何と言ふ不合理であらう。

三

いま私は手短かに勞働組合法案中の難點を指摘したが、それ

りの難點を産み出すにいたつた原則上の誤謬、法案作製者——政府——の觀念上の迷妄を闡明しておかねばならぬ。

第一、自然的に發生し、それ自身の生長の法則にしたがつて發展して來た社會的組織を、法と權力の作用によつて、何等かの方向に導かう、導き得ると思ふのが、原則上の一つの誤謬である。これは實に舊い法理思想に囚はれた觀念を基礎としたものである。

第二、國家を社會的な一個の指導誘掖の機關と考へ、國家の導く方向は善なりと觀念することが、一切の誤謬の基礎をなす原則上の誤りである。組合の監督權を規定し、解散權を規定する等のことが、何等の疑問もなく行はれるといふことは舊い國權思想がいかに盲目的に信奉されてゐるかを示すものである。

第三、外國の既成の組合運動において妥當とされる法制をそのまゝ採つて來れば、日本の事情にも當てはめて、大して間違ひがないとする模倣性がまた拔く可からざる基礎的の誤謬である。たとへば勞働組合運動の歴史が古くて、したがつて組合の發達が十分な域に達し、合同態組合、聯合態組合の段階を自然的に通過し、正に産業的に組織される階段に入つてゐる國の勞働法制を、そのまゝ無批判にとつて、日本の事情に適用し得るとするが如きは、全然その模倣性に基くものである。日本の今日の勞働組合運動の段階に少しでも理解を持つ者であれば、たとへばイギリスのそれと同一乃至は同一に近く認識することの出來る筈はない。それの出來る者は勞働組合法案の作製者——政府——のみと云つてもよいであらう。

第四、勞働階級對資本家の經濟關係が、協調的方法によつて解決し得るものとする觀念、即ち協調主義の原則が誤謬の一つの泉源である。勞働階級と資本家階級との關係が、協調主義によつて解決されるものであれば、恐らくは國家權力の干渉を待たないで、勞働組合の自律的精神をよくその協調主義によつて、問題を解決して行つたであらう。といふのは本來、勞働階級ほど、平和主義、妥協主義に傾斜し易い階級はないからである。資本家階級が勞働階級のこの保守的傾向を利用して、いかに自階級の利益を計つてゐるかは幾多の實例が示す通りである。しかしそれあるに拘らず、勞働階級と資本家階級の置かれてある客觀的關係は決して兩かく妥協的なものでもなければ、協調的なものでもない。事情の發展と共にそれはますます鮮明の度を加へて來る。そこで協調主義による階級並存の觀念は、結局勞働階級にたいする一方的壓迫にしか結果しない。この度の勞働組合法案が、いかにこの觀念によつて導かれて、その結果に到達してゐるかは一見容易に理解し得られるところである。

政府が、勞働組合の發達にたいして、眞に補助的な役目を演じやうと欲し、その社會的機能を發揮させやうと欲するなら

ば先づもつてこれらの原則的な謬誤を放棄しなければならぬ。そして労働組合をしてそれ自身の發展の法則にしたがつて、それ自身の軌道の上を走らせるやうに努めねばならぬ。

四

最後に労働階級にとつて最大の苦痛であり、階級成熟の上に重大な關係を持つてゐることは、この度の労働組合法案が法律となつた場合、労働階級の間に生ず可き分裂の傾向である。これはこの法案が全體として労働階級の間に作用する結果であつて、――必ずや近き將來に現實となつて現はれ、日本の労働階級はそのため多大の苦痛を經驗するに違ひない。

労働組合法案に明らかに、労働階級の間に政權によつて保護される部分と、その保護の範圍内に「放置」しておく部分とを規定してゐる。即ち政府が認めて、その『資格』ありとする部分には、法的擁護を與へるのであるが、その『資格』なきもの即ち自然的な形態をとつて自然的な要素によつて結合されたものには、法的保護を差控へるのである。法案中のこの準備は、更に政府の組合にたいする監督權、解散權によつて、最後の、決定的な仕上げが施こされてゐる。

其結果として労働階級の間に、團結權の盾の下に保護される部分と、團結權の埒外におかれ諸種の直接關係の壓迫、場合によつては團結權を否認される部分との分裂が來る事は明らかである。此分裂こそは、資本家階級が組合法に期待する唯一の積極的效果であり労働階級にとつて最大の損失でなければならぬ。

資本家階級とその代辯者に過ぎない政府とが、労働階級の一定の成熟の階級において、労働階級を二分してその一を資本家階級の労働執行人となすことは、西歐の先進資本主義國に於て、既に早くから行はれてゐるところであつて、それが労働階級の解放運動をいかに抑止し、その結果、階級闘争をいかに激化してゐるかは、周知の事實である。しかもこの資本家戰術は、資本主義が帝國主義の段階に入つて、國權が自由主義原則を離れて、露骨に資本家階級の獨裁機關たる實體を現はして來るにしたがつて、ますます有力に使用されるものである。西歐においては既に十九世紀末に當時最も資本主義の進んでゐたイギリスに於てこの戰術が現はれ、歐洲戰前戰後には正に西歐各國の先進資本主義國が競つてその戰術を採用して來たのである。そしてその戰術によつてのみ、辛じてその階級的地位の保證を得てゐるのである。

然るに今や日本の資本家階級と政府とは、労働組合法の名によつて、組合保護の名目の下に、この戰術を適用して、所期の效果をおさめやうと努めてゐるのである。既に治安維持法によつて、その頭部を奪はれ、労働争議調停法によつて、その四肢を縛された日本の労働階級は、いまや労働組合法の制定によつて、胴體を真二つに切斷されやうとしてゐるのである。労働階級が激烈な反抗の運動を起し、識者が労働組合運動の一大危機を叫ぶのはまた故あると言はなければならぬ。(一九二六、一一、七)

南京蟲

齋藤茂吉

　結婚して濱口に行つてゐた妹が懐姙したので、子を生みに東京へ歸つて來た。それは二月の事であつたが、五月になると丈夫な子が生れた。ところが暫くすると家に南京蟲がわいて、女中などはそれに螫れ紅く腫れたところに大小種々の水泡まで得てひどく驚き恐れたものである。私は肝癪を起し、ひどく妹を罵詈したりした。けれども妹も素直にはそれに服從してゐなかつた。『それはお兄樣が船からお持になつたのだかも知れないわ』などとも云つた。實際その掛念もあつたが、何むき私は、これは實に困つたことになつたと思つた。嘗てアルプス山系が延びて來てまさに盡きようとしてゐる所の温泉村を歩いてゐて、とある店でかういふ古びた繪を見たことがある。一人の老爺があの山鳥の尾の羽の著いた帽をかぶり、半ずぼんに縫取のしてある胸當を著てギタを彈じてゐる。その老爺の前では家がどんどん燃えてゐる。炎は不器用な手附で紅く空にのぼる所を畫いてある。老爺はギタを彈じながら訛の多い詞でこんなことを歌ふ。南京じらみの畜生め。これでもいかぬか、これでもいかなきや勝手にしあがれ。さういふ繪も實は偶然にして出來たものでないことを私は好く知つてゐる。

　そこで私は實に困つた事になつたと思つたから、退治の方法を毎日やつた。實は何でもやつたと謂つて好い。けれども夜になると何處からか出て來て私共を襲つた。そのうちにいつか梅雨もあがり八月になり九月になり十月になり十一月になつた。私はいつのまにか南京蟲の事を考へなくなつた。これはいつのまにか南京蟲が出なくなつてゐたからである。調べて見ると九月ごろから誰一人螫されたものはゐない。或時は私の國語辭典の間に大きな奴がつぶれて死んでゐたりした。

　私はやうやく蚊帳をとりはらつた床の上に居り、一時あんなに繁殖する勢を示し、今は一つも出なくなつた南京蟲のことを思つて、獨逸語の gedeihen といふ語を聯想した。少し悟りめくが、宗教の渡來・思想の傳播などにしてもさうだ。私の家はたまたま南京蟲に都合が惡かつたやうに、國土によつて gedeihen しないものが幾らもあるだらう。これには微妙な因緣があるだらう。そこで例へばゲーテのファウストあたりから旨い用例を拾はうとしたが急の間に合はない。,Der Herr der Ratten und der Mäuse, Der Fliegen, Frösche, Wanzen, Läuse…'などを見つけたに過ぎなかつた。

勞働運動と音樂

石濱知行

勞働運動の餘りな潔癖さは、その餘りな無節操さと共に排すべきものである。音樂、劇、文藝、等を見たり、携はつたりする事は有產者のやる事で、無產者のする事でないといふ考の如きはその例である。僕は外國で勞働者の集會、運動等を見聞する機會を屢々持つた。獨乙は當時戰後の悲境時代で勞働者は全く死線を超えてゐたに拘らず、彼等は時々音樂會を催したり、劇をやつたり、汚い地下室で舞踏會を開いたりして同志が共に樂しんだ。ラグビーその他のスポーツが盛な事は、共產黨の機關紙ローテフアーネやリユーマニテ等が毎日一頁を運動記事に宛てゝゐる事丈でも推察が出來る。休日には彼等は赤旗を先頭に立てて、一支部の若い男女がヴイオリンやマンドリンを彈じつつ、老いたるもの幼きものを携へて湖畔や森林に出掛け、そこで一日を消遊する。歸途は賑かな街を音樂を奏しつつ宣傳して行くといふ工合である。ここでは音樂の事丈を述べるが、勞働者の間に音樂の盛な事は驚く程だ。集會や演說會の前後にやるあの雄大なるインタナチオナーレの管絃樂と合唱はどうだ。「鬪爭」「革命」といふ言葉を口で何度繰返すも、とてもこの音樂の「革命的」なのには及ばない。又勞働祭や紀念日のプロパガンダを看よ。男女が一人置きに四列を組んで、行列の殆んど半分が樂器を携へ足を音樂に揃へて悠然と行進する。二年前の勞働祭は伯林で見た。社會黨各派がルスト・ガルテンに集つて一聲に音樂に合せて合唱し始めたら、同行の棚橋小虎君が感激のあまり二間位ある積煉瓦の上から踏みはづして落下し足を挫いた程だ。その翌年の勞働祭は佛のツールで見た。雨の中を赤旗を立てて音樂を奏しつつ行く姿は痛く僕の心を打つた。かくの如く音樂は外國では贅澤物どころでない運動には全くの必要物なのである。

南佛に居た時、或夜眠られぬまゝに、外套の襟を立てて、海岸傳にアンチーブへ行つた。寂しい街の一角から音樂の音が聞える。硝子窓から覗くと汚い洋服を着た連中が集つて管弦樂をやつてゐる。外で立聽して居たら、若い人が出て來て入れと言ふ。最後に判つたが、彼等は共產黨アルプ・マルチノ支部の者であつた。

生產者の威力をより以上に示す爲に、又ヒステリー女の變態的矯激から勞働運動を助ふ爲に、日本でも勞働運動に音樂を加味したら如何だらう。一年前農民組合の駐原君と木村君が組合に音樂部を作ると言つて勞働歌の事を聽いて歸つた。語を寄す兩君！その後あの計畫はどうなりましたか。

唐人お吉

木村　毅

私は日本史の中で特に、南蠻、紅毛、黒船の來航と、幕末とに興味を感じる。そして伊豆の下田の港は、その紅毛趣味と幕末趣味とを一緒に滿足させてくれる史蹟に富んでゐるから。何となく好きである。

昨年十一月の末、二度目に下田へ行つた時に、同地の森一君と村松春水老人とに會つた。下田には『黒船』と言ふ月刊雜誌が出てゐる。これは地方によくある文藝一遍の淺薄な同人雜誌などと違つて、文藝味も豐富だが寧ろ鄕土雜誌としてすぐれてゐる。森君はその編輯者であり、春水老はその寄稿家である。殊に約十號に渉つて連載せられた春水老の「唐人お吉」の研究考證は、資料が正確で珍らしいので、非常に興味があつた。私が特に春水老人にお目にかゝりたかつたのも、勿論唐人お吉の話をききたいためであつた。

三田村鳶魚氏に聞けば分ると思ふが、唐人お吉については明治の十年代に合卷ものが出てゐるさうである。矢田挿雲氏の『江戸から東京へ』に一寸書いてあるが、併しあゝ言つて了つては少し彼女に可哀さうだ。

彼女は人も知る通り下田藝者でハリスの妾になつた女だ。尤も彼女を日本最初の洋妾とするのは當らない。長崎ではもつと早くから和蘭人の妾になつた女がゐる筈だ。

彼女に興味のあるのはその勝氣な性格だ。斗酒を痛飲した上での傍若無人な數々の奇行だ。彼女が洋妾になつたのは奉行所の強壓と言ふよりも、イカモノ食ひを欲する變態性慾と解した方が面白い。或は又、ハリスは米國で失戀してそれ迄の生涯を聖者の如く、聖く淋しく獨身で通した人である。日本では男に捨てられた女が尼になる觀念は在つても、女に失戀した男がハリスのやうにして暮らす觀念はそれ迄に餘り無いから、お吉がそこに興味を感じて、彼の枕席に侍するのを厭はなかつたのだとすればなほ面白い。

ハリスは歸米し、世は明治になつて後は、彼女は常に痛快酒をやつて、紙幣を裂いては煙管を掃除する紙撚りとし、居能な話だが用便の後の用紙もすべて紙幣であつたさうだ。米一俵位に蒔いて與れた事もあつた。

春水老人の好意で史實としてのお吉の資料は私の手に揃つた。誰れか傳說傳話としてのお吉の知識を得さすべく、合卷を讓つてくれる人はないか。

ロシア經濟の方向

田中九一

ロシヤ政府が新經濟政策を實施し始めてから、もう滿五年にならうとしてゐる。新經濟政策の目的は言ふまでもなく、一時私的資本と妥協して生產力を恢復し、以て社會主義的經濟に進む素地をつくらうとしたのであるが、その成績は果してどうであらうか。利用せんとした私的資本のために却て壓倒せられて、木乃伊取りが木乃伊に取られるやうな羽目にはならないだらうか、といふ事は何れの立場にある者も多大の興味を以て觀てゐる所である。外國のブルジョア達は自分の願望と事實とを混同して、新經濟政策に依つてロシアは資本主義に降伏した、更に今度は新新經濟政策を採つて愈々胄を脱いでしまつた、など、大げさに吹聽してゐる。

然るに之に對して一の有力なる反證を擧げたのは、昨年發表せられたるイギリス勞働組合大會代表者の訪露報告書である。之はロシアの政治、經濟、軍事、財政、社會狀態等あらゆる方面の實地調査に基いて、ロシアのプロレタリアは革命に依つて贏ち得たる新組織を以て、緩慢ではあるが然し確實に所期の目的に向つて進みつゝある、といふ事を實證したものである。この報告書は世界に可成大きな波紋を投じた。米國の共產主義新聞はソヴイエツト制反對者の著したるこの報告書を全部轉載したし、又近頃本書のドイツ譯も表はれたやうである。他方諸國の資本家は勿論第二インターナショナルの人々も躍氣となつて本書の價値を抹殺する事に努めた。同インターナショナルの書記アドラーの如きは、自黨の機關紙に本書に對する長文の反駁を掲載したが、この反駁文が又露、（ベルリンで）・英、獨、の諸國語に飜譯せられるといふ有樣である。

所が最近又一つ資本家側にとつて厄介物が表はれた。それはゴスプラン（國家計畫委員會）の發表したる一九二五——二六年度の國民經濟豫算である。之は宛も諸國に財政豫算があるやうに、ロシアの國營諸企業全般に渡つて一ケ年間の豫算を立てたものであつて、何等宣傳的意義を含まないのは勿論である。然らばこの經濟豫算に表はれたるロシアの經濟は如何なる方向を示してゐるであらうか。之に就てはトロツキーが『社會主義に向ふか、資本主義に向ふか』といふ題の下に之を批評し、健實なる歩度を以て社會主義的經濟に向ひつゝある、と主張してゐるが、今はその詳細を紹介する餘白がないから他日を期する事とする。

古本哲學

千葉龜雄

某名士が、市内の古本屋を片つ端から廻つてあるいて、古本になつた自分の著書を片つ端から買つてあるいた。家へ歸つて、それをみな燒いて了つたと云ふ話がある。古本屋などに自著が出るのは、たまらない棄晒しだ、汚辱だと云ふのである。

本を書くやうな人ならば、この氣持ちは誰にも同情される「不如歸」がはやつた時分、古本屋を探し廻つて、一部も見つからぬと失望して居た丹念な人間が居た。流行の本などは滅多に古本に出ない。數が多く賣れたために多く古本になると云へる工合には行かぬらしい。で、古本に晒されるのは、もう、自分の文筆市場の定價が、どの邊まで下つたかを知る手助け位ゐにしきやならぬ。

ところが、この頃古本屋を廻つて見て、もつと撲たれるものがある。一人の文筆市場に占めて居られる時間が、十年前、二十年前に比べて、恐ろしく急速度なテンポを採つて來たことだ。或一人の榮える時間の短かさはどうだ。去年まで出版を待つて、爭つて新版がかはれたものが、今年は、十分の一の棄値で、古本屋の店頭に晒されて居る。それさへも、半年後には影を消して、もうそんな本や筆者の名は、場末の本屋でさへも忘られて了ふだらう我等が東京へ來た時分は、百年、四五十年前の本はさらに古本屋にあつた、今日の古本屋を占めるのは、まあ精々十年この方のものが多いだらう。

文明は一面經濟文明だ。澤山の利得を獲て、何んでも早く賣り拂つて了はねばならぬ。それと共に、文明人は刺激に中毒して居る。絶へず新しい刺激を與へねばならぬ。どつちから見ても、永遠性などを考へては得にはならない。たとへばペンを採る文章人に、どんな永遠性があらうとも、讀者はそんなものに目をくれず、新しいもの、新らしいものと追ふて行く。內容は目的でなく。一九二何年かにする。生む爲の死にしても。くの殺戮方法は、鋸引以上に慘忍だ。絞罪吏は文明。文明がいかに際物好きで、いかに殺人好きだか。彼等のこの病感性は、でなければ永遠に眠つて居るべき筈の、ツウタンカアメンの王墓を掘出したり、ポンペを發掘したりして、今度は跡方もなく殺して了はうとする。文明は便利を尊ぶ。紙と活字を作つて、印刷と運搬に自由したが、書物の破壊性と忘滅律がなほ多くなつた。どうせ永遠性が無い。旅の恥は書捨てと下らぬ印刷物も多くなる譯だ。

峠

成瀬無極

君のは四十歳の惱みだ。四十歳はナイフの刃を靭へ收めるやうに自己へ歸る時機だ。第一の總勘定をする時だ。一皮剝いて新らしい皮を着る時なのだ。——からロオド・タスビイはオスカア・ワイルドに云つてきかせた（シュテルンハイム戯曲の中で）さう云へば女性を倦厭して美しい青年に向つたのも、結局「四十歳」がさせた惡戯なのかも知れない。

何しろ四十歳が一つの嶮しい峠であることは確かだ。生理的にも色々の變化が認められる。精神上には可なりの危機だと思はれる。四十二歳にして我心微塵に碎けぬ、と抱月氏は歎つた。其當時氏は鴨涯東三本樹の頽廢した旅舍に隱れて、寂しい京洛の秋を眺めてゐた。惱まし氣な蒼白い顏をして、潤ひを帶びた眼は柔かい光を宿してゐた。私の記憶に從へば四十を越してから柳村博士は腸が千切れるやうな膽石病の發作に苦み出した。續いて眼を病み、顏面神經痛に罹り、腎臟病で全く飽氣無く逝かれた。何かの會合で都ホテルの應接間に氏を見出したのが最後となつた。病後の氏はショパンのノクテュルンの旋律を手拍子で說明してゐた。東上して洗足の池のほとりで靜養したいといふやうな事を話された。それから間も無く訃報が傳へられたのである。洋行に先き立つて上野精養軒で開かれた送別會では夏目さんが立つて、歐羅巴から雪隱を土産に持つて歸つた人の話をして皆を笑はせた。當夜を記念する爲めに提議せられた新らしい會に鷗外さんは「靑楊會」と命名した。「柳村」と會場の名とに因んだのである。送つた人も送られた人も今は亡い。

有島氏の死をハイデルベルグで傳聞した私はどうしてもそれを信ずることが出來なかつた。鋭い理知と強い道義心とを持ちながら、一面に飽迄潔癖で熱情的な氏が乾坤一擲の擧に出ることは別に不思議とも思はれなかつたが、人妻と死んだといふことが腑に落ちかねた。氏にふさはしいやうな、氏をして最愛の小さい人達を棄てさせる力のあるやうな女性が、そんなに俄かに現はれようとは全く考へられなかつた。然し、氏の場合にも、種々の意味を含んでの「四十歳」が働いてゐたのではないか。不可能の事は可能となり、悲慘な事實となり、今、私共はまた氏の誕生日を祝ふ代りに弔はうとしてゐる。有島氏の死をしみじみと悼むひまも無く日本の大震災の飛報は異鄕に在る私達の心を完全に顚動させてしまつた。ハイデルから伯林へ歸り、日日大使館へ詰めかけて故國からの音信を待ちくらす私の眼に「厨川白村氏熱海にて行衞不明となる」といふ電報の抄錄が映つた。腸の疾患か脚の疼痛を醫すための湯治中に遭難したのであらうか。どうか無事に避難してゐて呉れるやうに。やがて熱海は鎌倉に訂正せられ、行衞不明は死體發見となつた。

四十歳で斃れた人の墳墓が幾つも眼の前に浮んで來る。去年は更にその二つを加へた。一人は肝臟の、一人は頸部の癌腫で苦悶しつゝ絕命した。執着の指を一本一本もぎ離して引摺られて行つたやうに思はれる。

峠に立つて私もまた健康の衰へを感じる。空は高く谷は深い。そして海は無邊際に廣がつてゐる。せめて靜かな穩やかな心になりたい。

プロラ・トリスタンのこと

小牧近江

最近パリの友人がジユル・ピユエツクの「フロラ・トリスタン論」を送つてくれた。著者がプルードニアンで聞えてゐることは御存知の通りである。

フランスの社會運動史を繙くと、このフロラ・トリスタンといふ名によくぶつかるが、その人物の詳しい參考書のないのは困りものだつた。一昨年ジユネーヴに行つた折、牧師あがりでその方面の資料家であるエドワアル・デユフールなら知つてゐる筈だと聞いて、早速同氏を訊ねて見ると、フロラ・トリスタンに關することならピユエツク氏をさしおいてない。現に自分のもつてゐる材料も同氏が雜誌に發表した記事の持合せに過ぎないといふことだつた。

そこでパリに出た僕は當の御本尊のピユエツクを紹介してもらつたが、折惡しく會へなかつた。何んでもその時の話で同氏は纏つたフロラ・トリスタン傳を脱稿して出版する許りにはなつてゐるが、引受けてくれる本屋がなくて弱つてゐるといふことだつた。そんなものかなと僕は至極殘念に思つて歸つたら、昨年出版の運びにいたつたと聞いた。こん度友人が送つてくれたのがそれであるから嬉しかつた。

シヤルル・アンドレエル氏によると、フロラ・トリスタンは若くて死んだせいか(一八〇七—一八四五年)インターナショナル史上に先驅者として重大な役割を演じてゐるのに、あまり誰れも彼女について言及してゐないといふのである。ただ彼女についてはかつてプノア・マロンが「一八四九—五〇年代のフランス勞働組合聯合史」に於て彼女を追憶してゐるのと、彼女を知り彼女を賞讃したアルノルド・ルゲが恐らくマルクスに彼女の存在を通じただらうといふことである。「共產黨宣言」以前に佛國の「勞働者團結(リ・ユニオン・ウヴリエール)」(一八四三年)提唱したフロラ・トリスタンはプロレタリア小説の開祖でもあつた。「メフイス別名無產者(プロレテール)」なる長篇は今の時代から見ると、思想からいつても、小説道からいつても隨分とあらのあるものであるかも知れないが、同じ女流作家でもジヨルジユ・サンドなどよりは遙かに徹底してゐることが事實らしい。梗概しか讀んでないが。

フロラ・トリスタンは當時の若い女だけにコンスタン　タン師との戀愛事件や、その他かなりの數奇傳中の人らしいが、それは別の話。とにかく今までは殆んど無名だつた彼女がこの頃になつてやつと思想史上及び文學史上に明らさまにされたことは何んといつても痛快事といふべきだ。

董源の畫

瀧井孝作

東京の竹添履信さんのこの頃手に入れた、支那の董源のかいたといはれる墨畫を、志賀武者小路九里さんらと共に見た。これは箱はなく軸はとれた粗末な表装の、中の畫は巾四尺餘丈け六尺あまりの大きな掛物であつた。この古畫は甚だしく損じてゐて横折れの筋はあり全體に黒くて一と目にはよく讀めなかつた。けれど見てをると黒く古びた畫面は段々に頭にはいつて分つてきた。大層な力作だが、よくある樓閣山水のやうに固い感じはせぬ。畫の裾は横長の洲に蘆荻はならんで生ゑ江の水は流れ、畫の腹部には大木の松の杜や莊家などのあるあたりはこくめいに描かれてそばに近寄ると莊家の內と樹下に二三人の人物は淡彩を施されて小さく一寸位にかいてあり、それは緊つた筆で人物の心のうごきまで此方にうけとれる位である。後の樹の間には鳥曲に纜つた船の檣は交り、また横手より石の橋は伸びて懸つて居る。畫の胸部は一舟をも泛べぬ廣い水。またその上の方は對岸の景色になり丘陵の起伏とそのかげの都邑の民家と煙つたやうな樹木と楊柳とこの柳の塊りは滋味湧くが如き潑墨でもつて連なり、それから畫の頭はずつと長い〳〵横線を幾條も暈みかさねて果てのない平野になつて消えて居る。この畫の對岸の景色から上の部分は希有なもので實に心ゆく歎か味の筆である。畫の右肩の上に朱印が一つあるきり他には印も落款もないのだつた。そして董元畫天下第一と董其昌の字は横額のやうにこの畫の頭にくつゝいてゐた。「これは見るのに目さはり」と誰か曰つたら、履信さんは「董其昌の楷書は他にこれほどの出來榮の字はない相だ」と曰つた。履信さんはまた「內藤湖南氏はこの畫は世界十名畫の一つだらうといはれた」と曰つた。長尾雨山氏藏の倪雲林の斷橋臥柳圖は一寸これと似た構圖だつたがそれは董源のこれに倣つたのかと思はれた。南唐の董源は雲林などの畫の先祖といはれるだけに悠々と大きい。倪雲林が短篇小說なら董源のこれは長編小說みたやうだと思はれた。支那の名高い藏幅家の所有の中これと王維の畫とはきこゑた二幅だつた由だがその藏幅家が死んで二つは日本に渡り、履信さんはこれの方を好いて二萬圓程で讓受けたと曰つた。この掛物の破損した横折れは表具仕直せば目立たなくなり畫も見易くなるとのことだつた。尙この畫のもとの持主の支那人の名は自分は忘れ、志賀さんも武者小路さんも覺えてないのでこゝにははぶく。

「愛と死との戯れ」を見て

長與善郎

ロマン・ローランの「愛と死との戯れ」の上演を築地小劇場で觀た。

作について有り體に感想を云ふと、一方に於ては豫期通りであり、他方に於てはいさゝか失望した。

まづ豫期通りであつたと云ふのは、此作者がもう果して以前の如き簡單なヒロイズムを卒業してゐると云ふ事である。此作を見れば彼がよく物の「解つた人」だと云ふ事が分り、その心境が「爭ひの上にあれ」などと云ふ小論文を書いた時代よりずつと深くなつて來た事が分る。作中に人生觀や思想の挿み方はやゝ亂暴と思へたが、その人生觀が以前よりは大分落ちついて前ばかり見てゐた血走つた眼が、じつと靜かに後ろに向くやうになつた處がある。人生と云ふものは無闇にいろんな言葉や理屈でやかましく論じ立てるやうな複雜な人工感念ではなく只眼の前にある單純な草?である。之を摘み取るには唯腰を屈めさへすればいゝと云ふ女主人公の白や簡單な樂天的進化主義の革命家に對してそんな進化を自分はもう信じなくなつたと云ふ議員であるその良人の言葉や、あらゆる人物に對する同情の寄せ方、人間としての單純な生きんとする意志に對する根本的な同情なぞにそれが現はれてゐる。その點は期待を裏切られず、大いに氣持ちよく眺めた。又そこには別にコスモポリタンとして、どうかすると世界人道の大黒柱を氣取つたやうに見られ相な、一種の悲壯な芝居氣（無論彼にそんな俗氣があつてやるのだとは決して思はないが一寸そんな感じを與へる）臭味も出てはゐなかつた。が、同時にそれは餘りにそこ迄のもの、どこ迄の程度のものと云ふレベルがはつきりしすぎてゐて、それ以上に何處となく閃めいてゐる一種の「え體の知れなさ」不可能なサムシングがない。謎がない。そこに一種の――レベルは高いにしろ――常識感がある。議員である良人が歸つてくるあたりからよく書けてゐて引きこまれ乍ら見たが、どうもそのえ體の知れぬ。割つても割りきれぬ或る底の知れない何かゞないと作はすごい恐ろしいものになつては來ない。どうもわりに普通の頭のいゝ、善良で眞劍で、まつすぐな努力家の作と云ふ感じ以上に逼迫して來ない。そんな點で自分は決してローランを尊敬する事を吝むのではないが、今でも既に武者小路のものなぞの方が遙かにねばり強さがあり、深みもあり、複雜な味を持ち、謎の含蓄を持つてゐる少くとも眞の意味で新しく、進んだものであると思つた。自分は公平に見て敢へて之を安神して斷言するものである。

獨立人

武者小路實篤

自分はすべての人が獨立人になれる時が一番いゝ時代ではないかと考へてゐる。すべての人が獨立人になれる時始めてこの世から不合理なことがなくなる時と思つてゐる。

獨立人同志がお互に尊敬しあい、愛しあいそして助けあふ事實は實に美しい。他人に強いられてやむを得ずする行爲は、獨立人の行爲とは云へない。勿論、我々はまだあまりに自由にされてゐていゝ程に達つしてゐるかどうかはわからないが、他人の獨立性を侵する行爲は是認出來ない。すべての人が獨立人として生き、そして自らすゝんで自分のなすべきことをなし、そして生活出來、そして自由をたのしめる時が一番いゝ時代だと思つてゐる

つまり義務と、自由、獨立と協力が完全に生きる時が一番すべての人が人間らしく生きられる時と思ふ。

暴力のよくないのはわかり切つてゐるが、他人を獨立人として尊敬出來ない世界には暴力が巾をきかすのはやむを得ないことだ。

他人を獨立人として尊敬することが本當に出來た時、人間を支配する力をもつてゐるものは眞理と愛と正義の他にないであらう、その他のものに獨立人は動かされないからである。

人間が人間を全部獨立人として尊敬出來る時がくるまで、他人を利用して得をしようと云ふ人、樂をしようと云ふ人はなくならない。そして他人にいやがることをさせることを恥としない人間からは罪が生れないと云ふことはむづかしい。それと同時に自分が獨立人の資格をもたないで、他人に獨立人としてあつかつてくれと云ふのも蟲がいゝ。

要するにすべての人が獨立人になれるやうな設備が出來、すべてを獨立人として尊敬して始めて萬事が圓滑にすゝむ時がくれば、萬事はよくゆく事と思ふ。

その時は不當の利益は得られないし、又暗躍することは出來ないから、そして人々の正しい要求を邪魔するわけにはゆかないから。

獨立人とは自分の眞價で生きる人であり、自分の責任は自分で償ふ人であり、自分のなすべきことは自分ですゝんでなす人であり、他人の強迫では動かない人である。たのまれれば動くがおどかされては動かない人である、もしおどかされて心にもないことをする人があれば既に獨立人ではない、又他人にそんなことをさせる人は獨立人として他人を尊敬しない、侮辱罪の第一條で罰せられるべき人である。と自分は思ふ。（二月十日）

名古屋高商教授 高島佐一郎著

第六版

改訂増補 金融經濟の諸問題

廣汎な金融經濟の論考に對する現在の私は、いはゆる膠れる全體を描かんよりも先づ眞實の斷片を寫すを選ばんとする立場に居るのであるし、また内外の貨幣金融財政の實際界が提示する時論の解決に對しては殊に一般問題よりも寧ろ顯著な特殊問題に沈潛すべきの必要を痛感して居るのである。これが刊行一年にして四版を呼ばれつつ犧羊となつた本集内容の一部を復活せしめんとした理由なのであるが、しかし、フィニックスたらしむべくば新たな生命が吹込まれて居らねばならず、依つて、舊版十四篇中の六篇を削除して新稿四篇及び新附錄四篇を收錄したのである。之によりて希くば全體として論攻の一層强き「連鎖」を作り得た事と思ふとともに、安んじて「改訂増補版」と命名して本書を復た讀書界へ送らんとする所以である。（著者）

菊判上製
六百餘頁
定價金五圓
送料金十八錢

發賣元　東京市日本橋區本銀町三（振替東京二八〇）　大阪市西區阿波堀通四（振替大阪四三）　寶文館

遺された手帳

（禁轉載）

故　有島武郎

昨年十月婦人公論の誌上に、亡兄武郎が病妻に送りし慰問の端書集を載せたる後、更らに、他の書類のうちより古き日記及び滯外中父母弟妹に送りたる繪はがき其他を見出したれば、これを編纂せんことを思ひ立ちたれども、俗事に追はれ果さざりしを、漸くその一部を淨書しこゝに、發表することゝせり。

此等の日記は、凡て西洋紙の小さき手帳に鉛筆にて走り書きせるものにて、只心覺えに認められたるものなれば、年を經て文字抹消せる箇所或は亂筆の爲め判讀し難き部分もありしを强ひて淨書したれば、欠字もあり、不明の箇所もあれど、徒らに加筆すべきにあらねば、其儘になし置きぬ。

熱心にまめ〳〵しかりしは日記のうへにも歴如たるところあり。

來月號には滯外中に送りこせし通信文を發表し得べし。

十五年正月　下六番町にて　佐藤隆三

明治卅四年

七月廿三日

午前六時十分發の汽車にて札幌を去る。此日天氣晴朗、朝來の濃霧全く霽る。

小樽より馬車に乘じ（父上、余、阿部）て發す。車の震動甚だしく、殆んど坐上に跳躍す。十時桃内に着し、少憩す。

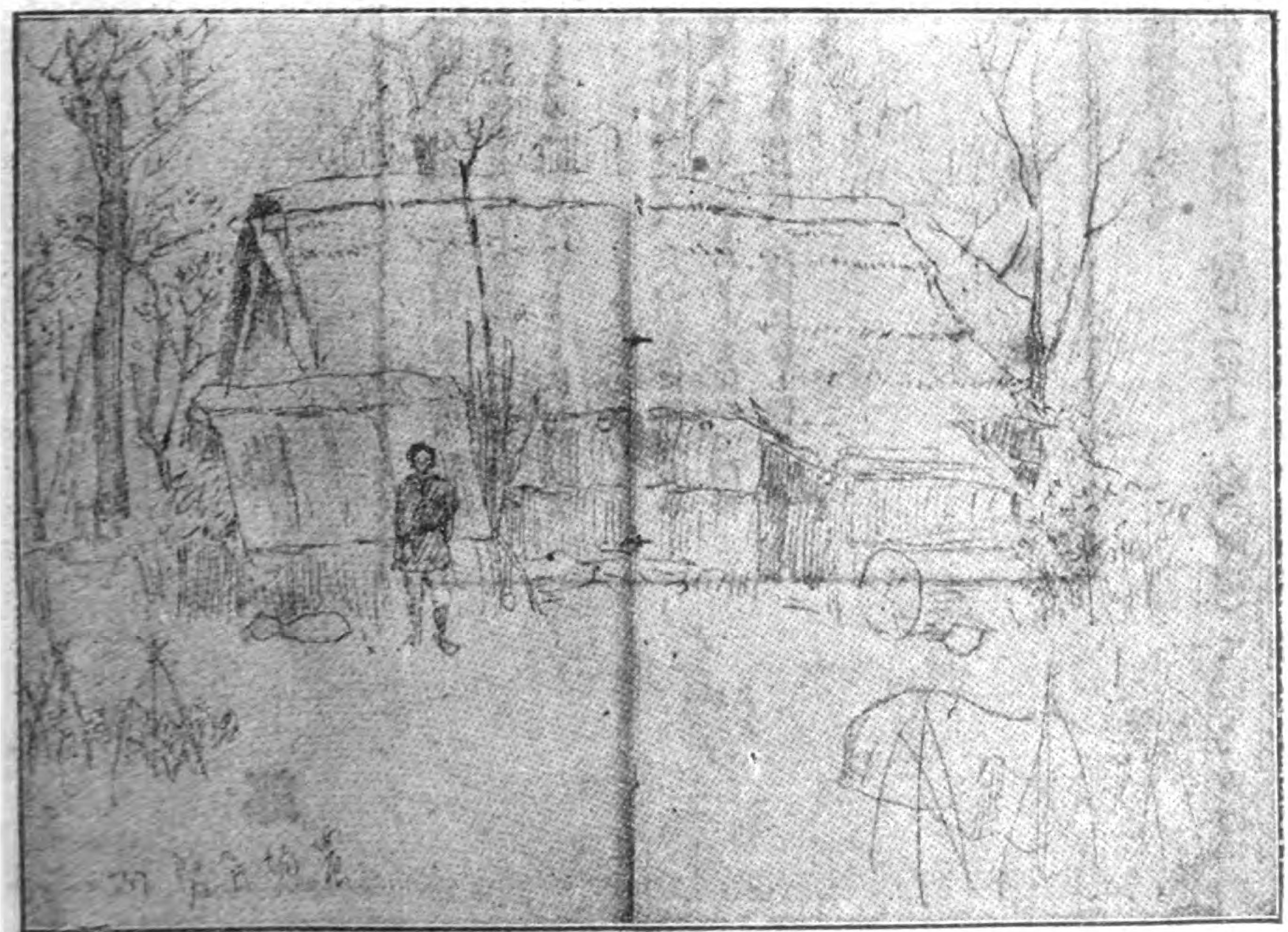
十一時十分桃内を發して十二時十五分大川町對旅館に着し中食す。

一時半出發、四時山道村（峠下）に着す。大川より五里なり。途上日中暑氣強く、車上の人皆眠る（甚だしき震動の中に）御者亦眠る。

峠下五時發七時十五分前小澤村荒井旅店に着す。峠下より四里なり。

中澤村に人家の出來しは四十年程以前なる由なれども著しく發達進歩し來りしは七八年來にして、今は戸數凡て二百七十余戸あり四年來殊に景氣よかりしが、昨年に至りて一反減退し、本年に入りてより更らに活氣を色し來れり。

此日は余に取りてつらき日なりき。余の心をひく幾多のものを札幌に殘して去らざる可からざればなり。鳴波五里霧長きが如くにして甚だ長からず。回顧すれば我の爲せし處何事ぞや、我は何事もなさゞりしも、神は我を甚だ多くを爲し給へり。我が眞生命の生れし故郷は札幌なりき。我の苦めたりしやるせなき苦痛、味ひたりし深き歡喜の是等は凡て札幌の自然と人が余に供したる處なりき。之れを思ひて感謝の涙溢れざらんや。神よ、罪多き氏卑僕にさへ、再び去るべからざる生命を附與し給へる恵みに滿てる神よ、願くは益此卑僕の弱く汚れたる心を



扶せ給ふて幸に精神を弘し震を渇して此卑僕が主に従ふを得るに然らしめ給へ。我が心、我が身、凡ては主のものなり、主我をよきに導き給ひ得べし、主よ凡てを捧げしめ給へ。

二十四日

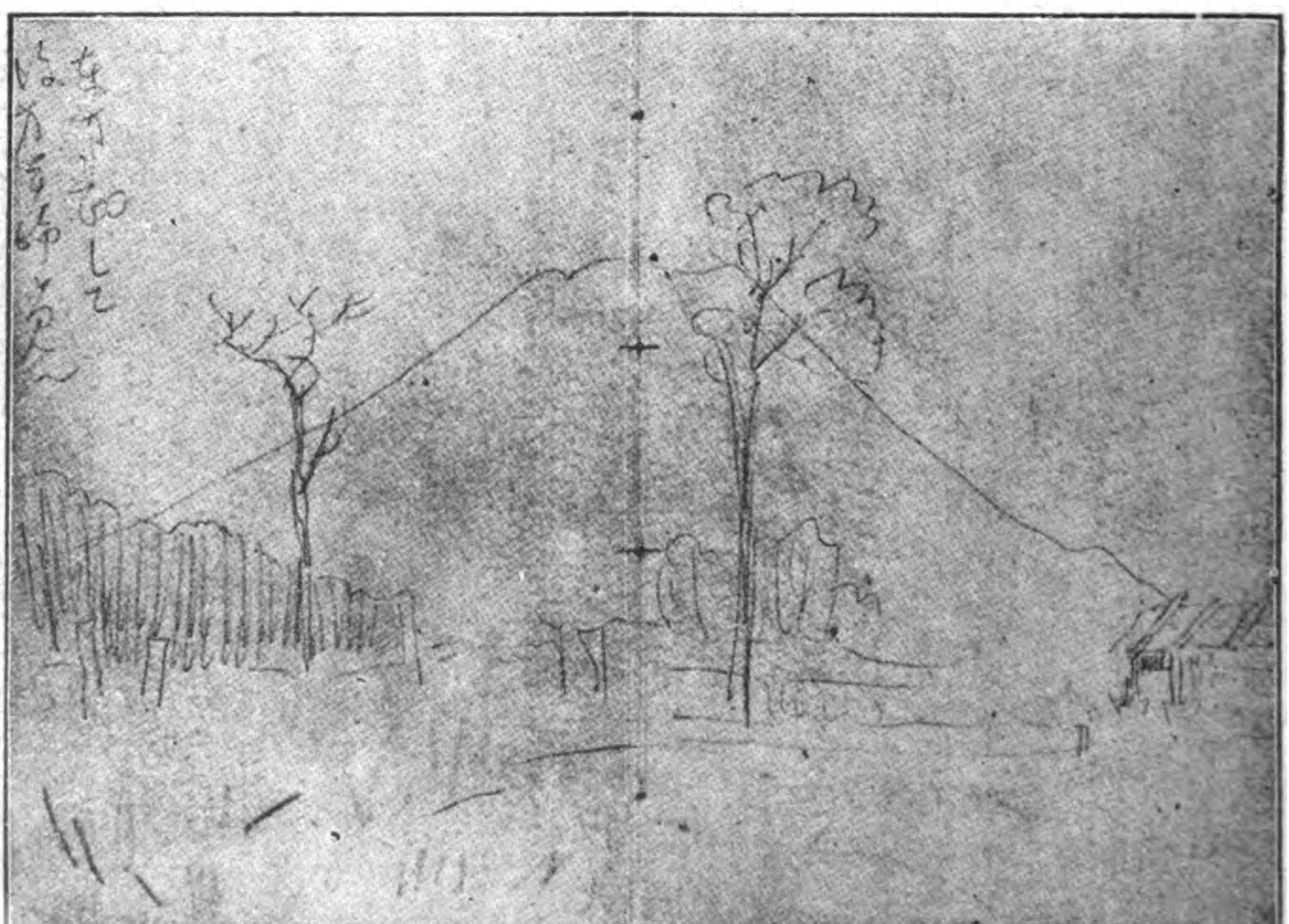
午前少し前起床、空には少しく雲ありたれども多分霽るゝなるべし。

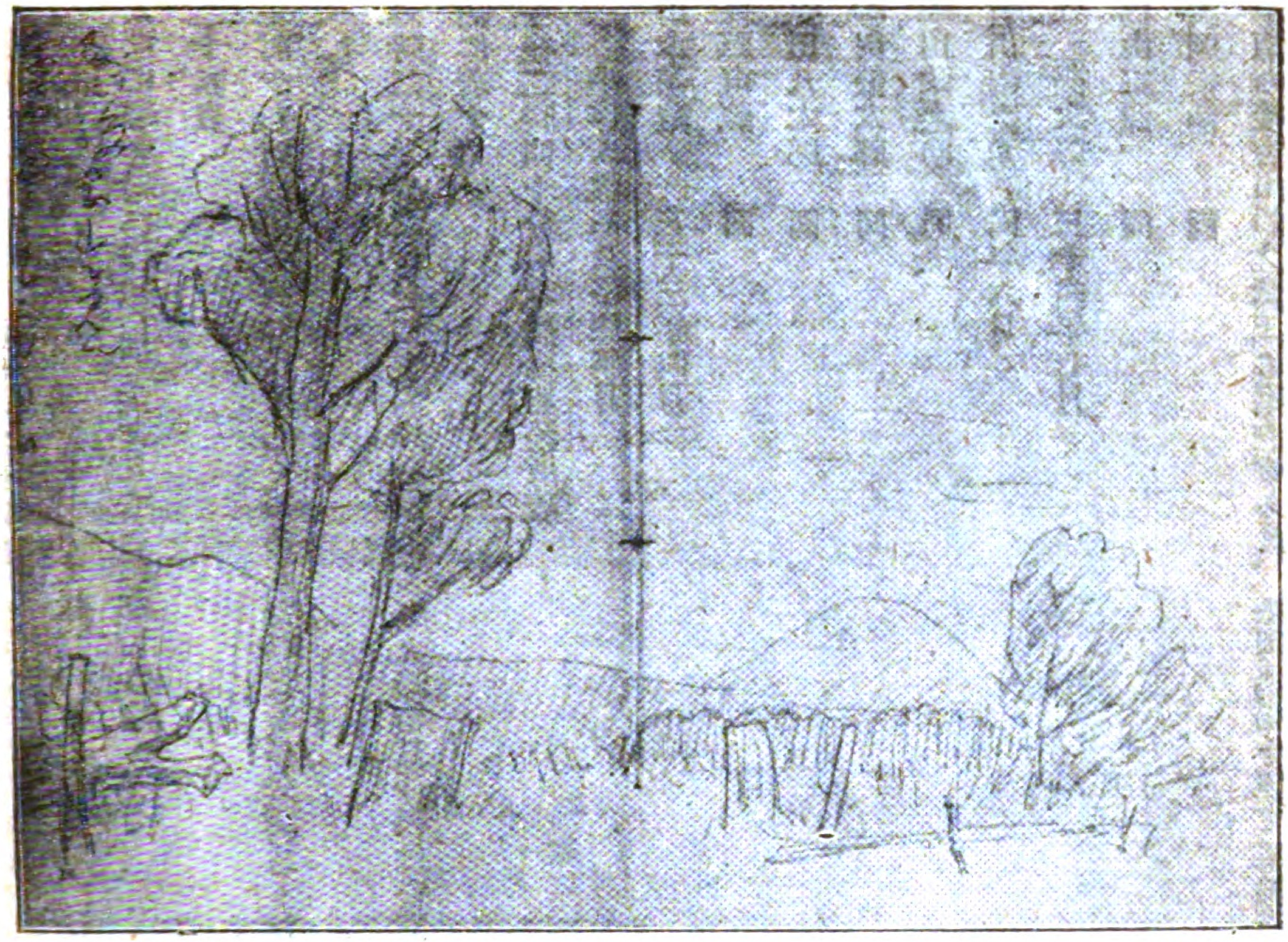
六時二十分小澤村を發す（馬を傭ふて）九時十五分倶知安日旅店に着す。

午後二時四十分山本農場事務所着

小作人姓名	及移住年月
山本甚藏	三十三年四月
佐藤由藏	同
安田八太郎	同
神田榮太郎	同
本田政之助	同
吉川銀之丞	同年六月
牧　榮次郎	三十四年七月
內山正源	同
廣岡宗助	同

少憩の後吉川銀之丞氏に案内せられ、松岡農場を經て基線道





路に出で市街線空地を通過して眞狩別川に出で、本流後志河と合流する所を遠望し、深飼農場事務所を經て歸る。夜農場の經營に付き警告注意をなして、十一時に至り就寢す、蚤多くして眠屢々破る。

夜月中天にあり、マツカリヌツプリの高峰高く雲表に聳えて夜衣を纏ひ、崇嚴高崇の景襟を正ふせしむるものありき。

七月二十五日

朝五時起床、屋を出で少溪に下りて顔を洗ひ體を拭ふに清烈なれ、膚に透りて齒の震ふを覺え快云ふべからず。事務所の前に立ちて東方を見れば、例のマツカリヌツプリ曉雲に閉され時々其頂腹を示し、朝暉其左肩を排して徐々昇り來るの狀、壯快と稱すべし。

小作反別十二三町歩

小作人山本を伴ひ諸方を見物す。

午後一時眞狩太驛亭に到り馬を僦ふて留壽都に向け發足

五時十分前留壽都驛大野方(加藤農場及牧場のある所)に著す。眞狩村郵便局のある所なり。

眞狩太を發足して近藤農場を通過して眞狩別に出で行く單獨農事經營の模樣を見て、後志山下の荒冷たる平原を出て、一望漠々たる青原の野と倒鉢の狀をなせる後志山と後方は形よく富

土に似たるマツカリヌツプリとを見て、高原の遷路を拾ふもの殆んど二里遂ひに加藤牧場の中に入り漸く山を下りて留壽都に入る、發してより五里半なり。

午後六時馬車を傭ふて留壽都に發す、里程三里半にして達し、初めて路甚だ平易なりしも行く事二里、この原を過ぐる頃より漸く凹凸を生ず。西方昆布岳の邊に日沒を見る。雄渾の致名狀すべからず。既にして羊腸たる阪路を下り再び上り又下りて午後九時十分前、湖暮れ、山黑みて月獨かすかに明き道を經て漸く湖畔三橋旅店に着す。車にバネなき爲動搖一方ならずして、三人の疲勞甚し。

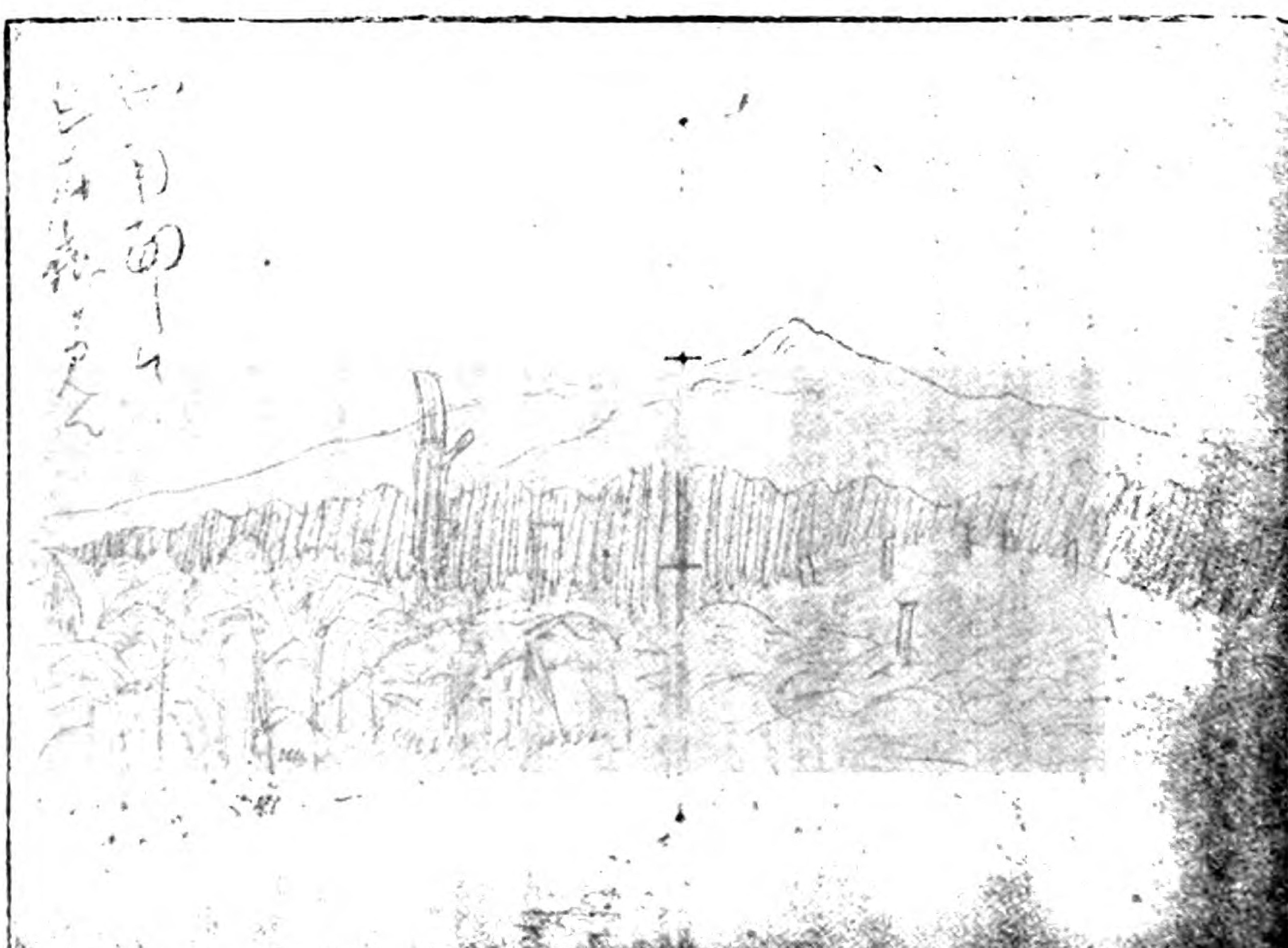
廿六日　雲多し

朝早く湖畔に嗽き、汀際を歩して無限の感興を得たり。湖中に死せる伊藤氏を追懷して情甚切。

例のバネ無しの馬車を傭ひ八時半三橋を發し孤兒院の下道を經湖畔に沿ふて行く事凡そ二里、峠を越えて山中假野の地に畑を開けるもの甚だ多きを見る。遂に虻田の所在する内浦灣を遠望する所に來り、漸く下りて普く開拓されたる畑隴の間を過ぎて旅店新井に入る、時に一時半。

朝來暑氣實に甚し。

向洞爺より虻田まで凡そ三里半と稱せらる。



新川に中食し此に再び馬車を傭ひ、海岸に連れる砂丘の後方を走らせ、有珠、長流等を經、有珠岳を望み、内浦灣に面する明媚なる風光と内地府縣の如く牧歌的に開拓せらる畑とを經て紋鼈（モンベツ）に出で阿部旅店に投ず、時恰も五時。

隣室にゆくりなくも佐藤六郎に會す。

夕食後市中を散歩す。

夜佐藤の室に佐々、芳賀の二人來る共に相談し十時頃に至れり。

夜に入りて風出で、又雨少し至る。

廿七日

朝來雨、少時にして止む。

八時十分前馬を傭ふて發す。

十時舊室蘭に着し、舟を傭ひて發す。十二時十分前室蘭に着し、⊖旅店に入る。

午後より三人椛北氏に伴はれて角力見物に到る。三時十分母上、湯地氏夫妻と共に栗山より到着せらる。

此夜九時半汽船薩摩丸に搭乘す。夜靜かにして霧深し、甲板の上に立ちて見るに海と空と共に霧中に隱れ去り、天地唯一の圓顱然として白雲の間を分けて上に昇るの思あり。後舷に立ちて瞑想時を久ふす。北海の天地に逍遙するの時も既に瞬轉の後に終らんとするなり。嗚呼慕はしき札幌の地よ、汝と相遇はんは何れの時なるべきぞ。嗚呼愛すべき札幌の人々よ。汝と相見んは何れの時なるべきぞ我は新に祈らん、是れ我が彼等に報ゆる最もよき道なり、人、人に智慧を傳へ得可しとせば神豈其嬰兒に祈禱を敎え得給はざらんや。

廿八日

昨夜汽船は午後十時室蘭を發したれども濃霧の爲めに遮られ海中に漂蕩するもの甚だ長く夜十二時頃漸く室蘭港を出で夜の明けたる時も船は尚四顧漠々たる霧中に彷徨せるに過ぎず。かくの如くして九時半頃漸く沿岸の風光を見るに至り、十二時頃函館港に着す。

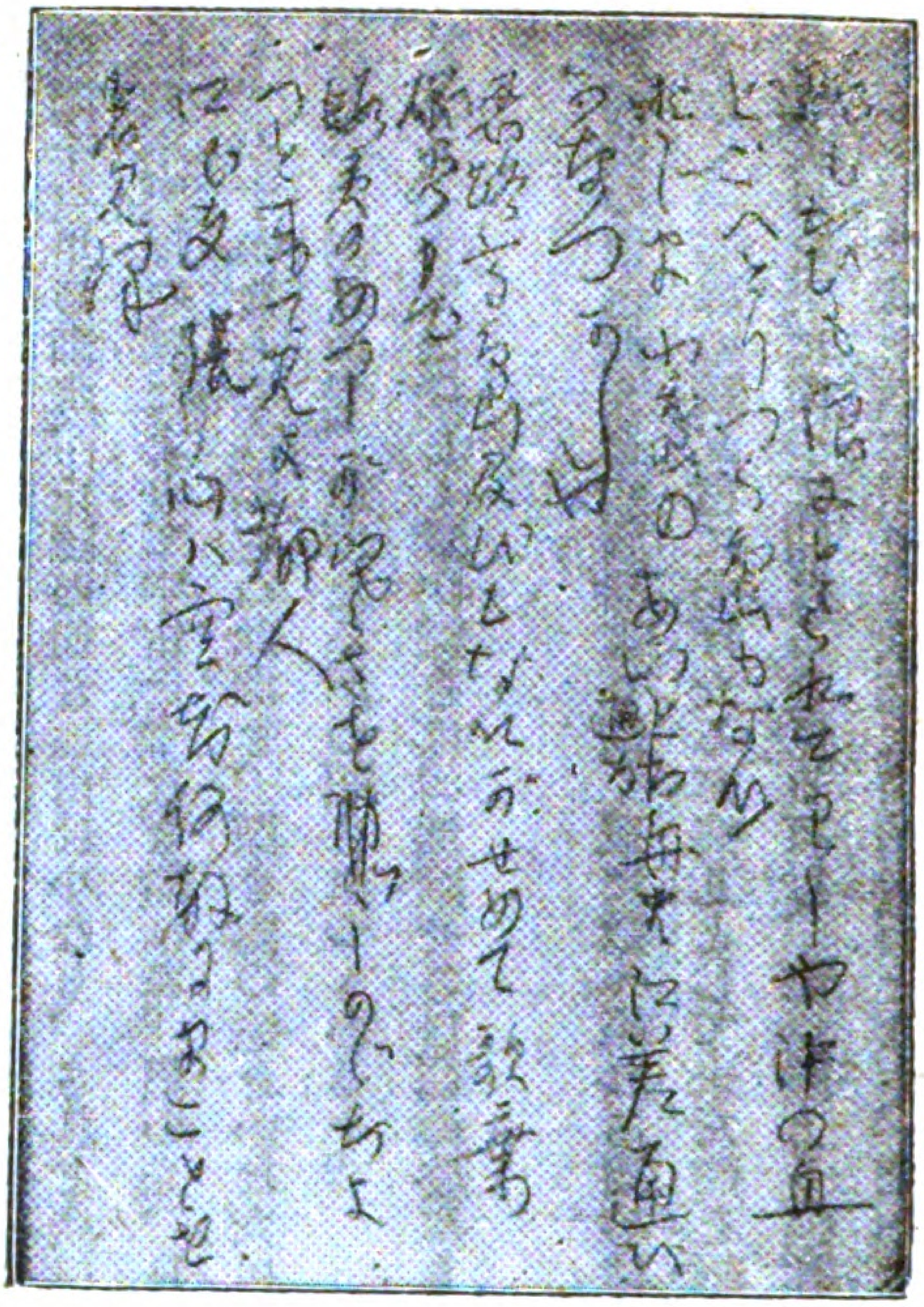
龍岡、藤井氏の兩氏郵船會社の小蒸汽船を以て迎ひに來られ、郵船會社の樓上に少憩したる後、車を連ねて公園に至り一覽の後、野地頭の鑛泉浴場に至りて馳走になる。

此夜十時汽船東海丸に乘し十二時出航す。海上多少霧ありし由なれども幸に甚だしき事なく翌朝

二十九日

六時頃無恙青森灣頭に入れり。我れ遂に北海の人にあらずなりぬ。本島の風光は依然として本島なり。我洵に彼地の風光を

追懐するの念に堪えざる哉。



午前八時に汽車に乘じて盛岡に向ふ。暑氣甚し、舊來の疲勞一時に發し、睡魔の襲ふが儘に華胥の郷に入りて、夢中に幾驛の風光を過ぐ、二時四十分頃盛岡停車場に着す。沖ありて迎ふ。共に陸奥館なる旅店に入る樓上清風あり、三時頃以前より此地に滯在しつゝありし英夫來る。此夜疲れて寢ね、夢なし。

三十日

朝、沖、英夫と共に市內を見物す。去る三十年に來れる時に比すれば、少しく活潑の氣呈し來れるが如し。殊に織物業の著しく盛大となれるを見る。城のありし跡に至る眺望甚だ佳なるに、石階悉く草の茂るにまかせぬ。城亡召山河と云へる句不思して唇頭に浮び來るなり。午食を久慈氏の家にて馳走となり、此に五時まで語り居り父上六時五十分の汽車にて歸京せらるゝに就き停車場に送る。此夜月よし、三千里外故人心！

夜遲く久慈氏の家に移り、此日より茲に厄介となる事となる。

此日夕刻心地よき驟雨あり、快哉を三呼せり。

附記

此日記はこれにて終れり、されど、洞爺湖を過ぎし日の思ひ出をかける一節あり左に。

七月廿五日夜九時余等を乘せたる荷車は惡路を跳躍しつゝ馳せて漸く洞爺湖畔の一逆流に入りぬ。余は洞爺湖に對し二つの抹殺すべからざる記憶を召す。一つは明治三十年、此地を跋涉して月明の一夜を湖畔の淸風に過せし事。一つは其時一面の識を得し孤兒院の一助手伊藤君が一昨年此湖に投して死せりと云ふ事是れなり。

夜は更けつ、余は餘りに疲れたりき。されど腦は是れ等の記

驗に動揺せられて直ちに床に入るに堪えず、遂ひに家を出でゝ湖邊に歩し到りぬ。

夜と寂寞とは今世界を主宰せり。山眠り水死して、一葉のさゝやく聲、一波の動く音だに聞えず。

濃霧は深く天地を罩め、天地をして一の中に融合せしめぬ、我に近き水は霧を通して來る。十三夜の月も爲めに埀れる銀の如くなれども、五十弓の彼方は何れも綿の如き混沌の中に隠れ去りて、我は眠れる天地が見つゝある夢の中央に立てる心地す。

周圍十三里の湖水、丘陵の如き連山は小なり、されど全能の手は此小天地を霧によりて宇宙につなぎ給ひぬ。星の光、日の色も、かすかならでは漏さぬ此深き、深き霧の遼きかなたに如何なる手の働きにて、如何なる酒の醸されつゝあるや。戦かるゝまでに厳しく意味深きは、沈默せる自然の姿ならずや。

内浦灣の山色波光を室蘭港より漸く東に數へ來れる旅客は幾干もなく一奇峰の煉瓦色に禿げたるが突兀として未だ煙を絶たさる噴火口を天に向つて開けるを見る可し、海岸線より連れる紋甃の沃野は其山麓に至りて俄然火山的岩石となり、狂へるが如く觸起して此峰を爲せるなり。旭日の映じて[illegible]銅の色を爲す時、夕照を背にて紫醉の彩を賦する時、濃霧麓を包む時、怪焔巓に騰る時、直線的にして單調なる海岸の旅程に疲れし海人、行客は此奇峰に接して沙漠に入りてオーシスに逢へるが如き心地するなり。此峰の東若くは西を繞り、花環の如く聞く連れる山を截すれば、花環の中央に如何なる美しき手の投げ棄てたる明鏡ぞ、周圍十三里の洞爺湖は四山の峯を匝して眠れるが如く横るなり。

湖心には島三つあり。倒鉢の形せるが、倒影と相合して三個の線なる菱形を爲せり。其島には數百年來安置されたる觀世音の大像ありて、そを持來れる一個の經歴は地人の質朴なる口角に神仙の如く傳説せらるゝなり。數百年の昔、圓滿無礙の女神を此に移したる一個の心強ちに罵りに値せざる可くや。

島には北海道に産出し難き竹あり、巨大なるつゝじあり。其他草木の此處に非らさるものなしとは、我等の馬を驅りし馬丁の得んとして放語せる所なりき。

水は一種淡藍の色を堪え、水晶と綠玉を交へ擢きたるが如く、烈甚なる北海の冬にさへ嘗って氷を結ばず。水の深きことは幾干なるを知らずと云ふ。嘗つて孤兒院の一助手これを測らんとして舟上より絲を垂れしに絲は恰も水に溶解し去るが如く之れを垂るゝ事幾千尺なるも絶えて底に徹する狀なかりしか



ば、慄然として膚の戰を覺え、蒼惶として糸を收めて舟を返せりとか、靈湖と稱する故なきにあらず。

余は今其北岸に立てるなり。

沈思は屢々昏睡に似たる無我を齎し來る、余今正に然かなりき。全く無意義に漣波が目前に織成す彩紋を凝視しつゝ而かも何物を凝視しつゝあるかを知らず。時限なく、永劫獨り長へなりき。

忽ちにして我が耳、先づ覺め、何物か聞ゆるなり。聲幽かにして而かも散漫、例へば夜靜なる時高丘に登りて俤かに響き來る遠き村落のさだめきを聞ける時の如し。或は聲なかりしにはあらざるか、されど又聞ゆるなり、耳を欹つる事再三、再四、物ありて漸く我が下に近き來るが如し、遂に耳に入りぬ、而して嚴かに我れに私語せり。

TO BE OR NOT TO BE, THIS IS QUESTION!

須臾にして再び私語けり。我は心中にて其語を繰り返しぬ、三たび私語けり。我又心中に其語を繰返しぬ。四たび私語けり。我初めて其意は了せり。背と腹と掌裏に冷汗の一時に迸れるを感ぜし時、其物、其聲後にあらずして我の眼初めて覺めぬ。我は依然として湖畔に立てりき。

嗚呼我れ罪の子弱き者、茲に獨天地の眠の中より覺めて淸々

して脆かりし彼れの短生涯を回想しつゝありしなり、年齒凡そ我と同じかるべし。

「時」は彼に對する我の記憶を抹殺し得ず、我れの孤兒院を訪へる際、一青年助手ありて共に語りぬ。寧ろ短小なる軀幹は質素なる綿衣を纏ひ、面淸く痩せて額高く、口角緊し眼冴え、一見忘れ難なき印象を與ふ。寡言と云はんより沈默に近く、常に何物かを思索しつゝある如き容顏は確かに其の思想の人なるを示しき。是れ彼なりしなり。

さはれ、我れ彼と多くを語る時なくして袂を分ちぬ。かくて月を閲する事若干、一夕某雜誌を窓下に繙きつゝありし時、我が注意を固く捕へし一論文ありき。カーライルとエマーソンとバイロンとを評論し、結ぶに自己の深き感慨を以てせるなりき。我は其該博なる智識と深厚なる思想と敬虔にして沈痛なる諧謔とに深き注意を拂ひぬあらず、我は學者が邊僻なる北海の洞爺湖にあるを知り、神遂に北海の好風光を空しく造り給はざりしに深き注意を拂ひぬあらず、我れ學者が曾つて一面識ある沈着なる一青年なりしに消き注意を拂ひぬ、是れ彼なりき。伊藤氏其人なりき

かくて日出でゝ入り、月缺けて圓み、我等人の子永劫の面に刻れたる悲しき時限を若干か閲し去りぬる明治三十二年の月は忘れたり、日は元よりなりき。不圖新紙の一隅に孤兒院の助手伊藤某なるもの洞爺湖に投じて死す、其因總えて知るに由なしとの記事あるを見き。余新紙を投じ茫乎として爲す所を知らざりし事分時。嗚呼彼洵に死せるか、洵に自ら殺して死せるか、理想の紫雲彼より遠かりしや、現實の汚泥彼を俗かしめしや。傷める花よ誰が折りしぞ、熄れる焔何によりてか消えけん。青春の血熱すれば即ち沸々として鐵と金とを併せ鎔すべきに、如何なれば空しくこれを舉げて靈湖の水に冷し了れる。青年の氣激すれば即ち昂々として雲霄だも凌ぎたんに、如何なれば遂に湖心底深きあたりに藏し去れる。年齒僅かに二十の前後、彼の鬢緑に、彼の唇紅に、希望の光春の若さを捨てしや。嗚呼神よ、彼を省み給はざりしや。我切に彼の死因を知らん事を希ひ、これを我等が馬車に鞭取れる若者に問ひぬ。

彼得々として語るらく、世にあらずなりし彼人は沈着、溫厚なる青年なりき。彼は漸く郷黨の尊敬を買ひ、遂に洞爺村の小學校に教鞭を執るに至れぬ。父兄は皆彼を校長として得たるを喜び、安んじて其子弟を托せり。彼は素來小兒を酷愛したれば、彼等亦よく彼に懷きぬ。さるに一生徒あり、年齒尙幼きに、人の誘ふ所となりて、放蕩度なきに至りしかば、彼漸く憂ひて、屢々密かにこれを諭せしも、遂に省る所なかりき。一日

天晴れて風靜かなりし時、彼はかの放蕩兒を合はせ四五の生徒を伴ひ、獨木舟を繰りて湖に浮びぬ。かくて小兒等の擺れて歸りを希ふまで遠く進みし時、俄然として水中に投入しぬ。銀色に驚かされたる一群の鴨の如く、兢々として僅かに湖畔に舟を還せる小兒等の村人に告げし所は唯是れのみなりき。世に小心の人も多し、されど彼の如きは異數ならむと、これ我れを滿足せしむべき答へにあらず。嗚呼愚かなりしかな、人に問ふに伊藤氏の死因をもつてせんより、土鼠に問ふて天の一角に美しく流れて消ゆる星の心を以てすべかりしなり。

さらば我れ遂ひに彼の死因を知るに由なかるべきか、石を取つて水に投ずるに、波紋廣くして影淺く、幾何か廣がり盡して再び始めの平靜に歸る。石は何水心に潜めるべきも、人再び彼の波紋を見ざるなり。彼水に投じて村民其死因を知るもの一人だになく、其名煙滅して、世は永遠に亘て地球の面に彼ありしを忘れんとするか。嗚呼冷たき石塊と溫き靈魂とは遂に同じき運命の末に走らんとするものか。

冷たき石塊、溫き靈魂遂に同じ運命の末に走らんものか。

狼へる如く心熱したる我れは遂に此秘術をあばくに由なし。

主よ、我が凡てよ、迷へる羊に直き道を敎へ給へ、みまへに跪きて我が靈痛く戰けり。

左の日記は兄が豫備見習士官として、步兵第三聯隊に勤務中、府中方面に演習に行きたる際かき綴れるものなり。

十月九日　朝雨

此日記を認めつつあるは九日の午前五時半、府中町なる（欠字）と云ふむさき蕎麥屋の二階の三尺廊下にてなり。廊下につきて六疊の室二つ、夫れに十一人と云ふ士官と見習士官が雜魚寢をしてゐて、客も女中も未だ起きぬ。廊下には釣ラムプが心を細めて置いてあつて板葺の屋根には秋雨が降りそそいで居る。吸口の狼籍した煙草盆の傍に夜具を敷て坐つて居るのである。「蚊のおやぢ」が二三匹、クスブツタ壁に長い脚を休ませて、障子に映る灯の光は紫がかつた大黄色に見える。

蚯蚓が鳴いて雨垂の音、先刻先發した騎兵の蹄音を聞いた外には靜まりかへつた曉である。

昨八日七時三十分、青山練兵場に整列した、第一大隊は先發し、第二、第三大隊は合併して第三大隊を作り旅次行軍で府中に向つた。朝晴れの美しい秋日和、我等は（二字不明）として先發し、甲州街道を西に向つて行く。厚着やら、薄着やら、黑い色が一際くすんで赤い色が殊に目だつ、梨、柿、栗は水菓子屋の店に、白く洗つて青々とした葉の大根と、赤い薩摩芋と、

白壁の長い窓とは八百屋の店に、乾物屋の乾物、呉服屋の色々の美しい布地、其の間に家並が絶えると屋根がツヤ〳〵した日に光つて柿の葉が稍色づいて居る。折々見える富士の面には心細ひ迄雪を見せて、秩父の連山は名にしおふ武藏野の涯、秋草を蒲団に寝た形。

十一時半下布田と云ふに着いて、或る旅店で中食をする。水の多い大きい梨に秋の味を掬んで、折しも來合はせた聯隊長と話などした。

府中に着いたのが二時半、大急ぎで、偵察の報告作業にかゝる。

夫れより大國魂神社で聯隊長の講話があり、又問題を二つ與へらる。

諸隊は警戒舎營と云ふことになつて、第十二中隊と第九中隊の一小隊は前哨だ。盧田、茂木と僕と三人で一々見て廻つたが、面白かつた。

道を間違へて無名寺に行つた時なぞは實に詩的だつた。

薄い灯が障子に映つて絲繰車の影が見える、訪ふと障子が開く、老媼が一人、車の前に、老僧が一人其向ひに五ッ六ッ程の小供が四人讀書して居た。話が長びく中に奥から十三四の美しい少女が物珍らしそうに出て來た。

書き忘れたが、昨日來る道に調布の里も過ぎた。機が殆んど家毎にあつて、トンバタンと音が聞へて居た。

十時頃巡察を終つて、此蕎麥屋に着いたのであつた。

九月十日（晴）

朝八時半整列と云ふので仕度をする。宿の女中は商賣柄に似ず朝寝坊で、未だ夢の中に居る。

小さな中庭に雨がサラ〳〵と降りそゝいで、青桐の葉が、一片二片落ちて來る下に、名も知れぬ秋草が線を殘して居る。

昨日露營した第十二中隊は嘸難儀なことであつたろう。信子は未だ夢でも見て居るか、千生馬は佛國で何をして居るだろうなどゝ、とりとめもないことを、それからそれと思ひ入りながら、黒い柱に倚れて庭を眺めて居た。兎角涙になりたがる僕の弱さよ。

其中に町が急に賑やかになつたので、表を見ると、宿の直前に大隊長以下が集つてゐた。兵士の頭巾を取れと聯隊長が嚴命する。

秋の雨が粛々と乗馬の背を垂れ下つて、尻のあたりから湯氣が面白い樣に立ちのぼる。慘として憫らずと云ふのか列兵の釘打の靴が礫交りの土を踏む特殊の音のみ聞える。

命令が出て、前衛と共に見學の爲め隨從する。例によつて蘆

田、茂木と一緒である。

くねつた桑園の一條道、或る時は灌木の林も通る。旅の人には一人も逢はぬ。試みに若い農夫が何かの事から家を脱して斯かる秋雨の中を他郷に訪はうとする道すがらの事を小説にして描くとして、此道のあたりを如何形容したものであらうなどと思ひながら俯首して行くと、蔵田君が、道の邊の秋草の花の哀れなさまなぞ云ひ出したので、妄想が破れて見ると、自分は戎衣を着て隊尾に侍して居ると云ふ仕合せ。玉川上水の水が黄色く量を増して眞直に流れて居るのを渡ると秋の心が身に沁みる。此邊には敵兵の設けた鹿柴らしいものがある。飯粒の散つた所がある。續が谷と云ふ村の道は、河のやうに雨水が流れて居る。

やがて敵は、久米川村附近に陣地を設置して居ると云ふ騎兵の報告が來たので、部署が定る。小川と云ふ一寸した村の北方の大森林の五叉路、一昨夜敵が前哨を、張つた邊りを過ぎて杜端に出ると淺間祠と云ふのがある。赤松と杉の亭々たる一構へ、それに前衛が停止して、本隊は林を右方に大俗に展開するのを待つ事になる。右側衛は又も右方に居る。時は十一時頃、雨は篠をつく計りである。

安東大尉が來たので、一所に大隊長の居る所に行つて見て居る中に叱られて、右方の百姓家に入ると、雞が寒む相に片脚で立つて居る。流し元には栗のゆでる香ひがして、小供が大きな傘をさしかけながら駈け出して來る。栗を拾つて一つ二つ生で食ふ。

敵の砲兵陣地を味方の右側衛が側方から攻撃を初めたのを見て、久米川村に入ると、町中の人が集つてこれを見て居る。番傘の黄色と秋の雨。

直ちに敵を追撃したから所澤の北端まで出て演習中止となる二時半。中食後少暇をぬすんで一軒の百姓家に入る。此家の主人は明治十四年に花房公使を朝鮮に護衛して行つた人ださうだ。白湯を煮て呉れる。裏では豚がうめて、堆肥の香ひがキビシタする。

兵を宿舍に入れたのは七時過ぎであつた。大きな金物屋の裏座敷に我等五人宿る。新らしい浴衣を出して呉れたので、グショ濡れの戎衣を脱ぐ。當番が働いて呉れる、雨は小止みなく降つて居る。

此日記これにて終れり、演習の命令及講評の内容等あれども略す。

明治四十年

八月四日(日曜)

晴、午後時々雨

午前十一時四十五分父上と共に上野驛を發す。高木、山本、

奥園の諸君見送り。

八月五日（日曜）

曇り、風、霧、朝七時青森停車場待合室に於て朝食。郵船支店長來訪。十時住ノ江丸に搭乘。波稍荒く、船客船暈を感ずるもの多し。五時函館着。龍岡、郵船支店長代理諸氏も出迎へらる。旅館勝田に投宿。夜は野地の勝田に於て龍岡氏の饗應。松前追分、義太夫等を聞く。十一時歸宿。

八月六日（火曜）

朝七時二十分函館を發す。郵船支店長、龍岡氏及勝田女將が見送らる。（出發に先ち旅館に藤井氏來訪）車中時々來雨。沿道の風光好きところ、大沼、小沼。耕地の見るべきもの、目名、蘭越。わが農場の景況は五年以前に比すれば大差あり。吉川銀之丞及農夫五人出迎へあり。高木氏と別れて農場に向ふ。行く行く新市街地、製麻會社用外濠等を拾視す。

此夜吉川が單に監督人たるの職責を守り、地主請負人の資格に立入らざる旨を話す。

○附記　五年以前に比すれば云々とあれども、筆者の北海道を去りしは明治三十四年なれば、足掛け六年目に再び此地にまみえたるなり

八月七日（水曜）　朝曇

朝の話

一、全部ノ附與ヲ受クレバ、製麻會社ト、地上權設定ノ約束。
一、新貸風防林ト會社トノ境ノヿ
一、空間地ハ先取權を主張スルヿ
一、立木拂下ゲ及處理ノヿ
一、貸貸與地附與願ノヿ
一、當年收納金ノヿ
一、吉川トノ契約追加ノヿ

午前、村役場に村長を訪問し、談話十一時に至る。山内榮喜より鷄卵十個を送り來る。午後少しく午睡。クロポトキンを讀む。五時近く、小吉川氏を伴ひて風防林地を東方に小林農場境より三角地の東端に到りて七時歸宿。午後空は曇りたれども時に雲切れし、蝦夷富士の次、織雲を破りて立てるを見る。

八日八日（木曜）雲あり、午八十七度。

早起結束して出發し、第三線北際、小鐵境界を踏査し、隧道を經て極北の地に入る。草膝頭を沒して困憊甚しく、暑氣亦强し。阿部、伊藤の二人、草を分けて案内す。午に近く河畔に出で少憩して河聲を聞く。林中遊蝶頗る多し。繚紛として碧葉の間にむらがり飛ぶ。若しツルゲネーフあらば此夏の深林の様を如何に美しく描きしものならむ。歸路默歩せる傍にフト、ゲーテーの風貌・性格などを烈日の下に思ひ起す。

彼の眼の如何に美しく輝けるか、彼の激烈なる情緒が殆んど冷淡と見ゆる深刻なる修養によりて內向し、そが爲めに如何に多くの恨を人より買ひしかなど。

家に歸りて飲みしサイダーの味！裏の河邊に衣を脫して入らんとすれば冷水身を切るが如く長く浸るに不堪。

愛子より端書あり、母上の病漸く癒え給ひしを報ぜり。

壬生馬の端書には（COROT の畫あり。余の背て眼に逆らざるもの必らずよき作なるべしと思ひしに、壬生馬の短文を讀めば、彼も亦近く見るの喜びを得可き其畫を賞すること甚し。

ティルデ、アグネス、エルキントン及び森本諸君よりの端書或は書狀心深く讀む。

午後父上が河島長官と共に旅行せらる可き少旅の準備を爲す。午下雷鳴。

八月九日（金曜）曇

朝七時五十六分の汽車に乘して小樽に向ふ。汽車の遲行と、停車場に於ける待ち合はせの長き間がゆさに不堪。十一時五十六分小樽着、越中屋に投宿。午後散策。夜九時増毛に向ふ可く釧路丸に搭乘。凉冷最も佳。

八月十日（土曜）曇

午後四時釧路丸小樽を發す。原內務大臣、河島長官、安東警視總官、高岡、廣井氏が同乘す。不意に內村鑑三氏に會し喫驚。八時増毛に着す。直ちに市中を見物す。戶數約二千と稱せらる。暑寒川市の西方を流る三吉神社對岸にあり。全市街を展望す可し。十二時乘船中食。一時出帆。一時四十五分留萌着、蒸汽船に引かれて留萌河を溯る事約一里半にして上陸し、小寺の立てる山腹に至りて概景を展望す。市街の地形は増毛に比すれば甚廣濶に、河流の便も亦大に可なり。然れども波濤の荒き時には二十尺に達し、一立方尺に加はる可き壓力は實に六千斤に達するが故に、防波堤を築くに當つては、二十噸の角石を要すと云へり。戶數約二千と稱す。

山を下りて再び引舟に乘じ港口に出で警標所より港內全般を眺望し、丸二旅館に投ず。當旅館は三叉路の交點にあり。

伐木せられて草のみ青々と生じたる狀、波の如き連丘を東方に望む。店前には少女の二三、手毬を弄べり。今日氣候は烈暑を極め、殆ど困憊せんとす。宿に着して浴す可き湯なし。隣室には色青ざめたる病者臥せり。

八月十一日（日曜）曇

昨夜蚊と蚤とに攻められて寢ること僅かに二時間。朝四時半起結束して一行と共に汽船に行かんと、河を渡り昨日の地點よりトラックを以て大和田炭礦に至り、一行五台の馬車に乘りて

發す。暑氣甚だしく、馬車は留萠川に沿ふて峠を上り、其絶頂に於て中食す。洗ひたる葉の上に副菜を置くなど面白き事あり、時に十一時。再び發して峠を下り御料林を經て北龍の本願寺開墾場に少憩、こゝにて沼田農場のことを聞く

約田一反ニ付

一等田、	大豆、小豆、小麥	各一斗宛
五等田、	同上	各六升宛
米		五斗宛

小作千餘戸。沼田農場。北龍村。

後雨龍川を渡り荒漠たる泥炭地を經て妹背牛に入る。驟雨如突篠。五時着。

停車場側の茶屋に少憩す蒸熱益々甚しく、衣襟汗に濕る。七時四分の汽車に乘じ、七時四十分頃、瀧川に着し、停車場より五町計りなる渡邊旅館に入る。

寢具清潔熟睡、終日の疲勞を醫することを得たり。

八月十二日（日曜）　朝曇、午后晴れ。

朝五時起床。冷氣身に適す。八時十一分の汽車にて札幌に向ふ。十一時半札幌着。七年前の牧郷之事夢の如く腦裏に浮ぶ。不言の情。山形屋に入る。

愛子、壬生馬、Lili Beschlin、龍岡、大野、吉川より來信。

母上様の御病氣御快方の由大に安心す。

午後休息。夕刻より馬車に乘じて中島遊園地、西川氏、農科大學、博物館等を訪ふ。變りしものあり、變らざるものあり。我れは果して變りしものゝ一か、將た變らざるものゝ一つか。

八月十三日（火曜）　晴れ

朝西村氏を訪ひ、氏及其妻君に面會す。例によりてよき人なり。買物に南一條に行き、後宿にて諸方に出す端書など認む。

舊農學校の鐘聲と、甲斐甲斐しき學生と、殊に我が心臟を躍らしむ。

テルデ、フォルスター、大野、孝太君より來信。

八月十四日（水曜）晴

午後農學校に至り田中稔氏に面會す。夫子依然孜々として其職に忠なり。星野其他に會はんとしたれど會はれず。去つて星野を共寮に訪ふ。東海林、渡邊の二人又來り會す。快談半時間後、大臣等一行の出發を停車場に送り、西田氏に到りて晩餐の馳走となる。

停車場にて、校長、安部、南、橋本の諸教授及前田君に會ふ。

此夜同窓會に於て、星野、渡邊、半澤、東海林相會して快談す。

父上三時三分の汽車にて室蘭に赴かる。

世界的名著武者小路實篤氏の快作

日本發賣

『愛慾』現るゝや文壇は滔々たる賞讃の爆聲を轟かした。其の平明率直なる表現裡の深刻さ、コロロホルムが伴ふ如き恍惚裡に潜む苦惱に讀者は醉はされ憑かれ戰慄に打たれて、此の靈感の前に絶大の嘆聲を發し、額づき伏するであらう。本書は實に我が文學史上の一巨星であるのみか、世界文學史上にさへ鐲々放光する巨星である。さらば英人がシェイクスピヤを千載に誇り獨人がゲヱテを冠して語る如く、我等も亦本書を揭げて我等の誇を世界に示すべきである。

廣島高師教授 清原貞雄著

日本道德論

定價五圓 送料二十六錢

最新刊

道德論は時代と共に或は變遷し或は進歩する。大正の道德哲學は明治の道德哲學とその基準を同うするものではない。清原教授の新著は、單に此の理由だけでも既刊の道德學の論著を一蹴するものであるが、而かも本書に於ては、從來學者の敢て試み得なかつた歷史的考察を爲して、立言堂々約六百頁に渉り、說き去り說き來たりて、眞に道德學の堂奧を衝けるの慨がある。此の書一卷を玩味し嗜讀せば、他の凡百の書物を繙くに優る。學者教育家思想家は勿論、萬人必讀の好書。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

八月十五日（木曜）晴、涼。
朝校長を訪ひ一身上の相談をなし、西田氏を訪ひて歸宿
朝食の時女中タケと語る。
星野を訪ひ、東海林と共に札幌農學校を見る。中食は星野方、三時過まで語る。

八月十六日（金曜）曇、暑し。
朝丸井にて買物。一時十分父上御歸札。
午後暇乞ひの爲、西村、高岡、校長西田訪問。夜西田氏來訪、談十時半に至る。

八月十七日（土曜）曇、暑し
朝六時十五分札幌を發して農場に歸る。
午後三時半母上御着。停車場に迎ふ。雨到りて夜尙やまず、大いに秋冷を感ず。夏逝かんとす。
壬生馬より端書來る。

八月十八日（日曜）晴
一、空閒地、山浦支店長と談合、又西村とも打合はせの上、取計らひの事吉川に依賴。
一、貸附地名前換。
一、製線取道路を相當代價にて引受くること。
一、新貸附地に屬する追加約束。
一、木材取分の事。
一、學校前新道路兩側、又は片側を相當代價にて引受くる談を爲す事。
一、本年收納豫算。
一、明治三十九年八月廿一日付契約に左の條件を追加すること。
一、年月日付許可の貸付地線何坪。及將來增加する地積。
一、管理の報酬年金參拾圓とありしを金五十圓と改むること。
以上父より掲示。
朝母上に從ひ農場地巡視す。午後新築家屋の設計。夕方より父上と共に松岡町に至り、諸買物などす。夜事務所の前庭に火を燃して、涼を取る。夜上の草花漸く凋落して秋行逝しぬ。月は九日頃なるべし。

八月十九日（月曜）曇、冷。
朝洗面せんと戶外に出づれば冷涼の氣身に沁みて、北海の天地は旣に秋なり。朝母上に從ひて新農市街を見る。秋時雨時に至りて、衣袂を濕す。午後二時より彌照神社の臨時祭あり。雨となる。參詣人大人五十名。

夜話。夜半急雨。

八月二十日(火曜)朝雨後晴。

朝十一時三十六分發にて狩太を辭す。小作其他見送人多し。

七時十五分函館着。勝田旅館に入る。

八月廿一日(水曜)半晴、冷。

朝龍岡氏夫人、郵船會社支店長、區役所書記來訪。父上は共進會開會式に列興。母上、行郎と共に十時旅館を發し馬車にて湯の川林長館に至る。着せるは十一時半。一浴清爽を感ず。午後父上來館共に散步して南方に至ること約十町。歸館すれば江夏夫妻あり。夜九時頃まで遊ぶ。

八月廿二日(木曜)半晴、風

午前玉突入浴其他に費す。

午後高野、藤井、江夏の三氏來訪。前二者は一泊、夜龍岡、一木夫人及龍岡老母來訪。

八月廿三日(金曜)晴、大風。

午後謠の師匠、高木其他來訪。夜月明(十四日)市に盆踊を見る。余が盆踊を見しはこれが初めてなり。夜に入りてより風强し。

八月廿四日(土曜)晴、大風。

午前中は謠數番。

午後村角力を見る。母と愛國婦人會の函迎員と共に函館に赴かる。榊郵船支店長來訪。夜津田氏より電報あり。一年志願兵の事思はしからず、服役せよとのことなり。無據佐藤校長に就任延期の事願ひ置き、明日歸京の事に決す。

八月廿五日(日曜)曇り午後晴、大風。

朝七時父上と別れ、行郎と共に馬車にて勝田旅館に歸り、母上と面談、英夫よりの來狀を報告す。龍岡氏訪問。午後一時半玄海丸にて函館を發す。波稍高し。青森一泊

八月廿六日(月曜)曇、風。

朝六時十五分青森を發す。途中利根川にて增水の爲め汽車不通の報に接し、五時半松島驛に下車し、車にて松島ホテルに入る。

Nを夢む。

八月廿七日(火曜)無風、雨。

朝瑞巖寺(葡萄木鼠、政宗公)半月庵、三交松、觀瀾亭其他を見る。午後獨五大堂に上にて靜思す。

五時一分前發して松島驛より五時三十分の汽車に乘じて六時仙臺着。仙臺ホテルに投宿す。此夜大雨傾盆。函館大火の報あり。母上、行郎の安否を思ひて熟睡し得ず。屢々夢む。

八月廿八日(水曜)曇。

五時起床。六時六分の汽車に乘じて仙臺を發す。沿道の河流皆大溢。取手――間、龜有南千住間、二ケ所汽車不通の爲め、二時半頃土浦紫車旅店一泊するの已むなきに至る。此夜晴れ、市中を歩む。

八月廿九日（木曜）曇。

朝五時五十分土浦を發し取手驛より此方、利根川の甚だしく增水せるを見る。龜有に着せる時午前八時二十分頃なりしなるべし。

然るに荒川の水亦增水して渡船の便なしとの事に此停車場にて渡船の用意なるを待つ外なきに至れり。

附記　此の日記の續きなくして、如何にして上京せしやを詳かにせざるは遺憾なれど詮なし、兎も角も萬難を排して歸京の上、九月一日より豫備見習士官の勤務に服せるは前記の日記（見習士官時代の）に據つて明かなり。

左の詩は二十七歳の折、米國ハーバアーフオード・カレヂ大學院に在學中に作れるものなり。

夕暮海邊に立ちて

靑、黃、丹紅、紫の
雲藍色に
日のかげ靜かに薄れゆけば
黃金を浮けし波の穗の
ゆるぎも底にかげろひ
小兵の星のみくぐり出で
遠きみ空に光る哉
夜の幕全く閉ぢぬ。

島姬宿る巖かげ
流れ緩き淵
倦する腕に楫をとりて
白く光る鱗の
跳ねかへる音を聞きつゝ
今漕ぎかへる海士の子等は
闇き浪路の夕暮れ
わが岸何れと惑ふらんよ。

礒邊に立てる荒屋
童女は早く眠りて
女房屋廚に隙やある
形よき火盥を
南の窓に點して
舟漕ぐ目路にと輝く掲えぬ

信仰あつき比丘尼の
法會にともせる燭の如く

夜次第に熾りて
引汐走る音のみ
眞闇に知らるゝ海のかなた
白き手すがる戸の上
低き火の目標
船人かへると思ひやれば
胸に泌み入る平和に
おぼへず涙を巌にたれぬ。

聖地巡禮
――その斷片――

賀川豐彥

ガサの廢墟

寢ぼけ眼に、ガサの廢墟が映つたのは、午前五時であつた。砂漠の空は、いやな程澄み切つて居る。石垣だけ殘つて屋根の無いのは、最近發掘したものか、屋根のある家には、カナン人が住んでゐると見える。孰れにしてもあまり相違はない。たゞ、土を固めて土塀にしたやうなものである。ガサを過ぎて、私はまた坐つた儘、ベンチに凭れて睡入つて了つた。ルドにつく少し前に、同行のユダヤ人が注意をしてくれた。一枚の毛布と、二つの鞄を持つて、手輕に降りたのは善かつたが、行く方向が分らないので、大勢について行くと、それがヨツパ行きのプラットホームであつた。間もなくヨツパ行きの汽車とエルサレム行の汽車は殆ど同時刻にやつて來た。それで慌てゝ驅け出すと、アラビヤ人のボーイが、私の鞄をもぎ取つて走る。私も彼について行く。元のプラットホームに歸ると、その子供は、五ペヒテル吳れと頑張る。この邊りのアラビヤ人の性質の惡いのには、遉の私も吃驚する。

ルドで乘換へた汽車は、徐々に高地に登つて行く。ラメラを過ぎると、野は一面に麥が熟してゐる。あまりに乾燥が甚しいので、作も惡い。農夫の刈取つた後に、多數の貧しい婦人達が、落穗を拾ひに廻つてゐる。その光景が如何にも詩的で、私はルツ記を今樣にして眼のあたり見るやうな思ひがした。このあたりで氣のつくことは、幾萬枚かの石板を垣の代りに突きさして、畑の圍ひにしたり、家の周圍のかこひにしてゐることである。

昔ユダヤの建國者モーゼが石牌の上に十誡を書きしるし、之

を人民に與へたと云ふが、こんなに石板の多いところであれば、そうしたこともあつたらうと、すぐ頷かれた。その當時は、紙も木筆もなかつたらうから、石板に釘で彫りつけたと云ふことは、ありそうなことだと思ふ。

空は青玉のように光り、白亞層の上に出來た畑は、銀色に輝く。カナンの土人は昔風の風呂敷様のものを冠り、一生懸命に刈つた麥束を駱駝に積んでゐる。

カナンの女達は、色は日に燒けて淺黑いが、輪廓は、日本の女達より遙かに美しい。それに服裝が何とも云へぬ優雅なものである。袂は根付から手の方に向つて、廣くなつた三角形のもので、日本の袖に比較して、美しく優美に見える。襟元は胸がはだけない爲めに、裝飾のある布があたる様になつてゐる。どんな貧乏な婦人でも、足元まで長い衣を着てゐる。頭には大きな風呂敷を纏ひ、素足で、畑の中をちよこ／＼走りに拾ひ廻つてゐる。

ルツ記のことは、三千年前の昔物語ではなく、今日のことであると思つて、私も何だか悲しくなつた。

ステーションで、カナンの女が巴旦杏を賣つてゐるのが眼につく。「もろぶた」の中に巴旦杏を入れて、一生懸命に賣つてゐる様が、如何にも田舍臭く見える。

エルサレム行

汽車は谿谷を外つて行く。サムソンの住んでゐた洞穴だと云ひ傳へられてゐる。洞穴が絶壁の頂上に見える。汽車はうねりくねつて急坂をよぢ登つて行く。然し、高崎から輕井澤に上る位の斜面であつて、別に美しいこともない。たゞ、地中海に傾いた斜面に、幾千となく羊と山羊を飼ふてゐるのが特別に眼に立つ。

エルサレムの停車場と云ふのは、實に貧相なもので、特別大きな貨物が此處から出ると云ふのでもなし、さればと云ふて、澤山な客が此處に降りると云ふのでも無い。日本の田舍のステーションより遙かに淋しく、また穢い建物であつた。たゞ、その附近に赤瓦で葺いた、獨乙式のバンガローが澤山に見えるので、獨乙系統のユダヤ人が無數に歸つて來つゝあると云ふことを知るのであつた。

然し、エルサレムで赤瓦の家を發見することが、なんだか調子はづれな氣がした。

汽車が停車場につくや否や、私は、緋のトルコ帽を冠つた青年に、無理にも馬車にのせられて、吉川源治郎君に紹介狀を貰つたアメリカン・コロニーに走つてゐた。

馬車はエルサレムの西壁に沿ふて走る。ヨセパテの谷が南に見える。橄欖の木が一面に生えてはゐるが、木が小さいので青い葉より黄褐色の土の方が多く見える。

城壁の上に、塔が覗く。『ダビデの塔だ！』とすぐ氣がつく。その側に美しい金の十字架の高塔が見える。獨乙教會の高塔である。

馬車は賑やかな新ヨッパ門より城内に這入り、五、六間行つたところでハタと止る。赤帽の通辯が、私をアメリカン・コロニー商店の支配人に引合してくれる爲めであつた。

アメリカン・コロニー商店で、支配人は親切に寄宿舍に電話をかけてくれた。それで私はまた、同じ馬車に乘つて、ダマスコ門を北にオリブ山に近いエルサレムの北郊セント・ジョウヂ教會に近い、アメリカン・コロニーに馳けつけた。

そこは石造の無造作につくられた家であるが、東側の木戸口から内庭に這入り、寄宿舍の世話を燒いてゐる叮嚀な、然し、無口な婦人に案内せられた。

「朝飯を！」と云はれる儘に、朝食を取り、乾の隅にあたる三階の廊下をし切つて、作られた小さい室に通される。

「結構、結構！ これで十日間のエルサレムの瞑想には充分である。たとひ、それがエリヤの洞穴であらうとも滿足するものを、かうした白いシーツと、曲りなりにもスプリングの付いたベットの上にねさせてくれるなら、これ程幸福なことは無い」と、私は、靜かに床の上に跪いて默禱した。

魂の故郷

私がエルサレムに來たのは、たゞ見物に來たのではない。私は魂の巡禮者として來たのだ。多くの豫言者の靈とカルバリーの丘で私の爲めに死んでくれたナザレのイエスを眼のあたり見んがために來たのだ。それで私が安樂な旅行を續けることは先に走つた豫言者の靈に對してすまない。

私が靜かに祈つてゐると、この土地を踏んだ、多くの豫言者の靈が、私の耳に話しかける。

第一、私に話しかけたのは、エリシヤであつた。

『此處はシュナムの城壁の上に、狹く小さく設けられた、私の寢床に似て居るではないか』とエリシヤが私に物語つた。

さう思へば、そのようである。私はシュナムの村の仲の善い信仰深い若夫婦が、豫言者エリシヤの旅行の往復に、特に便宜を計つて態々造へた室と寢床のことを思ひ出した。

北向の大きな窓には蚊と蠅をよける爲めに鐵のスクリーンが張られてゐる。そこから見た景色が、曾て、私が訪問したこと

のある、米國ヴアジニアン州レキシントンの私の恩師マヤス博士の邸宅の北窓から覗いた風景にあまり善く似てゐるので、アメリカの冬景色を見てゐるのではないかと思ふほどであつた。六月の初めであるけれども、一本の青草が生えてゐるのではなし、空は眞青に澄んで、天空の底の底まで見すかす事が出來る。右に見えるのが、オリブ山のアインスタイン大學である。直前はサマリヤからナザレに通ずる道である。

左にはミズペの尖角形の山が見える。その下の谷が、エゼケルの豫言で有名な死の谿である。

十日間此處で瞑想をつゞけることが出來るのだと思ふと嬉しくて仕方がない。私は、病める眼を出來るだけ大きく打開いて、あたりの風景を打見守つた。

私は魂の故郷に歸つたことをうれしく思はずには居れない。

遂に私は來た。エルサレム！エルサレム！百萬の魂を曝しものにしたエルサレム！十字軍の凡ての血を無にしたエルサレム！世界の凡ての血がそこに向つて流れるエルサレム！私は遂にそこに來た。そして、私は此處で何をしようとしてゐるのか？

ダマスコ門外の塵埃

私は、十一時に再び來てくれるようにと赤いトルコ帽の青年に云ふて置いたから、約束通りに、十二時に木戸口の前に立つて待つてゐた。青年の通譯がやつて來た。

『今日は安息日だから、今日見なければ『哀號（ウエール）』が見られないすぐダビデの城壁に行かうではないか』と、私を誘つてくれた。

私が最初見たかつたのは、何を云ふても神殿ではあつたけれども「神殿」跡を見るにはどうしても三時間かゝるからと云ふので、私は哀號（ウエール）の場所に歩いて行つた。

沙漠の太陽が頭から照り付ける。私は少しの蔭をも撰んで歩いた。コルクの夏帽子を冠らなければ、エルサレムでは日射病に、かゝるかも知れないから用心しろとポート・セツトで云はれたので、少し高かつたけれども、十五ペヒテル（一ペヒテルは約一圓十錢）を、支拂つてコルクの帽子を冠つて來たのが、非常に助けになつた。

ダマスコ門外をとぼ〳〵靴で歩いてゐるとほこりの多いのに氣がつく。靴はすぐに石炭質の塵埃で眞白になる。そのほこりがまた深いものだから、自働車が側を走ると帽子と云はず、着物と云はず眞白になる。すぐ私は、イエスがその弟子に『汝、足の塵を拂ひて、次の邑に行け』と云はれたことを思ひ出す。塵の多いユダヤでなければ思ひ浮べない言葉だ。

ダマスコ門の入口は市場である。馬車屋、靴磨き、パン屋、水を賣るもの、樣々な小商賈人が緣日商人のように屋台店を出して、客を待つてゐる。

門は日本のお城の大木戸にあると同じように『く』の字形に曲つて這入るようになつてゐる。そこは、少し涼しいものだから、地方から來た人々であらう、大勢隅つこによつて晝寢をしてゐた。その上を幾萬匹かの蠅が群をなして飛び廻つてゐる。

エルサレム城內は想像以上に不潔なところである。日本にあれだけ不潔なところを探さうと思へば、東京深川の猿江裏の貧民窟か、神戸葺合新川の二疊敷長屋の外に見出すことは出來ない。『よくもまアあんな穢いところに滿足をして住んでゐるなア』と私は吃驚したのであつた。

窓と云ふ窓はみな不完全なものであり、糞尿は街路に流れ、紙屑は路上に四散し、一匹の驢馬が通れば、他の人は大手を振つて歩けないような街路の上に、暑氣を避ける爲めに、トンネル形の土蓋を作り、そこに長方形の天窓を開け、辛じて、光線がそこから忍び込むようにしてある。そこでは人の顔は勿論のこと、物品などは全く見ることは出來ない。然し、エルサレムの最も繁華な街はさうしたトンネルの中にあるから驚くの外はない。震災前に本所や三の輪にあつたトンネル長屋の徹底的なものである。

亡國の嘆き

ダビデの城壁は今日ほんの一部分だけ殘つてゐる。それは日本の小さいお城にはざらにある五尺角位のものを二丈位積みあげたものである。その上は後期に屬するものと見えて、明かに積み重ねた石が小さいものである。

百人近い男女が、異樣な帽子を冠つて、身體の上部を前後に振動させ乍ら、日本の船頭歌によく似た調子を以て、哀歌を唱へてゐる。先づ指導者らしい人が大聲で叫ぶと、その後から組になつてゐる會衆が、それに加はる。

『エルサレムを再び興し給へ
主よ、エルサレムを築き給へ』

と和してゐるのださうだが、ヘブル語の訛りが私には少しもわからない。

唯、彼等が一生懸命であるところには帽子を取りたくなる。それで私は帽子を取つて、默禱してゐると、私も悲しくなつた。國亡びて、既に二千年、彼等は猶『主よエルサレムを築き給へ』と祈つてゐることを思ふと、人間の力と云ふものが存外、弱いようで強いものであることを思ふ。

私に考へさせてくれるなら、こんな沙漠地方に國家を作ることは不可能中の不可能なことであるから、民族として一國家を作りたければ、別に何處か、南アメリカあたりに集中して、移住すれば善いのにと思ふ。なにも北半球でなければ、神が居らぬと云ふのではなし、彼等が團結して土地を買ひ取つて移住すれば、立派な國を作ることが出來るのにと思ふ。私であれば、さうする。こんな沙漠に、アインスタイン大學を作るよりか、ユダヤ人の集つてゐるニューヨークに、アインスタイン大學を作つた方が遙かにましだと思ふ。

然し「哀歌」を唱つてゐる人々に取つては、地理的エルサレムは、もう地理的實在ではなくして、心理的實在なのだから悲劇である。

男子が餅のような形をした毛皮の帽子を冠つてゐること、鬢の毛を剃らないで、延びるだけ延ばして、それを巻き上げてゐる姿が如何にも異様に見える。宿の主人公のミスター・スパフオードは「異邦人(ヒーザニッシュ)」臭いと云ふたが、確かに野蠻人でなければ、半開人の姿と云つて然る可きである。

石垣に接吻する度數が激しいものだから、殆ど顔が這入る位、掘れ込んでゐる。

今頃では、お葬式があつた後などには、特に此處に來る人が多いとかで、愛國的精神と、個人的に悲哀を訴へる場所が一緒になつてゐるわけである。泣く爲めには確かに善い場所である。凡ての人が泣いてゐるのだから、自分のことの爲めに煩悶してゐて泣いてゐても、それを咎める人はない。

ユダヤ人の涙ぽい人種であることは、エレミヤ記をみても、エレミヤ哀歌を見ても、舊約の詩篇を見ても善くわかるが、エルサレムの哀號を見れば、國民性の凡てが善く理解せられる。泣いてゐる人に若い青年男女が少なくて、中老以上の男女が多いのは特に私の注意をひいた。若いものの多くは少年であつて、最近ヨツパから歸つたものらしい子供達も中に混ぢつてゐた。六月であるのに、厚い皮の着物をきたり、陣羽織のようなものを着てゐるためであるか、その行動が如何にも鈍く、なんだかアルコホール中毒に懸つてゐるのぢやないかと思はせられた。

この種の保守的なユダヤ人はアラビヤ人に比較して、進取的氣性に缺けてゐるような氣がした。世界の天才の三分の一を出したと云はれてゐるユダヤ人の中にも、かうした保守主義者があるかと思へば、ユダヤ人は保守主義に於ても天才的なのだと思ふ。

そこに集つてゐるユダヤ人の多くは、白色人種のどの人種に較(くら)べて見ても、決して劣る容貌をしてゐない。否、寧ろ、アリ

アン民族よりも青白い位である。勿論、日本人に較べて遙かに美しい人々である。

私は、彼の哀號を聞いて居る中に、『國』と云ふもの、民族と云ふものが、如何に妙なものであるかを思ふた。私のように世界を旅する人間にとつては×と云ふものほどおかしなものはない。そしてユダヤ人は今、そのおかしなもの〻爲めに祈つてゐるのである。何故一歩前に進んで『神の國』の爲めに祈らないであらうかと、私は考へた。

悲しみの途（ヴィア・ドロロサ）の瞑想

ダマスコ門を這入つて二町位ゐ行くと、少し、途が廣くなつたところがある。廣いと云つても幅三間とはないであらうが——廣くて二間とは無いエレサレムの『とまどひ小路』には之でも廣い方である。そこは左手に中世紀層の青石みたような美しい火石岩を積み上げた城のようなつくりになつてゐる建築物が一つある。そこに『M』と云ふ字が印されてあるものだから、私はアラビヤ語の通辯に尋ねてみた。そして、それが、イエス・キリストの悲しみの途として知られてゐるヴヰア・ドロロサの記標であることを初めて知つた。

そこで、私は幻の中に千九百年前に歸つて行く。なぜなら、現實の記號は恐らく、宗教教育の記號の外は何の意味も無いものであらうから——そして、恐らくは、ヴヰア・ドロロサも今の方向ではなかつたらうから。然し、悲しみの途（ヴィア・ドロロサ）がどの方向について居らうと私の魂の記錄の上に變化は無い筈である。私は何にも高等批評をしに來たのでは無い。私は私の魂を少しでも淨化すればこと足りるのである。

エルサルムの地上に印した、今日の記號は違つてゐるだらう。然し、「悲しみの途」の上で起つた出來事は新約聖書の記事として、ちやんと殘つてゐるから、不變的性質を帶びてゐる。では、私は瞑想の手綱を曳いて、ヴヰア・ドロロサの主を探がさう。

その日、エルサレムは、朝からでんぐり返つてゐた。奴隷解放の記念日に、一年一度の大祭として、狹い街の辻々は夜營した田舍者の家族で一杯になつてゐた。

然し、昨日、起つた出來事、ダビテの子が掴かまつたと云ふことは、もう凡てのものが知つてゐた。

それは祭司長アナニヤの家から、ピラトの家、市の西から北東迄彌次と、群衆に取まかれて追はれて來たイエスを見たものは、すぐそれが何事を意味するかを知つたのである。判決に斷定を與へかねて、ガリラヤの主君ヘロデの邸宅に送つたり、ま

た辱されたり、イエスは夜を徹し裁かれる爲に、エルサレムの狭い路次をあちら、こちらに引廻されたものだから、城壁内に住んでゐる人々はすぐ事が面倒になつた事を知つたのであつた。

アントニアの塔のすぐ筋向へのピラトの屋敷で兵士に愚弄せられ荊の冠に葦の杖を持たされて、目隠しの儘、『預言せよ』と要求せられ猶一言の答へなかつた『罪人』イエスは、午前九時頃正式にピラトから死刑の宣告をうけ、あの狭い途を、とぼとぼ重い十字架を背負せられこ、歩み出したのである。死刑囚を引張つて行くことや、人間一人二人殺すことは平氣になつてゐる四人のロマ兵は「今日も一仕事ある」と云つた得意な顏付をして、叱り付けないで善いところを大きな聲を出してイエスを叱り飛ばして、驢馬か駱駝を追ふて行くやうな調子で、イエスを追ふて行く。アントニヤの塔から出た。ダマスコ門に曲る角のところには、大勢のエルサレムの娘達が待つてゐた。その中にはマグダラのマリアは勿論のこと、ヘロデの大臣クーザの妻ヨハンナも急を聞いてかけつけて來てゐた。宮の中で兩眼を癒された青年の母もその中にゐた。ベタニアの二人の姉妹も吃驚して馳けつけた。

二人は、イエスを一眼見るなり大聲を擧げて泣き出した。そして、泣きつゝイエスの後に追ひて行つた。女達の悲しみがあまり激しいものだから、イエスは十字架の重荷に沈みつゝも數時間の沈默を破つて、女達を顧みて云ふた。

『エルサレムの女よ、私の爲めに泣いてはいかない、自分と子供の爲めに泣きなさいよ。『産ざる者、いまだ孕さるの胎、いまだ哺せざる乳は福なり』と云ふ日が來ますから。

その時、みんな山に向いて、私達の上に倒れて來い、また岡よ、私達に蔽ひかぶさつてくれと云ひ出すのです……』

イエスは息切れを少し休めて、語をついで『青木がかうであれば、枯木はどうなるであらう』とひとり言のように呟ぜられた。

髑髏山までの行列は別に體形と云ふのも無く、嚴重な監督と云ふのもなく、民衆の中に少し囚人に同情するものが有つても、番兵もあまり八釜敷は云はなかつた。

イエスに接近しても、番兵が八釜敷云はないと知つた、マグダラのマリアはイエスの十字架を少し支えるようにしてゐたが、兵營を出る前に兵士に蒙せられた荊の冠の爲めに、額から血が泌み出るのを氣にして、イエスが息をつくために、立ち止まつた瞬間に、走り寄つて、血をふきとつた。

また雜然たる沈默の行列が續く。昨夜から一睡もしないで、一粒の麥も咽を通らせてゐない上に、三十九の鞭をうけ、兵士

等の愚弄と、鞭打に疲れ切つて了つたイエスは十字架の重みに沈んで了つた。それでも剛膽なイエスは元氣を出して二町ばかり歩いたが、登り坂になつて、もう歩けなくなつてしまつた。そこで兵士がいくら叱り付けても、イエスは沈默した驢馬のやうに、十字架を背負わせられた儘、立ちすくんで了つた。

そんな時には、狹い路次の向ふから來た初めて人間をとつ捕へて、十字架を背負せる習慣があるのだが、愛憎と、ダマスコ門を拔けて、けげんな顔をし乍ら、十字架囚の一團に近づいて來たのが、遠くクレネからやつて來た、シモンと云ふ三十男であつた。彼はその息子のルフと一緒であつたが、兵士は大聲に彼を呼びとめた。

『こら、田舍者、この木を負ふて行け』

シモンは、土地の習慣と知つてゐるものだから、苦笑ひをしながら、

『今日は、わしも緣起が惡ひなあ』

とこぼし乍ら、イエスの携ふ可き十字架を擔つて、元氣よくイエスの後からついて行く。クレネのシモンは事件の眞相を一々女達にきいて居る。女達はイエスを一々辨解する。そして、その脇について行つた。息子のルフも全くイエスに感心して了ふ。これが緣になつて、ルフも、その父シモンもイエスの信仰者になる。

ダマスコ門から群衆は一層大きくなつた。門を出ると、右手に見えるのが髑髏山である。羊の門から見ると、大きな山のやうに見えるが、ダマスコ門から見ると、小高い岡としか見えない。そこへイエスは呪れ釘で十字架に打つけられ、曝し者にせられた。

私の幻はそれからそれへと延びて行く。パレスチは私の魂の故郷である。私は阿波の田舍の出來事よりか、パレスチナで起つたイエスの出來事に就て多く知つてゐる。

エルサム隨想

△

間違つてゐる！　間違つてゐる。宮だけたてゝ、人間を建てない、今日のキリスト教は全く間違つてゐる。

聖墓教會も、ベツレヘムの誕生教會も、みな虛僞である。

△

今日迄に、三つのプロテスタントが有つた。第一回はマホメット教で、第二回はルーテル教で、第三はボルセヴヰキである。三ツともユダヤ人とユダヤ主義が中心であることに注意せねばならぬ。

私はマホメツト教のモスクを一番心持ち善く思ふ。彼等はキリスト教の佛畫を巧みに保存し、それを偶像化せずに保存する。マホメツトが、ユダヤ教とキリスト教を取り入れんと苦心した努力をみよ。それは最も完全なる反抗運動であつたのだ。

エルサレムはイエスの時代から魂の墓場であつたのだ。それを嫌つてイエスはガリラヤに留まつてゐたのだ。其魂の墓場に私は來て、イエスの墓、マリアの墓、使徒ヤコブの墓、ザカリヤの墓、ヨセサフアトの墓、豫言者ザカリヤの墓、アブサロムの墓、ダビデの墓、墓、……十字軍の將軍達の墓、マホメツト教徒の墓を見せられる。唯感心なことには、マホメツトの墓だけがない。

教会も又生きた人間の墓場である。エルサレムは墓地である。生きた人間には川の無いところである。

エルサレムに着いて、第一印象の惡いのは案内者の圖々しいことである。人の馬車に無現矢理に乘り込んで來て、案内の日取りを押つけるのである。其上に馬車屋の狡猾と云へば又話にならない。私はエルサレムに來て、ほと／＼アラビヤ人の亡國的性質に驚いて了つた。

世界の中心だと云ふから、もう少し大きな街かと思つてゐると、日本の小さい街ほどもない。人口にすれば城内に一萬人と住んでゐるか頗る問題だと思ふ。城の内外共に六萬五千と云ふてゐるから、大きさの程度がわかる。ところが私の馬車屋は、十五六町のところを約二圓五十錢取るには、驚いて了つた。

北京の城壁を見てゐる眼には、エルサレムの城壁が如何にも子供だましのやうに見える。

△

ユダヤの宗教はどう考へても奇蹟の宗教である。こんな砂漠にようまあこんな高尚な宗教が生れたことだと思ふ。ギリシヤにソクラテスの生れることは不思議ではない。印度に釋迦が生れることは不思議でないかも知れぬ。然し、ユダヤにイエスのような頑強な精神と愛とを持つた人の生れたことは全く奇蹟である。その宗教が佛教のようにわざとらしくなく、スツと湧き上つてゐるところに何と云ふ有難い默示があるのだらう。

△

荒野に來ては、絶望か祈禱である。そして絶望の出來ないユダヤ人は至純な心で祈り出したのである。此處に世界一の至純な祈禱宗教が産れたのだ。

△

然し、エルサレムの墮落は、何と云ふ體たらくだらう。宿の主人ミスター・スパフオドはエルサレムを乞食の都だといふた

が、誠にその感がする。今日のギリシヤ正教の祭司長は、昔の祭司長だ。貪ることの外に何も知らないのだ。昔の祭司長達は貪ることのみを知つてゐた、預言者アモスが、テコアの荒野より羊牧ひの姿その儘でエルサレムに現れたり、エレミヤがアナトテから出て來たなどは尤もと思はれる。

△

富の豐かにあるところでは、神の惠が全くわからぬものと見える。ユダヤ人は砂漠を通過した爲めに、「無」いところから、「有」るところに導かれる、創造の神が理屈でなく、信仰として與へられたのだ。

建國運動と共産村

今日パレスチナに居るユダヤ人は僅かに八萬五千人位である。（一九二二年十月の國勢調査の時にユダヤ人は八萬三千七百九十四人、其他六十七萬三千三百八十八人）この中の大部分の人々は戰後歐洲列國から歸つて來た人々である。即ち約五萬人（一九一八年以後一九二四年十二月迄四萬八千九百七十九人）は英國がパレスチナをユダヤ民族の爲めに解放してから歸つて來た人々である。實際、最近のユダヤ人の聖地に歸還する趨勢は驚く可き程度であつて、戰後彼等は既に六千萬圓近くの金をパレスチナに投資し約百萬本の樹木を植林し、五十萬本のユウカリプトスを植元付け一千萬圓の資金を投じて百五十の工場を作り、製油、製粉、製鹽、セメント工業の四種のパレスチナ特有の産業の爲めに戰後既に五百萬圓の投資をなし、その他最近には煉瓦養蠶業等の方面に著しき發展を遂げつゝあるのである。

動力の不足を補ふ爲めにと、ロシヤ系のユダヤ人ピネハス、ラツテンベルグ氏はイエス・キリストが洗禮を受けられたヨルダン河に水力發電所を設ける許可を英國政府から受け、工事は着々と進行して居る。

組織好きなユダヤ人は、生産及消費組合を組織し、殆ど凡ての企業と投資は何等かの産業組合と關係が有ると云ふ形である。

二萬のユダヤ人はヨツパ郊外のテル・アヴヰヴTel-avivに市政をしき、世界に於ける唯一つのユダヤ人の自由都市として、パレスチナに於けるユダヤ系の文化の中心をなして居る。そこには、アムステルダムの萬國勞働組合總聯合に加盟した勞働組合もあり、教育機關も完備し、義務教育的設備もあり、五才より十四才までの兒童の九十六%は小學校に出席して居る。醫療機關も非常に發達してゐる爲めに、一九二三年のユダヤ人の死亡率は僅かに千の人口に對して十四人・八分であり、出生率は三十六・二%と云ふ數字を示して居る。之を他の住民に較べる

と話にならない。一般住民の死亡率は千に對して二十七人三分と云ふ高率を示し、出生率も千に對して四十九人一分と云ふ數である。

ユダヤ人のこの建國運動の中心勢力は何を云ふても「シオン」主義運動である。シオニストZionistは世界列國に四十七の同盟會を持ち、三十二萬人の組合員を持つて居る。然しユダヤ建國運動に贊成してゐる人々はこの團體の外に、ユダヤ教教師の團體であるミズラキ Mizrachi と社會主義團體であるヒタチダス、ザイレシオン、ポアレシオンの三團體がある。ミズラキは十三萬四千の會員を有し、社會主義三派は十萬九千人の組合員を持つて居る。

之等の人々の中には『開拓者（チャリッツム）』運動と云ふのが特に唱道せられ、歐洲列國のユダヤ人の中にも、二十の農學校設を立して、近くユダヤに歸還せんとする近世的農業技術家を養成して居るのである。今日そこには四千人の學生が訓練を受け、その組合には一萬二千人が加盟して居ると云ふことである。

こんな傾向であるから、歐洲からも、アメリカからも續々とパレスチナをめがけて歸還しつゝあるのである。その中の多くは資本金二千五百圓以上五千圓位まで携帶してゐる定住的移民であるから心強い。然し中には、紅海に面したヤーメン地方に遊牧してゐた牧羊者の群も、歸還しつゝあるから面白い。

こんなにユダヤ人が、本氣になつて、パレスチナに歸りつゝあることを思ふと、豫言者イザヤの言葉が段々成就するように思はれる。

『われ河をかぶろの山にひらき、泉を谷の中に出し、また荒野を池となし、乾ける地を水の源と變らさん、我荒野に香柏、合歡樹、もちの樹、および油の樹を植え、沙漠に松杉及び黄楊をともに置かん、かくて、彼等之を見て、エホバの手の作し給ふところ、イスラエルの聖者の造り給ふところなるを知り、且心をとめて共々に悟らん』――イザヤ書四十一章十八――二十節

ユダヤは荒地ではないのだ。人間の心が荒地なのだ。

ヘブロン行

パレスチナは　毎日　天氣である。都には烟筒の一本も建つてゐるわけではないし沙漠の空には雨催樣のある心配もないから、空は心ゆくばかり澄み切つてゐる。

『今日はヘブロンに行きませう……いゝ自働車の組がありますから』

から例の赤トルコ帽の通辯が云ふてくれるものだから、私はヘブロン行を決定した。それは六月八日月曜日の朝であつた。

同行の西洋人は英國の牧師が一人と、アメリカの宗教家二人で

あつた。

私は南はベエルシバまで行きたかつた。然し、時と金とが許さない。それで、私はヘブロンだけで辛抱することにした。エルサレムを南に下つて行くと、來る時に氣車から見た澤山の文化住宅が並んでゐる。ベテレヘムまでの途は平垣なもので、山の上とは考へられない位である。此處は傳説によると、巨人アナックの子孫達の住んでゐた所ださうで、手足の指が二十四本もあり、身の丈が一丈一尺もあつたゴリアテの兄弟達もこのあたりに住んでゐたのだと云ふ、それにしては、あまりに平凡な平原である。

途中でマギの泉と云ふマタイ傳の三博士に關係ある泉の側を通つたが、水の少ないユダヤだから、凡ての泉には何かそれに關連した傳説を作つてゐる。さう云ふて置けば少しも間違ひはないのである。なぜなら一つの町に井戸が二つあると云ふ所は少ないから、どんな有名な人でも必ず、その井戸の水を汲んだに違ひないのだ。それで最も有名な人の名前をそれに喰付けておけば、それで大抵當つてゐるのである。

ベテレヘムにさしかゝると、不思議に果樹園の多いことに氣がつく。やはり『穀物の庫』と云はれるだけあるわい、とすぐ頭に浮んでくる。

ベテレヘムの谷を越えて、左側の遠景が誠に善い。遠く、死海の西海岸を形成して居る、海岸線と直角になつて、互に相平行してゐる、多くの山々の相重なつてゐるのが、大阪の人形芝居で見る千疊敷のやうに見える。その中に、たゞ一つ形の著しく違つて立つてゐるのがフランク山と歐米人に呼びなされてゐる圓頂形の小山である。それは攝津西の宮の奥にある甲山にあまりに善く似てゐる。傳説もなか〳〵面白いものを持つてゐる。あの暴逆なヘロデ大王の屍があしこに埋められてゐるのである。ヘロデは日本で云へば源頼朝のやうな人で、兄弟を片端から殺し、幾人かの妻君をも殺し、しまひには自分の息子を二人まで殺し、死ぬ時にはエルサレムの有力者を全部虐殺しておいて死んだと云ふ暴性の王であつた。イエスキリストは、産れたばかりにすんでのことにこの暴君の爲めに殺されるところであつたのだ。

山の恰好が美いものだから、土人は極樂山と呼んでゐる。ヘロデは在生中そこに離宮を建てゝゐたのであつた。道の左側は太古河床であつたと見えて、丸い小石が澤山野原一面に散らばつてゐる、極く悪い畑である。

此處には面白い傳説がある。

イエスが或時、この附近の畑に勞働してゐる人に尋ねた。

『何を蒔いてゐらつしやるんですか？』
勞働してゐる男は眞面目臭つて
『石を蒔いて居ます。』
と答へた。
『じや、石が實りますよ』
とイエスがひとり言のように云はれた。すると、その年の秋に穂に石が實つて、百姓は困つたと云ふのである。

ユダヤらしくて面白い傳説である。ヤコブの戀女房ラケルの墓が、野中の地藏堂のやうに立つてゐる。マホメツト敎の人々には大事な墓と見えて、中は見させない。

ベテレヘム見物は後に廻して、ヘブロンに直行する。麥が熟してゐるのが眼につく。岩石と云ふ岩石はまるで、石版のように水平に積み重ねた白亞層である。それが年月の經つと共に風化し〳〵、ぼろ〳〵に成つてゐる。

自働車に驚いて、小猫位いの狐が畝から飛び出した。すぐ、イエスが王ヘロデを「狐」と呼んだことを思ひ出す。枯草の色によく似た毛色の野狐が慌たゞしく、とまどうて、一二町も自働車と平行して飛んで行く。それが、如何にも面白かつた。

住む人が少ないものだから、こんな大きな自働車途のついたところに今も猶狐が居るのかと思ふて不思議に感じた。

ソロモンの貯池はエルサムから十九キロも走らなければ行かぬ随分邊鄙なところにある、大きな池が三つあるが、ポンプで井戸から水を扱み上げて、それを貯蓄してゐる。何だか大きなところを見て來てゐる勢か、日本の田舍の紡績工場の貯水池より小さいような氣がする。ソロモンの貯水池の下にイエスキリストを死刑に處したポンテオ・ピラトが宮の納め金を盗み出して造つた、と云はれてゐる大きなロマ式水道工事のでん、繰り返つてゐる光景が見える。

ソロモンの池の北側の開で、カナン人が麥刈をしてゐる。同行のアメリカ人は鎌を貸して貰つて麥刈を始めた。私も自働車の運轉手が呼ばなければ麥刈がしたかつたのだが、先をせかすものだから、麥刈か出來なかつた。麥と云つても、水氣の少ない畑に肥料もやらないで生え放なしにしておくものだから少しも、大きくなつて居ない。それこそ貧相な飢饉年の麥のようである。然し、晴れた空を仰ぎつゝ傳説の多いユダヤの野に惠まれた健康を持つて、詩篇でも歌ひつゝ勞働する愉快を思ふと、預言者アモスや、ミカの仲間入りをして、ボアズの畑に麥刈をしてみたい氣になる。

そこからユダア全國で道の付いてゐるところでは最も高いと云はれてゐる一つの峠を越える。そこには、アイン・アルブと

云ふ不思議な程善く湧く泉から水を汲みあげて、エルサレム方面に給水してゐる大きなタンクが据つてゐる。このあたりは不思議に途の側に水が湧いてゐる。昔の巡禮は使徒行傳八章に出てゐるピリピがエテオピアの女王カンダアオの大臣に洗禮を授けたのは此のあたりだと考へてゐた。

また少し行くと右手に「マカベ王朝」の要塞地であつたベート・ヌールが山の上に見える。

そこから一キロも行くと、ハルハルと呼ばれる邑がある。三千四百年も、引續いて存在してゐる要塞のやうに見える、カナン人の大部落だが、谷を隔てゝ向ふに見える。北から續いて來た山脈の南端の斷涯絶壁に、燕が巣を造るやうに邑を作つてゐるのが如何にも昔の名殘を留めて面白い。生存競爭の激しい士師記時代から、今日まで部落が保存せられたと云ふのは、全く此の地形のためであつたらうと思はれる。

涯の中腹に積み重ねられて出來てゐる石造の建物が、大部分は屋根の平つたいユダヤ式のものであるが、仲には、美術的にローマ式の圓屋根をつけてゐるので、それが非常に美しく見える。近くよると、穢いエルサレムの街のやうであらうが、遠くから見ると、それが如何にも美しく見える。實際ユダヤの邑里ほど遠くから見て藝術的な印象を與へるものは少なからう。

ヘブロンに急ぐ中に、エルサレム行の隊商に幾組にも行ふ。それが如何にも悠長に見える。

ヘブロンは思つた程、美しい街ではなかつた。狹い二つの谷合ひの兩側の斜面に、街は跨つてゐる。この谷をマムレの廣場といふのであらうが、あまり感心したものでは勿論ない。たゞ四千年の昔アブラハムの時から有名な街であつて、此處にはアブラハムの墓は勿論のこと、その妻サラ、アブラハムの子イサク、その愛妻リベカ、イサクの子ヤコブ、その妻レア、ヤコブの愛子ヨセフ、合計七人の屍が此地に葬られてゐる爲めに、ユダヤ民族に取つては靈場となつてゐる。

アブラハムは最初、北方ベテルから此處に羊を牧ひ乍ら引越して來て、愛妻サラを失ひ、銀二十枚でマクベラの洞穴を買ひ取り、そこに葬つたのが因緣でユダヤ民族の始祖達がみな此地に葬られるやうになつたのである。

マホメット教徒はアブラハムを信仰の中心人物の一人として考へるのと、アラビヤ人種が、イサツクの長子エソウと直接關係ある爲めに、アブラハム・イサク・ヤコブの墓を最も神聖なものと考へ、之を尊重してゐること、メッカ、メシナに劣らないのである。ヘブロンは、メッカ、メシナ、エルサレムを加へて、マホメット教徒の四大靈場の一となつてゐる。

それほどまでに、大切であり、有名であるヘブロンも、行つて見ると四國八十八ヶ所の一つの霊場に較べても、見劣りのする位穢い場所であつた。

マクペラの洞穴は、山の腹に掘られてあるものと見えて、マホメット教の寺院は實に妙な場所に位置を占めてゐる。俗人は一切出入を禁止してゐるが爲めに、洞穴は私等には見ることが出來なかつたが、少し金をやると、仕事をしないで遊んで居る案内人らしい男が、門の中を一寸這入つた東門の戸の鍵穴から、ヨセフの墓と、ヤコブの墓を覗かせてくれる。

墓は日本の博物館などによく置かれあるやうな、日本上代の石棺類似のもので、それを教堂の中央に並べて据えてある。之はマホメット教的なやり方であると見える。そこには裝飾らしい裝飾のあるのでもなし、一つの花を祭つてあるのでもない。マホメット教的潔癖で、凡てを沙漠的單一性で押し通してゐる。案内者は山の中腹から見れば、寺院の大きさがわかるだらうと云ふので私は寺院を一周して來たが、別に大きなものでもない。

山に登つて見た所で、美しい景色のあるはでなし、面白い古蹟の保存せられてゐるでもないから、私は東洋流のヘブロンの市場でも見物して行かうと、エルサレムと同じように狹い街路の上を十字に蔽ふたトンネル市場で、アラビヤ人の商てゐる賣物を買つてやらうとひやかしてみた。安いのは、安いが、ユダヤで出來たものは一つもなし、みなダマスコ織だときかされてうんざりした。然し土產ものにもと、ユダヤ人が帽子の代りに頭にかぶるハンカチを一枚買ふた。

王ダビデも此街に居たのだが、その古蹟は何に一つも殘つて居らず、たゞ往還にダビデの井戸と云ふのが一つ殘つて居るだけである。案内者は小使取りがしたいと見えて、私等を無理にも、舊式のガラス工場につれて行つた。然し、別に面白いこともないから、再び自動車の客となつて、マレムの樫の木を訪問することにした。

マムレの樫の木

狹い野道へ無理に自動車を入れて走ること約二十分、ヘブロンから約四哩離れて、公園のようになつた所がある。そのあたりには此附近特有の樫の木が澤山生えて居る。

昔アブラハムが「神の友」としての名稱を戴いたところはこの樫の近くだらうが、七、八百年も經つて居ると思はれる樫の木が、幹の髓を腐らして、辛うじて鐵の支柱によつて外皮ばかりで立つて居る。多くのロシヤの女巡禮がその木を取り卷いた[illegible]

畑の中で建てゐる。このあたり四國の靈場巡りと少しも變らない。木の幹と云はず鐵の支柱と云はず、そこいらあたり天使がアブラハムに現れたカードをベタ〳〵貼りつけてある。その畫と云ひ、色彩と云ひ、實にあくどひ現實的なもので、アブラハムに美女が現はれた形になつてゐる。非常に幻滅的なものである。アブラハムの時代には、樫の木の森が、パレスチナの土地にも、あちらこちらに有つたと思ふと、不思議に思えてならない。それを思ふと、土地が荒れるために、人間が住めなくなるのではなくて、人間が荒れるので、土地が住めなくなるのだと云つたような感じがする。

私はアブラハムと云ふ男が、大好きである。神の召と聞いては、偶像の都を打捨てゝ遠くヘブルの地まで彷徨し、自分に迷惑をかけた甥のロトに對しても、決して女々しい態度を示さず、一旦、彼に背き去つた者に對しても、其男が一敗地にまみれバビロンにまで捕虜になつて行つたと云へば、一族郎黨三百七十騎轡を並べて長驅し、ハマテの入口まで敵を追ひ馳けて、ロトを取り返してやつたなどは、普通の男としては眞似の出來ぬことである。而も恩義を知らぬロトは助けられ乍らも、また候、淫亂の巷ソドムの地にぐづり込んで了つて、天の刑罰が來るのも知らないでゐた。

マムレの村のある夕、天使はアブラハムの天幕のほとりを過つて、ソドムの街の滅亡をアブラハムに打明けた。この時でも、アブラハムはまだロトの味方であつた。

私はこんな親切な男が「神の友」との稱呼を神から戴くのは當然だと思ふ。

私は、マムレの樫の木を前にして、ロシアの女巡禮等のしてゐる通り、土べたの上に坐り込み、アブラハムの拜んだ、神に就て默想してみた。永遠の乳房の神、慈愛の大能者、飢えたるものに對しても猶眼を持ち給ふ神（アタエルロイ）が、しみじみとうれしく感ぜられて、眼に涙の泌むのを覺えた。マホメット經の聖典に「アブラハムの神」「アブラハムの神」と繰返して書いてあるのは、決して意味なくして書かれたのでは無いと、私は深く考えた。

歸りの自働車は早かつた。四十分かたゝぬ中に、早やベテレヘムまで來て了つた。

ベテヘムの誕生會堂

ベテレヘムの街はまたエルサレムと同じく狭い途で、一つの自働車がやつとのことで通れるのである。曲りくねつた途を、誕生會堂の廣場までやつて來た。

誕生教會と云ふのは、要塞のような造りになつてゐる不恰好な教會である「くぐり戸」などでも、やつと一人の男が俯向いて這入るようになつてゐる。それはマホメツト教徒の襲來を恐れたものらしい。

内に這入ると吃驚するような大きくて美しい大理石のイオニツク式圓柱が二十四本兩側にちやんと並んで立つてゐる。誕生會堂で見る可きものは、實際この二十四本の圓柱だけであらう。之はなんでもヘロデ大王の建てたエルサレムの神殿の柱であつたさうだが、ロマ帝國の最初のクリスチヤン王コンスタンタイン大帝の王妃ヘレナがエルサレムから移して、此『誕生會堂』の支柱にしたのだと云ふ。教會としては、實に粗末な醜い原始的な教會であるが、柱だけが、飛び抜けて美しい。それは誰れが見ても、他から運んで來たものであることがわかる。高さ二丈位いある大理石は少しのつぎ目もない玉のような壯麗なもので、私は、歐米各地を廻つて、あれ位、揃ふた美しい柱を何處にも發見しなかつた。恐らくは、傳説が眞であらうと思ふた、さうすると、ヘロデの建てた神殿と云ふのは眼醒めるばかり美しいものであつたことが想像出來る。

聖壇に向つて右側の地下室へ降る階段のすぐ下が、イエスが産れたと傳へられてゐる處になつてゐる。どれだけ信用が置けるかは疑問だが、恐らくはかうした巖穴を既に使用したものであらうと思はれる。巖を隠す爲めに錦を張り廻してあつたことと敷いてある絨壇によつて、アルメニア教會と、ギリシヤ教會などとの地域を定めてあるのだと聞かされて悲しかつた。イエスのねかされたと云ふ持ち運びが出來ないような大きな馬桶が石造であつたのには吃驚した。ユダヤの聖地では、マホメツト教徒と、キリスト教徒が競爭で、傳説を製造する。それで場所と器物に就ては或物を除いては殆んど信ずべき者は無いと云つて善い。誕生教會も、イエスが現實的に生れたと云ふことを知るよりか、巡禮者の心理に傳説がどんな形に印象されるかを知るより外に仕方はない。

私は傳説を傳説として受取る。それに高等批評を加へるだけの野暮では無い。それにはそれだけの大きな使命がある。それで私は魂の糧として、ユダヤの自然美を勉めて、多く吸收することにした。

誕生教會を出て、エルサレムに歸るとコロニーでは丁度晩飯の鐘が鳴つてゐた。

ガリラヤの自然

春が近づいて來た。シリアの荒野が段々淋しくなる。

カナを出たときにはもう、太陽が今日の華やかしい姿を西方の地平線に僅かばかり殘してゐた。黄昏時の夕榮えを背にして、私の自動車は東に向つて一直線に走つて居る。タイベリアスにつく時間が氣になる。それは、一晩しか無い私のガリラヤ湖畔の夕を、まだ暗くならない中に見たかつたからであつた。途は實に善い。自動車の調子も善い。深い谷を隔てゝ向ふに、祝福の山と呼ばれるハッチン山が見える。犀が首を土中に埋めたような形をしてゐる。信州輕井澤の離れ山に似た形である。

ガリラヤの谷々の美しいこと、信州輕井澤の高原を行くような氣がする。ハッチン山が離れ山とすれば、淺間を越えて上州方面の山々を見渡した景色がガリラヤの景色である。ヘルモンの秀峰が富士か御嶽のように見える。西方に微かに殘つた夕燒けに、東方は深い紺紫の色に染められて行く。ヘルモンも、メロム湖方面も、さてはハッチン山の頂きも、その下の谷も、みな神秘的な紫水晶の中に吸ひ込まれて行くようである。ぼんやりと、霧が谷間から昇つてくる。

カナから、タイベリアスまでは、殆ど村らしい村も無く、約十八九哩はたゞ高原を自動車がひた走りに走る。

一つの小さい峠を越す前に右手にヨルダンの河床まで、何の妨げもなく見渡すことの出來る美しいなだらかな斜面に出遇ふ。その斜面は忘れることの出來ない美しい斜面である。春先には生え繁つてゐただらうが、今は水分の不足の爲めに黄褐色に枯れ萎んで了つた雜草が、千數百尺下まで一面に生えてゐる。その間に一本の木らしい木もなく、そこから辷り落ちても別に大怪我は無かろうと思はれる程斜面は一直線になつてゐる。

そこを過ぎると、ハッチン山の左手にガリラヤ湖の上半分が始めて見える。

その時のうれしさ！そして美しさ！

湖面は青銅の鏡の如く青く耀き、バシャンの山々は板の如く平つたい。水は澄んでゐない。錆の這入つた青銅色である。然しそれが如何にも物錆びて何となく俳味を帶びてゐる。ユダヤ地方の色彩の單調な地方から來ると、ガリラヤは誠に樂園である。淡水が足らなくて、二十哩も離れてゐるソロモンの貯池から飲料水を引いてゐる。エルサレムと違つて、淡水は直經三里に七里の大きな湖に一杯ある。これだけでもユダヤ地方と余程違ふ。

タイベリアス程近くなると、向ひ岸が善く見える。對岸は玄武岩層の兀峭たる絶壁であることが手に取る様にみえる。乙女峠の上で、蘆の湖を見ると如何にも美しいが、それにも似て、更

に眼界の廣いのがハッチン山に近く、タイベリアスを見降りた琴湖の景色である。(ガリラヤ湖はリラ琴の形に似てゐるから琴の湖とも呼ばれる。)イエスがガリラヤに居て、善く山に登った筈である。ガリラヤでは、山を登るのと、登らないのとで、景色に非常の差がある。山に登れば地球の中でも最も美しい景色の一部分が覗はれ、山の麓に蟄居して居れば「もぐらもち」のやうな生活に甘んじて居らなければならぬ。

ガリラヤ湖面は、地中海の水平線より約六百八十尺下になつてゐるから、ハッチン山に近い山の上から、タイベリアスに降るのは千二三百尺も降ることであらう。その又斜面から見たガリラヤ湖が何とも云へぬ美しいものである。日本アルプスで善く經驗するやうに途が色々な方面に向いた斜面と凸凹の上に作られたものと違つて、少しも變化が無いものだから、自動車の上から湖面の景色を湖岸の風景が思ひつたけ吸收することが出來る。高原の頂上からはハッチン山の景色とそれに組合せられたカペナウム附近からヨルダンの上の入口が美しく見えたが、山腹からは、タイベリアスの街を基點にして、ヨルダン河への湖水の吐け口まで湖岸線が何とも云へぬ美しい曲線美を畫いて、それが紫色の山の色と深いコバルトに塗られた湖面の色と、エメラルドのやうに澄み切つて沙漠の上に蔽ひかぶさつた大空との三つの對比せられた單色に別かたれて、何とも云へない神秘的な空氣を作つてくれる。

昔、王ヘロデ・アンチパスが、ユダヤ人の嫌ふ墓地を移轉させて、この地に離宮を營造したと云ふのも「故あるかな」と私は胸の中で感歎したのである。

タイベリアの暮色

タイベリアスの街に火が這入つた。それが長く延びた緩やかな斜面にまばらについて何とも云へないほど美しく見える。それは沙漠の街には珍らしい景色である。富士山麓の河口湖畔の夜の景色も捨てたものではない。然しタイベリアスを見降すやうな豐かな斜面が無いために美しく見えない。そして、河口湖はガリラヤ湖に較べて何だか俗つぽい。濱ノ湖は、湖面としては、ガリラヤ湖より遙かに美しい。然し、何だか金持ちに寄せられてゐるやうな感じがする。中禪寺湖は環境から云へば、ガリラヤ湖より優麗なところがある。然し矢張り遊び人の行くところである。

ガリラヤ湖は、遊び人の行くところでもなければ、有閑階級の避暑地でもない。そこは沙漠に住む遊牧民が、辛じて見付けた淡水のオアシスである。それによつて、生きて行かんとする

ペテロや、ゼベダイの子等の漁場である。それにしては、ガリラヤ湖は未だに穢されず、未だに原始的神聖さを保つてくれてゐるのが嬉しい。湖水としては手頃の湖水である。琵琶湖のようでも大き過ぎるし、中禪寺湖のやうでも、小さ過ぎる。對岸が丁度私の視野に一杯に這入つてくる程度で有る爲めか、如何にも心持よく、眼底に殘るのはどう云ふわけであらうか？あれで、あまり對岸が明瞭に見え過ぎると、美しさが無くなるであらうか。あまり遠くもなく、あまり近くもなく、向ふ岸に渡るにも頃合であるから、誠に自然美に生きる人の子の爲めには適當したところであつたらうと私は思ふ。ナザレはエズトライロンの平原を見降す南の山の頂に立てば、多少美しくもあるが、迚もガリラヤ湖畔の美に較ぶべくもない。イエスが、ナザレから引越して、カペナウムに移つたと云ふのは「自然美」の爲めにも出るであらう。

タイベリアスの一夜

湖畔に降りて了ふと、タリベリアスは穢ない一漁村であつた。たゞ一つしか無いホテル——それも春と初夏だけしか開いて居ない如何にも田舍臭いホテル・タイベリアスに、私はとまることになつた。自動車の震動に對して、非常に弱い私は散歩もしないで、風呂に這入つて寢ようと思ふてゐると、どうして知つたか、二人の女性が私を訪問して來た。二人ともオクスフオード大學の卒業生で、まだ年の若い美しい娘達であつた。ひとりの娘は英國人で、友人であるユダヤ系の學校教師をわざ〱英國からガリラヤまで訪ねて來て、數週間の善い日を二人で送つてゐるのだと云ふことを知つた。

その英國の娘はラフアエル前期派のロセツチなどが、好んで畫くやうな優しい線と輪廓を持つた柔和な女性で、ユダヤ系の乙女は現代的な强いところのある社會主義婦人であつた。二人とも雜誌「ニユー・ステーツマン」で私のことを讀んで、私のことを知つてゐたが、宿帳を見て會ひたくなつたからと云ふので、宿の狹いパアラーで夜遲くまで話込んだ。

ユダ系の女教師は、大學を卒業してすぐパレステナの建國運動に參加して、ユダヤにある、凡てのユダヤ系諸學校の視學官として赴任して來た女性である。その話をきいても實にしつかりしてゐる。住んで居るところは、エズトライロン平原の殖民地だそうだが、非常に愉快さうにユダヤ人の殖民地のことを色々話してくれた。カゾース（Kwutzoth）と云ふ共産的村が七十幾つか出來てゐること、然し、共産的に經營も出來ぬところでは、産業組合的にやつてゐること、之が約三十二位はある

ことなど、一々詳しくきかしてくれた。その婦人は逍遙に、この後どんな風にこの資源の豐富でない、ガリラヤの勞働村を指導して行けば善いであらうか、それを教へてくれと聞かれて、ザイオニストの運動に就てあまり詳しく知らない私はたゞ簡單にこんなことを答へた。

『宗教的情熱が續いてゐる間は、共産主義は續きます。それで、ユダヤで共産主義を徹底的に實行しようと思へば、常に宗教的でなくてはなりませぬ。それが、少しでも宗教的道德が冷えて來たと思へば直に産業組合式に轉換せねばなりませぬ。即ち、共産主義の能、不能は全くその道德的熱度の充不充に比例します』

すると、ユダヤの乙女はすぐ答へた。『私もさう思ふてゐる彼等の多くは今日まだ、充分宗教的である。だから、或者はまだ共産主義的にやつて行けると思ふ。然し或者は營利本位であるから、それ等のものに對しては産業組合をやらせてゐる。然し、今日までパレスチナに來てゐるユダヤ人は諸外國からの寄附金で生きてゐる。だから、共産主義をやるにしても、やり易いことは、やり易い』と。

娘達は、私に一二週間殖民地を一緒に留ちないかと勸めてくれた。彼等の勝れた教養ある態度――殊にユダヤの娘の美しい英語と世界的知識に、私はガラリヤの夕が、ロンドンの一夜であるかの如く感じた。私はかうした優れた貴女がこの沙漠のようなパレスチナ開發の爲めに來てゐるのだと思ふと、頼しくもあり有難くもあつた。

寢る前に散歩に出ようと思ふと、今結婚式が一つあるから見に行かぬかと、アラビヤ人が案内してくれたが、何だか遲くなるのが心配だし、ひとり湖畔を逍遙して見たいと、外に出て見たが、星も見えない眞暗な晩で、湖面も何も見えないので、散歩してもつまらないと思つたから、すぐ床に這入つた。

水平線下六百八十尺の凹地には、微風も動かない。六月の初めではあるけれども暑くて、暑くてとう／＼一晩充分眠られなかつた。

カペナウムの朝

翌朝、私は朝七時にカペナウムにひとり自動車を急がせた。昨日、エルサレムから一緒に乘つて來た米國人は、ハイファに出てギリシヤに渡る船を待つと云ふので別れた。

私はガリラヤでは、カペナウムが一番見たかつた。あの美しいイエスの詩に、必ず美しい環境の感化があるに違ひなからう。あの優しいガリラヤ湖畔で話された、多くの平易な譬喩は必ず

や、優しい自然の香が通ふてゐるに違ゐがない。出て行つてはまた歸り、出て行つてはまた舞ひ戻つて來たあのイエスの「神の國」運動の根源地カペナウムを見ずして、私はユダヤを去ることは出來ぬと思ふた。魂の故郷から云へば、イエスに取つて、ナザレも、ベテレヘムも、異邦人の街である。

イエスの最も多く教へ、食ひ、癒したのはカペナウムの地であつた。カペナウムで、イエスは最初の弟子を造り、カペナウムを中心として、ガリラヤ教化の計畫を建てられたのであつた。そのカペナウムが、私は見たかつた。湖にはナイル河で見るような三角形の帆を吊つた、面白い形の船が浮んでゐる。それを右に見乍ら湖畔を走ると、相州葉山の海岸を走つてゐるような氣がする。その山と海岸線の優美な組合せ、湖水の中に突出した岬の美しさ、カトリック教會の修道院の建つて居るところは、葉山の御別邸のあるところよりも遙かに美しい。

このあたりは木も善く繁つて、櫟の森のようなものがところどころに茂つてゐる。イエスを愛したマグダラのマリヤの産れたマグダラの狭い平原を過ぎ、ペテロの産れたベツサイダの原を過ぎると、日本の農村を行くような氣がする。もしユダヤ人が稻を作ることを知つてゐる國民であつたなら、ベテサイダの如きは、最も善き稻作地であらうのにと考へた。奈良の三笠山に似たなだらかな曲線を持つた小山からは、滾々とつきざる清水が、小溝に沿ふて流れてゐる。その水の美しいことは、攝津灘の山から出て來る小溝の水を思ひ出さしめた。

私は、あの小溝の水があれば、一生でも遊んで暮すことが出來る。私はベテサイダを開墾してみたいと思つた。ユダヤ人に稻作を教へてやりたいものだ。

美しい岬を作つてゐる峠を越えて行くと、カペナウムは森の中に見える。今日殘つてゐるのは、天主教の小さい僧院だけである。昔イエスが屢々説教した教會堂と云ふのは、跡かたもなく崩れた儘になつてゐるが、今日はその周圍に垣を繞らして、パレスチナ發掘協會が保護をしてゐる。不思議なことには、今日住んでゐるのは、天主教の修道僧だけであるが、教會の石などは、千九百年前の姿その儘の形で殘つてゐる。雨の降らないお蔭で大理石なども、少しも腐蝕しないで、昨日、地震で倒れたかのように見える。四隅の基礎工事も、教會の上り口も、窓の裝飾も、講壇の恰好なども、イエスの時代その儘が、此處には保存せられてゐる。恐らくは、イエスが手づから觸れた石も、その中には幾つかはあるであらう。兎に角、ユダヤ全國で、イエス時代のもので、その儘保存せられてゐると云ふのは、このカペナウム教會の石位のものであらうと思ふ。今では、天主

教の修道院を作る爲めに、少しは石を他に運んでゐるようだが、もし再建を思ひ立つものさへあれば、殆どイエス時代の會堂の現形に近いものを、現在そこにある石だけで、再築することが出來るであらうと、私は思ふた。會堂は間口八間に奥行十五間位の小さいものではあるが、表だけは大理石で出來てゐて、ナザレの教會よりは、遙かに大きな、そして、美しいものである。

ペテロの家と云ふのが、ちようど、會堂の正面にあるが、そこは、ずつと前に天主教の修道院でも建つてゐたものか、美しいモザイックの敷石がしてある。それが破損せられるのを恐れて、天主教の僧侶は、その上に砂を蒙せてゐるので、案内者の僧侶に教へて貰はなければ、その位置を發見することは困難である。

イエスがペテロの家を中心にして、彼の十二使徒を教育したことが、今更ながら思ひ浮べられる。

カペナウムの岸は、合歡樹に似た葉をした森が生え繁つて、夏でも涼しからうと思はれる。修道院の庭には椰子の木が高く延びて、ガリラヤには珍らしい景色をみせてくれる。修道院を出て、湖水の中につからうかと思つて、着物を脱ぎかけたが、あまり大勢のベドウヰン人の子供が、附近の穢い天幕から群り來つたので、游ぐことを中止した。

湖畔には砂は少しもなくて、黒びかりのした火山石の丸くなつた小石が、積みかさなつて、それに苔が生えてゐるところは貯水池のような感じがした。顔を洗ひ、水を一口飲んでみたが苦臭いのには驚いた。小石の間から生え出てゐるシヤクナンゲに似たピンク色の花を一枝折り取つて、ポケットに入れ、私は暫し、湖水を眺めつゝ瞑想に耽つた。湖面は微動だにしないで、永遠の沈默を守つてゐる。今は湖水に網を入れるものも、この邊りにはないと見えて、一隻の船も動いて居ない。

後に振り向いて見ると、ダマスコへ行く駱駝の細道が、折り重なつた小山の上に斜に黒く見える。今しがた低く地面と平行に張つた貧相に見えるベドウヰン人のテントからは、朝飯の茶を沸かす烟が薄紫色して立ち昇る。

あゝ、禍なるかなコラジンよ、
あゝ、禍なるかなベテサイダよ
汝等の中になせし異能を
ツロとシドンの中に爲せしならば、
彼等は早く麻を被、灰を蒙り、
悔改めしなる可し！
われ汝等に告げん、
審判の日には、ツロとシドンの刑罰は

汝等よりも、却つて易からん！
既に、天にまであげられしカペナウムよ、
また陰府に落さる可し！
そは、なんぢに行し異能を
もしソドムに行しならば今日までも
留たもちしならん…』マタイ傳一一章二〇―二四節

イエスのこの詠嘆の詞は、あまりに完全に成就して、今は住む人の影もなきこのガリラヤの美しき自然に、メシヤの言葉のみが生き生きとして、私の魂に感じる。魚も躍らず、鳥も飛ばず、私はたゞギレアデの山々を見守つて『時は滿てり、神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ』とイエスの云つた文句を今更の如く考へ直すのであつた。

悔改めざりし民衆は、何處へか消え去つた。そして、悔改めを要せざる綠の山河だけが、ひとり默々としてそこに立つてゐる。これを思ふと、天地の運命のあまりに不思議なことに、たゞ忙然とする。

『バクシーシ、バクシーシ！』

ベドウヰンの子供等が「心付け」を貰はふと、私に詰め寄つてくる。私はまた現實の世界に取戻されて、これ等の兒供等もどうかしたければいかぬと思ひ浮べる。

（おはり）

智能心理學（松本亦太郎著）

現時の智能研究の著しい特色は智能その物及び智能の成果を量的に表示する事に努めつゝある事であらう。智能の量的表示には絶えず反對の存在するに拘はらずその企圖と遂行とはむしろ成功しつゝある今日、本著のなされた事はただに著者のみのよろこびではあるまい。年齢の相違に從い空氣溫度濕度等の環境的諸條件に從ひ、智的機能の發現が影響するところを明らかにし、また智的作業の繼續遂行から作業そのものが如何に影響せらるゝかを見るこれ等の智能探求の最近の業績と、舊來の心理學が概ね不問に付した領域から産まれたものを、該博に例證し論ぜられてある十六編からなる大冊であつて、特にわが國人の年命の消長に關する考察と、東西の心理學界の現狀に就ての論文は、智能心理學が現代の心理學中に如何なる地位を占むるかを明かにしてゐる興味あるものである。（東京日日）。（菊版、九七三頁、九圓、芝愛宕下町一の一、改造社）


東京景物歌
帝國議會
岡本かの子



ロリマー會見記

鶴見祐輔

一

ブロード・ストリートの停車場で、汽車から降りた自分は、芥を洗ふやうな人ごみのなかを、縫ふやうにして、廣い石段を下りて、街にでた。古風な煉瓦造の大きい建物のつらなつたフヰラデルフヰアの町のうへに、秋の日射しが一ぱいに、降り灑いでゐた。左手の市役所の石造の建物の頂邊（てつぺん）には、いつもながらに、ウイリアム・ペンの像が、大きいクエーカー信徒の帽子をきて、突つ立つてゐる。市役所内の石だゝみの廣小路をぬけながら、自分は考へた。

『今日は、とう〳〵この町へ、仕事をしに來たんだ』

こう思つたら、不思議な感じがした。丁度、十三年まへの今ごろであつた、自分が新渡戸博士ご夫婦のお伴をして、桑港から一氣呵成に、大陸を横斷して、初めて降りたつた東部沿岸の大都市は、この費府であつたのである。學校を出てまだ間もない時分のことで、西も東も見當のつかない自分は、初めて見るこの世界的大都會をひたすら驚歎して眺めてゐた。栗樹街（チェストナット）といふ町に出ては、フランクリンの自叙傳中で、あの若い貧しい主人公が燒栗をかぢりながら歩いてゐたのは、この邊か、などゝ小供らしい懐しみをもつて、見廻したことであつた。獨立宣言の殿、若き愛國者たちが、うち鳴らしたといふあの鐘に、いまはひゞが入つているのなどを、珍らしく見入つてゐた。華聖頓といふ人にたいしても、純眞な尊敬を抱いてゐた時分であつたので、彼の足跡を印した、この町を貴いものとして考へてゐた。

十三年の年月は、かゝる傳奇的情緒の貝殻から、自分を追ひ出してくれた。詩興横溢する革命傳中の英雄兒のうしろにも、地道な冷やかな經濟的因子が、儼存してゐたことを知つた今日、獨立の鐘も、獨立館も、單純な熱情奔逸の遺跡だとは、見

てゐない。ましてや、この立ちならぶ俗惡な家の一軒々々が、史的ローマンスの情味をもつて、遊子の心眼にせまる、とは毛頭思つてゐない。しかし、新しい別の意味において、この大都市は、自分の深い興味を唆るやうになつた。

それは、現代米國の生きたるシムボルとしてゞある。商業都市としての、この町自身には、紐育だけの壯觀はない。政治都市としても、紐育にも、華聖頓府にも及ばない。文化の中心地としては、ボストンにすら及ばない。しかし、この町には、他のすべての米國都市にないものが一つある。否、全世界のいかなる都市にも、ないものが一つある。

それは、世界第一の雜誌たる、サタデー・イヴニング・ポーストである。そして、この雜誌を、僅々二十年間にこれだけに、仕上げた天才ロリマーが、この町で働いてゐるといふことである。

現代米國は、他の何國も生まざりし、色々の人を生んだ、發明家エヂソン、新植物を器機のごとく自由に製造するバーバンク、電氣事業界の天才スタインメッツ、自働車を紙のごとく普及さしたヘンリー・フオード、『ナイアガラ瀑布と並ぶ米國の二大壯觀』と、モーレー卿を嘆賞せしめた自然兒ローズヴルト。これ等はみな、米國のみが產出する人間界の奇觀である。

しかし米國人にむかつて、あなたの國の代表的人物五人の名をあげてくれ、といふと、大ていの米國人は、グツと詰まつてしまふ。英國でこの質問をすると大ていの英國人は、自國の代表的人傑を、すら〳〵と答へる。佛蘭西でも同じである。しかし、米國では、この質問に即答を與へ得る人には、ついぞまだ會はなかつた。きつと、みな額に手をやつて、

『さうさ、ねー』

といつて考へ込む。さうして、

『米國には、英國のやうに、飛びぬけた人がゐないからね』。

と、今更らのごとく米國に指導的人傑の缺如せるを嗟嘆する。しかるに、つい近頃、自分は、兩三の有力なる米國人が、偶然にも『米國第一の働き手』といふ人の名前をきいた。それが、このロリマーなのである。

自分は、どうしても、このロリマーに、會はなければならない、と決心した。

そして、いま、停車場を降りて、彼のオツイスにむかつて、歩いてゆくところなのである。

二

約束の二時には、まだ大分ひまがある。ぶら〳〵町を歩きな

から、ゆくことにする。一緒に、米國では、時間の時間を打ち合せておいて、この約束に、うつかり後れてゆかうものなら、大失策をする。もうあとの客の時間がきてゐて會へない。のみならず、あの人は後れるといふ印象を貽すと、あとが厄介だ。時間勵行で有名であつたのは、ウイルソンであつた。ロリマーも十分の隙なく働いてゐるのであらふから、きつと、時間のやかましい人であらふ。しかし、今日は、まだ大丈夫だ、などゝ考へながら、歩いてゆく。

紐育から來ると、費府のきたないのが、目につく。昔ては、紐育と競爭してゐたのが、いつの間にか、市俄古に追ひこされ、デトロイドに追ひこされ、ロス・アンジエルスにさへ負けてしまつた。そして、狹い通りに、自働車が一杯通るので、交通整理のため身うごきも出來ない程である。人道は人道で、悠長な顔をした年老ゐた婦人たちが、ゆる〳〵歩いてゐる。米國位、不思議な國はない。川一つ隔てゝ隣り町となると、もう町の氣分が、ころりと變る。それは、日本のやうな劃一的な中央集權の國には見られないことである。建物や人の着物は、同じであるが、町々で妙なところが違つてゐる。それは、欧洲での本國が違ふからである。

四辻々々で、交通巡査に止められて、がうを煮やしながら、やつとのことで、獨立四辻（インデペンデンススクエア）について、さてと、見廻はすと、小公園を前にして、二十階の赤煉瓦の見上げるばかりの大建築が、聳えてゐる。町區全體（ブロック）が一軒の建物で塞がつてゐる。正面に立ならぶ、大理石の希臘風の圓柱幾個のうしろに、大きい硝子のドアーが六つほど列んでゐる。花崗石の廣い階段を七つ八つ踏んで、扉を押すと、うちは幅二十間、奥行五六間の大廊下である。正面に、高さ二間幅五六間の壁畫があつて、その間に希臘風の白い小堂、その前に、噴水を湛へて、滑らかな噴水が、涼々と高い天井にむかつて、吹いてゐる。白いコンクリートの床は、塵一つとゞめぬ程、滑らかに掃除がとゞいてゐる。

これが雜誌社か、と自分は一寸、呆氣にとられた。左手に大きい樫の机があつて、そこに一人、中年の男が春の日長のつれ〴〵といつた風に、坐つてゐる。自分はつと進みよつて、

『紐育から、お約束の時間通りに、ロリマーさんに會ひにきました。』

といつて、名刺を出した。

彼は、机の上の受話器をはづして、話したと思ふと、すぐ、

『九階に、お昇りなさい。』

といふ。廣廊下の左隅の昇降機にのつて、自分は、音もなく、すーつと、昇つていつた。

九階で、昇降機を出ると、二間幅の廊下、床は暗黄色の木、よく拭きこんである。右手の大きい机によつて、金髪に碧い絹の衣裳を輕くきこなした、若い娘さんが、しきりに新刊の雜誌を見てゐる。

足音をきいて、一と顏をあげると、

『あ、いらつしやいましたか』

と、紅い頰に快活な笑ひをたゝへて、すらり、と立つて腰ほどの高さの木の棚のやうな扉を、押して、奥の部屋に消えていつた。すぐ、出てきて、

『どうぞ』

と、右手の大きい部屋を、眼と手で、さしたかと思ふと、もう、机に腰をおろして、さき程のつづきを一心に讀み出した。

あたりは、森閑として、物音一つしない。

自分は、その低い扉をあけて、奥の廊下の左手の、第一の戸をあけた。

三

奥行二間半、幅四間ほどの廣い部屋の眞中に長さ一間半、幅五尺程の大きい木机がおいてある。つき突りと、右手に大きい窓四つ五つ、床にはうす鼠色の部厚な絨氈、天井は白壁、秋の日が一ぱいに射してゐる。机の上にも、床の上にも、塵一つ落ちてゐない。紙片一つ置いてない。ただ、明るくて、靜かで、大きい。これは、素より、ほんの刹那の印象である。

『カム・イーン』

大きいはりのある聲が、したと思ふと、右手の窓ぎはの椅子から、おそろしく丈の高い男が、むく〳〵と立ちあがつて、

『グラッド・ツー・シー・ユー』

と長い手をさしのべた。

之れが、ジョージ・ホーレース・ロリマーである。

鳩色をぐつと黒くいつた濃い背廣、茶色の半靴、腹のあたりに無造作に下つてゐる太い金鎖。ダブル・カラーに、黒つぽいネクタイ。苔のやうに、ぴつたり頭にくいついてゐる半白のかみの毛。心持ち長い顏は、日にやけて赭い。廣い額、高い鼻柱、ひげを剃つた上唇から顎にかけて、寸分もたるみない程、引きしまつた筋肉、やゝ前に突き出た强情な心持ちを示す顎、太い眉毛。眉毛の下に深く陷つた眼孔、そのうちから、炯々と光つてゐる雙眼、手といはず、肩つきといはず、顏といはず、コチ〳〵に硬いといふ感じ。頑丈な、强健な、負けじ魂の人といふ印象。

『今朝、マッコツソンから、手紙で、詳しく、あなたのことを、

いつて寄こしました。あの男には、いつお會いでしたか。何、きのふの晩？　あそう、ロートス倶樂部で？　そしてすぐ、あなたの子供の名を言つて健康かつて、聞きましたつて？　あ、そう、何しろ、あの男は記憶力の恐ろしくいゝ男で、また、それが自慢でしてね。アッ、ハッハッハッ。』

と、さびのある聲で、だしぬけに大きく笑つた。と見ると、その瞬間に、彼の顏の表情が、すつかり變つた。

重くるしい室内の空氣が、一度に、パツと散つて、爽快な、開けつ放しの亞米利加人が、この六尺幾寸の剛强漢のなかから、刎ねとばされたやうに、飛び出してきた。炯々と光つてゐた眼が、小供のやうにいたづらな表情にかわつた。そして、彼は、からだ全體を揺すつて大きく笑つた。男性的に笑つた。

はじめの一二分の直感では、この人は、話しにくいな、と、自分は思つてゐた。實は、今日は自分にとつては、一生一代の大切な用事をもつてきてゐるのであるから、どう切り出さうかと、一寸當惑してゐた矢先き、この豪快なわらいである。これは、すぐ突撃するのだ、と自分は思つた。

『日本の近情をすこし、話して下さい』

彼は、すぐ矢繼ぎ早やに質問した。流行に永い間の雜誌經營者生活である。自分に切り出す隙も、あたへないで、彼の方から、自分を試驗しだしたのである。

自分は、各地で講演してゐる現代日本論の内容を、手短かに話して、最近におこつた米國の移民法が日本人にあたへた烈しい憤慨の情について、縷述した。

だまつて、はあ〳〵と、聞いてゐた彼は、突如として、

『そして、亞米利加の聽衆は、どうゆう態度で、あなたの講演を、うけいれましたか』

といつた。成程と、自分は感心した。米國の人氣、輿論、好尙、を早く測定して、いつも時流に掉して、後れないやうに、あの大雜誌を經營してゐる彼は、各所で講演して歩いてゐる自分を通して、米國の對日感情を、測量してみやう、としてゐるのである。

こゝで自分は、少しく、彼の經營する雜誌と、彼自身について、物語らなければならない。

四

彼は、一八六八年、即ち明治元年の生れで、自分の會つた時は、五十六才の男盛りであつた。生國は風光の明媚と、人情の諄良と、又以前は名馬とウヰスキーの産地として、聞えた、ケンタッキー洲の、しかも首府ルイヴィルである。エール大學を

出て、記者となり、ある雜誌に出したのが、紋きもの〻『腕一本で叩き上げた商人の我が兒に與ふるの書』といふ話であつた。これが大變な評判となつた。これを讀んで感服したのが費府で雜誌經營をやつてゐた、カーテイスである。

カーテイスは有名な、ベンジヤミン・フランクリンが、一七二八年に創刊した、週刊雜誌サタデー・イヴニング・ポーストを、引受けて經營して見たが、どうも思ふやうに賣れないので、弱つてゐた。しかし、後に現代米國の出版王となつた程であるから、流石に眼が高かつた。彼はロリマーの文章を見て感服した。これ程、面白い文章の書きこなせる男なら、他人の文章のよしあしも解るに、相違あるまい。この男に、自分の雜誌を、やらして見やうといふので、三顧の禮をもつて、ロリマーを招いた。ロリマーが承諾して、この雜誌の主筆となつたのが、一八九九年、彼が、三十三歲の若いときである。

ロリマーが引受けたときの、サタデー・イヴニング・ポースト誌といふものは、毎週僅かに、二萬内外の發行部數で、あつたといふことである。

ロリマーはこの雜誌の主筆となつて、三年目に、あの續きもの〻話しを、單行本として出版した。有名な『レターズ・フロム・エ・セルフメード・マーチヤント・ツー・ヒズ・サン』が、これである。この本は、數年間に百萬部を賣りつくし、今日もなほ、廣く米國と歐洲とで、讀まれてゐる。

果して、カーテイスの考へた通りであつた。ロリマーの入社と〻もに、サタデー・イヴニング・ポーストの態裁が一變した。彼は、米國の讀書界を、あつと言はすやうな新案を、後から〱發表した。讀者が吸ひつけられるやうな面白い記事を、滿載した。彼の著述の賣れたやうに、彼の主宰する雜誌が、うれ出した。萬が十萬となり、十萬が百萬となつた。それでも、彼は滿足しなかつた。サタデー・イヴニング・ポーストが週刊で百萬の發行部數を示したときに、大低のものはこれが米國讀書界の飽和點であらうと思つた。ところが、ロリマーは、これで決して滿足しなかつた。彼は、カーティスに勸めて、ペンシルヴエニア州の山の中に、大きい製紙工場をつくらした。そして、それでも足りない時がくるから、といつて努力した。ところが、あまり大きな製紙工場であつた〻めに、その經營が困難をつげた。ロリマーの獻策が外れた、かと見てゐるときに、歐洲戰爭が始まつた。各新聞、各雜誌社が、紙の缺乏に苦しみ出した。カーテイス出版會社だけは日の出の勢で發展した。サタデー・イヴニング・ポーストは二百萬といふ發行部數になつた。そして、とう〱最近に三百萬弱の部數を發行するやうになつた。しか

も調刊であるから、一年には一億五千萬の發行部數である。

ところが、發行部數だけなら、さして驚くことはなかつた。ほかにも、百萬を越した雜誌は、いくつもある。サタデー・イヴニング・ポーストが、世界中で、二番のない一番の雜誌といはれるのは、發行部數でなくて、その勢力である。日本の雜誌の四倍大位の大きい雜誌で、頁數が二百五十頁、日本の雜誌の型にすれば、千頁の大きい雜誌で、それが一部僅々五仙である。こんな贅澤な雜誌が、なぜ僅々五仙で賣つて引きあふか。

ロリマーが、のちに自分に直話したところによると、一部の生産實費は二十仙弱であるといふ。して見れば、日本の金で、四十錢のものを、十錢に賣つて、一冊につき三十錢宛損をしてゐるのであるから、三百萬部で、大約、九十萬圓の損失である。賣れゆきが、増せば増すだけ損が嵩むわけである。現にアメリカン、といふ月刊雜誌は、百萬部を越へてから、損が多くなつて、潰れかゝつた、といふ話しである。しかるに、サタデー・イヴニング・ポーストだけは、なぜ、三百萬賣つて、毎週九十萬圓の損をしてやつてゆけるか。玆にロリマーの絶倫の天才が顯はれてゐるのである。

それは、法外なる廣告收入のためである。

この雜誌の一頁の廣告料は、一萬五千圓で、しかも十二三回分を契約しなければ、出してくれない。そして、雜誌の大部分は、廣告である。その廣告收入が、一號について、二百萬圓はいるのであるといふ。これで、雜誌賣上げの損失が、いかに塡補せられてゐるかゞ解るわけである。

しからば、何故に、この雜誌だけに、かゝる法外な廣告が載るのであるか。そこに、ロリマーの非凡なる能力がある。

第一にこの雜誌が、他の流行雜誌と異る點は、この雜誌は、讀者が、讀む雜誌である、といふことである。これだけでは、說明が充分でないかも知れない。世の中が忙しくなると、多くの人は、新聞でも、雜誌でも、表題と見出しだけを眼を通して、內容まで、一つ〳〵丁寧には讀まないものである。殊に、忙しがりやの米國人は、大ていの雜誌は、買つてはおくが、碌に眼も通さず、甚しきは、紙封も切らずに積んでおく。しかるに、サタデー・イヴニング・ポーストは、あんなに內容の澤山ある雜誌であるにかゝはらず、皆が讀んでゐる。玆に、何人も企及しがたきロリマーの天才がある。

自分は、色々の人と話して見て驚いた。サタデー・イヴニング・ポーストは、廣告まで讀んでゐる人が多い。之れは何故であるか。その理由は、あとで、ロリマー自身をして、語らしめたい。

第二、この雜誌は、人の信用する雜誌だからである。こゝに、ロリマーの並々ならぬ苦心がある。彼は、最初の頁から、最後の頁まで、彼の心血を注ぎこんでゐる。ために、この雜誌の記事は、從來一度も名譽毀損の訴訟をうけたことがない、と彼が、自分に語つたやうに、彼は事實の正確といふことに渾身のちからをこめてゐる。したがつて、之れが讀者に映つて、皆んなが信用して讀む。そこで、廣告のきゝめが、他の雜誌と格段にちがふから、法外な廣告料を支拂つても、みながこの雜誌に出すのである。

雜誌の資本主義的經營といふ點からいへば、サタデー・イヴニング・ポースト社は、間然するところなき、大資本王國である。丁度、現代米國が全世界の資本主義の總本山であるやうに、カーテイス出版會社は、雜誌界において、正にその資本主義を、完全に代表するものである。

從つて、この雜誌の勢力、といふものが、またすばらしいものである。大きい綺麗な繪入り雜誌であるために、讀者が、これを、紙屑籠に捨てないで、手から手に渡つてゆく。そこで、一冊を十人乃至十五人が、見るとして、三千萬人から、四千萬人の米國人が、この雜誌を讀むといふ計算である。實際、米國を旅行して、どんな片田舍にいつても、サタデー・イヴニング・ポーストを見ないことはない。

從つて、米國の輿論を動かすものは、新聞でなくして、この雜誌であるといふ定評である。大てい、毎號、短篇小説が十篇、續きものゝ小説が三四篇、論文が十篇ぐらいである。讀者をつないでゐるのは、小説であることは、勿論である。そこで、こゝに小説や論文が數回載れば、それで、米國文壇で一流作家として聲名が確立するわけである。全米國の文章家は、ロリマーの眼鏡に叶つて、一度この雜誌に出さうと、苦心慘憺する相である。

歐洲戰爭中、ロイド・ジョージや、クレマンソーや、獨乙のテルブルヒが筆をとつて、花々しき宣傳戰を試みたのも、この雜誌上であつた。今日、米國の大統領クーリッヂ氏が、初から終まで精讀するのは、この雜誌だけであるといふことを、氏の友人から聞いた。之れは、平民國である米國において、一般人民の思想傾向を味讀するには、このやうな普遍的な雜誌によることが、一番好都合であるからである。

五

『あなたは、どうゆう主義方針で、サタデー・イヴニング・ポーストを經營なさいましたか」

と、二度目に會つたときに、自分は、だしぬけに、彼に問いて見た。

彼は言下に答へた。

『世の中につまらない思想（アイディアス）はなく、世の中につまらない事實（ファクツ）はない。たゞ、つまらない記者（ライターズ）あるのみ。といふのが、本誌の唯一の方針です。要は、材料の取り扱ひかたですね。實際、取り扱ひ方を知らない人にかゝつては、どんな材料でも、讀めたものではありませんものね。』

"There are no dull ideas, no dull facts, but dull writers." 實に、名言であると、自分は感服した。

これが、サタデー・イヴニング・ポーストの今日を、築いた原因である。

六

こゝで、自分は、再びさき程の初對面の話に、ひき返す。

自分は、そこで、ロリマーの問に答へて、自分の忌憚なき言論が、いたるところ米國の聽衆の傾聽を買つた模樣をのべ、かつ、數百ケ所から講演の招待狀が、きたことを話した。

彼は、默つて聞いてゐた。

自分は、だん〳〵時間の移つてゆくことを感じた。早く切り出さないと、駄目だと思つた。しかし、今、切り出して斷られてしまへば、それでもう、おしまいだと思つた。自分が、失敗してしまへば、外の日本人が、また後をつゞけることが出來まいと怖れた。一寸、自分が、言葉を切つた。

敏感なロリマーは、自分が、今何を言ひ出さふと、してゐるのかを見拔いてゐた。また見拔いてゐることを自分は、知つてゐた。なんだか、重苦しい氣が、部屋に滿ちて來るやうに感じた。

『實は、私は、初めて米國の土を踏んだ一九一一年以來一つの希望を抱いてゐきました。それは、いつか一度、サタデー・イヴニング・ポーストに、自分の記事を掲せたい、といふことでありました。そのために、私は過去十三年間、あなたの雜誌を研究してゐた。私に、一つアーティクルを書かして下さい。』

これは、生れて初めて、自分が、米國人と仕事の談判をする經驗であつた。しかも、最初にロリマーにぶつかつた、といふことが不思議な緣であつた。

『お書きなさい。喜んで、掲載しませう。五千字。あなたの思ふことを何なりと。』

何の造作もなく、彼が、ピタリ、と言つた。

あんまり、事があつけなく運んだので、自分は一寸戸迷ひした。

『題は、何としませう』――

『ジャパン・アンド・アメリカ』

『文體についてのご注意は』

『深い思想を有する人の文章は、常に簡約平明でせう』

『時間は』

『早いだけよろしい』

たゞそれきり、永い年月の間、自分が、考へぬき、調べぬいてゐたことは、僅々二三十秒で片附いてしまつた。自分は、一寸力拔けがした。

しかし、それは、自分が、ロリマーを知らなかつたためである。彼の、仕事ぶりを、知らなかつたゝめである。その後、自分は、四度彼を訪問して、都合五つ論文を彼の雜誌に掲載してもらつた。これで、自分が、渡米した目的は達せられた。自分の百五十回の講演よりも、この雜誌に一度書いた記事の方が、有效であつたと、多くの米國人は話してくれた。

用事がすむと、ロリマーの緊張した顔が、またもとのやうに、氣輕になつた。

『これを、ご覽なさい』

と一枚の紙を、机の抽出しから出して

『これが、毎週の計劃です。いつでも、今度は廣告が何頁あると、いふことを調べて、その模樣で、かうして、社說のはさみ場を動かすんです。この社說の場所が定まると、雜誌の頁數がきまるんです』

とまるで、なんでもないことのやうにいふ。

また一枚、大きい紙きれを出して。

『いま丁度、あなたの來られる前に、この廣告文を書いたんです。ね、これは、さう五分もかゝりましたか』

といふ。見ると、何かの會社から、この雜誌に出す商品の廣告文である。

『あなたは、廣告文まで、自分で書くんですか』

『さうです。賴まれゝば、いくらでも書きます。又廣告主の方で、書いてよこすのでも、そのまゝは、出しません。私のところの廣告は、雜誌社が廣告の內容に對して責任を負ふことにしてゐます。だから、廣告の申込があると、必ず人をやつて、會社の內狀を調べて、間違なしと決定したものでなくては、出しません。』

成程と思つた。これ程に苦心してゐるのである。

『しかし、よくそんなに、あなたは、時間がありますね』

と、うつかり、自分が訊いた。
『いや、時間は、かゝりません。この位の廣告文なら五分間で書きます。私は、ものに屈托しませんから、仕事に長い時間をつぶしません。原稿は、小說でもなんでも、私が全部、眼を通します。社でよみきれないと、家へ持つて歸つて皆んな、讀んでしまいます』
自分は、ウィルソンと、ローズヴエルトのことを思ひ出した。ウィルソンが、歐州戰爭中、外交文書を自ら立案起草した早さは、今も有名な話である。また、ローズヴエルトの早さは、ちとそばの者が心配した程の速力であつた、といふ。ロリマーも、同じ型の米國人である。彼は、全盛時代の、太刀山の突つ張りのやうに、來る仕事を、片つ端から、土俵の外へ、突き出してしまふ。そして、すんだ後では、ハツ、ハツ、ハ、と大きな聲で笑つて、もう外の仕事に掛つてゐる。だから、サタデー・イヴニング・ポーストには、ロリマーの精神が、廣告文のうちにまで、潑剌と躍動してゐるのである。

七

これは、あとで氣のついたことであるが、彼は、自分に面會の約束をする前に、紹介人のマーコツソンから、充分自分のことを訊いておいたに違ひない。それから、彼は自分が、部屋にはいる瞬間に、大きい机のうしろで、ぢつと見て、大たいの見當をつけて、それから、自分の對米意見を一寸聞いて、そのあとで、彼にとつて、最大切なことを、一つ聞いてゐるのである。即ち、米國聽衆の人氣である。彼は、三千萬人の讀者を有する身の上として、一般思潮の傾向を怠らず眺めてゐる。そして、一九二四年の米國が、排日移民法通過の反動として、滔天の親日氣分に變じたことを知つてゐた。そして、從來、自分の雜誌で十數年、排日記事を連載して來たその方針を、よい潮合に、切りかへなければならぬことを、熟考してゐた。そこで彼は、米國の聽衆のうちに、露骨な米國文化罵倒論をして歩いてゐた自分を捕へて、文章を書かして親日の讀者の風潮に投じて行つた、のではあるまいか、と、多少穿ちすぎるかも、知れないけれども、自分はそう思つてゐる。そして、彼が、十數年間の排日方針を變ずるのに、僅か十數分の會見中の印象で、決定した仕事ぶりを見て、彼が、あの大事業をし乍ら、綽々として餘裕のあるのは、故ありと感心した。
二度目に、ロリマーに會ひにいつたときには、丁度、米國で財政金融のことを、明快に書くので有名なル・フエーブルがきてゐた。彼が歸つたあとで、ロリマーが、嗟嘆していつた。

『金持ちに文章を書かすぐらい、六ケしいことはありませんね。あの男は、株式取引所で、仲買人をしてゐて、大儲けをしてからは、もう原稿料なんか、いらないんだから、之れに書かすには、毎日のやうに手紙や電話で、やかましく催促するより外ない。しかし、あの男以上に經濟問題を、面白く書ける人はないのでね』

そこへ、漫畫子が、四五枚の畫を持つてきた。くるり、と椅子の上でむきかはつて、ロリマーが、鉛筆を取つて、すら〳〵と何か、畫の上に書いて、

『この畫がよろしい。こゝをかう直して』

といつて、漫畫子をかへした。ものゝ二分も、かゝらない。

自分が、

『あなたは、畫も直すのですか』

ときくと、

『私のところの雜誌にでるものは、何から、何まで、みんな、この机で初まつて、この机で終るのです』

と、自分の机を指した。小說も、畫も、論文も、廣告文も、悉く彼が案をさずけて、作らして、出來るとこれを讀んで、校正刷の締切まで、彼が眼を通すのである。

『小說まで、あなたの案なのですか』

と自分が訊いた。それは、紐育での話に、この雜誌に出る小說の筋は、ロリマーがさずけるのである。と聽いたからである。

『普通の小說は、私は關係しません。たゞ、ある思想を米國の輿論にしやうと考へると、それは、論文だけでは、人が讀まないから、一流の小說家に賴んで、小說に仕組ますのです。例へばですね、今日、米國の國防のためには、軍艦など多く殖すのは、無駄だと、私は考へてゐる。將來の戰爭は、飛行機と、潜行艇と、タンクだと、私は信じてゐる。然るに、米人はこれ等について知識が足りない。だから、私は先づ、陸海軍の將官に、論文として、これを書かし、同時に、小說に仕組んで、いま連載してゐる。』

こゝに、現代米國の研究者の見逃しがき重要な因子がある。ロリマーが、米國の輿論を作る、といはれるのは、彼のこの種の周到な計劃と方法からきてゐる。五六年前に米國に居られた人々は、サタデー・イヴニング・ポーストに連載された長篇小說『太陽の種子』を記憶されるであらふ。それは、カリフオルニア日本人の生活を、あしさまに書いた物語である。かくして、排日移民法通過の大勢が隱約のうちに、全米に培はれたのである。いま、ロリマーは、佛蘭西の軍國政策の攻擊をしてゐる。

數年後に、佛國の政治家たちは、臍を噛むの悔をすることとなるだらふ。かゝる折りに、自分の泌々感服することは、英國の手のゆきとゝいてゐることである。英國の政治家たちは、かゝる徹妙なる米國政界の素因を洞見して、これに對する一切の準備が、平生から出來てゐる。

『食堂に參りませう』

といふ、彼のあとについて、自分は、昇降機に乘つた。最高のフロアーについて、昇降機から降りると、パッと、眩しいほどの色彩。紅、紫、碧、褐、白、黃、一せいに花の開いたやうな色どり。幅四十間に、奥行、十五間ほどの廣い室のうちに、五六百人の金髮の若い娘さんたちが、みな一台のタイプライターを前にして、餘念なく、仕事をしてゐるのである。

『こゝに、立ちどまつては、いけませんよ。すぐ食堂へ食堂へ。アツハツハツハ』

と、ロリマーの、大きい聲がすると、大きい部屋のうちから、クス／＼笑ひ聲が洩れる。

右のつき當りの食堂にはいると、

『お客さんをつれて來ると、あの部屋に立ちどまつて、困ります』

と笑つて、さてと、社の幹部の人々を紹介する。

この大きい建物のうちに、何千人かの使用人がゐて、それが、彼の手足のやうに氣輕に動いて、この大きい雜誌ができて、ゆくのである。

『だから、言はないことではない』

と、彼は、突然大きな聲を出していふ。

『今から三年まへぢやないか。僕がポーストの社說欄で早く米國のゴム政策を樹立しないと、英國に死命を制せられる、あれ程痛論したのに、朝野が耳をかさないから、こんな事ことになつたんだ』

と。それは、丁度、一九二三年の四月で、英國が、突然ゴムの値を上げて、米國の金が、どん／＼英國に吸收され出したときである。

世界のゴム戰爭を、いま茲に縷述する必要はない。外交とは何であるか。抽象論ではない。が嘗ては、鐵と石炭との奪ひあいであつた。佛蘭西が、ルールの石炭ほしさに出兵したのは、つい三年まへである。それから、世界の石油田の爭奪戰。メソポタミアで、英佛米がいかに入りみだれて爭つたか。今ごろ北樺太でさあるまい。かゝる營利的外交戰に、如何に英國政治家の達見が他國に先鞭をつけてゐるか。石炭も、鐵も、石油も、着々として入手した英國は、いま一つの武器を獲得して、ひそ

かに、對米外交挽回の機會を待つてゐた。それが護謨である。英國は、何でも不足なく生産ある。たゞ護謨だけが無かつた。その護謨の世界中の生産地は、みな英國領である。而して、ゴムの第一の消費者は米國である。英國が、三年前に、時の藏相ボールドヰンを米國に派遣して、對米負債償還の契約をきめた時に、世界中は驚いた。何の成案があつて、あんな法外な負債償還契約をするかと思つた。二年たつたら、英國が、ドンと、護謨の値をあげた。そして、英國から、利子として、米國に支拂ふだけの額を、英國は護謨の賣上高として、取りかへしてゆく。さうして、ロリマーが、ッキラデルッキアの、ポーストの高層樓上で、地團駄を踏む。しかしとにかく、三年まへに、それに氣がついて、國論の喚起に努力するジャーナリストを持つ國は、仕合せである。

「英雄兒は、新しいところに出るのだ」

さう思ひながら、自分は、紐育への汽車のなかで、あの大きい頑丈な漢子のことを考へた。今でも、英雄兒は、軍人界と、政治界とだけから、出ると思つてゐる人もある。しかし、時代の大きい波紋が、日々目まぐるはしいやうな勢で、廻轉してゐる。ヒアノ彈きが、新興共和國の大統領となる世である。新しい社會を動かす新しい力は、古い社會で威張つてゐた古い型の勢力ではない、米國といふ新しい社會に出たジャーナリストは、英國に出たのとも違つてゐる。ノースクリッフ卿と、ロリマー君との相違が英國と、米國との相違である。

(一九二六・二八)

北京印象記（承前）

犬養健

四　日記抄（續）

八月十四日

午後近藤氏の案内で城南の陶然亭といふ古寺へ行く。

しかし例のとほり人力車を雇つて内城正陽門を出、先農壇公園のあたりまで來ると、車夫もそろ／＼地理が分らなくなつて來る。もと／＼陶然亭はさう大伽藍といふわけでなく、むしろ近郊の詩宴の席として風流人の間に愛されてゐるのである。結局公園の門柱の傍に立つてゐる巡査に訊ね、その塀に沿つた細い道を入つて行く。この邊はもういかにも場末らしく、木のない、演地のやうな凸凹のはげしい空地に、塀を妙に高くめぐらせた小さい家があちこちに塊つて、自然と一つの町をなしてゐる。これが廢れてしまつた工場の附屬家屋のやうに陰氣で、いぢけて、荒れた光景を見せてゐる。その癖耳をすませば、内城の雜音はまださう遠くはないのだ。——或る路角の大きい一膳めし屋では、苦力が往來にまで溢れて、得體の知れない焦茶いろのものを頬張つてゐた。遅い晝食らしい。だがその不氣味な騒ぎさへ、終に人里へ出たやうな華やかな印象を與へてくれるのだ。

それから數丁、一面に蘆荻の茂つた澤の擴がつてゐるあたりまで到ると、道は二三日前の雨のために、すつかり影の鮮かな小川に變つてゐる。車夫は引返すと云ひ出す。近藤氏と車夫としばらく押問答のあげく、酒錢を出すといふ事で落着する。車夫たちが股引をまくりあげて車が再び動けば、水に波紋ときらめきとが忽ち起る。自分はほんたうに旅行者になつたやうな氣がした。

「この蘆は、新芽の時はいゝですよ」と近藤氏が、うしろの車から高い聲で敎へてくれる。

そして向うの車夫の水を分ける音が傳はる。

「さうでせうねえ！」

それからこつちの水の音。

だがこの空想的な心持は、數分とは保たれなかつた。曲りくねつた水を奥へ進むにつれ、兩側の蘆の間から無數の蚊が群がつて來て、自分達を襲撃しはじめた。車夫は二人とも半裸體だから堪らない。忽ちその脊中に集まる。自分の顔を防ぐついでに、後ろからハンカチで拂つてやるのだが追ひつかない。日に焼けた筋肉に見る見る痕がつく。この痒い感じの想像は妙に他人事(ひとごと)でなく鋭く來る。だが本人はわりに平氣な笑顔を見せて、痛痒い感嘆詞らしいものを同僚と投げあつてゐた。

やがて蘆の重なりを越して、陶然亭の屋根が小高く見える。この寺は小さい丘一つを利用して、城砦のやうな土台に建てられてあるのだ。それを見上げながら滴のしたゝる車を降りる。此處もまた草のない淋しく乾いた土。何日か前の轍の痕。路傍の灰色の墓。ごく遠くの汽笛。――市廛から全く隔つてゐる點では、例の天壇の境内も及ばない。

案内記を見ると陶然亭は遼金時代に建てられた慈悲庵の跡で、康熙年間に亭を設け、白樂天の「更待菊黄家醞熟。與

君一醉一陶然」から引いて陶然亭と名づけたところ、慈悲庵の名の方が自然と湮滅したものだそうである。埃にまみれた——恐らく春毎に蒙古の砂漠から來る埃にまみれた「古刹慈悲禪林」の門額はその名殘なのだ。

幅のゆつたりした、鄙びた、そして苔のために猶趣味のいゝものになつてゐる石段を上つて行く。石段は中ほどで一つ折れてゐるが、それが大變落着いた、何となく伊太利僧院風の構圖をあらはしてゐる。「内外時聞長者車。寮中別有仙家日」——これが今云つた門柱の對聯である。そのとほり、一歩靴を踏み入れると簾を垂れた一室では若い僧が午睡を貪り、苔の蒼黑い中庭では年とつた坊主が箒の音をたてゝ、槐の散り花を根氣よく掃き集めてゐた。音響らしいものはこれだけである。花を散らせた槐の大木には鳥籠が釣され、紅い小禽が啼き、根元にはこれも暑さに舌を出してゐる犬が、「時聞異邦人靴音」に穩やかでない身構へを見せてゐた。

坊主が淡白な聲でそれを叱つた。

そして坊主はその鳥が「紅子」であると自分に敎へてくれた。紅い鳥は一しほまめに動き、まめに啼きたてた。

裏庭で自分は白粉草の陰に落ちてゐる雀の子を拾つた。閑かさの程度がこれでも知れよう。

棟々を見て步く、展望にいゝ室は皆酒席に適すやうにしつらへてある。入口の聯句までが「空前綠樓分祠榻。城外青山到酒杯」といふ風である。それで寺としては思ひがけず淸潔で支那離れがしてゐる。一列に引き上げられた蔀(しとみ)風の障子の卍模樣を、端(さき)から見通すと淸々しい。部屋々々の壁は有名無名の文人の幅で埋つてゐる。翁同龢が何代か前の住持に贈つた對聯なぞが見える。部屋々々ばかりではない。便所へ行く通路の塀にまで、何十といふ鉛筆詩が連續してゐてる。自分は近藤氏とそれを拾ひ讀みしながら、才能を不足した詩から受ける印象は、才能に富んだ詩の場合とちがつて國を問はず一樣だと思つた。丁度花をつけた枝とちがつて、枯枝がほゞ一樣であるやうに。

西に面した一室で茶を飲みながら眺望する。平たい芦荻の面を隔てゝ、少しばかりの林と少しばかりの粗末な屋根の塊りとが、さまぐ\に繰り返されて遠くへ展がつてゐる。その向うに眞すぐに登つてゐる淡い煤煙一つ。財政部印刷局の煙だといふ事だ。かう書けば無趣味だが、その煤煙の淡い濁り方は、この眞夏の景色のなかで決して異分子ではない。それは何かしら長々と續く、素朴な鄙唄のやうなものを自分に聯想させた。——違ふ意味からではあるが、かういふ遠い煙突の烟は、北京近郊でいつも自分に或る親しみを起させた。それはあれが見えるならば、此邊はさう片田舍ではないぞといふ、一種安心した氣持だつた。

室外に出て石の欄に倚りかゝると、南にはやはり蘆を越した四五丁先きに、外城城壁がいかにも寂れた單調さで、向うの景色一切を嚴格にさへぎつてゐた。冬の曇り日にこの壁はどんな重い色になる事だらうと思つた。自分はその後ろに、海のやうに平らかな田園が續いてゐるやうな氣がして仕方がなかつた。

「あの上に登りませう」

歸途近藤氏をかう誘つて見たが、蘆の間の水溜りが案外に深いために、それを果すことが出來なかつた。

さつき休息しながら眺めた村落を縫つて、唐代建立の法源寺、それから謝疊山の祠にまはる。法源寺は廣い境内を滿りがちに占めた柏の古木、甍の線、棟々の靜かな厚み——さういふものゝ持つてゐる沈默から、やはり唐代の夢のかけらを感ずることが出來る。しかし扉の透き間から覗いて見た諸佛は、皆なまなましい金色のひどいものだつた。清朝の役人の惡改修の仕業なのだらう。此處は唐太宗が征遼の役に戰死した士卒のために建立した、憫忠寺の後身にあたるのだ。遼代の古碑がある。それから安祿山の建てた磚塔がある。

謝疊山祠は、今では中日學校と同居のかたちになつてゐた。教員らしい青年に案内され、いかにも體操場と云つた趣

の中庭を横切つて、袁山が憤死した小さい堂へ行く。この堂も實は教室の一部になつて居る。塑像の祀つてある壇を圍つた幕のうしろに生徒の机が並んでゐるらしいので、一寸教員室に呼びつけられた心持になる。白く目立つだけに自分は閾を跨ぐとヘルメツトを脫いだが、像の左右の行燈に排日の宣傳文が記してあるのを見たら、形式的にも一禮する氣になれなかつた。

この邊から先農壇公園の方向にかけて、蜿々と續いてゐる村落は、一種不思議な悠々とした寂寞さに包まれてゐた。路は鉛色で木といふものを殆んど見ず、笑ひ聲とか冗談とかを通りすがりに聞くことがない。村人はたゞ懶げに動いてゐる。自分は落ちかゝつた西日を浴びた或る空地で、澤山の塗りたてのテーブルがごたごたと乾されてあるのを見た時に、やつと文明に觸れたやうな氣がして輕い心持を取りもどした位だつた。それは皆俗惡なテーブルではあつたが、自分は東京の新宿通りの或る安つぽい家具屋を思ひ出し、夕方の光線のなかで不意に奇妙な懷郷病に囚はれた。

しかし外城の繁華な洋風新市街は、そこから思つたより近かつた。

八月十五日

午後、學校時代の先輩三島彌彥氏來訪。支那劇の話と運動の話をする。それから思ひ立つて錢湯へ行つて見ようといふ事になる。それを云ひ出したのは僕だ。僕は義兄の家の僕から自國の錢湯のいろいろな効能を聞かされてゐた。例へばその僕は風邪をひいたなと思ふと、早速錢湯へ行つて半日ほどぶらぶらして來るさうである。錢湯のなかには料理店、茶店、理髮店、それから麻雀をやるやうな室も具つてゐるといふ。横山大觀氏もよく出かけて、何時間となく寢ころがつてゐたといふ噂である。——これらの話を聞いて、僕は湯氣や、灯影や、酒の匂や、博奕の音や、もしかしたら阿片の淺い香や、樣々なものを空想して見た。しかしそんなひと癖ありさうな場所へ、到底一人で入り込む勇氣はなか

つた。そこへ三島氏が乘氣になつてくれたのは、伴れとしては理想的である。三島氏はオリムピアの祝祭競技の廣場で、着物を脫いだことのあるほどの體格の持主なのだ。

だが三島氏も實は心細いと見えて、「正金銀行までうちのボーイを呼んで、そいつを案內役にしよう」と云ふ。二人は雨模樣の空の下を、洋傘を持つて正金へ出かけた。丁度二階の玉突場に來合せてゐた外語敎授瀧村氏も一所に行かれる事になる。やがて三島氏の日本語のうまいボーイが、銅錢（トンツル）の束を手拭でしばつて肩に掛けて來る。何だか勇ましい。

ボーイは一寸部屋のなかを覗いたが、遠慮して扉の陰に立つてゐる。

「おい、ボーイ！風呂屋のいゝところを敎へろ」

これは怒鳴つたのではない。にこ〳〵しながら出す大聲である。

「前門（チエンメン）がよろしいね」ボーイが顏だけを出して答へる。

「前門のどこだね」

「開明（カイミン）（劇場）の前です」

「綺麗か。ボーイ！」

「北京で一番立派」ボーイは恥しいのか、物を言ふ時だけ首を出す。「三階の家です。一等二等と三等の切符ある」

「そりや大袈裟だな」

「三階建なら間違ひあるまい」

「ボーイ！其處にきめたぞ」

外へ出ると、ボーイは音響をたてゝ群つて來る車夫のなかゝら要領よく四台を選び、賃銀を値切り、そしてわれわれ

は二台づつ竝んで談しながら、公使館區域のアスファルト道路の並木の下を走つた。

しかし前門外西珠市口のその清華池澡堂といふ風呂屋へどや／＼と入つて行つて、僕達は一齊に失望した。なるほど三階建である。正面には勿體ぶつた階段が左右へ均齊的に分れて居り、頭の上からは理髪店の鋏の音が聞えて來る。切符も一等から三等まである。浴室には電話さへ附いてゐる。しかしそれだけだ。湯桶は普通ホテルにあるやうな純洋風だし、浴室の構造も試みて及ばなかつたといふ風な安つぽい西洋間であり、ソフア、スリツパー、シヤワー。――支那らしいところは、支那の夢は一つとして見當らない。

「つまりこれは、支那人が西洋へ行つたやうだと云つて喜ぶ場所だね」

「大觀氏はほんとに半日も寢ころんだのかしらん」

「ふだん湯に入らない人間には、いゝんだらうね」

「奉天の風呂屋は、もつと支那式だつていふがな」

こんな愚痴を云ひながら、それでも怒つてしまふ譯にゆかないところが、何だか可笑しかつた。

結局三島氏と僕が同じ室。瀧村氏は廊下を隔てた向うの室に分れて入浴する。二人は左右の壁に沿つて置かれた湯桶につかる。白い瀬戸びきの器のなかで仰向くと、天井にある明り採りの大きい硝戸窓をとほして、白い雲がゆつくり動いてゐる。

やがて扉が開き、疥瘢のある上半身素裸の大男が、反りかへつて入つて來た。それが三助だ。三助は二尺餘りの絲瓜（へちま）を抱へてゐる。そして三島氏に近づくと默つて氏の背中を引き寄せ、シヤボンで塗りつぶし、それから入念に絲瓜で擦りはじめた。それは擦るといふよりも、むしろ力を入れて絲瓜を皮膚に押へつけ、それを少しづつ移動させると云つた方が

適當なのだ。その丹念さはやはり支那の三助である。背中が濟むと、今度は右を斜めに湯桶に差入れて三島氏をその上に仰臥させ、胸と兩腕とを同樣に擦る。時々絲瓜を洗つては、刃を調べるやうな素振をする。

「垢が出ないので不審に思つてゐるな」と、三島氏が仰向いた儘云つた。「合憎僕はゆうべよく洗つて置いたんだからね」

僕の番になり、すつかり同じ事を繰り返される。明り採りの窓の白い雲は、いつの間にか右の端の棧に近寄つてゐる。それが時間の經過を風流に語つてゐた。三助は洗ひ終ると

「…………？」

何か云つたやうだ。二人とも分らないので手を振る。そのうちに出て行つてしまつた。

僕達は寄宿生のやうに竝んで着物を着た。ふと僕は隣室との境の擦硝子の低いところに、赤黃ろい燈の影がぽつと映つたのを見た。僕はそつと覗いて見た。擦硝子には細かい透明な花模樣が附いてゐたからである。

僕はおや／＼と思つた。硝子のすぐ向う――僕の顏から三尺とは離れてゐない長椅子の上に、色の白い、脂肪太りに肥滿した紳士が仰臥して、身體から盛んに湯氣をたゝせてゐる。それから彼の足の近くに、先刻の三助が安座をかいてゐる。低い赤黃ろい明りはその紳士の足に向けられた卓燈だつた。三助は片手に客の足をかゝへ、片手に鋭い形の小刀を持ち、すつすと調子を附けて爪を削つてゐる。瘡痕のある顏の下半が、赤黃ろい直射の範圍に入つて異樣だつた。鉛筆をけづるやうにして爪を切るのだから、三助は眞劍に兩眼を据ゑてゐる。肥滿した紳士は腹を大きく高低させ、いゝ氣持に眼をつぶつてゐた。所謂支那髭が湯で柔かくなつて唇に引ついてゐる。――僕はこの浪漫的場面を三島氏にも敎へて覗かせた。先刻三助が僕たちに何か云つたのは、爪や耳の掃除は必要ないかと訊ねたものらしい。

すつかり歸仕度をして廊下で三人顏を合せた時、突當りの窓一ぱいに夕日が赤く强く溢れてゐた。それは今しがた僕

硝子の一部分にぽつと映つてゐた、あの卓燈の小さい明りの色に大變似通つてゐた。その夕日はごた〳〵と入り組んだ、前門外のさま〴〵な胡同(こうじ)の煤けた屋根の上を、音もなくわたつて來てゐるのだ。その光線は向ひ側の開明戲院の俗惡な白壁をも、西珠市口のコークスの色の沁みた薄汚い往來をも、一帶に美しく染めてゐた。町の子がしきりと何か騷いでゐる。これが期待して行つた清華池藻堂のなかで、僕の觸れた唯一の詩的感興だつた。

歸途、入浴で咽喉が乾いたので新市街の正陽公司といふ藥局へ寄つて氷其凌(アイスクリーム)を飲む。こゝの主人は慶應義塾出身の由。店内はすべて資生堂風で、給仕も珍らしく少女を使つてゐる。その少女たちが「左樣(トエラ)」などと返答する發音はいかにも單純で愛らしい。しかしこの資生堂風の店は北京でも初めてゞあると見え、硝子張りの入口からは往來の苦力や子供達が群をなして覗いてゐた。

また車を列ねて正陽門の方へ、八大胡同の斜巷をぬけて行く。軒並の妓館の入口は造花や色紙に飾られて活氣づいてゐた。

八月十六日

朝食のをりに今日は日曜だつたなと思ふ。なぜならば近頃は毎土・日曜に、一弗の觀覽料で「故宮」が見物出來るからである。くわしく云ふと、紫禁城のうち保和殿以南は儀式用の諸殿であつて、これは毎日三十仙の料金で觀せ、(十二月號參照)乾清門以北は昨年まで宣統帝の籠居せられたところで、それを淸室善後委員會の監理のもとに觀覽料をとつて公開することになつたのだ。人力車を雇つてひとり宮城の北門である神武門から入る。切符賣場では華文英文兩樣の說明書を備へてゐるし、通路には指差した圖の立札が立つて居り、すつかり遊覽地の體裁である。麗しい晴天。子供連れの陽氣な見物人が多い。

延暉閣、澄瑞亭、千秋亭、養性齋と東側の諸殿をだん〳〵奥深く入つて行く。だが自分が御花園から漱芳齋への小門をくゞつて、藻のはびこつてゐる溝を見つめながら歩いてゐる時に、不意に白壁の陰からはつきりした日本語が響いて來た。自分はこの晴れた暑い日の滿洲朝の禁庭で、その人の姿を見ずに東京語を耳にするのが面白かつたので、蓄音機を聴くやうな興味から立ち止つた。

そして自分にはすぐに分つた。それは三島氏と同様に學校の先輩である加納久朗氏の一家の話聲だつた。

「ほらよく御覧なさい。その奥に燭臺が倒れてゐるでせう」と加納氏が、僕とは何間かの支那人の列に隔てられたがら、或る房の硝子窓を透して、内の家具を子供さん達に指さしてゐた。「あの燭臺は、この前お父さんが見に來た時から倒れてゐるんですよ。つまり宣統帝がこの宮殿からお逃れになつた當日のゴタ〳〵の時に倒れた儘になつてゐるんです。——ほら、そこに鉢植の菊の花が萎れたまゝになつてゐるでせう。——みんなさうですよ」

「皇帝は菊の花の咲く頃にお逃げになつたのですね」と夫人が云つて居られた。

「なぜ倒れた儘になつてゐるの」

「役人がとるといけないから」

「役人が？」

「さうです。御覧なさい。みんな扉に封がしてあるでせう？かうして置かないと内のものを持ち出す役人があるんです。もう少し先のお部屋へ行くと、金魚鉢の水がすつかり蒸發して、金魚が干からびた儘になつてゐますよ」

自分は人ごみを分けて加納氏の一家に挨拶した。それから額を硝子窓につけて噂の黄ろく枯れた菊の鉢植を覗くと、その傍に皇后の使はれたらしい獨逸風のピアノと、もう一つ——幼稚園を思ひ出す愛らしい小オルガンが置かれてあつ

た。自分は美しい悧潑な少女としての皇后の生活を、微笑して想像せずにゐられなかつた。

漱芳齋の前に中庭をへだてゝ戯臺がある。能舞臺のやうな形である。これは清廷に永らく傳はつた好劇の風の記念物なのだ。康熙帝が長生殿傳奇や桃花扇傳奇を宮中で演ぜしめたといふ話は、この戯台での出來事だつたかも知れない。近年では西太后がまた劇狂であつた。しかし戯台そのものは、あの萬壽山の石舫を思ひ出すほどに低俗をきはめてゐる。鐵の欄干の無駄にくどい唐草模様や、正面の壁に描かれた幼稚な洋畫の春景装飾は、自分の記憶に朧げに殘つてゐる昔の東京の勸工場や上等理髪店のハイカラ振りに似通つてゐる。勿論さういふ店の持つてゐた一種の素朴さは此處には見られない。戯台ばかりではない。漱芳齋、蘂中殿、重華宮、翠雲館——戯台に近い棟々は皆同じ清廷式の装飾で害はれてゐる。この邊の建物はみな一種の病人だと云つていゝ。自分が先日感心した午門や太和殿一帶が、或る誇大妄想症的な美しさに充ちてゐるとすれば、この漱芳齋の近くに塊つた棟々は、衰弱した病人の醜さに陥つてゐる。趣味の痩せ衰へた時代の醜さは爭はれないものだ。

この一劃を出て木陰につゞく影の多い徑を歩き、蔦の深く茂つた小門をくゞつて養性齋といふ御學問所へ廻る。養性齋は舊式な木造の洋館で、そろ〳〵朽ちかゝつてゐる。此處で宣統帝が博士ジョンストンから洋學を習はれたのだ。建物の前に岩を集めて山が築かれてあり、その岩山の横に思ひがけず鞦韆が一つ、動かぬまゝに曝されてある。これも皇后が愛されたものださうだ。われわれの後から來た、派手なパラソルを翳して書物を抱へた女學生達のひと群が、少時饒舌りながら鞦韆の周りにたかつてゐた。皆皇后と同じ年頃の娘である。と、自分が遠ざかつた時、鞦韆からは錆びた金具の音が二三度起つてゐた。

――リプトン茶の容器や、マッチ箱や、紙卷煙草の袋や、果物の皮などが卓や床の上に亂雜に轉がつた儘になつてゐる。じめ〳〵した、異臭のこもつた宦官の詰所らしい建物の間を通りぬけ、一番奥の乾淸門に設けられた喫茶店で休息する。加納氏からラムネの御馳走をうける。自分は汗を拭きながら、境の塀の向うに傲然と聳えてゐる、例の太和殿一帶の甍の重なりを見て、はじめて胸のすく快感をおぼえた。同じ禁裏ではあるが、此方側(こちらがは)は小さい嘆きのほかを知らない老大國の役人根性が、至るところ壁にも柱にも沁み渡つてゐるやうな心地がするのだ。あちこちの茶卓に溢れてゐる共和國の快活な男女が、その對照からいかにも新しい生活力を持つてゐるやうに見える。

汗を乾してから、また神武門へ向つて西側の諸殿の間を曲り蜿つて行く。上書房といふ名の或る廂房で、自分は加納氏の一家に別れた。此處で舊内府收藏の書畫を三十點ほど展覽してゐるからである。

あまり廣くない室内はなか〳〵の雜沓だつた。――畫では徽宗耄耋畫(卷)、同じく御河鸂鶒圖(卷)、燕文貴秋山蕭寺圖(卷)、郭熙關山行旅圖(卷)、が眼につく。徽宗皇帝の作のうち、一つは三四匹の猫の戲れてゐる圖で、一つは鴛鴦が流れに浮んでゐる圖である。猫の圖は設色の密畫で、筆法や構圖など自分の淺い智識で得てゐる徽宗皇帝の樣式のものだが、猫の細かい毛並の筆づかひ、その眼差の味はひなどが、何となく固苦しく、奧深い象徴的な生命を帶びてゐず、その儘すぐに眞蹟として頭をさげる心持になれなかつた。大膽な事を云へば、臨寫ではないのかしらと思つた。鴛鴦圖の方はおつとりした、なだらかな、單純な筆勢で描かれた墨畫だつた。何となく圖案化された趣を持つてゐる。この方は樂んで應暢に描かれた點を素直に享け入れる事が出來る。しかしあの桃鳩圖などから想像して、皇帝の動物畫の持つ神祕感に期待をかけて行つた者には、やはり物足りない心持が殘る。――偶然此處で北京有數の蒐集家である關冕鈞氏に出會ふ。だが、この純支那氣質の老人は英語が分らず、自分は無論「右へ曲れ」とか「この品は高價い」位しか喋れ

たいので、双方握手と笑ひ顔で用を足す。徽宗の二つの卷に就いて意見を聴きたいと思ひながら、片言が通じないのは殘念だつた。

燕文貴の卷は古雅な、厳しい、密な筆法の秋景山水だつた。紅葉の點々と色づいてゐる險しい山中に寺の屋根の見えてゐる構圖である。しかし燕文貴の作では最近顔氏寒木堂で、同じやうな圖柄の非常に優れた卷を見た後なので、この卷の前に立ちながらも、自分はむしろその方の氣品を憶ひ出してゐた。郭熙の卷は山間の棧道をさま〴〵な荷を背つた人物が旅してゐる圖で、稍々太い、ぼき〴〵した筆づかひで描かれてあつた。自分はこれによく似た、宋人作山中行旅圖と題する卷が文華殿にあつた事を思ひ出した。そして二つを比較すれば、文華殿の畫の方が秀れてゐるやうに思はれた。この卷が比較的癖のない、人物の寫生を主にした、くだけた風俗畫になつてゐるにひきかへ、文華殿出陳の畫にはむしろ剥落といふやうな名を聯想する唐代に近い古風な氣韻があり、棧道を歩く人物の面白味よりも、背景の山水の持つ一種の大きい壓迫力が圖面を司配してゐるやうに思はれた。――結局上書房に出てゐる畫は、皆想像したほどではなかつたといふ結論になる。このほか呉道子と稱する佛畫、仇英の美人畫、王翬の山水畫などあつたが、何れも感服は出來なかつた。

書の方では朱熹の琴律說、蔡襄詩札、宋賢書翰（この日は蘇東坡の書が開かれてあつた）、米芾詩牘などが主なものだつた。これらは十分に樂しみ、眼福を得たといふ心持になる事が出來た。しかし朱熹の端正な楷書の上に、最近政府が保和殿かどこかゝら發見したといふ金梁氏康有爲氏等の復辟運動に關した密書を長々と展げて、公開してゐるのは變な對照だつた。そして室内の観覽人の多くはそれを讀むために雜存してゐるのだ。こゝにも新らしい共和國の動いてゐる面があつた。

――上書房から數丁隔つた後庭の一部に建つてゐる、絳雪軒といふ齋の前に出る。ちようど先刻の鞦韆と林一つを挾んだ位置にある。傳説によるとこゝは乾隆帝が群臣と吟咏し、隆裕皇后が侍女と憩ひ、宣統帝が外賓を歓待された所ださうである。それは風露と清室美後委員會の處置のために色褪せてしまつてはゐるが、何となく明代の美人畫にありさうな、爽やかな愛らしい小堂だつた。こゝで再た關冕釣氏と落ちあふ。二人ならんで顔を硝子窓に押しつけ、内を覗いてゐるうちに、奥の壁に掛つた石濤の山水と沈石田の花鳥の幅とを發見する。

「石濤――」

とその時、關老人がつぶやいた。そして自分は石濤の名の支那讀みをはじめて覺えた。

沈石田の幅は鷺鳥と石と花とを描いたものだ。白と水色と薄墨との目立つその淡彩の小品は、いかにもこの明畫風の建物に映つて見える。だが石濤和尚の山水畫と宮殿の壁――この取り合せは何だか不適當だつた。

「後天(ホウテン)、十一點鐘(シユウイテンチヨン)」

別れる時に關氏は僕の肩をたゝき、子供に教へるやうに指を折つて十一の數を示した。前もつて招いてくれた明後日の午餐の時間を、間違へないやうに念を押したのだ。

歸路十刹海へまはる。十刹海といふのは皷樓鐘樓の近くにある五十畝ほどの池である。だが十刹海が一種の名所になつてゐるのは、池の周りに軒並みに塊つてゐる小屋掛けの見世物や、安芝居や、飲食店のためなのだ。實際遠近の見世物の鉦が鳴りわたり、老人子供が雜沓し、物賣りが路に景氣よく座つてゐる光景は、何年か前の淺草公園にめぐり會つたやうである。路ばたに展げた繪草紙に中華十傑などといふのが見え、十傑の顔ぶれに勳章を光らせた軍人の多いのも、

何だか明治時代の佛がある。それからあちこちで賣つてゐる、盂蘭盆の飾り物らしい紅い蓮の花の紙燈は艶やかだつた。頬紅をこすり附けたやうな淡い色をしてゐる。紅い紙燈は賣ゆきがいゝ。

池に沿つた蓆張りの茶屋で休む。池を縁どつた柳の柔らかな半圓形のなかに、滿開を過ぎた紅い蓮花が咲き散らされてゐるのはいかにも美しい。だが自分の驚いたのは茶屋の中ほどを太い竹で仕切り、男女の席を嚴格に區別してゐる事だつた。「席を同じうせず」といふのは昔の言葉ではないらしい。その癖中央公園に行けば、腕を組み合せた新時代の青年少女の多いことは、到底銀座などの比ではないのだ。僕のあとから入つて來た男は、青竹の上から伴れの女學生風の娘に何か品物を渡してゐた。

しばらく徘徊したあげく、二十何文かを拂つて或見世物小屋に入る。茶番狂言の可笑しい身振りだけを時間つぶしに眺める。しきりに笑ひ崩れてゐる苦力や兵士や子供や女學生の頭を越して、今しがた休んだ茶屋の側面と、柳と蓮との靜かな配合が見えてゐた。

八月十七日

午前八時四十分西直門驛發の汽車で、八達嶺に出かける。萬里長城を見物する爲めである。西直門の停車場では、青い襤褸を着て何やら喚き立てゝゐる運搬夫の群にぎつしり取り卷かれる。言葉が分らないので、何か氣色ばんでゐる視線だけが四方から投げられる。一同狼狽する。だが彼等を追ひ拂ふには、素早く把まれた手荷物を引つ張り返すだけの腕力がなくては、埒があかない。大蒜の香りと悲鳴に近い音聲の間を通りぬけ、車台に入つてひと息つく。——しかし後になつて考へれば、あらゆる埠頭と停車場に見受けられるあの東方臭い叫喚や動搖は、支那の出入口の一つの裝飾として忘れにくいのだ。

同じ車室に大村氏、上川氏、それから僕の甥たちと、都合三家族が居並んでゐるので、忽ち日本語が支那語を壓倒する。發車すると直きに玉泉山西山一帯が左手に見える。先日通つた埃の多い街道の楊柳が、城外からその麓まで帯をなして續いてゐる。鐵路のカーヴにつれてその青い帯が斜めの位置に縺り、少時して遠くの平行線に落ち着いてしまふ。清華園驛では靜かな田園のなかに、清華學校が外人の富豪の別莊のやうな姿で建つてゐた。これは米國へ行く留學生のための留學豫備學校である。米國が團匪事件の賠償金の一部を支那に還して創立させた特殊學校なのだ。

南口を過ぎる頃から地勢が少しづつ險しくなり、やがて夏草の薄緑と岩層の灰白色とが大變美しい斑紋をあらはしてゐる山峽の間に入つて行く、窓から首を出して仰ぐと、その山々の頂のあちこちに崩れかゝつた烽火台が見える。寂れた烽火台が大陸的に澄んだ青空のなかにつくつてゐる、鋸形の屈線はすばらしかつた。

乗車二時間。青龍橋驛で降りて驢馬十數頭を雇ふ。一同長い列をなして石塊の多い山路を登つて行く。先頭に立つてゐる僕の甥から殿の大村氏のお孃さんまで、半町ほど續いてゐる。それに、驢馬一頭に苦力がそれぞれ附添ふのだから一層賑やかである。驢馬は頸の鈴を快活に鳴らしはじめる。苦力の親方らしい、片手のない不氣味な男が、時々鞭の音を空間に響かせてゐる。つまりさうやつて、先天的に暢氣者である驢馬どもに警告を與へるものらしい。事實これは利き目があつて、鞭が鳴ると一齊に蹄の音がまごついたやうに早まる。同時に鈴の音はひとしきり高くなる。

振り返つて見ると、様々な彩色のパラソルや麥藁帽で日光を用心ぶかく避けた一隊が、驢馬の意志のとほりになつて小石に躓いたり、灌木の繁みをわざと擦りぬけたり、溪流で不心要に飛沫をあげさせられたりしてゐるのは、何か間が抜けてゐてユーモラスだつた。ヴン・ドンゲンの「東洋への初旅」といふ繪の構圖を思ひ出す。甥達は喜び、姪達は恐がり、年のいつた婦人達は迷惑してゐるのだが、驢馬の生れつきが粗忽で剽輕なのだから仕方がない。

十丁ほど登つて「北門鎖鑰」と刻してある長城の關門の下に着く。驢馬は放たれてあちこちの草原に散つて行つた。半ば崩れた階段から城壁へのぼる。陽が忽ち直接に帽子と肩に降りかゝつて來る。僕は愉快になつた。長城の大規模な點に驚いたからではない。さういふ感覺は中學時代の地理教科書以來、いつの間にか鈍らされてゐる。たゞ山の頂から頂へ蜿蜒と目ぶしい灰色の大道の續いてゐるのが、一種獨特な散歩道として氣に入つたのだ。足の達者な朔と大跛に歩いて婦人達に離れながら、此處は空想者ニーチエの好きな散歩道になつたかも知れないと思ふ。いつまでも續いてゐる灰色の道の面は光線の變化に敏感であるし、頭はすぐに高所の空氣にさらされる。そして城壁の礎は多種類の花で飾られてゐる。——だが僕たちが勢よく或る曲り角まで來ると、その陰から跣足の少年が現はれた。彼は矢鏃らしいもの、化石らしいものを差し出し、僕達が引返した後まで

「不貴、不貴」——（高くない、高くない）

と眉根を寄せて歎願してゐた。

二三丁の急勾配をのぼつて、烽臺の一つに備けられてゐる大幕張りの休息所で辨當を開く。張家口の方角にあたる遙山が稍々霞みながら青く耀いて浮き出てゐた。眼下の關門からはその方へ通ずる道が、埃つぽく一すじに光つてゐる。それから半里ほど先に癈墟のやうな輪廓の小村落が、熱した大氣のなかで震へてゐる。こゝを沙漠地方の駱駝隊が通過する時は、やはり鈴の音でそれと分るさうだ。

僕は辨當を使ひながら、偶然上田夫人が松村みね子さんの令妹である事を知つた。なるほど上田夫人の聲を聞きながら、松村さんのはき／＼した美しい發音を思ひ出す。食後、もう一つ先きに聳えた烽台まで出かけて、銃眼の窪みから足を投げながら、上田氏の小さいお嬢さんと思ひかけず松村さんの噂をしばらく續ける。冷い風が襟に滿ちる。

「三十分ほどしたら出かけませう」と案内役の近藤氏は、氣を揉んで時計を見てゐた。「この線の汽車は大概の場合遲れますが、それでもどうかすると時間より早く着いて、その儘早く出たりしますから――」

「叔父さん、石を投げてどこまでとゞく？」

甥の一人が、張家口（カルガン）の方向を見つめながら、僕に訊ねた。そして僕の擲つた石は、近くの龍頭に似た淺碧の花の叢のなかに落ちた。

歸途の列車が彈琴峽や、後漢以來の古塞である居庸關のあたりを過ぎると、西日の黄金色が山々の緣、林の緣を一面に半透明に燃えたゝせてゐた。線路に沿つた平らな巣川にも同じ炎の色が溢れた。そして白壁、畑、歸狗、農夫、風景すべてが澄んで纎細で稍々感覺的なところ、惲南田の或る畫境を想ひ出させた。居庸關から半里ほどで

「春が來れば林の家に鳥が訪れる――」

かういふ意味の對聯の前句が、丸木橋を渡した川べりの或る豪農らしい家の門に掲げられてあつた。それは何のとほりに落葉樹の林を背にした、平和なつゝましい一軒家だつた。二度と通りかゝる事のない家かも知れない。だが僕が後半を讀みとらぬうちに、下り坂にかゝつた列車が疾走してしまつた。今故意（わざ）とらしく和譯の形で引用するのも、詩意だけが危く記憶に遺つてゐるためである。

八月二十日

辻さんに從いて前門外鮮魚口の華樂園に京劇を觀に行く。辻さんとは云ふ迄でもなく、支那の俳優達から「父」とされてゐる聽花翁の事である。前夜燕士詰の催した夜宴で僕は辻さんと同じ卓に座つた。そしてこの詰襟服を着た溫顏の

老人ならば、先日開明戯院で「綵珠」を觀た折に、恐らく小屋ぢう第一と思はれる大音で「好(ハオ)！　好(ハオ)」と聲を掛けてゐた樣子を見覺えてゐたのにと思つた。食後日本語の上手い四五人の支那靑年が辻さんを取り卷いた。そして僕が「綵珠」のつまらなかつた事を明らさまに話すと、辻さんは「それぢやあ明日の程艷秋を御覽なさい」と奬めた。「華樂園といふ小屋で白天戯——晝芝居です。さうだ。あなたの所からは近い」

この時沈さんといふ、外交部秘書を勤めてゐる三十を越したばかりの靑年が、梁士詒を中心にしてゐる卓から離れ、紺地に黄龍の躍つてゐる絨壇の上を往き來しながら、ある日本武官の揶揄に應酬してゐた。

「いや、わたし自身もあなたから見れば赤いかも知れません」——少年時代を東京で過した沈さんは、われわれと少しも遜ひのない綺麗な日本語を使つてゐた。「支那ではあまり貧富の差がはげし過ぎますからな」

武官は苦笑した。僕もこのはつきりした物言ひをする、何處か重厚なところのある靑年を笑つて見てゐた。

「奇縁ですね。あの沈さんはまだこれ位の時分に」——僕の隣りの支那紳士が、子供の脊をはかる手附をして見せた。「その辻さんの家から學校に通つてゐたのです。さう、辻さんが東京に住んで居られた頃だから十五年前——もつとになりませうか」

沈さんは一人離れて空いた長椅子に腰を下した。僕はそこへ移るために立つた。その時、沈さんに純粹の東京辯を教へ込んだ當人の辻さんが、僕の肩を後ろから叩いてから附け加へた。

「では二時頃に、自家のボーイを迎に出しますよ。それから便宜のために、大體の筋書を書いて持たせてあげませう」

翌二十日の午すぎ、打ち合せのとほり僕は淸朝風の帽子をかぶつた辻さんの童僕に連れられて、前門外大街から魚市

口の横町へ入つて行つた。相變らず兩側の極彩色の看板に取り卷かれて、人間と車と驢馬とが揉みあつてゐる。半丁ほど先からもう例の鑼鈸の騒ぎが聞える。華樂園の入口の紅い廣告ビラの前に疎髯を弄りながら立つてゐた辻さんは、僕を見ると性急に兩手を組む支那風のお辭儀をした。それに對して僕の脫帽の挨拶が何だか粗末で物足りない。

「代水擒」といふ武劇の最中に二階の左棧敷へ腰かける。こゝは開明(カイミン)などから見れば略どほり快い古風な亂雑さに滿ちてゐる。僕の座つたベンチなぞも幅一尺とないので臀が痛いが、その代り野天に蹲んでゐるやうな格好をしても構はない點は、一種氣安くて樂しい。棧敷の前列には、今年から改造されたといふ事で、新式劇場なみに男女合座の包(ボツ)廂(クス)が出來てゐる。葉卷をくはへた紳士や、パイプ付の紙卷煙草を喫つてゐる婦人が共處に居ならんでゐる。「好(ハオ)」の掛け聲は流石にその仲間からは出ない。だが辻さんは僕に西瓜の種をすゝめたり、役者の特徵について叮嚀に說明したりする合間に、相變らず一種彈力のある叫び聲を飛ばしはじめた。——舞台は今斥候の一人が敵城の濠をくぐつて忍び入らうとする場面らしい。青い股引をはいて上半身素裸になつた末(モオ)（端役）がひと跳び跳ぶと、いきなりたゞの板敷の上で泳ぐ手振をはじめる。同時に舞台の右端に石垣の書割が立てられ、そこから隈取(くまどり)のいかめしい武淨(ウウヂン)（武劇の敵役）が小手かざして現はれる。その石垣は紺の小さい布に白く細巾を描いたものに過ぎず、遠望してゐる敵將はニス塗りの椅子の上で背伸びしてゐるらしい。だが小さい布地の上に隈取(くまどり)のあらい大きい顏がぬつと出たところは、突飛な遠近法を形づくつて、効果が案外強い。——敵將も負けずに石垣から飛び降りる。それからは曲藝ともつかない獨特な水中戰である。双方で見せる例の泳ぐ手眞似の早業は絕頂に達する。そして一種の旋律が客席まで傳はる。

次の齣では周端安といふ武生(ウウション)（武劇の立役）が六尺あまりの山鳥の尾を兜につけ、槍を文字どほりに水車のごとく廻して、敵群をなぎ倒して見せる。なぎ倒されに雇はれた兵卒どもは、風を切つて一人あて十𢌞ぐらゐづつ、宙返りを繰

りかへす。敵が殘らず跳れると武将の槍の廻轉はますます猛烈になる。かうなるともう輕業の範圍である。いつまで廻してゐるものか少し心配になる。だが最後に銅鑼が馴れない耳を劈き、武将は眼も鼻も分らない隈取の貌で見得を切り、右足をどういふわけか高く蹴りあげて右の掌でそれを見事に搏ち、そして例の山鳥の尾を悠々としごいて見せた。見物は沸きかへる。實際それは妙に無邪氣な虚榮心のこもつた動作だつた。……………

次の「捉放曹」が済んでいよいよ程艶秋の出る「寶蓮燈」にかゝる。能と同じ事で、別に幕が閉るわけでないから、胡弓弾きが入れ代る様子でやつと分るのだ。この頃から小屋のなかは新らしい客でひとしきり雜沓する。熱湯をしぼつたタオルが土間の一隅から新らたに塞がつた客席めがけて飛ぶ。それは汽船と埠頭とのテープのやりとりのやうに賑やかである。僕は投げるボーイと受け取るボーイとの熟練に感服した。目的の客の頭の上一二尺で、タオルは必らず緩い拋物線を描くのだ。これも先刻の武将の槍術や、兵卒の宙返りと同じ技藝に屬しさうである。不用になつたタオルはまた傳書鳩のやうに、受取人から白い筋をひいて歸つて來る。

「寶蓮燈」は年代不明の作らしい。辻さんが順天時報の原稿紙に書いて示された筋書によると

「縣州々官劉氏ニ二兒アリ、一ハ先妻ノ子、一ハ現夫人ノ産。學校ニテ誤ツテ前太師秦氏ノ子ヲ打殺ス、二子共自分ガ殺セシト云フニ、劉氏ハ母ナキ子ヲ稍偏愛シ、夫人ハ産ミノ子ヲ庇護シ、互ニ罪ヲ免カレシメントシテ爭フ。夫人終ニ讓歩シ、先妻ノ子ヲ逃ガシ、劉氏ハ現夫人ノ子ヲ伴ヒテ秦邸ニ謝罪ニ赴キタルヲ、秦ハ大ニ怒ツテ劉氏息ヲ打チ殺ス。

劉氏（正生）——郭仲衡。夫人（青衣）——程艶秋。秦氏（副淨）——侯喜瑞。

夫婦互ヒニ偏愛スル兒ヲ庇護シテ爭フトコロ、肝要ナリ」

「寶蓮燈」がはじまつて二十分。息子ふたりが父親の前で互ひに庇ひあつてゐる時に、急に小屋のなかの燈が一齊に點いた。僕はそれを夏の北京市の送電時間だと思つた。だがそれはやはり青衣(チンイ)の現はれる先觸(さきぶれ)だつたのだ。程艷秋が舞台の左端から出て來る。兩肩を注意ぶかく形よく落し、手を垂れて組み合せてゐる。大きく描いた眉、稍々釣り上つた長い黑眼、桃の花びらのやうに濃い頬紅、(それでも花旦(ひすめ)の役よりはずつと薄化粧ださうである)それから目立つて細い腰——それが花鳥を刺繍した重い帳を背景にして浮き出てゐる。

「徐碧雲よりいゝ顏ですね」と僕は感服して辻さんを振り向いた。

「さう、可愛らしい。貌に邪氣がないから娘役としては今大變な人氣です。二十二ですから聲もこれから厚みが出ます。——あれは梅蘭芳の弟分のやうになつてをるのです」

そのうちに程艷秋は多少の愁を含めた聲で唱ひはじめた。先日の徐碧雲の方が稍高い野生的な强みを持つてゐるが、此方は圓みと一種柔かいねばり强さでその不足を補つてゐる。姿も唄もすつきりして日本人好みだと云へる。だがやがて良人との歌のやりとりが早まり、厭みの息子の前に立ち塞がつて極度に高い唱を發すると、思ひがけず惡意の籠つた病的な艷やかさが現はれる。僕から斜めの位置にゐた顏色の蒼い若い婦人は、煙のたつパイプを棧敷の手摺の上に置いて、双眼鏡の度をせはしく合せはじめた。それは今まで退屈のほかを知らないやうな表情で煙草をふかし續けてゐたゞけに眼立つた。白い小さい靴に力が入つてゐる。氣をつけて見ると、前髮を愛らしく垂れたあちこちの女學生達も、熱心に眼鏡を渡しあつてゐる。——

舞台は結末に近づく。劉夫人は先夫人の兒を逃し、片袖を拳げて顏を隱し、破調に近い激しい腔(たかごゑ)を唱しながら馳け去つてしまつた。それは何か調子の狂つた美感といふやうな感じだつた。そして僕の頭にも、その瞬間他人の傷口の生ま

生ましさを見て滿足したやうな、一種奇妙な印象が殘る。かういふ印象は恐らく刺戟劑として、古來の支那人の好みに合ふものなのだらう。あの武劇の調子外れな鑼鈸の音にしてもさうである。

しかし程艷秋は更に角脆くて麗しい。殊にその細細とした胴は、支那でなくては見ることの出來ないしなやかさな線を教へてゐる。僕は柳腰といふ形容のモデルに接したやうな氣がした。たゞこの役柄として強いて欠點を云へば、やはり稍々娘臭い事である。劉夫人はもつと豐かであり、もつと熟し、そして肉體的に强みを持つてゐるべきだらう。桃の花に似た程艷秋では、嫉妬の陰影が優し過ぎる。

晩飯に招ばれてゐる時刻がせまつたので、秦邸の齣を見ない事にする。

「わたしも御一所に出る事にしませう。これから實は役者の結婚式に行かなくちやならんのです。わたしが子供のやうにしてゐた役者なのですが――」辻さんも時計を見ながら席を立つた。「今日はちつとは氣に入りましたか。――それはよかつた。程はまあわたしの次男のやうなものです。尙小雲が長男で、程が次男といふところです」

辻さんの半白な髮に覆はれた頰には、事實穩やかな愛情が幸福さうに動いてゐた。

「しかし徐碧雲の新劇も一つの試みとして認めてやつて下さい。あれは過渡期の努力をして居るのです。あゝいふ男も居らんければいけない」

戲院の街門を出ると、夕刻に近い横町の人ごみが、西日と建物の影とで斑らになつた儘流れてゐた。車馬の發する一面の土ほこりが、その動かない家並と動いてゐる雜沓とを幻燈の繪のやうにぼけたものにしてゐた。僕は不意に霧の町に出たやうな氣がした。小僧が一人、場所柄だけに女形のせりふらしいものを、大聲に自慢らしく唄つて通つた。

「大同府から歸つたら一寸知らせて下さい」辻さんが車を待つ間に親切に云つた。「その頃はちようど七夕で、梅蘭芳が天河配を演りますよ」

紫禁城あたりの空で夥しい蝙蝠の群が小さく舞つてゐる。僕は明後日この北京城よりももつと未知の場所へ出かけるのだなと思つて、不意に旅人の心持になつた。

(日記抄の項終り)

時評

山川均

一　ブルジョア「眼光」

憲政會内閣は、さきに結黨式を擧げた農民勞働黨を、結黨三時間後に禁止した。この果斷な行動に出でた理由は、出來上つた農民勞働黨の綱領（就中、採用しなかつた綱領！）も、その組織の形態も、成立に至るまでの經路も、これに關與した人物も——要するに農民勞働黨の四肢五體から魂まで——何も彼も氣に入らぬ、悉くこれ現行法律に背反し、社會の現存秩序と一日も——精密に云へば三時間以上は——兩立すべからざるものだと云ふにあつた。

然るに二月二十七日の衆議院では、議會に於ける急進的勢力を代表する清瀨一郎氏は、この點について、峻烈な質問を以つて政府に肉薄した。清瀨氏によれば、農民勞働黨の綱領にも、組織形態にも、政府のいふが如き禁止の理由は少しも存しない。のみならず成立に至る經路とこれに關與した人物とが、禁止の理由とならぬことは無論のこと、現行法律に抵觸するかも知れぬといふ遠慮のために採用しなかつた綱領さへも、清瀨氏の見るところでは、『これを分析的に見ても綜合的に考察しても』、『何等共產主義と關係のない』もので、從つて政府の云ふが如き、禁止の理由とならぬものである。

この質問に對する若槻内相の答辯は、問題を徹底的に闡明した。即ち農民勞働黨の禁止に對するこの正反對な二つの見解を生じた理由についての疑惑は、若槻内相の明快な答辯によつて一掃されたのである。若槻内相の答辯によれば、『政府は所謂眼光紙背に徹する方法にて、これを禁止した』のである。

この答辯には、二つの事柄が含まれてゐる。即ち第一には、

清瀬氏が、農民勞働黨の如何なる點にも禁止の理由を發見し得なかつたのは、紙背に徹する眼を以て見なかつた爲めである。然るに政府は、この特別の『眼光』なるものを持つてゐた、といふことである。要するに人間の器官の問題である。吾々は清瀬氏が、この五官以外の第二の視覺を所持せられなかつたことを憐まざるを得ぬ。

第二には、憲政會内閣によつて禁止せられた農民勞働黨には、その如何なる點にも、現在の地球の上の人間の眼によつて見ることの出來る、何等の不都合の點――何等の正當な禁止の理由――も存しなかつた、といふことである。これは若槻内相の答辯により、一點の疑ひなく明かにされた。たゞ憲政會の政府は、特別の器官、特別の眼を持つてゐた。政府はこの特別の眼を以つて、農民勞働黨を見た。それ故に、農民勞働黨はどうしても禁止しなければならぬものに見えた。どうしても活かしては置かれぬ恐ろしい物に見えた。それ故に農民勞働黨を結黨三時間後に禁止した。これが憲政會内閣を代表して、白晝公然、帝國議會に於て、若槻内相の與へた説明である。

この不思議な眼は一たい何で出來上つてゐたか。硝子玉であるか。シン粉細工へ煉り物であるか、それもブルジョア階級意識の强度の眼鏡を掛けた眼であるか。この不思議な眼の成立ちについては、私はこゝには、せんさくを試みぬ。けれどもブルジョア政黨の内閣は、農民勞働黨の『紙背』を見て之を禁止した。吾々もまた、この『禁止』の『紙背』を見なければならぬ。

農民勞働黨の綱領は、違法である。そのうちには好ましからざる分子の主張を含んでゐるからだ。農民勞働黨の組織形態は違法である。それは好ましからざる分子によつて提唱せられたからだ。政府は無産階級政黨のを壓迫するものではない。ただ好ましからざる分子の參加が、現行法律の適用をよぎなくする……。これが『禁止』の印刷面である。

この禁止が、實際に無産階級運動の上に及ぼした作用はどうだらう。それは無産階級運動の右翼分子をして、左翼分子と斷絶する決意を固めしめたことであり、彼等をして、無産政黨から左翼を排除する斷乎たる決心をなさしめたことである。吾々の政黨組織を妨げるものは左翼であり、この好ましからぬ分子に對して吾々を掩護する吾々の協力者は、政府であるといふ信念を右翼に抱かせるに至つたものは、この『禁止』であつた。最近一年間に於ける、日本の無産階級運動の主たる特質は、右翼の結成であつた。右翼の結成によつて、日本の無産階級運動は、左右兩翼への明白な分化が進行した。そしてこの分化の作用を大

成したものは、即ちこの『禁止』であつた。この分化作用を完成し、無産階級運動を明白に左右の兩翼に分割することに成功した時に、ブルジョア階級は、無産階級そのものの、陣營のうちに、初て信頼することの出來る有力な協力者を求めることが出來る。農民勞働黨の『禁止』の印刷面には何と書いてあらうとも、それは明らかに斯ような役目を成し遂げた。無産階級の眼は、よし一枚の紙を見透ほすことは出來なくとも、この事實――農民勞働黨の禁止によつて、ブルジョアジーが成し遂げようとした眞實の企圖を見透さねばならぬ。

無産階級運動の單一な戰線が完全に破れた時、資本の攻勢は眞實に開始する。その犧牲となるものは獨り左翼ではなくて、左翼をも右翼をも含めた無産階級全體でなければならぬ。左翼の排除によつてブルジョアジーの注文に應ずることが、無産政黨を造り上げる安全な方法、唯一の方法だと考へる者は、『禁止』の紙表をのみ見てゐる者である。この點に於いて、無産階級の眼光は、ブルジョアジーの眼光に劣つてゐる。

税整案の階級性

税制整理案は、第五十一議會の中心問題と見做されてゐる。ブルジョア三政黨は、何れも政策本位を以つて議會を臨むと稱してゐるが、その政策の中心は税制問題である。そこで憲本兩黨の妥協の機運が、早くも税整案を中心として動いてゐると同時に、議會解散の危機もこのあたりに孕まれてゐる。

斯ように三政黨の税制整理案は、對議會の一切の懸引をその底にかくしてゐる。それと同時に、三政黨のそれ〳〵の税整案は、來るべき總選擧に對する戰備と見ることが出來る。若し議會の解散を見るならば、三黨の税制整理案は、やがてはそのまゝ總選擧のプラットホームとなる。そこで吾々はそれ等の税整案によつて、ブルジョア政黨が、普通選擧による最初の總選擧に如何なる準備を以つて臨まんとしてゐるかといふ、少くとも大體の態度を知ることが出來る。

憲政會は、普選の實施に最も功勞ありと見做されてゐる政黨である。從つて普通選擧による第一回の總選擧に對して、最も多く自信を有すべき政黨である。普選の實施によつて新たに加

へられた一千萬の投票に對して、ブルジョア政黨が何等かの自信を持ち得るなら、勢ひ憲政會は、最も多くの自信を持つべき政黨である。そこでブルジョア政黨の税制整理案、就中、憲政會の税制整理案（即ち政府案）は、新たに政治の舞台に現はれた一千萬の新勢力に對するブルジョア政黨の態度を知るために、特別の興味があるといふことが出來る。

藏相の説明によると、政府の税制整理の基調となつてゐるものは、『社會政策的効果を擧ぐる』ことゝ、『事業の基礎を鞏固にし、産業の發展に資する』ことである。政府が社會政策的効果を擧げるために減税した總額は七千萬圓餘であるが、その内五千四百萬圓は通行税、醬油税、賣藥税、織物税の廢止である。これ等の間接税の廢止は、無産階級に取つても有利である。然しながらその利益に浴するものは、無産階級のみではない。況んや政府は、無産階級の生活に影響のあるこれ等の間接税を廢止する一方に、煙草の値上げ、酒造税、麥酒税、清涼飲料税などの改正や新設により、それ以上の増税を企てゝゐる。税整案によつて廢止せられる間接税が無産階級の生活に影響するものであるやうに、これが爲に増税される間接税も、無産階級の生活に影響するものである。そこで通行税その他の生活必需品——藏相公認の生活必需品——の消費税を廢して、藏相のいはゆる『絶對的必需品ならざる物』に對する消費税の増額に切り替へることは、藏相の説明の通り、社會政策的効果を擧げるものだと假定して見ても、少くともその社會政策なるものは、專ら或は主として、無産階級を對象とした政策でないことは、一點の疑ひない。

殘餘の一千七百萬圓の減税は、所得税・免税點の引上げ其他、相續税・免税點の引上げ等であるが、最も主要な項目は、地租免税點の設置による一千二百萬圓である。政府が特に社會政策的の目的を以つて行はんとしてゐるこれ等の減税が、特に中産階級を對象してゐることは云ふまでもない。藏相は『主として中産階級以下多數國民の負擔を輕減せんが爲に、實に七千百七十餘萬圓の減税を行つた』と説明してゐるが、この七千萬圓中の實に一錢たりとも、中産階級以下の階級、多數國民たる無産階級のために輕税せられたものはないのである。政府の社會政策の目標が無産階級ではなくて、藏相のいはゆる『國民道德の根幹』たる中産階級であることは明かである。

その他に改正せられる税目は、恐らく藏相のいはゆる『事業の基礎を鞏固ならしめ、産業の發展に資せんとする』ことを目的とするものであつて、この領分では、政府は大手を振つて中産以上の階級の利益をも代表することが出來る。この項目中には

所得税の改正（公社の留保所得に對する累進課税の廢止等）と營業税を營業收益税への改正による減税九百五十萬圓、地租一分減による九百六十萬圓がある。これ等の改正には、中産階級もまたその利益に浴するが、國民の全所得の約半額は、法人の所得と一萬圓以上の個人所得によつて占めて居るといふ事實を見ただけでも、これ等の輕税が絶對的な負擔額に於ては、大資本家大地主に最大の利益を與へるものだといふことが分かる。然るにこれ等の減税による不足を補ふためには、相對的には主として無産階級の生活を壓迫する煙草の値上げその他の消費税六千萬圓の増税が行はれてゐる。これは中産以上の階級の負擔を無産階級の負擔に移したものであつて、政府の税制整理は『階級鬪爭を激成する整理ではないか』（砂川重政氏の質問）といふ疑問を起さしめるに充分なものである。

以上の大ざつぱな觀察によつても、税制整理案の階級的性質は極めて露骨である。憲政會内閣の税制案は、『産業の發展に資すため』資本家と大地主の利益を擁護することを忘れなつかたが、資本家と大地主の利益を擁護するに當つては、政府は注意深く、これを中産階級の利益と結びつけてゐる。政府の標榜する税制案の基調は社會政策であつて、その中心目標は中産階級、就中その下層である。そして政府は『國民道德の根幹』たるこの階級の利害を、注意深く無産階級の利害から區別して、資本家及び大地主の階級の利害に結びつけてゐる。税制案は地租の輕減及び免税、所得税の改造などにより小所得者と自作農の利益を資本家大地主の利益と共通した利益として、共通に保護してゐる。然るに都會の勞働者と農村の無産者たる小作農との爲めには、特に何等の負擔の輕減をも計つて居らぬ。即ち政府の税制案は、『中産階級及び中産下層階級の利害は、無産階級の利害とは全く獨立無關係に、資本家大地主の階級的利害と消長を共にするものだといふことを、租税の負擔によつて、實物的に示さうとするものである。かくて『國民道德の根幹』たる階級を、資本家大地主の階級に結びつけること、これが即ち政府の謂ゆる社會政策であつて、その税制案の基調である。それは『階級鬪爭の激成』ではなくて、階級鬪爭そのものである。

政友會は、地租委讓の一點張りである。かくて委讓せられた地租を如何に處理するかは、各々地方自治體の政權を握るブルジヨアと地主の事務である。これが彼等の利益を擁護する最良の政策であるとするのが、政友會の見解である。

政友本黨の税整案は、政府に對する和戰兩様の用意の上に立つてゐる。この逆轉式税整案のうちに、憲本妥協と議會解散との、二た通りの機微が藏せられてゐる。かように政本黨の税整

案は、多くの點で政府案と大差がない。少くとも妥協の途が殘してある。たゞ農村の中産階級下層については、政友本黨は、特に憲政會内閣とは異る方法によつて、その利益を競爭的に代辯する必要を認めてゐる。即ち本黨は政府案の地租一分減、免税點の設置と競爭するために、自作農の免税を主張する。目指すところは、同じく『國民道徳の根幹』たる社會相である。税整案の焦點が自づから農村に於ける中産下層に置かれたことは、ブルジョア政黨がこの社會層を、如何に重要視してゐるかを示してゐる。

これに反して農村の無産者たる小作農と都會の勞働者とに對しては、ブルジョア政黨は何物をも約束して居らぬ。否な都會の勞働者に對しては、政府は資本家の要求するが如き勞働組合法と爭議調停法の制定により、勞働者が自己その力によつての地位を改善しようとする活動に對してすらも、致命的な制限を置かうと試みてゐる。中産階級――特に無産階級に接續する其下層――と無産階級との利害を明白に對立させ『國民道徳の根幹』たるこの階級をして、資本家大地主の階級と共通の利害の上に緊密に結合せしめることによつて、其上に彼等の政治勢力を維持すると、これがブルジョア政黨の政策の基調であつて、税整案はこの作用の發展に『資さんとする』ものに外ならぬ。

贋札の支拂

大正九年この方、歴代の内閣が『考慮』したり、『熟考』したり、『調査』したり『研究』したり、呑み込んだり吐き出したりして今日に至つた勞働組合法案も、憲政會の内閣により、いよいよこの議會に提出せられることゝなつた。組合法の制定は、在野黨時代に於ける憲政會の約束の一つであつて、政權を握つた憲政會がこの約束を忠實に履行しようとすることに、何等の不思議もない。

昨年八月、内務社會局の起草した組合法案が一度び發表せられるや、勞資いづれの側からも熱心に研究し批評された。社會局の法案には、例へば組合員名簿の閲覧、地方長官が組合の決議に對して取消命令を發する權能の如き、勞働階級に取つて不利益な規定を含んでゐたにも拘らず、少くとも（一）組合の團結

權を公認し(第十一條、二十一條)、(二)組合の團體交渉權を確認し(第十二條)、組合の組織形態については何等の制限をも設けなかつた諸點に於いては、慥かに進歩的であつた。そこで社會局の法案に對する勞働階級側の批評は、若干の修正の要求に歸着した。

　これに反して資本家階級の側からは、猛烈な非難と攻撃の聲が揚げられた。その要求は、社會局の草案から、苟も勞働階級側に有利な一切の條項を取去り、組合法としての一切の性質を取去ることであつた。そこで資本と勞働との二つの勢力は、社會局の組合法案を挿んで相對峙したのである。

　この法案は行政調査會に於いて、幾多の修正を受けた。修正を受けたと云ふよりも、全く別個の法案に造り變へられた。組合法案は行政調査會の濾過器により、資本家階級の輿論によつて砂濾しされ、苟も組合法たる性質――この不淨物――は殘らず取り去られて澄明な――底の底まで透き通つた――勞働組合彈壓法となつた。

　組合法案は近々、閣議によつて最後の決定が與へられ、議會に提出せられるといふことであるから、いよ／＼如何なる成文となつて現はれるかは分らぬが、行政調査會の決定に基づいて新たに草案せられたものであるから、少くともその主要な點に於ては、右の決定要綱に均しいものに違ひない。現に組合法案の要綱として、新聞紙の報導するところに照して見ても、近く政府が議會に提出しようとする組合法案は、(一)資本側が勞働者の團結權を犯した場合の罰則(社會局案第二十一條)を削除して、組合の公認を事實上無價値にしたものであること、(二)團體協約權確認の條項を削除したものであることは疑ひがない。

　かやうに政府の組合法案は、勞働組合法から、その勞働組合法たる二つの根本性質を取り去つたものであるばかりでなく、(三)組合の組織形態を職業別產業別に限定し、現在の合同組合(乃至は一般勞働組合)なるものを除外するばかりでなく、組合の地方的聯合體をも、全國的總聯合體をも除外して、これ等の組織から、組合としての權利を奪はうとするものである。職業別の組織に對して地方別の組織は、その地域に於ける全ての職業の勞働者を包容した階級的の組織を意味してゐる。その如く、產業別の組織を結合する全國總聯合の組織によつて、初めて勞働階級の全階級的組織を見ることが出來る。政府の組合法案が組合の組織形態を職業別產業別の結合に限定しようとしてゐるのは、勞働者の階級團結を妨げようとする明白な意圖に外ならぬ。

文には（四）組合員の資格を制限し、謂ゆる智識分子が組合運動に協力することを妨げて、組合の活動能力を制限し、（五）組合の登記を強制的として、官憲の干渉を容易にするばかりでなく、（六）組合の決議に對して、地方長官が取消命令を發する權能を以つて滿足しないで、政府は組合解散の權能をも握らうとするものである。組合は組合法の有無に拘らず、その決議乃至は行動については、治安警察法その他の一般法規の適用を蒙るものであつて、組合の違法の決議や違法の行動に對しては、政府はこれ等の法律に基づいて充分の取締をすることが出來る。それにも拘らず、政府が一般法律の規定以外に、特に勞働組合に對して解散の權能を握らうとする動機がいづれにあるかは、餘りに見え透いてゐる。政府は組合法によつて勞働組合の法律上の地位を確立しようとするものではなくて、法律によつて勞働組合の地位を根柢から掘り崩そうとするものであり、ブルジョアと官憲に對する勞働組合の絕對の無力を、合法化しようとするものである。

更に（七）政府の組合法案は、官吏、軍人、軍屬、農業、林業、漁業等の勞働者を勞働者と認めず、從つてその團結權を認めないばかりでなく、官營大企業の勞働者に對しては、政府は必要に應じて、組合運動の自由を制限する。この點に於て、政府の組合法なるものは、勞働者に組合を組織する權利を與へる法律ではなくて、現に有する權利を、勞働者から剝奪するための法律である。また（八）組合の基金の支途を制限し、特に政治運動のために勞働組合が資金を供給することを阻止しようとする條項が、無產政黨に對するブルジョアジーの對策の一部であることは云ふまでもない。

これが憲政會內閣が、勞働階級に與へようとする組合法の骨子である。この組合法案が議會を通過したならば、日本の勞働組合はその首に繩を縛りつけ、その×××××——といふよりも資本家階級の×××の手に持たれると同樣である。ブルジョア政黨によつて組織せられた×××手にこの種の組合法のあることは、組合の公認ではなくて組合の威嚇である。憲政會內閣は、勞働階級の一致の戰線を打破るために、無產政黨を禁止した。憲政會內閣は、無產階級の戰線を分裂せしめることにより、無產階級そのもの〻陣容の內部に、有力な味方を作ることに成功した。憲政會內閣は更に勞働組合法による威嚇の鞭により、組合運動を望み通りの通路に驅り入れることによつて、この事業を完成しようとする。

政府の組合法案は、要するに社會局の原案から、資本家階級の反對する一切の條項を引き去り、その跡に殘つた勞働組合法

の幾層に資本家階級の要求する一切の規定を加算したものに外ならぬ。その名は勞働組合公認の法律であつて、その實は資本家官憲による勞働組合の破壞を公認する法律である。憲政會はこの勞働組合法を以つて、在野黨時代に於ける、勞働階級への約束を忠實に履行しようとする。それは金貨で借入れた借金の返濟を、忠實に僞造紙幣で行はうとするものである。

「普選即行」の拒否

若槻新首相は二月四日の貴族院に於いて、政府は直ちに議會を解散すべしといふ主張に答へ、『予が少數黨に立脚して不敏ながら敢て組閣の大命をお受した所以は、國民大多數の支持を受けてゐると信ずるからで、予はこれによつて所信を斷行するつもりである』と答へてゐる。然しながら國民の大多數が若槻内閣を支持してゐるか否かは、總選擧によつて知る外はない。國民に信任を問ふことなしに、國民の信任を得てゐることを勝手に信ずるのは、明かに自信の範圍から、僭上の範圍に踏み越えたものである。

憲政會は、さきに下院の第一黨として内閣を組織した。今日も尙ほ、下院の第一黨たる地位には變りはない。これは加藤前首相の死によつて三政黨のいづれかと後繼内閣を組織すべしとせば、憲政會の首領たる若槻氏がその任に當るべきだといふ一應の理由とはなるが、かくして成立した若槻内閣が、現に國民多數の支持を受けつゝあるといふ證據とはならぬ。若槻氏が――或は憲政會が――日頃口にする憲政の常道と名づけるところのものを解したなら、そして現に國民多數の支持を受けてゐるといふ自信が眞實にあるならば、直ちに議會を解散して國民に信任を問ひ、その自信の誤りなきことを、實際に證據立つべきであつた。憲政會の新内閣にこの勇氣がなかつたのは、この自信のなかつたことを物語つてゐる。

斯ような内閣の變動がなかつたと假定しても、『普選即行』の主張によつて政權を得た憲政會内閣は、當然議會を解散して、民衆に對するこの約束を履行する責任がある。若槻首相の答辯によると憲政會が在野時代に主張した『普選即行』とは、普通選擧を即時施行することではなくて、少數黨に立脚した内

閣が尙ほ二ケ年の間政權を持續し得るために、現に法律となつてゐる普通選擧を、即時に施行せぬことなのである。

憲政會内閣は普選即行の約束を履行せぬばかりでなく、普選の即行を阻止するためには、在野黨との間に、重要政策についての妥協をさへも辭しないものである。憲政會内閣は、よし國民多數の意志には反しても、尙ほ二ケ年間の命脈を保つ望みがある。之に反して議會に於ける政友本黨の支持なくしては、この一と冬をも切り拔けることは出來ぬ。然るに政友本黨の支持を得ることは、多かれ少かれ重要政策についての妥協を意味してゐる。

在野黨は原則として、現狀の打破を利益とする『憲政の常道』によれば少數黨が多數黨となる唯一の機會は總選擧である。在野黨は議會の解散を必要とする。けれども普選の第一の功勞者として、普選による第一回の總選擧に、最も多くの自信を有すべき憲政會に何等の自信がないとしたならば、その他の二政黨にこの自信のないことは少しも不思議はない。彼等もまた、有ゆる手段によつて解散を回避しようとする。そこでブルジョア三政黨は、政權を中心として醜い鬪爭をしてゐるにも拘らず、唯だ一つの解散の回避についてはたま〳〵利害が一致する。三政黨の間には、解散を回避する暗默の同盟が成立つてゐる。

解散の回避は、普選即行の拒否である。一千萬人の新有權者に、與へられた參政權を行使する機會を拒否しようとするものである。この一千萬の國民は、曾ては參政權を剝奪せられてゐた。然るに參政權を與へられた今日も、僅々三百萬人の有産階級の代表者によつて、その行使を拒否せられてゐるのである。

ブルジョア政黨は、普選の實施によつて、新しい社會的勢力が議會に侵入するに先だつて、一切の反動的政策を完成することを急いでゐる。彼等は一方には、農民勞働黨の禁止と組合運動の戰線の攪亂とによつて、無産階級が一つの政治勢力に結成することを極力阻止すると同時に、有ゆる反勞働者、反農民的立法の制定を急いでゐる。彼等が普選即行を一日でもおくれしめようとする、有力な動機の一つはこゝにある。

『國民の多數』は、憲政會内閣を支持してゐるといふ若槻首相の妄信を打破するために抗議の叫びをあげ、如何なる意味に於ても最早や國民多數の意志を代表して居らぬ議會の解散と、普選の即行を要求しなければならぬ。(二月六日)

無產政黨と智識階級

長谷川如是閑

智識階級が無產政黨に對して、どういふ地位を占めるかいふ問題は、それを研究するものが智識階級自體である爲めに、往々、階級的幻想によつて特殊な判斷に陷る虞れがある。社會運動の意識的反映は主として智識階級に起る。運動そのものの衝動的本質を共有するものは智識階級それ自體ではないが、その意識的の指導が知識階級の手によつて行はれるのは、恰度本能に對する理智の役目を知識階級がつとめてゐるやうなものである。その地位の重大さはこの意味に於ても疑はれないが、然し個人の場合に於て行動が叡智に先立つ作用であると同じく、社會に於ても先づ行動が起り、意識はそれに次で起る。社會運動は社會的理智に先立つて行動的に作用する働きであつて、それは個人の場合に衝動的な行動が先づ生存過程を押し進めるものであると同じく、社會的生存過程の衝動的の動きである。さういふ行動は社會的理智が惹起すのではなく、社會組織の構成分子の生存行動として起るのである。故に、さういふ行動は、社會的理智を表現する道德、法律、とは矛盾した形に於て現はれるのが普通である。その事は敢て所謂社會運動に限らず、その相手方たる現狀維持者の支配行動に於ても同じである。壓迫も要するに社會組織の構成分子が、盲目的に、衝動的にその生存欲を働かせる所から起る。支配の哲學もさういふ盲目的行動の反映としてそれに次で起る意識作用に外ならない。智識の作用は、それ故に行動的集團に從屬する合理主義であつて、正、反兩樣に於て成り立つ。さういふ立場を代表する者が智識階級である。故に智識級階は、それ自體の階級的地位をもつてゐるものではない。階級とは畢竟相容れない行動の範疇をもち、それを相互が行動する事に依つて當然闘爭狀態を惹起す集團に外ならない。然るに、智識階級はそれ自體が行動的範疇をもたないで、行動的範疇をもつ集團のいづれかに歸屬せねばならぬ。智識階級は行動する階級でなくして、行動の叡智を表現する階級である。之れに反して階級は、行動そのものの闘爭陣形であ

る。知識階級さういふ性質に於ける階級ではない。それは行動的範疇をもつ集團に分割される階級である。若し彼等が一定の必然的行動の範疇に於て行動せざるを得ない生存上の立場に立つたならば、彼等は、そこで各自の階級的立場をもち得るのである。その時には、彼等は智識階級ではない。

智識階級は、その叡智的立場に依つて階級的地位を決定する事はできない。矢張り彼等は一般社會人と同じく、その行動上の立場に依つて自己の階級的地位を決定せねばならぬ。行動上の立場は即ち生存上の立場に依つて決定される。彼等の働く叡智的の機能が相反する行動的範疇のいづれに役立つかといふ事によつて決定するのではなく、その機能をもつて役立つものの地位が如何なる生存的行動を執らねばならぬかによつて決定する。それは恰度勞働者の地位が、その勞働の機能が資本家に役立つといふ事で決定されずに、その機能を働くものが、どういふ生存的の行動を起さねばならぬかによつて決定すると同じである。故に、智識といふものが階級を測つ事は出來ない。それが何に役立たうとも、その所屬は彼れが行動的に從屬すべき組織的の地位に依つて定まる

社會運動が政治行動への形式をとる場合にも、その政治的鬪爭の立場は階級的の立場によつて決定される事は云ふ迄もない。それはブルジョア政黨の範疇内に於ける鬪爭の分子ではなく、政黨を階級的立場に依つて區分した場合の對立的要素である。さればこの政黨的分野に於ても、智識階級が一分野を形造る事は意味をなさない。智識階級は資本家政黨に屬するか、無産政黨に屬するかのどちらかであらねばならぬ。前に云つた理由によつて考へても、無産階級の政治行動は、階級的生存行動として、衝動的に起る社會運動の背景から生まれ出たものに外ならない。これはブルジョア政黨が、軍國貴族の國家に於ける市民の衝動的行動を背景として成立したのと異らない。政治的機構が支配の形式を決定する事實のうちに、盲目的の動發をもつて入り込むのである。政治的行動の叡智的道德的乃至社會的意義の如きはその問ふ處ではない。從つてその政治的機構に入り込む衝動的行動集團の背景がなかつたならば、その政治行動も成り立たない。而してその行動的集團の背景とは即ち一つの社會的勢力である。組織が無視する事の出來ない勢力である。昔市民が斯樣な一勢力となるに及んで、市民階級は政治的機構に入り込んだ。今日無産者が政治的機構に入り込むのも同じ道程であつて、それは理性や道德の問題ではなく力の問題である。政治的機構は社會的に結局如何なる地位をもつものであるかといふやうな事は、政治行動に於ける當面の問題ではない。

それは社會運動一般に於ける問題であつて、結局政治行動が組織の進化の上でどんな轉機をとるべきかといふ事は、社會運動の意識として確かな認識を必要とするが、政治行動は一つの戰鬪的態度であつて、それ自身の行動的必然性があれば、それに突き進んでゆく事が當面の必要である。而してそれは階級的行動の重力の作用で、云はゞ物理的必然である。

斯樣な物理的必然は、それを決定する重力關係に立脚する。その重力は行動的集團のそれである。從つて無産階級の團結の機械的な統一がそれに伴はねばならぬ。それが機械的であるといふ意味は、即ち實際的であるといふ事であつて、場合に依つては合理性を外れる事もあり得る。それは行動の機械的一致によつてもち來されるものである。智識階級はかやうな政治行動に參加するに當つて、その平生の生活理想よりは行動の實際的性質に移らねばならぬ。從つて、その叡智的立場によつてその地位が決定されずに、生活利害がそれを決定する。而かも前に云つた如く、智識階級の生活利害は、その機能的の立場が正反いづれにも屬し得るものであるために、いづれの階級の利害にも所屬し得る地位にある。智識階級は一つの階級的集團として、その行動上の地位を決定する事は出來ない。從つて全體として階級的行動集團のいづれかによるといふ事は出來ない。

無産政黨に對する智識階級の地位はそれ故に行動的に分割される。然し、どちらの階級に所屬するにしても、その中心重力としては働かない。重力は行動集團の社會的勢力によつて決定される。從つて無産政黨に於ても、資本家政黨に於ても、若し智識階級が特種の政黨的集團を作るならば、そこに一つの小さな別働隊が出來るに止まる。この別働隊は或る意味で、智識階級的利害を代表してゐるかの如く見えるが、然しそれが決定的の力となるには對立的二大階級のいづれかに從屬せねばならぬ。その中間的地位は從つて決して安固なものではない。恰度彼の崩壞した國民黨のやうな形勢にある。この事は無産階級内の政黨的分野に於ても同じである。智識階級が若しそれ自體の政黨を形造るならば矢張り其の中間的地位は階級内のより大きい勢のいづれかに所屬する事によつて決定される。それも恰度ブルジョア政黨に於ける如く、或る過渡期の事であつて結局は、いづれかに吸收される。

中間的勢力として智識階級が、それ自身の政黨をもつ事の困難なる事情は、同時にこの階級が無産階級内の分野に於て、政黨的分野の有力な重力として成り立ち得ない事を説明してゐる。無産政黨の重心を決定する力は矢張り一般政黨の場合に於けると同じく、二つの根柢をもたねばならぬ。一つは行動上の

團結的力であり、一つに財政上の力である。前者は前に云つた如く階級的生存の過程に於ける一定の行動的範疇をもつ集團の團結力である。それは無産政黨に於ては勞働團體である。後者は、その行動の經濟上の基礎であつて、行動的集團が一つの財團にまとめられる可能性をもつ事である。この二つの根柢は互ひに關連してゐる。經濟的根柢は、行動的根柢の上に立ち、財團はその團結的勢力によつて組み立てられる。具體的に云へば前者は、直接行動であり、後者は戰鬪費である。即ち、前野の有力さに比例して、後者が有力に成立する。無産政黨の分野は、恐らくこの行動勢力と財政的勢力とによつて分れる事ブルジョア政黨の過去の歷史に似たものである。智識階級は、この二つの根柢に於て中心をなすものではない。行動的にも、財政的にも中心は勞働者の團結に存する。故に智識階級の中間的地位は、始めから困難である。從つて智識階級はそれ自身の政黨をブルジョア政黨に於ても持たなかつた如く、無産政黨に於てももたないであらう。

智識階級の機能的地位が最も有力に發揮される場合は、彼等の生存上の地位の自覺である。而もこの自覺は、彼等が屬する社會的地位に依存する事他の階級の人々と異らない。が、只彼等は特殊な批判的立場によつて、彼等自身の現在の利害を批判する傾向をもつ。この自己批判によつて彼等は客觀的の範疇的態度をとる。その意味から智識階級は必しも彼等の階級的行動に盲從しない事が出來る。一種の自己否定が智識階級を特種な地位に立たしめる。この自己否定の働かない智識階級は當然その屬する階級的行動集團に從屬する。無産政黨に於ける智識階級は、無産智識階級と、この自己否定的の智識階級との集團である。前者が恐らく一般無産階級と同じ基底に立つ事に依つて階級內に於ける有力な叡智的立場をとる事が出來る人々であらう。然し重心は行動集團にある事云ふまでもない。智識は行動に引摺られるのが決定的運命である。

志賀直哉著

雨蛙

四六判 上製

定價貳圓五拾錢 送料廿二錢

五版

清澄にして端嚴なる筆致、精緻にして純眞、奇警なる觀察、漱石歿後の文壇に北斗の如く燦として輝ける著者が、最近會心の作長短十餘篇を收む。文壇一方の雄たる著者の藝術の心境に接せむとする人は本書に就け。殊に『或る男其の姉の死』は暗夜行路と共に氏の最長篇にて百四十頁に達する。本書は最近に於ける小說集中の第一人者である。

雨蛙。冬の往來。濠端の住ひ。偶感。轉生。鳥。斷片。子供三題。震災見舞。廿代一面。或る男其姉の死。

志賀直哉著 小說集 **壽々** 五版

定價貳圓八十錢 送料廿二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二二



戯曲

勝頼の最後（二幕）

正宗白鳥

人物

武田勝頼

跡部勝資

土屋惣藏

甚三郎

市之助

又平

御臺所

百合野

その他無名の武士數名

（一）

「やうやくその日は、栖尾といふ山里へ着かせたまひ、怪しげなる土民の蝸屋に、柴引結び宿らせ給ひけり。御供の人々も、木の蔭岩の狹間に、幕を張り莚を敷いて泣伏してぞ居たりける。樂盡きて悲來る。天人すら猶ほ五衰の火に逢へり。況んや人間に於てをや。哀なりし次第なり」(甲亂記)

三月三日の夜。

木の間の幕を開けて、武田勝賴の從者一人現はれ、あたりを見て、急ぎ足で出て行く。やがて、他の幕の間からも、一人の武士が姿を現はして、キヨト〳〵しながら出て行く。

相木甚三郎(三十前後の元氣な男)。幕を開けて出て來て、闇を透して、脫走武士の後を見送つてゐると、木の間の薄暗いところから、笠山市之助(四十代の疲勞してゐる男)が出て來て、互ひに顏を見合はせる。

甚三郎　お前は氣が冴えて眠られないのか。夜が更けると、宵の騷ぎも止んで、誰れも彼れも正體なしによく眠つてるぢやないか。

市之助　おれも、晝間の疲れで、さつきまで前後不覺に眠つてゐたのだが、何か大きな音がしたので目が醒めたのだ。まだ夜討が來たのぢやあるまいな。

甚三郎　まだ大丈夫だ。敵が幾ら疾風のやうな足をもつてゐても、高遠から此處まで今日のうちに押寄せて來る氣遣ひはないよ。だけど、明日は分らないな。足弱を大勢連れてノロクサしてゐると、明日の日が氣遣はれる。おれだちが目を開けてかうして生きてゐられるのも、今夜だけだと思ふと、おれは變な氣持がする。

市之助　變な氣持と云つてどんな氣持だ。お互ひに戰に出りや生命を的だ。敵を斬るか敵に斬られるか、そんなことは不斷から覺悟がついてる筈ぢやないか。

甚三郎　お前だから打開けるのだが（あたりを見廻して）おれは負け戰ばかりしてるのはつく〴〵いやになつたよ。お前は若い時分から、信玄公のお供をしてゐて、たび〳〵戰に勝つた樂みを知つてゐるのだが、おれなぞは、長篠の大合戰以來、今のお屋形樣のお供をして、勝利の歡樂は、たつた一度だつて味はつたことはないのだから、武士になつた甲斐がないよ。逃げることが上手になるだけなら、武士のやうな危い商賣をするにや及ばない。身延の山中で樵夫でもしてゐた方がよかつた。今日も、新府を飛出して、重い葛籠を脊負はされて、無我夢中で此處まで驅けて來たのだが、荷物をおろして、一息吐くと、こんな馬鹿なことはないと思つたよ。

市之助　さう思ふのも無理はないよ。おれも十何年の間御先代に御奉公をして來て、その間に、お上の御領地は廣くなるし、勝軍のお祝ひ酒もたび〳〵頂いたし、甲州武士の一人だと自慢の鼻を高くしてゐたこともあつたのだが、世渡りが下手なせいか、知慧が足りぬせいか、おれは何時まで經つても平武士で、かつ〳〵喰つて行けるくらゐな知行にしか有りつけなかつた。………逍遙軒殿や右衛門大夫殿や、お身内の士大將でさへ、お上を見捨てゝ散り〳〵ばら〳〵に逃げて行つたのに、おれ達のやうな滿足な御恩を受けてゐないものが、負け軍のどん詰りまでお供をして行くのは、馬鹿正直のやうに思はれてならんよ。

甚三郎　お屋形樣とは從弟同士の左馬之助殿でさへ、假病をかまへて、評定の席へ出なかつた上に、こつそり信州の方へ落ちて行つたと云ふぢやないか。

市之助　おれ達小身者が、負け惜みの忠義を盡したつて、亡びるお家が起上る譯はないんだからな。……お上がたつた一本の賴みの綱にしてゐらつしやる小山田殿だつて、當てになるかどうだか。おれには、あの郡內の大將の腹の底が危なかしく思はれるのだ。

甚三郎　どうせこの先は駄目なんだ。……兄貴。逃げてしまはふ。

市之助　お前と一しよなら心丈夫だ。おれも宵のうちからさう思つて、傍の奴が寝息を搔くのを見てゐたのだ。

甚三郎　おれは宵から迷つてたゞけお前よりやお人よしだつたのだな。さう極つたら愚圖々々しちやゐられないが、ちよつと待つて呉れ。おれは新府から脊負つて來た葛籠を持出すから。

市之助　慾の深い奴だ。早くしろ。

甚三郎　あの中には、御寮様や女房達の晴着がやたらに詰込んである筈だ。十年もたゞ奉公をした埋合せに頂いて置かう。

甚三郎、藪の中へ入つて行く。市之助は草鞋を穿直し、逃仕度をしてゐるところへ、土屋惣蔵（二十代）が、木の間の暗いところから、あたりを警戒しながら出て來て、市之助を見つけると、目を怒らせて側へ寄る。

惣蔵　お前は市之助ぢやないか。

市之助、それに氣づいて驚く。

市之助　ハイ。土屋様はお見廻りをしていらつしやるのですか。御苦勞様で。

惣蔵　貴様、逃げるのだな。

市之助（聲を顫はせて）決して左様なことは………わたくしは、お上をはじめあなた様方がどう遊ばしていらつしやるかと氣遣はしくなりまして。

惣蔵　それで草鞋を穿いて裾をからげて逃げ仕度をしてしてゐるのか。………逃げられるなら逃げて見ろ。不忠者め。

惣蔵は市之助の襟首を摑まへて引倒し、市之助の起上るところを斬下げる。

甚三郎は薦の間から、そつと顔を出して見てゐる。

惣藏は死骸を木蔭へ押やりながら奥へ入る。甚三郎は、その後姿を見詰めてゐたが、やがて、葛籠を脊負つて薦の間から出て來る。横田又市（三十前後）あとから隨いて出て來る。

甚三郎　危いところだつた。慾を出して葛籠を取りに行つたお蔭で、おれの生命は助かつたのだ。……さあ、この隙間に急いで行かう。あの崖道を上つたら大丈夫だ。

又市　まあ、待て。今夜は迚つ氣味が悪いよ。明日の晝間にいゝ機會を見つけて身體を隱した方が無事だ。

甚三郎　いや、かういふ時には早い者勝ちだ。一日遲れると人數が減るから、逃げるにも人目に立つて逃げ損ねるよ。思立つたら一ときも早い方がいゝ。

又市　ぢや、お前だけ先きへ行け。

甚三郎　市之助の最後を見て臆病風に吹かれだしたのだな。

又市　何とでも云へ。……土屋殿も、餘計なおせつかいをするぢやないか。逃げ腰になつた者を引留めてお供に連れたつて何の足しにもならないだらうのに。

甚三郎　あいつの忠義自慢は勝手だが、おれ達を無理やりに犬死の仲間に引張込まうとするのが癪に障らあ。あいつへの面當てにでもおれは逃げて見せる。……ぢや、おれは一足先きへ行くぜ。生命があつたらまた會はふ。

甚三郎、葛籠を脊負つて出て行く。又市はそれを見送つて、自分も後を追つて行かうか行くまいかと迷つてゐたが、ふと、ある人影を見つけて、あたふたと薦の中へ入る。

上手の鎖されたる茅屋の側から、武田勝頼（三十七歳）が跡部大炊助勝資（五十代）と、話をかはしながら出て

來る。

勝頼　雑兵どもが逃失せるのは逃がして置け。穴山入道をはじめ、肉縁の者すべてに見棄てられたおれだ。最後はおれ一人になることは分つてゐる。雑兵が何千何萬おれのまはりに隨いてゐようとも、敵の大軍に勝てる筈はないのだ。其方や長坂は今日になつてもまだ、おれを甘やかして、雲を攫むやうな空な望みを掛けさせて呉れたが、おれは、腹の底まで其方だちに誑らかされてはゐないのだぜ。

勝頼、木の根に腰をおろす。勝資その側に座す。

勝資　お上は、心弱いことを仰せられる。小山田は籠城の準備をしてお迎へにまゐる筈では御座いませんか。要害堅固な岩殿の城に籠つて、わたくしどもが力を合せて守つてゐれば、たとへ敵の大軍が押寄せてまゐつても、大丈夫當分は引こたへられます。そのうちには、長坂やわたくしどもが、何とかいゝ分別をめぐらして、御運の開くやうにいたしませう。

勝頼　おれも未練がましく、一日でも生延びようと思つて、其方だちの勧めを入れて、小山田を手頼る氣になつたのだが、……しかし、勝資。父上御他界の後十年の間。たつた一度でも、おれの希望が遂げられたことがあると思ふか。おれは全心全力を盡して働いて來たのに、みんな無駄骨折だつたのだ。法性院殿御寵愛の老臣どもや、肉縁の誰れ彼れがおれを無能呼はりして、てんでに勝手な意見を持出して、武田家の非運をおれ一人の所爲になすりつけるのだが、おれの身にもなつて見ろ。

勝資　それは、不斷からよくお察し申して居ります。

勝頼（興奮して）無能呼はりが癪に障つてならない。おれの不運は、武田信玄の後嗣者として生れた時から極められて

ゐるのだ。おれの一番の失策は、あんな軍に強い親爺の子としてこの世へ生れて來たことなんだ。………其方も覺えてゐようが、三年前に、おれは親讓りの諏訪法性の鍪を前に据ゑて斷言した。織田と德川と北條と三人が連合してこの勝頼一人を推し倒さうと企てたなら、遲かれ疾かれ、勝頼の滅亡することは日が西へ落ちるに極つてゐると同様に、極つてゐるが、たとへ滅亡するまでも、信長如きの旗下には斷じてならないと、おれは云つた。おれは滅亡を覺悟の上で、今日まで生きて來たのだ。……それにしても今日のみじめな樣は何と云ふことだらう。高遠落城の聲に驚いて、苦勞して築いた、城もむざ／＼と燒拂つた。……（感慨を寄せて遠くの空を見詰める）

勝資　御寮樣が草鞍をかけた百姓馬にお乘りになつて、女房たちが徒步跣足でお供をしてゐるのを見ますと、おいたはしうて、わたくしはたび／＼落淚いたしました。

勝頼　おれは平家の都落ちを思出してゐたのだ。………しかし、勝資、平家は一門揃つて退去したのだ。西海の藻屑になるまで、肉身緣者は、互ひに扶け合つてゐたのぢやないか。おれには、數の多い身内のうち、誰れが隨いて來てゐる？幼い信勝とおれと父子二人で壇ノ浦に向つてゐるのだ。

勝資　さう世の中を惡くお觀じなさらなくつても、明日の日どんな御運が向かないとも限りません。今日の敵は明日の味方で、幸運が幸運で終らず、惡運が惡運で終らないのが浮世の實相だと思はれます。ことに、源平二つに分れてゐた昔とは違つて、今日は四分五裂の時勢ぢや御座いませんか。何時敵軍に內輪揉めが起らないとも云へますまい。頑丈な謙信法師でさへ、厠の中で不慮の頓死をしたので御座いますから、織田信長の壽命だつて何時どこで盡きるか、人間業では分りますまい。

勝頼　そんなことが當てに出來るか。だが、おれも氣力が弱つたのか、こなひだうち、そんなことを考へてゐたことも

あつたよ。

　そこへ、惣藏が木の間から出て來る。勝資を見ていやな顔をする。

勝頼　惣藏はあれから夜番をしてゐたのか。

惣藏　ハイ。

勝頼　御苦勞だつたな。別に異つたこともなかつたか。途中の疲れでみんなよく眠つてゐるだらうな。

惣藏　どこの假屋(かや)もヒツソリとして居ります。春の夜の明けるにはもう間も御座いますまい。

勝資　土屋殿は、お見廻りをしてゐられるのは感心だが、御臺樣のお身の廻りを警護してゐなければいけますまい。

惣藏　それはあなたの御注意を受けるまでもないことだ。……御臺樣はお寺の御本尊にお祈りを上げていらつしやる。

勝頼　來世を願つてゐるのか。

惣藏　御本尊の藥師如來の前でお通夜をしたいと仰せられました。

勝頼　どうせ心が昂(たか)ぶつて眠れないのだらうから、佛の前にゐた方がまだしも心が安まつていいだらう。おれも、一度目が醒めてからは、どうしてもあの寢床に入つちやゐられなくなつたよ。

勝頼　御尤もで御座います。あんな穢るしいところへお寢間を設けましたのは申譯が御座いませんが、明け方の山風は急に冷えてまゐりましたから、茅屋(あばらや)の中でも御辛抱なすつて、暫くお休みなすつた方がよろしいかと思はれます。

勝頼　なに、おれは此處で夜を明さう。此處で夜番をしながら、春の曙を待つことにしよう。其方だちは、おれの假屋へ入つて、發足の知らせのあるまで、心置きなく眠つたらよからう。遠慮には及ばない。今朝からの其方だちの心遣ひはおれも察してゐるよ。

勝資　恐れ入ります。それでは御意に甘えて一眠入りさせて頂きませう。土屋殿もお休みなさい。明日の日もあることだから。

惣藏　わたくしは少しも眠くはありません。(ブッキラ棒に云ふ) 二日や三日、眠りを缺いたために氣力の衰へるほど虚弱に生れついてやしません。

勝資　末頼もしい若武者とは、あなたのやうな方だ。甲州武士のお手本だ。我々がたとへ窮境に陷つてゐようとも、あなた方御兄弟のやうな血氣盛んな忠臣が、お上に附添つてゐられる間は、決して失望落膽するには及びますまい。

惣藏　跡部殿は何を仰有る?。わたくしは左樣な氣休めの悅しがらせは聞きたくありません。武田家の昔の榮えを再びこの世で見ようとしてお伴してゐるのぢやありません。新府の館で織田の大軍を待受けて、刀の折れるまでも敵を斬つて〱斬りまくつて、華々しく討死しようと覺悟してゐたのに、敵に後を見せて落ちのびたことは心外です。若君信勝樣も無念に思つてゐらつしやる。わたくしどもは、お上の御生害の時に、潔く腹掻切つて、死出のお供をしたいために、無念を忍んで今日の日を生きてゐるんです。(涙を落して) あなたや長坂殿とは違ひます。外に何の望みを有つてゐるものですか。

勝資　心をお鎭めなさい。御前間近かで不吉な言葉はお愼みなさい。

惣藏　何が不吉です?。死すべき時に死するのがなぜ不吉なんです。敵軍襲來の噂に怯ぢて逃出すこそ、武士として見苦しい不吉の事なのではありませんか。

勝資　あなたの勇氣は感心だが、死急ぎをしなくつてもよろしからう。人間は死ぬるのは何時でも死ねる。敵軍に對し朋輩に對する外見で、稍々もすると討死を言張るのは淺はかなことではあるまいか。

惣藏　それでは、跡部殿は、我々が新府中に踏留まらうとしたのを、外見のためだと仰有るのですか。(目を怒らせて詰寄る。)

勝資　いや、さうは云はない。あなた方が、目醒ましい討死をして、名譽を後世に殘したがるのも、昔ながらの武士の道で、至極結構なことだ。しかし、他人をも強いて、生きられる者までも一しよに死なせようとするのは、わたくしには同意が出來ない。……木の根を枕にしても、我々主從は今夜此處で生きてゐることを、わたくしは喜んでゐるのです。

惣藏　それは腰脫け武士の言草だ。

勝資　腰脫け武士と思ひたければ、さう思つてゐなさい(極めて冷靜に)しかし、わたくしは生きてゐればこそ明日の日の光が見られると思つてゐる。お上も　春の曙を此處でお待ちになつていらつしやる。あなたがいきり立つて御自分の絕望の息を他人の胸腑にまで吹込まなくつてもよろしいではないか。

惣藏　………名譽ある武士が、城を棄てゝ野の末山の隈を逃廻つて、それでも、生きのびた甲斐があると、あなたは思はれるのか。小山田殿がどれだけ手賴りになると、あなたは思つてゐられるんです?。二十日や三十日は必ず持ちこたへると當てにしてゐた高遠の城さへ、一たまりもなく落城した今日、わたくしなどは、空な望みには飽き果てました。

勝資　小山田は、あなたも聞かれた通り、自分の領內へお上をお迎へする準備をすると堅く受合つて行つたぢやありませんか。あの男がどれだけの力になるかならんかは、行つて見なければ分らない譯だが、今からケチをつけるには及びますまい。どうせ駄目だと早合點して絕望してゐた日にや、人間といふ人間が、みんな一日だつて安閑と生きてゐ

られない譯なんです。平家を滅ぼして天下を我が物にした賴朝公だつて、三代とは家が榮えなかつた。運がよくて日の出の勢ひで慢心してゐる織田信長だつて、何時哀れな最後を遂げないとも限らないが、さう先きから先きを案じてゐたら、どんな大英雄も戰爭を一度する氣にもならないでせう。……空がよく晴れて、明日も天氣がよさゝうなのを、まだしも仕合せだと思つてゐなさい。

惣藏　天氣がよくつても、百姓馬の一匹も見つからないんですから。大勢の女房だちは、か弱い足でどうなさることやら。

勝賴　二人とも言合ひは止して呉れ。疼いところへ障られるやうで、おれは聞きづらいのだ。以前のおれなら、一概に惣藏の意見に同意するのだが、今のおれは勝資の言葉も無下に斥けられなく思はれるのだ。長篠の大合戰の折は云ふまでもなく、先頃、膳の城を素膚で攻めた折の勝賴は、今の勝賴ではなかつた。(歎息する)

惣藏　上州の膳の城を乘取つた時の、お上のお勇ましいお姿は、今目の前にちらつくやうに思はれます。紫綾の羽織を召されて、白熊織の毛笠をお着しになつてゐらせられた(恍惚としていふ)

勝賴　あの時、其方は、緋緞子の羽織を着て、白手拭で鉢卷をして、釆配を取つてゐたであらうがな。

惣藏　土屋惣藏一番乘りと名乘つて、二の門の内へ乘り込みました(得意らしく云ふ)

勝賴　その時の其方の悅しさうな聲は、今でもおれの耳に殘つて居るよ。其方のやうな勇者もおれの臣下になつてゐるために、一番乘りの勝利の樂みを、たつた一度しかしなかつたのだ。おれは不憫に思ふよ。

惣藏　(首垂れて沈默)

勝賴　あの勝利も瞬く間の夢であつた。零落した人間が昔の勝軍の夢を思ひ出すのは心淋しいものだ。勝資はさう思は

ないか。

勝資　御意の通りで御座います。上州征伐の折には、わたくしもお供いたしました。

勝頼　あの時には、左馬之助も右衛門大夫も我軍に加はつて働いて呉れたのだ。わづか一年經つか經たぬに、おれの身のまはりが、どれほど淋しくなつたか。左馬之助はおれの從弟だ。おれの娘の婿だ。……それでも勝資は、人の世が頼みになると思ふのか。

勝資　御心中はお察し申します。しかし、浮世の眞實の相を御覧になつたのは、萬卷の書籍をお讀み遊ばしたにもまさつた、尊い御學問では御座いませんか。

勝頼　滅亡の淵に落ちかけてゐる人間が、浮世の學問修業をしたつて、何の役に立つものか。ハヽヽヽ（淋しく笑ふ）もう夜の明けるには間がないだらうが、其方だちは少しの間でも休息しろ。……皆んなよく眠つてゐるのか、おれを捨てゝ逃げ失せたのか。あたりがヒツソリとしてゐるぢやないか。

勝資　それでは、わたくしはお暇を頂いて、一休みいたしませう。土屋殿はいかがなさる。

惣藏　わたくしは、今一度見廻りをいたしませう。……一晩や二晩眠らなくつても、やがて腹でも切つて死んだら、何萬年でも、飽きるだけ眠られるのだ。こんなところで眠り急ぎをするには及ばないや。

惣藏貧然として出て行く。勝資靜かに出て行く。

勝頼、物思ひに耽つてゐる。又平。窓の間から、そつと頭を出す。あたりに誰れもゐまいと思つて、二三歩出かゝつたところを、勝頼に見つけられて驚いて平伏する。

勝頼　誰れだ、其方は。

又平　小原下總守樣に御奉公いたして居ります者で御座います。
勝頼　うん。下總の家來か、見覺えのない顏だが、何時から下總に仕へてゐる？。名は何と云ふ？」
又平　又平と申します。昨年の暮れ、鵝鷁ケ﨑お引上げの折から御奉公いたして居ります。
勝頼　左樣か、（相手の顏を見詰めて）其方のやうな新參者が、よく主人を見棄てないで此處まで隨いて來たものだ。感心な奴だ。褒めて遣はす。
又平　冥加（みやうが）にあまるお言葉を頂きまして、恐入ります。わたくしは、主人と一しよに、何處までもお屋形樣のお供をいたす覺悟をいたして居ります。
勝頼　よく云つて呉れた。世が變つたら、其方のやうな忠義な武士は、心行くばかり取立ててやりいのだが、……其方も今日の有樣を見たら心元なく思ふだらうな。
又平　下賤なわたくしも、御武運の開く時を蔭ながら、神佛に祈願いたして居りました。
勝頼　それで思出したが、御臺所は、山の麓のお寺で通夜をしてゐるさうだ。其方これから、お寺へ行つて、おれが目を醒ましてゐると云つて、御臺所を此處へ連れて來て呉れ。少し話したいことがあるのだから。
又平　畏まりました。
勝頼　早く行つて呉れ。
又平　ハツ。
又平は、薦の中へちよつと入つて、包んだ者をコツソり取出して、袂で隱して、勝頼に會釋して一散に驅出す。勝頼がそちらを見送つてゐると、間もなく、又平が入つて行つた方から、勝頼の御臺所（十九歳）の侍女百合野（二

十歳ぐらひ）とゝもに出て來る。

勝賴　丁度いゝところだつた。今、又平といふ下郎を迎へにやつたのだが、其處で會つたらうな。

御臺　今、其處で見馴れない男に行會いましたが、何とも云はないで、アタフタと驅けだしました。

勝賴　それは變だな。……おれは、そこの見ぐるしい家に安閑と眠つてはゐられないので、さつきから此處に出てゐたのだが、いろ〳〵な感衝が胸に迫つて、急にお前に會つて話したくなつたので、お寺へ迎へにやることにしてたのだよ。……まあ、そこへ腰をおろしなさい。（侍女に向つて）百合野、お前は、その家へ入て、暫く休息してゐろ。

侍女出て行く。御臺所、勝賴のとなりに腰をおろす。

勝賴、お前は藥師如來に何を祈つてゐた？　今日の大難が明日の榮華と變るやうに祈つてゐたのか。

御臺　いえ、さうでは御座いません。後の世の事を佛樣にお賴み申してゐました。「南無藥師瑠璃光如來。わたくしどもの最後はすでに近づいて居りますゆへ、後の世では、一つ蓮の臺の緣を結ばせて下されと、そればかりを一心に祈つてゐました。（邪氣なく云ふ）

勝賴　お前は諦めがいゝな。不意の災難に會つたら氣でも狂ひはしないかと、かね〴〵案じてゐたのだが、思ひの外お前は氣丈夫に生れついてゐる。まさかの時には男子よりも女子の方が諦めがいゝのかも知れないな。………しかし、後の世の事は兎に角、三日でも五日でも、生きてゐる間、お前と艱難辛苦を共にしてゐられるのをおれは悅しく思つてゐるよ。生甲斐があると思はれるのだ。：：昨夜新府の館で大評定があつた時に、信勝をはじめ、多數の者は、館を枕に討死をすると、しやにむに言張つたのを、おれはそれを同意しないで、跡部の勸めを容れて、小山田を賴つて落ちのびることにしたのは、お前の事を思つたためなのだ。：：お前はまだ二十にも足らない年齡ぢやない

か。いはゞ苔の花だ。お前の顏を見ると、春を待つてゐる梢の花のやうに思はれて、ムザ〲散らすのは忍ばれないのだ。お前といふものがなかつたら、おれも新府にじつとしてゐて織田の大軍を待受けたかも知れなかつた。

御臺　それでは、わたくしのために館をお棄てなされたので御座いますか。それが武田家の名折れになるのではありますまいか。

勝頼　名折れになつてもいゝではないか。どうせおれの名前は十年この方傷だらけだよ。……退去するにしても、眞田昌幸はあの男の領地の上州阿賀妻へ來て籠城しろと勸めて呉れたが、おれは其方へ行かないで、此方へ落ちて來ることにした。これも釣閑の說を容れたのだが、釣閑の爺いや大炊之助は、おれの心をよく酌取つて呉れる。高阪や土屋のやうな理窟一遍の頑くな忠義者とは違つて、人情がよく分つてゐる。

御臺　それはどういふ譯なので御座いませうか。此方を差して落ちていらつしやつたのが、なぜお上の御心にかなひましたの？

勝頼（微笑して）お前にもよく分らないのか。長阪は口に出して云はなくつても、おれの心をよく察して呉れたよ。……分らなければ云つて聞かせようか。今日此處まで來る途中で、お前がついぞ乘つたことのない馬に乘せられて惱ましさうにしてゐるのを見るにつけても、こんな可愛い女を、どうして、荒武者と一しよにして、籠城の苦しみがさせられる者かと思つたのだが、今度手賴つて行く小山田の領内都留の郡は、お前の故鄕の相摸に近いのだ。

御臺　相模に近いところへまゐりましたら、どうなりますの？

勝頼　何とか手だてをして、お前を小田原の城へ送り屆けて、安穩に暮らさせたいと思つてゐるのだよ。氏政とおれとは敵味方に分れてゐても、お前は氏政の妹だ。妹が兄の側へ歸つて行くのは耻ではないし、氏政だつてお前を粗末に

はしないだらう。お前は長い間、寒さ暑さの酷しい山國で暮した。それで、たび〳〵幼い時分の記憶を思出して、海が見たい〳〵と云つてゐたぢやないか。おれも、親爺に負けないくらゐに運がよかつたら、海道一帶を切取つて、駿河か遠州の濱邊へ、龍宮のやうな城を築いて、お前に龍宮城の乙姫様にも負けないくらゐな榮華をさせようと思つたのだが、それも愚かな夢となつてしまつたよ。お前はおれに氣兼ねをしないで、小田原へ歸るがいゝ。

御臺　お上はひどいことを仰有る?。たとへ、兄の氏政が、輿車をもつて迎へにまゐりませうとも、お上にお別れして故郷へ歸らうなんて、わたくし、思ひもそめないことで御座います。それに、兄に人情があるなら、織田や德川の味方をして、甲州へ矛先を向ける筈はないので御座いますもの。

勝頼　それは戰國の習ひで爲方がないよ。氏政ばかりを咎めることは出來ない。おれもお前をこそ望んで貰受けたのだが、北條家の幕下になる氣はなかつたのだ。

御臺　この世の中では、女は夫より外に手頼りになるものはないのでせうか。……でも、わたくしは幸福で御座いました。七年の間、可愛がつて頂いたのですから。

勝頼　おれは七年の間、今日ほどお前を戀しいと思つたことはなかつた。錦の褥に坐つて琵琶の音や箏の音を聞いてゐた時よりも、木の根に腰を掛けて、木の葉の音を聞いてゐる今、しみ〴〵とお前の戀しさが感ぜられる。（御臺所の手を執つて）五日でも十日でも、二人で生きられるだけ生きてゐよう。…もう夜の明けるに間もないだらうから、此處にゐて、二人で久振りで春の曙を見ることにしよう。夜が明けて見たら、供の人數が半分にも減つてゐるだらうが、それがどうなるものか。お前を無事に小田原へ屆けて呉れる者が殘つてゐてくれゝばと思つてゐたが、お前が故郷へ歸りたくないのなら、その心配は無用だ……おれは今朝新府を立つ時から、最後はおれ一人と覺悟をしてゐた。

ふと、喧しい叫び聲が起る。勝賴大層驚いて顧みると、後の方に火の手が上つてゐる。それに驚いて、あちらこちらの隅の中から、武士が飛出して驅けて行く。

勝賴　誰れかゞわざと火を掛けたのだな。こちらは風下だ。油斷してはゐられない。さあ、彼方へ行かう。

勝賴立つて御臺所を急立てる。御臺所うろ／＼する。勝賴彼女を脊負つて出て行く。

隅の中から、寢呆け面をした武士が出て來る。

その武士　こりやたまらない。敵がもう攻めて來たのか。

慌てゝ逃出さうとするところへ、土屋惣藏が驅けて來て、その武士に向つて、

惣藏　お屋形樣はどうなされた？。其方は存じないか。

その武士　わたくしは宵からグツスリ眠つてゐましたので、何が何やら、サツパリ分りません。合戰がはじまりましたか。

惣藏　貴樣、氣樂な奴だな。しつかりしろ。

さういふが早いか、彼れは、武士の横つ面を毆る。その武士、しかめつ面をして出て行く。

惣藏はなほ、あたりを見廻してゐると、そこへ、侍女百合野が裸足のまゝ出て來る。

惣藏　オヽ、百合野殿。お上は何方へお越しなされたか、あなたは知つてゐられないか。

百合野　お上は。御臺樣をお脊負ひ遊ばしてあちらへお逃げになりました。（可笑しさを面に現はして云ふ）

惣藏　（今までの張詰めた顏を綻ばせて）なに、御臺所をお脊負ひになつて？

百合野　ハイ。世界が火焰となつても、血の池となつても、二人の中は離れないと云つたやうに、お二方の御樣子はお

睦じさうで御座いました。

惣蔵　さうでしたか。御臺様はいつ此方へお出ましになつたのか知ら。

百合野　破れ寺での御勤行は、氣が滅入つてなりませんから、わたくし、御臺様をお誘ひ申して、お上の御座所へお連れ申したのでした。わたくしはお邪魔にならぬやうに、あの家に身體を隠してゐたのですが、あまりに夜が靜かなので、お二方のお話は殘らずわたくしの耳に入りました。そのお睦じいことゝ云つたら。（調子に乘つて云ふ）

惣蔵　お睦じいのは結構です。（興もなさゝうに云つて）わたくしはそんな話を承らなくつてもよろしい。（行きかける）

百合野　まあ、お待ち下さいまし。わたくし、土屋様に是非お訊ね申したいのですが、小山田様はほんとうにお上のお力になる方なのでせうか。

惣蔵　それは、わたくしにもよくは分りません。お上のお望みで、我々はお供してゐるまでです。

百合野　お上は、御臺様をお里の北條家へお歸し遊ばしたいために、相模に近い小山田の領内へ身を退けることにしたと、さつきお話になつて居りました。

惣蔵　それは初耳だ。本當ですか。

百合野　長阪釣閑様も、さういふお上のお心を察して、新府落ちの道を此方へ取るやうにお勸めしたのださうです。

惣蔵　釣閑の諂ひ武者め。またしてもお上のお心の弱點につけ込みやがつて。

百合野　お上の御臺様孝行は結構なことなんですけれど、そのために、あなたをはじめ忠義に厚い方々や、わたくし達までも、無用な艱難辛苦をするのは、あんまり情けな過ぎるぢや御座いませんか。……土屋様、まあ、わたくしの足を見て下さいまし。（衣服の裾を上げて白い脛を見せて）今日一日御臺様のお伴をしてゐた間に、小石につまづいたり、

荊棘に刺されたりして、こんなに傷をして血だらけになつたぢやありませんか。わたくし、明日の日や明後日の日が案ぜられてなりませんわ。こんな苦勞をして、當てにならないところへ行くよりは、いつそ早く死んだ方がいゝと思はれます。

惣藏　（獨言のやうに）卑怯に城を落ちて、十日二十日生延びたつて、詰るところは討死なんだ。

百合野　お上は、その十日か二十日かを、御臺樣とお二人で、世の人の十年二十年の生活にもまして、睦じく樂んでお過ごしなさらうとなさるんです。わたくし達もさういふ心掛けで、明日の生命は分らない今日の日を樂しんではいけないのでせうか。

惣藏　さあ、どうですか。わたくしにはそんな六ケ敷ことは分りませんな。

百合野　あなたは、お上の御生害のお伴をすることばかり考へていらつしやるの？。………あと、十日か二十日しか殘つてゐないわたし達の生命をよくお考へなさいましな………（ふと感慨に迫つたやうに）百合野は、五年この方の胸の思ひを壓えて、殘り少い日を送らなければならないのでせうか。

惣藏　百合野どのは變なことを云はれる？

百合野　わたくしの心はよくお分りになつてゐるくせに（滿面に媚びを現はして）今朝の新府のお館の大混雜や、途中の騷ぎのうちに、わたくし一人は、うはべは泣いてゐても心の中ではコツソリ喜んでゐました。

惣藏（相手の媚態に稍々心を惹かれたらしい樣にて）あなたは氣味の惡い人だ。早くお寺の方へ避難して、朝の食事の仕度の手傳ひでもなさるがいゝ。

百合野　この騷ぎに、女の一人歩きは怖う御座いますわ。足も疲れました。脊負つて行つて下さいまし。

彼女は惣藏の肩につかまらうとする。惣藏は百合野を振拂ふ。

惣藏　はしたないことをなさるな。わたくしには妻も子もあるのだ。

百合野　明日の生命もわからぬ身で、お家の法度やお國の掟を恐れていらつしやるの？。どうせ死ぬのぢやありませんか。死ぬ時が來るまでに、お互ひに氣儘な戀を樂むのが、なぜいけないんです。……わたくしを背負つて行つて下さい。

惣藏　お謹みなさい。人が見たら嗤はれますよ。

惣藏は彼女の側を離れて向うへ入りかけたが、入り際で、彼女のことが氣にかゝつてゐるらしい態度で振向く。

百合野　これから奥様のお側へ行つて、忠義の御講釋をなさるの？

彼女が冷笑すると、惣藏は不快な顔をして入つて行く。火焰ます〳〵盛んになる。

(幕)

(二)

「栢尾へ着かせ給ひて、待たれけれども、小山田出羽守、御迎に參らざりければ、爰は餘り無用心なりとて、それより駒飼といふ山家へ、引籠らせ給ふ。其夜、人質とて召され置きし小山田が母、行方知れず闕落す。それよりして、すはや、小山田敵になるといひければ、上下惑亂して、さては郡内へ入ること、叶ふべからず。さらば天目山へ入らんとて、田野といふ所まで、辿り行き給ひければ……」(甲亂記)

三月十一日の明け方。

山麓に假りに設けた粗末な陣屋に幕を張つてゐる。所々に櫻の木があつて、花が散りかゝつてゐる。二三の武士、あたりを警戒しながら行過ぎる。

跡部勝資、物を考へながら出て來て、山の方を見上げる。

横田又市、山を下りて來た樣子をして、息もせか〳〵と入つて來て、跡部を見て一禮する

勝資　敵はまだ見えないか。

又市　敵兵らしいものは、まだ影も見えません。

勝資　さうか。山には、人の通れるやうな道がついてゐるだらうな。

又市　ハイ。この山から山續きに武藏の國へ越えられさうで御座います。お屋形樣は、山越しに何處かへお忍びになるので御座いませうか。

勝資　イヤ、もう此處が勝賴公の一番おしまひの御陣所だ。敵に追詰められたばかりでなく、土地の者にまで反かれて逃げ道を塞がれてゐるのだからもうどうしようもないよ。一人々々なら、岩を攀ぢても、流れを渡つても、外へ落ちて行く術もあらうが、手足纒ひの女童を大勢連れてゐては、どうしようもない。此處が武田家のドン詰りだ。

又平　御威勢の盛んだつた武田家の御運も今日限りとなつたので御座いませうか（歎はしげに云ふ）

勝資（相手の顔を不思議さうに見て）お前の妻子はお前と一緒にお供に加はつてゐるのか。

又平　わたくしには妻子なんかありやしません。一人ぼつちですよ。

勝資　それは却つて幸福だつたな。かういふ時には、妻子のあるものは、苦勞の上にも苦勞をする。………しかし、妻子のない身輕なお前が、よく今日まで辛抱してお伴をして來たものだ。新府を出て以來、柏尾、駒飼と、宿を重ねる

たびに、お供の人數が減つて、ことに、小山田の心變りが分つてからは、お前も知つてる通り、皆んなが我れ勝ちに逃出した。昨日の朝、鶴瀬から此處へまゐる時には、下郎一人さへ見つからなくつて、土屋殿がお上のお馬を引出したくらいだつたのに、身分の低いお前が、よくも此處までお隨き申して來たものだ。（感心するよりも、不思議さうに云ふ）

又平　今だから申上げますが、柏尾ではいく度も逃げようとして、機會を伺つて居りました。それが不意にお屋形様にお目通りすることになつて、わたくしの腹の中を御存知のないお屋形様は、お前は忠義者だ〳〵と、過分なお褒めの言葉を直かにお下し賜つたのでした。わたくしは、その時は冷汗を掻きましたよ。あの時の火事騷ぎに紛れて、とに角半里ばかり逃げるには逃げましたが、お屋形様のお言葉を思出すと、勿體ないやうな、空恐ろしいやうな氣持がしましたので、思返して後戻りをしたので御座います。

勝資　それで、最後のお供をする氣になつたのだな。

又平　かうなつたら度胸は据ゑて居ります。今にも敵がやつて來たら斬死にをする覺悟をして居ります。

勝資　死んでも生きても、さういふ覺悟がしつかりとついてゐりや仕合せだ。

又平　わたくしは、自分を幸福な人間だとは思はれませんが……

勝資　見たところ、お前はまだ三十になるかならずの若者だ。若い盛りに、迷はないで、生死の覺悟がちやんとついてゐるのだから感心だよ。

又平　さうお褒め下すつちや恐縮いたします。……さつき山の上から、方々を見廻はしてゐると、身延のお山が目につきました。柏尾で一しよに逃げる約束までした朋輩の甚三郎は、あの山の中に逃込んでゐる筈だが、

今時分は何をしてゐるかと、思はれて、何だか氣が滅入つてなりませんでした。……わたくしがお上のお供をして立派に討死をしたことを、あいつにだけは知らせてやりたいので御座いますが、今日此處で討死をなさるお歷々の方のお名前と御一しよに、わたくしのやうな卑しい木つ葉武者の名前も、世間に傳はりますでせうか。

勝資　それは世間に知れないことはあるまい。此處には四十人ばかりしか踏留つてはゐないのだから。……しかし、念のために、今のうちに、木か石へ自分の姓名をしつかりと書きつけて置いたらどうだ。

又平　成程。いゝ考へだ。それで安心して討死が出來ます。……殿樣、今日は天正十年三月十一日で御座いましたな。

勝資　さうだ。何年何月何日何の又平、名譽の討死と書きつけて置け。

又平　ぢや、早速書いて置きます。……おれも今日がこの世の見收めだ（と呟いて出て行く）

勝資、また山の方を見上げてゐる。と、そこへ、百合野が、前の幕よりも窶れた樣をして入つて來る。

百合野（ふと櫻を見て）オヽ、よく咲いてゐること。新府を落ちてから、何處へ來ても世の中には櫻の花が咲いてゐる。

その聲を聞いて、勝資は振向く。

勝資　百合野殿か。上樣はまだお眠りになつてゐますか。

百合野　一どお目醒めになつて、またお横におなり遊ばしました。

勝資　御心勞が積もつてゐるのだから、御無理のないことだ。

百合野　跡部樣は、この美しい野山の朝景色に見惚れていらつしやつたのですか。

勝資（苦笑して）わたくしにはそんな風流心はありませんよ。

百合野　躑躅ヶ崎のお館で、こんな美くしい春の曙を眺めてゐましたなら、御臺樣から、和歌のお題を賜はるのでせうけれど。

勝資　あなたは氣樂なことを云つてゐなさる！。一刻々々と近づいてゐる我々の運命を思つたら、春の曙も野山の景色もそれが何になります。我々は籠の中の鳥か網代の中の魚と同樣なんです。

百合野　だつて、あなたがお上をおそゝのかし申して、網代の中へ〳〵とお入れ申したやうなものぢや御座いませんか。あなたの御老巧なお目鏡で、小山田殿の忠か不忠のお見わけがつかなかつたとは思はれませんわ。

勝資　わたくしにだつて、人の心はその時になつて見なければ分りませんよ

百合野　お上も御臺樣も、小山田殿心變りの知らせをお聞きになつた時には、恩知らずの人非人よとお腹立ちになりましたが、そのあとでは、跡部や長坂があゝ云つて勸めたから、當てにならぬものを當てにして來たと、歎息していらつしやいました。

勝資　かうなつたら、わたくしなどはどちら向いても恨まれ役だ。(歎息して)おれの力でやうやく掻立てて來た希望の燈火が消えてしまつたら、それをおれの所爲にしやあがる。おれの所爲ぢやなくつて、油や燈心のなくなつたゝめなのに。―(と獨言のやうに云ふ)

そこへ、土屋惣藏が出て來て、怨みを含んだ目で、勝資を睨めつける。

惣藏　跡部殿、あなたは今になつても、まだ生きのびた甲斐があると思つてゐなさるか。明日の光が見られると思つてゐるんですか。僅か四五日生きのびたいために、小山田の罠に罹つて、我々主從はこんなところで見じめな最後を遂げなければならないぢやありませんか。どうせ滅亡するにしても新府の城で華々しい討死が出來たものを。……城を

來てゝ眦を啀らして、乞食のやうになり下つて、(口惜しさうに云ふ)

勝資　今になつて、あなたと爭つたつて爲方がない。何とでも仰有い。

惣藏　(激昂して)云はいでか。この頭腦につかへてゐた思ひを、今こそ吐出してしまはなければ、………貴樣や長坂は武田家の奸賊だ。獅子身中の蟲だ。小山田と云ひ貴樣だちと云ひ、憎むべき敵は却つて味方のうちにあつたのだ。口あたりのいゝ言葉でお上を誑かして、こんな所へお誘ひ申して、武田家の末路を汚したのは、跡部大炊之助長坂釣閑二人の所爲だぞ。言譯があるなら云つて見ろ(刀の柄に手をかける)

勝資默つてゐる。

百合野　土屋樣、そんなひどい事を仰有るものぢや御座いませんわ。

彼女は、いきり立つ惣藏を鎭める。

勝資默つて出て行く。

百合野　わたしだちの生命は、いよ〳〵今日一日と縮まりましたのね。

惣藏　あなたはなぜ何處へでも身を隱さなかつたのです?。女のあなたは、強いてお上の御最後のお供をしなくつてもいゝのだから、今からでも、コツソリ何處かへ落ちて行つたらいゝぢやありませんか。

百合野　落ちて行けと仰有つても、女の身で何處を當てに出て行けませう?。山の中で野たれ死にするか、荒武者に捌まつてむごい目に會はされるか。………

惣藏　それでは、御臺樣の死出のお供をなさるがいゝ。健氣なお覺悟だ。

百合野　わたしは、御臺樣の冥土のお供がしたさに、よろめく足に力を入れて、こんな片田舍まで落ちて來たのぢやあ

りませんわ。生命にかけて思詰めてゐたあなたの影身に添つて、トボ〳〵と此處までまゐりましたの。この世ではあなたの片意地から思ひが遂げられないと極つたのなら、あなたのお討死の時を見て、わたしも同じ時刻に自害して、あの世へまゐります。生死の境を越しても、わたしの一念は遂げないでは置かないと思つてゐるのですもの。わたくし、もう、鐵砲の音も刀の光りも恐ろしくは御座いませんの。

惣藏（當惑して）あなたは恐ろしい女だ。勝部をやつつけて、胸がすいたと思つたら、今度はあなたのために心を亂されければならない。……百合野どのはわたくしの目には鬼女に見える。

百合野　あなたのその目付だつて佛様のやうぢやありませんわ。鬼でも佛でも、わたしの一念はあの世まであなたに隨いて行きます。

そこへ、ふと、又平が入つて來て、いぶかしさうに二人を見る。惣藏極りが惡さうにする。

惣藏　貴様は何をしてゐた？

又平　山の方で見張りをして居りました。勝部様が木の間隱れに山を登つていらつしやいましたが、御様子が變で御座いました。

惣藏　彼奴、逃げるのだな。卑怯者め（と云つて、陣屋の方へ向つて、聲高く）お屋形様、勝部勝賓は脫走を企てました。打取りませうか。

勝頼（陣屋の中にて）なに、勝部が逃げた。不埒至極だ。追駈けて、打取れ。

惣藏　畏りました。

弓矢を持つて驅けて出る。

百合野（又平に向つて）あなたは餘計なことを云ふぢやないか。
又平　わたくしは、跡部様がお逃げになつたと申上げたのぢや御座いません。
百合野　逃げたい人は逃げたつていゝぢやないか。
陣屋の幕が開く。勝頼、總大將らしい裝ひをして端座してゐる。御臺所その側に侍してゐる。百合野と又平とは平伏する。
勝頼　勝資が逃げたといふのは眞實か。
又平　どうもさうらしう御座います。
勝頼　知慧者の勝資も、いよ〳〵おれに希望の破片もなくなつたのを見破つて、愛想を盡かして逃げ去つたのか。不忠者でも何でも、あいつが側にゐるうちは、まだ、どうにかなる道があるのぢやないかと、おれは思つてゐたのに。（二人を見下して感傷的に）武田家出頭第一の勝資でさへ、おれを見棄てゝ逃亡する有様なのに、又平、其方は新參者でありながら、よく辛抱してゐて呉れた。百合野だつてさうだ。世が世であつたら、おれが仲人になつて、其方だちを夫婦にしてやるであらうが、そんな望みもなくなつたよ。
百合野（不平らしく）お戲れにも、左樣なことは仰せられないやうに、お願ひ申上げます。
御臺　百合野は、先日うちの樣子では、心に思つてゐる人があるらしいのよ。最後まで、よくわたくしの側にゐて呉れた。まだ夫と極つたもののないお前は、今はの際に心淋しいだらうな。
百合野　ハイ、お二方を羨ましう存じます、
勝頼（微笑して）只今、この勝頼を羨むものは、日本中に其方一人だ。

そこへ、惣藏が勝資の死骸を抱へて入つて來る。

惣藏　見事に射殺しました。まだビク／＼して居りますが、いかゞ取計らひませうか。（死骸を下へ置いて、氣色ばんで）オヽ、それよりも、河尻肥前守の釣笠の馬印が遙かに見えたと、見張りの者の知らせが御座いました。

勝頼　敵はそんなに早くやつて來たのか、又平皆んなに左樣申し傳へて用意をさせろ

又平　畏りました。（出て行く）

勝頼　（御臺所に向つて）この世でお前と言葉をかはすのも、これが最後だ。何か云ひたいことはないか。

御臺　一つ蓮の臺の縁を信じてゐるわたくしは、今更未練がましくこの世で申殘すことは御座いません。わたくしだちを迎いあの世へ乘せて行く紫の雲が目の先きに見えるやうで御座いますわ。（百合野に向つて）かねて、男子にても女子にても、子供が一人あつたならと、神佛に祈りを懸けて、お前だちも不斷さう云つて、わたしのために悲しんでお呉れだつたけれど、今となつては、子供のないのこそ幸ひだと思はれるよ。幼い者が一人でもあつたなら、この世に未練が殘つてならないだらうから。

勝頼　紫の雲が見える？（ふと向うを見て）おれには修羅の衢が見えるばかりだ。お前は敵軍が間近く寄せて來ないうちに心靜かにあの世へ行け。惣藏、其方に御臺の介錯を頼むぞ。

惣藏　その仰せは御辭退いたしたいので御座いますが、只今の場合、心苦しくも御介錯のお役を勤めさせて頂きます。

御臺　いえ、お上の御介錯をお願ひ申します。人目のないところで、心靜かに生害を遂げたう御座います。

勝頼　承知した。百合野、厩屋の蔀を引いてくれ。

惣藏と百合野とが、蔀をおろす。勝頼夫妻の姿は、蔀の中に隱れる。

惣藏（愁然として）御臺樣のやうなお美しい方も、この世から無くなるのだ。

百合野　お上が御臺樣の御最期の御介錯をなさるやうに、あなたはわたくしの介錯をして下さるでせうか。

惣藏　あなたがいつまでも此處にゐて、敵の刃にかゝるのは見てゐられない。あなたは御臺樣と御一しよに早く、あの世に行きなさるといゝ。

惣藏、夢心地で咄嗟に百合野を引寄せて喉を突いて殺す。百合野は何か云はうとしながら云ふひまもなかつた。惣藏彼女を崖の方へ押やり、身震ひしながら合掌する。

勝頼、幕の中から出て來る。

惣藏　御臺樣は御生害遊ばされましたか。

勝頼　この後は、おれが切腹するまでのことだ。七年の間、飽きも飽かれもせず連添つてゐた御臺の首を落す時にも、おれには紫の雲も見えなかつた。……だが、惣藏、何十年來戰をし通して來たおれだから、無用なことではあるが、行きがけの駄賃に、五人や十人の敵は斬り捨てよう。其方もその覺悟だらうな。

惣藏　申上げるまでもなく、敵に一矢も放たないでは死にきれません。

勝頼（ふと、勝資を見て）勝資はまだ蟲の息でうめいてゐるのか。その息では、もうおれに空な望みを吹込んでくれる力もあるまいな。

惣藏　こいつはいかゞいたしませう。

勝頼　打やつて置け。そのうちに息が切れるだらうよ。

（幕）



父と子

明石敏夫

學校は正午までゞ休みになつた。明日の町制祝賀會に運動場と校舍の一部とが使用されることになつたからである。

中學三年生の古川仙吉は學校から歸ると直ぐに自分の居間になつてゐる二階の六疊で手紙を書いた。家の者に見られてはいけないので始終梯子段の方に氣を配らねばならなかつた。紙とペンとをきちんと机の上に揃へてから彼は、も一度入口の所まで行つて階下の樣子を窺つた。それから心を落ちつけてペンを取つた。

「おなつかしい佐世保のお祖父さん、お祖母さん、そして御一同樣……」と彼は書き出した。佐世保には三年前に死んだ彼の生母の生家があるのである。「皆樣の御慈愛に溢れたお顏を描きながら書きます。

「先日は私の方からあんな手紙を差し上げましたために大へん皆樣に御心配をかけまして申譯がありません。あんな事をお知らせすれば皆さんが御心配なさると云ふ

事は分り切つたことですけれ共、私の苦しみをどうしても皆様に聞いて戴かずには居られなかつたのです。他に私共の事を心から思つて下さる人は何處にもありません。

「皆様の事を考へる時だけ私の心は持つて行き處のない惱みから救はれます。悲しかつたり寂びしかつたりする時は皆樣にでも手紙を書かずにはゐられません。此の上いろんな事をお耳に入れて御心配かけてはいけないと思ふのですけれ共。

「家の中の面白くない事は相變らずであります。あの頃よりも一層惡くなりました。あれから何度私は父と衝突したか知れません。今では同じ家に居ながら顏も見合せないようにして暮して居ります。そのため家ぢゆうが何かで壓えつけられてでもゐるやうな重苦しさです。學校に行つても少しも氣が晴れず學科は身が入らなくなりました。友達と遊んでゐる時も教室に居る時も不愉快な家の事が少時も頭から離れないのです。

「一昨日もこんな事がありました。朝學校に行かうとして茶の間を通ると其處に小夜子が泣いてゐました。理由を訊くと母にあてがはれた着物を學校に着て行かないと云つて拗ねたので、父に折檻されたと云ふのです。父はもう役場に出勤した後で、母が困つたやうにしてそこに坐つてゐました。

「しかし、私には小夜子の心がよく分りました。その着物と云ふのは私が先着てゐたのゝ洗ひ晒しを縫ひ直したものなのです。もうあの歳になると見すぼらしい身裝が友達に恥かしいらしいのです。けれ共幾ら私が彼女に同情したからと云つて私の力で何が出來ませう。口を入れる事すら出來ないのです。私は立つたまゝ泣きじやくる小夜子を見てゐましたが、何だか口惜しいやうな悲しさが込み上げて來ました。憶病な癖にどうかすると人一倍强情な彼女がいぢらしくも憎らしくもなつて、思はず手を揚げて撲ちました。母が遮めようとしましたから私は、「私の妹を私が勝手にするんだか

ら遮めないで下さい」と云ひました。そしてつゞけさまに撲ちました。すると何時の間にか私の目からも涙が流れ出てゐました。

「その日終日私は後悔に苛まれました。小夜子の泣き聲が耳についてゐてはなれませんでした。あの着物を着て學校に行つたらうか。私が出たあとで再母に折檻されはしなかつたらうかと、それが氣になりました。わざと面當がましく目の前で彼女を非度い目に會はせた事が母に氣の毒になりました。その日は敎室に入る氣にはなれないので學校の裏の杉林の中に隱れて遣る瀨ない心で放課時間までを過ごしました。

「私達三人は何と云ふ不幸な兄妹でせう。私はどうかすると私共に冷酷な仕打ばかりする父よりも、私共兄妹をこんな境遇に置き去りにして死んで行つたお母さんの方を恨み度くなる時があります。私は今の母を憎みません。あの人だつて決して惡るい人ではないと思ひます。たゞ私には父の心が分らないのです。何故お母さんが生きて居た時のやうな優しい所がすつかりなくなつたのか。小夜子などは父の聲を聞くだけでおびえてしまうのです。

「慶吉兄さんは依然田岸裏の檻の中に居ます。一ト頃のやうに暴れたり喚いたりはしなくなつた代り此の頃は體がめつきり衰へたやうです。それには今年の夏の暑さが餘程應へたらしいのです。何しろ便所の中のやうな狹くるしい所に持つて來て日は朝から晩まで照りつけるのですから大概達者な體だつて耐らないはずです。番人の話しでは、一寸で良いから檻の外に出してくれ、決して亂暴はしないからと云つて此の夏中しつきりなしに拜むやうにして賴んださうですが、それも望みが無くなると毎日毎日死んだやうになつて眠つてばかりゐたさうです。食物も滅多に取らずに水ばかり欲しがつたさうですが、あゝなつては生きてゐるのが不思議な位いであります。私は慶吉兄さんの怖ろしい境涯を思ふと自分があたりまへの生活をしてゐるのが苦しくてなりません。私は兄さんをあんなにまでしておく必要はないと思ひ

ます。西澤の伯父さんたちも左樣云つて居られるさうです。御承知の通り父はあんな氣質ですから人の意見などには耳を假さないのです。

「兄さんは父と違つて素々氣立の優しい方ですからあんな所に押し込めておかないで周圍の者さへよく氣をつけてやつたら乾度元の欣吉兄さんになると思ひます。今だつて私は兄さんを氣狂扱ひにはしません。いつでも普通の人に對する時のやうに話すのですが、兄さんも間違つた事ばかりは云ひません。それは時偶理由の分らない怒り樣をしたり燥ぎ出したりするのが病氣の症候だとも云へませう。けれ共あんな所に置かれゝば誰れだつて常軌を逸した行動をする樣になるのが當り前ではないでせうか。

「尤も一度此んな事がありました。此の三月時分の事ですが學校の歸りにあすこに立寄つたのです。すると、あの農事試驗場の横に口髯を生やしてステツキを持つた男の人が立つてゐて私を見ると私の方に近寄つて來ました。そして、兄さんの名を云つて、この人が此のあたりに居るさうだが何處だらうと訊くのです。私は一寸躊躇ひましたが、それは私の兄ですと正直に云つて用件を聞きました。その人が云ふには、自分は以前の友達である。久しぶりに町に歸つて來て欣吉君の病氣の事を聞いたので見舞に來たのだが會はせて貰へまいかと云ひました。私は何うしようかと迷ひましたけれ共その人がいかにも良い人らしいので思い切つて案内して行きました。兄さんはいつもの通り汚れた薄い蒲團の上に褞袍を被つたまゝ圓くなつて何かブツ／＼獨りごとを云つてゐましたが、「古川君古川君」とその人が丸太格子の外から聲かけますと始めて氣がついたと云ふ風にけげんさうに此方を見ました。と、ぴよこりと頭を下げて、「君煙草をくれませんか。たつた一本で結構です。どうぞどうぞ」と手を出して哀願するやうな恰好をするのです。その人は兩方の袂を搜つて見ましたが、「生憎今煙草は持ち合せないがね、それよりも君は僕の顏が分らないのか。久島だよ、久島正吉だよ。

しつかりしてよく考へて見給へ。以前一緒に遊んだぢやないか」兄さんはじろじろ見てゐましたが、「君は探偵ぢやないらしいですな」とまるで他の事を云ひます。「私の味方ですか。私を救ひ出しに來て下すつたのですか」久島と云ふ人は情けないと云つた様な顔をして兄さんの口から出る譫語のやうな事を聞いて居りましたがやがて思ひ切つて歸りました。私は途中まで送つて行きました。久島さんは一圓札を出して此れで兄さんに煙草を買つて上げて呉れるようにと云ひました。私は辭退しませんでした。その人と別れて再兄さんの方に引返へして行きました。「探偵は歸つたか」と兄さんは私を見ると云ひました。「探偵なんかぢやありませんよ。兄さんの友達ぢやありませんか。久島さんて知らないはずは無いでせう。」と云つても、「イヤ探偵だよ。假裝してゐやがつたんだ。お前も甘く騙されたらしいな。あれアお母さんが家を横領しようとして手先に使つてゐる奴に違ひない。お前は俺の所には來なくて好いから家にゐてお父さんや小夜子を守つてろ」

「何も何か喋りつゞけようとするのを半分聞いて私は兄さんの側をはなれました。どうも私には兄さんが昔の友達に氣まり悪がつてわざと空惚けてゐるやうに思はれてなりませんでした。そして今だにその疑ひは解けません。尤も春の陽氣はあの病氣にはよくないと云ひますからそのせいであつたかも知れませんが。

「どちらにしても兄さんの今の苦痛は確かに必要以上です。番人が云つてゐるやうに今のまゝにして置けば遠からず死ぬばかりです。父にもそれが分らないはずはないと思ひます。何うしてお父さんは吾が子の死を早めるやうな處置をして平氣でゐられるのでせうか。

「私はお父さんの心を考へて見て自分の親と云ふものを心から怖ろしく思ふ事があります。私は此れまで一日も早く中學校を卒へて家をはなれて何處かに行けるやうになるのをたつた一つの樂しみにして來たのでしたけれ共、今の境遇か

ら脱れ出る事の出來ない兄さんや小夜子の事を思ふと、私一人良い境遇に入つて行く氣にはなれなくなりました。小夜子はまだ話相手にはなりませんし、親戚の者は父に惧れてか少しも私共に介意つて呉れませんし、何うしたら恐ろしい今の成行から脱れる事が出來ようかと自分の力では何うにもならないと分り切つた事を一人で思ひ悶えてばかりゐます。

「明日は當地は賑ひです。今度玉井村が町になつたので町ぢゆうお祝ひをするさうです。父はそのまゝ村長から町長になりました。加之に町からは今度の功勞に對して何か贈られる事になつたさうです。昨晩、あまり座敷がにぎやかなので降りて行つて見ましたら父が家の者や役場吏員共を集めて演説の稽古をしてゐるのでした。私が覗くと例にない機嫌で私にも聽いて批評して呉れと云ひました。私は聞かずに直ぐ引返して來ましたが、珍らしく父の優しい心を見せられたので涙ぐましくなりました。それにしても父と云ふ人こそ、野心家だとか、陰謀家だとか世間の人には云はれますけれ共、自分の一生を幸福に送れる人だとつくづく羨ましく思ひました。

「今日は此れでやめます。今後も書く機會は有らうと思ひますけれ共、私の家に何事か起りました場合には何卒立ち入つた御心配をお願ひ致します。當地の親類では西澤の伯父さん伯母さんが一ばん私共の事を心配してくれます。小夜子は少し強情ですが、體は達者でそれに勝氣な奴ですから自分で自分の運命を拓いて行くでせう。私は私共三人の内で彼女が一番父の性格に似た子だと思ひます。

「ではお祖父さん、お祖母さん、そして御一同樣。どうぞ御丈夫でいつまでも幸福にお暮し下さい。

仙　吉

仙吉は的もなく家を出て賑かな表通りに行つて見た。通りはもう祝ひの裝ひが半分以上出來上つて居る。兩側の家の

軒から軒へ旗が張り渡されて紙の隧道のやうに見える往來を晴れやかな顔をした人が往來してゐた。いつもは寂しい所々の空地が今は一番の盛り場になつて、方々から集つたいろんな見せ物が急拵らへの小屋に鮮かな幔幕を張つたり棒杭で圍を造つたりしてゐた。その前には子供等が集つて繪看板に見惚れてゐた。小夜子も、嬰兒を負つてその中に混じつてゐたが仙吉を認めると直ぐに走つて來て、

「兄ちやん、拾錢」と云つて手を出した。仙吉は錢入を取り出して中を見たが丁度拾錢が無かつた。で、廿錢紙幣を渡して、「此れしこやるけん。みんな遣ふち仕舞ふてたならんばい。明日んとに殘しとかにや」

小夜子は頷いて行きかけたが再び歸つて來て、「あのネ兄ちやん、新町ン方に行くとネ。お父さんの名ァ書いて高い處に揚げちあるばい。行つて見なはり」と言つた。

「然うか」と仙吉は云つたがその後から嚴ついた口調でたしなめた。「人にそげん事云つちや不可んぞ、お父さんの事を自慢するごつ思はれるけんな。人がお父さんの事を云ふ時にア、汝ア默つちよるもんばい。分つたか」

小夜子は年齡より怜しげな顔にきまり惡るさうな表情をしたが、「私しア誰れにも云はん」と云つて向うに行つた。仙吉は兄の所に行つて見ようと思つて人に見られない所で煙草を買つた。町を出はずれて農事試驗所の方に道を取つた。石橋を渡つたところで川縁に沿ふて行けば一ばん近いのだけれ共、その川沿ひの土手が縣道から見渡されるやうな位置にあるので、兄の所に行くのを人に見られるのが厭さにいつも迂回をするのである。

兄は肱枕で轉んでゐたが仙吉を見ると何う云ふ氣が起つたのか、

「箒を取つてやつてくれ」といつて身を廻りの掃除を始めた。此の前に來た時にはひどく機嫌が惡くて此方から口を利いても返答さへしなかつたのに、と仙吉は可笑しいのを耐へて兄の樣子を眺めてゐた。慶吉は敷つ放しの蒲團を折つ

て、仙吉が差し入れてやつた古新聞や講談本と一緒に疊の隅に積んで掻き寄せた埃は破れ團扇にすくつた。
「已が捨てち來う」と仙吉が云つたけれ共肯かずに自分で側の便所の中に入れた。汚れて縞目の分らなくなつた着物は點々綿が食み出て瘦せ細つた足は危ふくよろめいた。仙吉が煙草に火をつけて來て兄にやると、「ア大けに大けに」と兄は直ぐに取つて喫ひ始めた。仙吉は附添ひの老人にも二三本分けてやつて機嫌を取つた。此の老爺は小作人の中から選ばれてかうして番をさせられてゐるのであるが、ひどくむつちりした變人で何時も草履を作つてゐた。慶吉と二人きりで朝晩一緒に暮してゐながら、たゞ三飯や水の差し入れを機械的にするだけで慶吉に對して親しい態度を少しでも見せなかつた。慶吉の方から話しかけてもてんで取り合はない。どうかすと邪慳に叱りつけたりした。それで慶吉の方でもひどく氣兼ねして云ひ度い用事があつても耐えて仙吉の來るのを待つてゐると云ふ風であつた。老爺は貰つた煙草は吸はないで傍の道具箱の中に藏つた。やがて散らかつた藁屑を掻き寄せて、仙吉のために新しい莫蓙を破れた疊の上に敷いた。仙吉が兄の事を、
「今日は機嫌がばかに良かたい。」と云つて笑うと老爺も笑つて、先刻まで唄を歌つて一人で燥いで居たと話した。慶吉は自分の噂をされてゐるとは知らずに一本の卷煙草を惜しげにぐすりぐすり吸つてゐた。
仕事に一區切つくと老爺は一寸川まで行つて來ると云つて後を仙吉に賴んで汚れた食器を鍋の中に入れて出て行つた
「仙吉」と兄は二人ぎりになるのを待つて「田は既う刈つて仕舞ふとつか」と訊ねた。明り取りの窓は壁の一番高い所にあるので外の景色を見たくも慶吉には出來ないのである。仙吉には兄がそれを氣にする理由が分つてゐた。近傍が稲刈りでさはめいてゐた時分、土手を通る百姓等が聲高に彼の事を話して行くのがよく家の中にまで聞こへるのであつ

た。中には「村長さんとこの氣狂を見せてくれ」と云つて家の中に入つて來て老爺に怒鳴られる無遠慮者もあつた。
「ア、、既うすつかり刈つてしまうとる」と仙吉は云つて安心させた。
老爺は川から歸つて來ると何か云ひにくさうにもじもじしてゐたが思ひきつて、家まで着物を取りに行つて來たいのだがと仙吉の許しを乞うた。仙吉は何時頃歸るかと聞いて快く行かせた。
「小説本でも讀まんか」と慶吉は仙吉が退屈してゐるとでも思つたのかさう云つた。
「要らん、讀むごつ無か、己ら眠るけん」と仙吉は云つて莫蓙の上に轉んだ。兄と口利き度くないので眠つたふりをした。暫らくすると疊の上がごそごそ音がするので何氣なく目を開くと、慶吉が格子の間から手を一杯に延ばして箒の柄を出してゐるのでぎよつとして起き直つた。が直くに可笑しくなつた。疊の上の煙草をそつと引寄せて取ろうとしてゐるのであつた。彼に見られると慌てゝ手を引込めた。仙吉は一本取つて自分で火をつけて兄にやつた。ずつと前に一度燐の藥を摺り出して火を點けて危ふく火事を起さうとした事があつて以來、慶吉の側には一切火だねを持つて行かない事になつてゐた。それで煙草も一々此方で火をつけて渡して吸つて仕舞ふ間見張つてゐなければならなかつた。

仙吉はつい何時の間にかうとうとした。「仙吉、仙吉」と云ふ兄の鋭い呼び聲に喚び醒された時彼は怖しい夢に魘されてゐた。仙吉は恍けた目で四邊を見廻した。
「何うかしたつか。己たまげたぞ、あげん大けな聲立てち」と慶吉は云つた。
「ウム…………」仙吉は兄に聞えるやうな事を何を云つたらうと氣になつた。日頃自分の胸に抱いてゐる肉親に對する怖ろしい企てを今の寢言で慶吉に氣取られはしなかつたかと思つて檻の中を見ると兄は横になつてにやにや笑ひ乍ら此

方を見てゐた。氣づいて居る樣子はなかつた。

仙吉はもう眠るまいと思つて起きて家を出た。戸外のパツとした明るさは今まで彼を壓しつけてゐた黑い雲を一瞬に吹きとばした。幸ひあたりに人影が見えないので彼は土手の上に上つてあたりを見廻した。刈られた跡のからつとした田圃に傾きかけた陽光を一杯に受けて所々の黃葉して稻木や遠い連山の頭が黃金色に輝いてゐる。初冬のうら枯れた自然は澄み切つた大氣の中に重々しい崇嚴の相を見せてゐた。仙吉は土手の斜面に仰向けになつて、周圍の異樣な沈默の中に幽かに聞えて來る町の騷音に耳を澄した。

仙吉は俄かに人の居る所が戀しくなつて、老爺が歸つて來ると直ぐに走るやうにして田圃の中を町の方に向つた。町なかは先刻よりもざわついてゐた。役場の正門には杉葉に小旗を挿したアーチがこしらへてあつて、その前に人が大勢集つてゐた。仙吉も通りかゝりに立ち止つてそれを見てゐた。すると、「おい古川」と云つて彼の肩を叩いた者がある。振り返つて見ると筑田と云ふ同級の友人がそこにゐた。二人は其處を離れた。

「みんな嬉しさうな面付しとつ、が村が町になつたけんち、何んが良かこつか己れには分らん」と筑田はつまらなさうに云つた。

「ほんになア」と仙吉も相槌打つて、「今、ザツト雨でも來りア何も彼も滅茶々々になつて仕舞ふち面白かろばつてん。どいつもこいつも狼狽くさつてなア」と云つたが、フト相手が自分の父の野心を忌々しく思つてゐて、それでわざと彼にそんなあてつけを云つたのではないかと氣がついて厭な氣になつた。だが然うではなかつた。

「己、子供ん時つから損な性分でなア」と筑田は步き乍ら、「此げんお祝ひとかお祭とか云ふもんが些も面白無かつばい。人が嬉しさうにしとると餘計つまらんとばい」

仙吉は急に此の友達が好きになつた。それに此の儘陰氣な吾が家に歸つて行つてもつまらないと思つたので、「何か食ひに行こか」と誘つた。そして相手が金が無いと云つて躊躇するのを遮つて、「己がおごろ」と威勢よく云つた。つい此の程小夜子と二人に小遣ひにせよと云つて佐世保の祖父母から送つて貰つたので金は持つてゐるのである。そして二人は人目に懸らないようにして小さな料理屋に入つた。そこは主もに中學生を相手にてゐる肉屋であつた。仙吉は女に云ひつけて酒をも取り寄せた。

「君は酒を飲むのか」と筑田は驚いて仙吉の顏を見た。

「アヽ」と仙吉は笑つて二三盃つづけさまに干して見せた。が直ぐに眞つ赤になつた。頭が好い氣持ちになつて來て今は日頃の惱しい想念も遠退いた。

「親爺が酒食らひぢやけん。己が飲むのは當り前ぢやつか。なア、己親父ん前でも平氣で飲んぢやろち思とるばい」と陽氣に云つた。

「ほんに村長さんは飲みなはるげな。なア」

と女は仙吉の顏に目を据えて、「お父さんに似とんなはるたい」と獨言つた。

「似とるもんか」仙吉は聞き咎めてむきになつて、「己らそげん云はるんのは最ち厭ばい。また云つたら容赦せんぞ」と怒つた。戸外が薄暗くなつてから二人はそこを出た。

友達と別れて仙吉は家に歸つた。座敷には今夜も客が來てゐて酒になるらしい。父の豪傑笑いが聞える。母が臺所で襷懸けで立働いてゐるのが、ちらと見えた。仙吉は直ぐに二階に行かうとしたが、梯子段の下に小夜子が依然子供を負つたまゝしよんぼり立つてゐるのに目がついた。御飯はすんだのかと訊くと、まだと答へた。仙吉は十錢出して何か買

つてお食べと云つたが小夜子は此れから座敷にお銚子を持つて行かねばならないからと云つて取らなかつた。
「そつちや、此れは明日んなつちからやろばい。な」と仙吉は優しく云つた。すると小夜子は、
「私、持つとる。見しゆうか」と云つて懐ろから小さな金入れを出した。そして、「お母さんに貰うた」と云つて中から二十錢出した。
「兄ちやんの顔は赤つかか、酒飲んで來たつばい」と仙吉は妹の方に顔を持つて行つて、ハアと呼吸を吹きかけた。
「臭つ！」と小夜子は鼻を覆うた。
「臭かろが」と仙吉は笑つて見せて、「ばつてん、兄ちやんが酒飲ん事ア誰れんも云ふちやならんばい。なア」と注意した。
　仙吉は自分の居室に入ると蒲團を布いて灯を消して眠つた。
それから何時間過ぎて居たか、仙吉は突然慌たゞしく鳴り出した半鐘に驚ろかされて目を醒ました。始めの間、彼は夢のつゞきのやうにそれを聞いてゐたが、する内四邊がざはめいて來て、彼方此方で雨戸を開ける音がした。然し彼は現實の出來事だと云ふことが瞭り分つても猶ほ起き出ようとはせずに好い氣持ちでそれを聞いてゐた。どんな成行にならうとも兎に角現在の狀態を打ち毀すやうな何か出來事が有ればいゝと始終願つてゐる仙吉には、今何處かで燃えてゐる火事の場面を誇張して想像するのは面白かつた。戸外の騷ぎがだんだん大きくなるのも介意はずに横着に落ちついて勝手に空想を弄んでゐると階下から母の聲がけたゝましく彼を呼んだ。彼が眞つ暗な中に起き上つて着物を捜してゐる時には母は既う梯子段から首を出して、
「仙さん、仙さん。火事は田岸裏げな、早う行つて……」と切れ切れに云つた。
仙吉はそこそこに帶を締めて母について降りた。

「此ん横道もんが」と父はいきなり仙吉をにらみつけた「何を今迄ぐづぐづしとつか。役場ん衆が行つて呉れとつけん、さつさと行け」

父がいつもの尊大に似ず取り亂してしまつてゐる樣子が仙吉には滑稽に見えた。彼はわざと落ちつき拂つて青い顏に硬ばつたやうな侮蔑の表情を浮べて父を見返した「何ちふ目をして親を……」と云ひ乍ら父が立向つて來た。仙吉も身構へした。その時母が仙吉の腕を押すやうにして戸口の方に連れて行つた。

仙吉は町はづれに向つて一散に走つた。本町の通りに出ると火事場に急ぐ人が彼の外にも澤山あつた。何の火だつたらうとか、氣狂ひは何うなつたらうとか、その他仙吉の家に關する事を聲高に話し合ひ乍ら行く人々の幾組かを仙吉は追ひ越した。

町を出はづれる頃には行く人よりも歸る人の方が多くなつた「駄目々々、既う消えて仕舞うた」と云つて此れから行からとする者を思ひ止らせやうとした。それ等の人の話だと燒けたのは慶吉の入つてゐる所ではなくて、直ぐ背後の崖の上の百姓家であつた。仙吉はそれを聞いてほつとしたが、それと同時に何んだか當の外れた物足りなさを感じた。自分の心が父以上の殘忍な成行を待ち望んでゐたと思ひ度くはなかつたけれ共、事實はそれに違ひなかつた。仙吉は歩みを緩めた。小屋の傍に立つた時は見物人は散つてしまつて崖の燒跡からは一條の煙が白く舞ひ上つてゐた。家が小さいので町から人が驅けつけた時には燃えてしまつてゐたのであつた。慶吉は田圃の切株の上に戸板を置いて其上に寢かされて居た。四五人の男がそれを取り卷いてぶつぶつ囁いてゐた。近寄つて見るとそれは今まで家で父と酒飲んでゐた役場の者であつた。今夜一晩慶吉を何うしたらよからうと評議してゐた。

「ぢや、汝、苦勞かばつてん大將の意見を聞いち來い。夜通しこげんして夜露に曝らしとくわけにはいかんけん」と云

はれて小使が父の所に行つた。

「怪俄は無かつたか」と仙吉は老爺に訊ねた。老爺はたゞさへ無愛想を顔を一層膨らして、

「怪俄は爲んだばつてん、出しち呉れ出しち呉れ云ふち怒れて私や怖ろしうてどげん仕様もなかつた」と云つた。役場の連中は田の畔に腰を下ろして、てんでに煙草を吸ひ始めた。珍らしげに集まつて來た見物を巡査が追ひ拂つた。仙吉は小屋の傍に行つて見た。崖の上から押つ被せに火が落ちて來て何度か火がつきつきしたのをやつと消し止めたので、すつかり水に濡れそぼつて、たゞさへ粗末な建物は壁が落ちたり屋根が剝がれたりして散々に崩れてゐる。僅かな世帶道具と二人の夜具とは家の前に積んであつた。

「仙か」と云つて土手を降りて來た二つの人影が彼を呼んだ。近づいて來たのを見ると西澤の伯父と伯母であつた。伯母は跣足で着物の裾をからげてゐた。

「伯母さん」と云つて仙吉はその方に寄つて行つたが、涙が込み上げて來てそのあとがつづけられなかつた。

「慶吉は彼處か」と二人は聞いてその方に行つた。

　役場の小使や給仕が三人で細丸太やら板やらを背負つて來た。皆は假小屋の急拵へに取り懸つた。星明りを頼りに丸太棒を地に打ち込んで周圍と天井に筵を張つた。そして慶吉を戸板のまゝ運び込んだ。慶吉は生きたもののやうには見えなかつた。むくんだ顔は夜目にも青白く、その上に一尺の餘も延びた髮が肩のあたりに亂れ懸つてゐた。

　仙吉は先刻から皆の仕事には加はらずに少し離れた所の草の上に蹲踞んで涯も無く自分の上に展がつた星空をボンヤり見上げてゐた。云ひ様のない悲しみが彼の心を深い憂鬱に沈めた。燒跡からは尚ほも細い烟が昇つてゐる。それが綫く空の面に流れてやがて消えた。仙吉の目はそこから落ちて田圃の中に動いてゐる黑い人影に移つた。と、彼は何を思

つたのか町の方に向つてすたすたと駈け出した。

父は助役を相手に矢張り酒を飲んでゐた。火事場に行つて貰つた連中に御馳走するのであらう。お膳がずらりと並んでゐる。母も嬰兒を抱いて坐つてゐた。唐紙を開けてすつと入つて來た仙吉のたゞならぬ顔色に三人の目は一齊に注がれたが、父だけは素早く目を反らした。

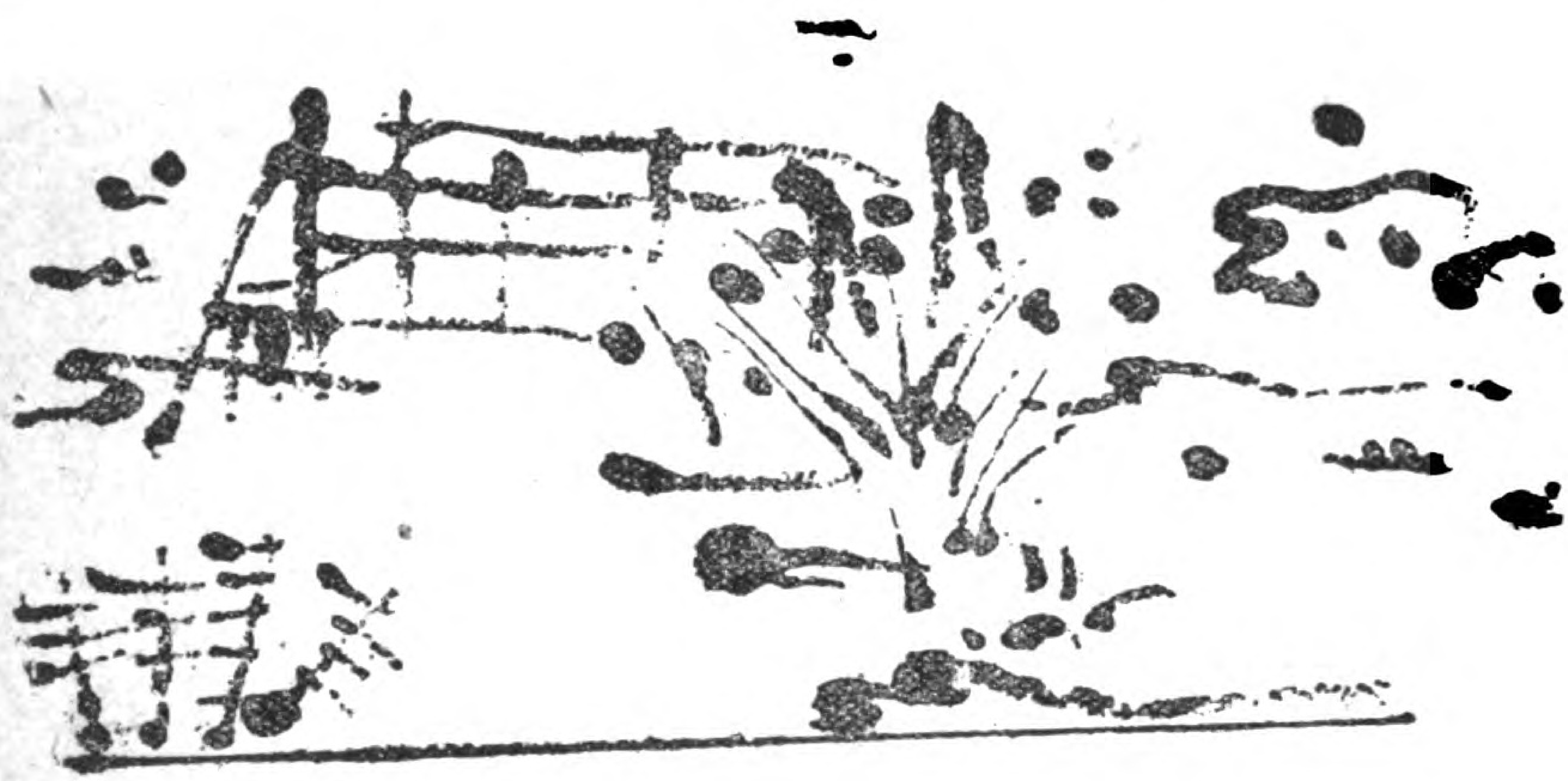
「兄ちやんには怪我は無かつたつちてな。」と母は機嫌をとるやうに云つた。「彼處の仕事はすんだつか。」

仙吉はそれには答へなかつた。わざとらしく落付いて酒を飲んでゐる父の横顔を睨みつけてゐたが、

「コラ」と怒鳴つて、「汝あ鬼か人間か。」と終いの方は半分泣き乍ら云つた。父は煙管を取つて立ち上つた。

仙吉は丁度そこに銚子を持つて來た小夜子を突き飛ばして二階に駈け昇つた。そして机の曳出しから小刀を取り出して、暗の中に父が追つて來るのを待ち受けた。

（をはり）



火を戀ふ

谷崎精二

一

汽車がS市の停車場へ着いたのは午后九時を少し過ぎて居た。

水原はトランクを下げてプラツトフオームへ降り、改札口の柵に凭れた五六人の人々の群へ視線を配りながら其方へ足を向けた。

『此處です、此處です。』

實子の義兄の湯淺がさう云つて彼の方へ手を振つた。そして水原が改札口を拔けると、氣輕に彼のトランクを持つてくれた。

『よくいらつしやいました。とにかく私の家へ參りませう。汚ない處でお窮屈かも知れませんが、二階が空いて居りますから。』

湯淺はトランクを持つてすた〳〵車夫の溜り場の方へ歩いて行つた。土産物だの、着替の衣類だのがぎつしり詰め込まれた、かなり重いトランクだつたが、商人で、若い時分力業をしたらしい、體格のがつしりして居る彼にはそんな物を持つの

が何でもないらしかつた

驛前の廣場は妙にだゞつ廣くつて、街の電燈の光も弱々しかつた。東北第一の賑かな都會として水原が想像して居た光景とは大分違つて居た。だがそんな事はどうでもよかつた。停車場に實子が來て居ないのが彼には物足りないのだつた。そして此のだゞつ廣い、妙に不活發に見える街と、廿幾年東京で育ち、一ケ月前病氣の爲めに義兄に連れられて來て、此の都會の何處か、おそらく停車場前の廣場よりもつと淋しい陰氣な一角で暮して居るであらう實子の身の上を結び着けて考へる事が彼の心を滅入らせた。

湯淺は車を二臺命じて居るらしかつた。だが水原は始めから湯淺の家へ泊めて貰ふつもりはなかつた。停車場の近所の旅館へ一先づ落着いて、其の上で湯淺の家を訪れるつもりだつた。實子と彼が正しい夫妻だつたら遠慮無く湯淺の家へ泊る事も出來たが、さうでないだけに彼としてはどうしても辭退したかつた。

『折角ですが私旅館へ行きたいと思ひます。其の方が勝手でようござんすし、始めから其のつもりでしたので。』

水原は湯淺の側へ行つてさう斷つた。

『まあ、さうおつしやらないでどうか手前共へいらしつて下さい。窮屈でお氣に入らなかつたら、又旅館へ御案内しますから。ね、どうぞさうなすつて。』

湯淺にさうせがまれると彼も其れ以上文句が云へなかつた。一月前、實子を彼に預ける時の交渉で、湯淺の親切な氣質は彼によくわかつて居たし、實子と彼との變則な關係を知りながら、彼を自宅へ泊めさせようと云ふのはかなりの好意でなければならなかつた。

『さあ、どうぞお乘りなすつて。』

湯淺は彼のトランクを抱へて先きへ車に乘つた。水原は賓子の事が氣懸りだつた。賓子は屹度湯淺の家に待つて居るのだらう。さうして見るとまだ身體が惡いのかも知れない。車へ乘つて家へ着けば、其處には賓子も居る。弟も居る。賓子の姉である湯淺の妻も居る。さうした人たちに會はない前、彼は今迄手紙の往復だけではよく會得出來なかつた賓子の近狀を委しく湯淺から聞きたいと思つた。

『賓子はどうして居ます？』

彼はもう一度あたりを見廻して、賓子が來て居ないのを確かめながら問ひかけた。

『賓子さんは今朝から髮を結つたりして大分はしやいで居ました。私と一緒に家を出たんですが、時間が間に合はないので私だけ先きへ急いで馳けて來たんです。もう來さうなものですが、或ひは道に迷つて歸つてしまつたのかも知れません。妙に怖がつて此方へ來てからも決して一人では外へ出ないんですから、道なんかまるでわからないんですよ。』

『ぢやあまだ頭の工合がすつかり直らないんですね、どんな樣子だがゆつくり伺ひたいんですが……近いなら歩きませう。』

『えゝ、歩いてもようござんす。では鞄だけ車屋に持たせませう。』

湯淺は車から降り、水原と肩を並べて歩き出した。車夫がトランクを載せた車を曳いて後からついて來た。

『どうも淋しい處で東京とは比べ物になりません。私が始めて來た時分には今よりもつとさびれて居ました。早いもので、もう此方へ來てから十年になります。』

そんな事を云ひながら湯淺は停車場前の大通りから靜かな横町へ曲つた。雷雨が降つた後で往來はぬかつて居た。街の電燈の數も少なかつた。夏の宵で、東京なら場末の町でも十軒に一軒位、カフエーとか、時計屋とかの店先で蓄音

器やラジオのラッパが唸り聲を立てゝ居るのに、兩側の商店は往來で話合ふ人の聲が店の奥迄通るだらうと思はれる程ひつそりして居た。

『手紙でお知らせしましたが、實子さんを連れて來た當座は全く弱りました。近所の溫泉へ連れて行つたんですが、湯殿から座敷へ戻る途中で女中部屋に紛れ込みましてね。其處に汚ない着物が脱ぎ棄てゝあつたのを見て、これは乞食の着物だ。私を欺してこんな處へ連れ込み、此の着物を着せて乞食にしてしまふつもりに違ひないなんて云ひながらおいおい泣き出したりするんです。とんだ恥をかいてそこ〳〵に宿を出てしまひました。それから大學病院へ連れて行つて藥を貰つて來たんですが、どうしても飮まないんです。毒でも入れてあると思ひ込んで居るらしいんです。家内が無理に飮ませようとすると、ぢやあ姉さんが一口飮めと云ふんです。何しろ實の姉迄疑ふ様になつてしまつたんですからな。』

水原は暗い顏をして俯むきながら湯淺の話を聞いた。別れて姉の許へ預ければ直るだらう、さう思つて實子を姉夫婦の手に托したのだつたが、結局其れは大した効果が無い事が明かになつた。彼が側に附きゝりで介抱してやつたら案外早く直つたか知れない。だが實際のところ彼は一月前、氣が變になつて夜中に剃刀を引抜いたり、家を飛び出して近くの井戸へ飛び込まうとしたりする實子を宥め、賺し、或ひは强壓する努力ですつかり疲勞し盡してしまつて居た。急電に接して姉夫婦が上京して本郷の實子の家へやつて來た時、彼は本當に助かつた氣がした。實子の看護を暫くでも彼等に委ねなければ、彼自身の健康が堪へられなくなる事を憂慮して居た。

『ぢやあ御機嫌よう。私もう生きてお眼にかゝれないのね。』

家を疊み、家財を悉皆S市へ送つて、姉夫婦に伴はれ上野停車場から汽車に乗り込む時、實子は見送りに來た水原に悲しい微笑を向けながらさう云つた。どうして殺されるのだか、何故生きて居られないのだか、其れは誰にも理解出

來ない、だが强く彼の女を脅かして居る狂ほしい一つの觀念だつた。彼の女は最初水原の愛情が冷めたと云ふ疑ひを抱き始めた。水原は幾度か涙を流して彼の女の前で愛情の變らない事を誓はなければならなかつた。だが其の誓ひが効果があるのは唯其の日一日だけだつた。翌日になると前日と同じ様に彼の女は又烈しい非難と疑惑とを彼の面前に投げつけた。彼の女がぢれると彼も同じ様にぢれて來た。彼の女は遂に假想の敵を造へ出した。或る時は其れは水原の友人であり、或る時は彼の妻であり、或る時は又ありもしない水原の新しい愛人であつた。そして最後に世の中で凡ての人々が彼の女を脅かし、彼の女の生命を奪はうとして居るのだと思ひ込む様になつた。彼の女は家の外へ一歩も出ず、水原が側に居なければ食事も取らず、一睡もしなかつた。

『私が生きて居ればあなたの邪魔になる事はわかつて居ます。だがそんなら死んでくれと何故はつきり云はないんです。自分が知らん顏をしながら外の人を使つて私を殺さうなんて餘り卑怯です。』

そんな事を水原に向つて云ひ出す頃、彼の女はもう全ヽ片時も眼を離されない不幸な病人となつて居た。

二

『彼處が私の家です。そら、實子さんが店の前に立つて居ます。』

廣い、稍や賑かな通りへ出て二三町行つたところで、湯淺は右側の大きな硝子の戶が押し開かれた店先を指しながらさう言つた。珍らしく丸髷に結つた實子が、見覺えのある青い紗の帶を締めて其處に立つて居た。

『どうしたんです、實子さん？後から來なかつたんですか？』

湯淺は側へ寄つてさう話しかけた。人の好い彼は義妹をいつもさんづけにして呼んで居た。それに義理の妹と云つて

も、遠く離れた處に住んで居たので、彼は實子と今迄幾度も會つた事が無く、曾て高等教育を受けた資産家の青年と結婚生活を營んで、萬事ハイカラな趣味を持つた彼の女を、田舍の商人らしい單純な氣質から多少尊敬もして居た。

『私兄さんの後を追つ馳けたんですけれど、途中で影が見えなくなつたので引返して來たんです。姉さんに叱れたわ。』

實子は穩かに笑ひながら答へた。

『實子は家へ歸つて、水原が來るなんて嘘だ、兄さんが私を欺して汽車で何處かへ連れて行くんだなんて云つて居るんです。本當に仕樣の無い馬鹿で、物が云へません。』

姉が奥から出て來てさう說明した。

『まだやつぱり駄目だ。どうしたと云ふ事だらう。』

水原はさう思つて湯淺と顏を見合せた。

實子に導かれて二階へ上り、水原は改めて湯淺夫妻と挨拶した。彼等は東京の生れだつたが、十年も前から此の土地へ來て、小さな、だが手堅い商店を經營して居た。湯淺は世話好きな、そして人の好い男だつたので、此の界隈ではかなりの顏役らしい事を、水原は實子から聞いて居た。

『汽車の中、暑かつたでせう。着替へたら？』

實子はさう云つて、本郷の家で彼の女が縫つてくれた浴衣を出してくれた。

『實子さんは丸髮がよく似合ひますね。何しろ今日は朝から御機嫌が良くつて髮を結はうつて云ひ出したんですからね。此方へ來て一月になりますが、いつも結び髮で病人らしくつて、今日始めて元氣な顏を見ました。』

口の輕い湯淺は笑ひながらそんな事を云ひ出した。

『およしなさいよ、兄さん、つまらない事を云ふのは。』

實子は義兄に非難の眼つきを向けた。さうした常談を云はれる事が嫌ひな實子である事も、折角かうして訪ねて來た水原と義妹との仲を再び圓滿に納めようと努力して居る湯淺である事も、水原にはよくわかつて居た。

用意してあつたと見えて直きに酒と肴が運ばれた。

『どうぞ一杯召上つて下さい。うちではお酒を飲まないので、お酒の道具が何もありませんで。』

そんな事を云ひながら、姉は不恰好な大きな盃を水原の前へ置いた。東京から汽車で運んだ荷物の中で、陶器類はすつかり壞れてしまつたので、實子の家にあつた盃や徳利は皆使へなくなつたと云ふ様な事を湯淺が側から辯解した。

水原の外に誰も酒を飲む人は居なかつた。其の水原もほんの二三合しか飲めなかつた。實子は彼にお酌をしたり、時々言葉寡なに彼の質問に答へたりした。彼がわざ〳〵かうしてS市迄見舞に來た事を信じないで、つい先刻義兄が來すのだと疑つたと云ふ彼の女だつたが、愈々彼が來て、かうして落着いて話合ふとなると、又其れが當然の様に思つて居るらしかつた。

『どうぞごゆつくり召上つて。』

姉はお銚子のお代りを持つて來ると、さう云つて下へ引立つた。湯淺も後から降りて行つた。

二人きり二階の坐敷に取り殘された時、水原は先づ實子に對して一月間抑へて居た烈しい愛情の表示をしたかつた。だが彼の女の狂つた頭腦がどれ程迄常態に恢復したかわからなかつたので、うつかりした事は云へなかつた。彼の女の氣を落着けさせてゆつくり話を進めるより外は無かつた。いや、彼自身これから先きどうしたらいゝのか、決心がついて居ないのだつた。實子を東京へ連れ戻つて、再び以前の様な烈しいヒステリイの發作に惱ませられる事は堪へ難かつ

た。妻子のある彼として一身の安全を謀るためにはそれつきり別れた方が無難である事を十分知りながら、やはり一日彼の女に會ひに來ないでは居られない彼だつた。

『別れてから乾度あなたは私の氣持がわかります。あなたといふ人は別れてからでなければ其れがわからないんです。』

實子の云つた其の言葉がまるで重い石の樣に此の一月の間絶えず彼の心にのしかゝつて、次第に心の餘裕を狹めて行つた。彼の弱々しい心は其の重壓の下で無造作にへたばつた。一身の安全を謀る氣持も、將來の方針を建てようとする試みも、更に彼自身と周圍の一切を自由に、公平に眺めようとする凡ての意圖も、彼の女の强い情熱の爲めにいつか燒き盡されて居た。自分の愚かさを憐れむ氣持さへ、彼には一種甘美（スウィート）な物となつて來た。剃刀を咽喉に當てた時の彼の女の凄慘な眼ざしも、井戸へ飛び込まうとして彼の腕を力一杯振りもぎつた時の狂暴な擧動も、彼の女に別れた後の彼の腦裡にはいつも美しい、魅力に充ちた繪として生きて居た。古い諺にある火を戀ふ夏の蟲の樣に、彼は今まつしぐらに彼の女の許へ飛んで來たのだつた。

『一體あなたは何をしにわざ〳〵こんな遠く迄やつていらしつたの？』

少し酒が廻つて、赤いどんよりした眼つきを見せて居る水原を睨み返しながら、實子は咎め立てる樣な語調で云つた。

『君の見舞に來たのさ。今日來るつてちやんと手紙で知らせて置いたぢやないか。其れをどうして疑つたの？』

先刻停車場迄彼を迎へに行きかゝつて、急に義兄に欺されるのだと云ふ懸念から家へ引返したと云ふ實子の氣持が、彼には訝かしいと云ふより寧ろ不憫だつた。彼の女はもう誰の云ふ事も信じないのだつた。周圍の凡ての人が彼の女に

對して惡意を持ち、彼の女を苦しめようとして居るのだと疑つて居た。だが此方へ來てから今日始めて髮を結つたと云ふ義兄の話は彼を喜ばせた。彼を疑ひながらも、停車場迄迎へに出かけて又引返しながらも、若しかしたら本當に來るのかも知れない彼の爲めに、さうして髮と容姿とを整へる事を忘れなかつた彼の女の配慮が彼を絕望から救つてくれた。義兄や、骨肉の姉を疑ひながら、彼にだけはまだ多少の信賴を措いて居る樣にも思はれた。彼の女を連れて何處か溫泉へでも行き、ゆつくり保養したら案外容易く病氣が直るかも知れないと云ふ氣がした。そして其れが彼がわざ〳〵此の土地迄彼の女を見舞に來た目的でもあつた。

三

二階の六疊の坐敷に水原は寶子と床を並べて寢た。暑いので表側の硝子窓を開け放したまゝにして置いた。其處から涼しい夜風が吹き込んで蚊帳を外側からふつくらと脹らませた。氣の狂つた、そして彼を疑つて居る寶子であつたけれども、彼の沸り立つた熱情は何の顧慮も無く唯彼の女の肉體に對して濺がれた。寶子は蚊帳の中で其の小さな眼を見張つて居た。美しい、だが何處か彼を警戒して居るらしい、潤ほひの足りない眼つきだつた。然し水原は今、さうした現在の寶子を見なかつた。彼が見た物は一月の間片時も彼の腦裡を去らなかつた彼の女の幻影だつた。そして其の思ひ出多い、細やかな影と心とを持つた幻影に、彼は自分の眞情と肉體との凡てを投げかける事を抑へ得なかつた………

開け放つた窓から朝の日光は早くから蚊帳の中に落ちて來たが、二人は明るい光の中でうつら〳〵眠り續けた。寢床を離れたのは十時過ぎて居た。

寶子は洗面所へ水原を案内して、嗽ひの水を汲んでくれた。

『昨夜はよく眠られましたか。狹苦しい處でお窮屈でしたでせう。』

茶の間から出て來た湯淺が彼に愛想好く聲をかけた。

昨夜着いて直ぐ二階へ上つてしまつたので、下坐敷の樣子がよくわからなかつたが、朝になつて見ると案外手狹な家である事が水原にわかつた。茶の間では三人の子供ががや〳〵騷いで居り、狹い庭の低い垣根越しに直ぐ隣家の廂が出て居て、夏の事故開け放した兩方の家の内部が共に見透しだつた。そして此の手狹な家の中へ貫子と弟（彼は中學生で、つい先月迄東京で中學へ通つて居た。）を引取り、其の上に又彼を心安く泊めてくれる湯淺の親切を有難く思ふと共に、好い氣になつていつ迄も此の家に滯在しては居られないと思つた。

朝飯を濟ませると彼は貫子に一緒に近所の溫泉へでも行つてみないかと誘つたが、彼の女は餘り氣が進まないらしかつた。

『をかしいわね、何だつてそんなに私を連れ出さうとするの？』

貫子はさう反問した。此の土地へ來てからは彼の女は姉夫婦に伴はれて近所のAと云ふ溫泉へ一度と、大學病院へ一度と、たつた二度外出したきりで、一人では一歩も家を出ないのだつた。誰か危害を加へようとして外で待ち構へて居る者があるのだと疑つて居た。病院から貰つて來た藥も、毒が入れてあると云つて唯一度飮んだきりで、いくら姉が執拗に勸めても其れつきり服藥しなかつた。彼の女を欺して大學病院へ連れて行き、其のまゝ入院させてしまはうかと云ふ樣な事も、水原は手紙で義兄から相談を受けたが、無理にさうして彼の女の行動を束縛したら、結果は一層惡るくなるかも知れないと云ふ懸念から彼は贊成しなかつた。

『何處の溫泉へ行かうつて云ふの？　此度誰か廻し者が先きへ行つて居るんでせう。』

彼の女はさう云ひながらぢつと眼を据えて水原の顔を睨んだ。彼の眼の底に少しでも惡意が閃めき出るのを當然期待して居る樣だつた。最も信頼して居た筈の彼をも、彼の女はもう敵の中に數へて居た。だがおそらく其れで居て、やつぱり彼に對する愛情を全く捨て得ないのだつた。東京を立つ日、彼の女が突然行方不明になつて家中の者が大騒ぎをした時の事を、彼の女は今ぽつ／＼彼の前で語つて聞かせた。彼の女は其の日死なうと思つて家を飛出した。電車に乘つて品川の方へ行かうと思つたが、――其處で彼の女は鐵道自殺をする覺悟だつた――どの電車にも自分の知つて居る人が乘つて居て抑へられる氣がして、止むを得ず車を傭つて品川へと向つた。だが本郷から芝公園迄來ると車夫がすつかり疲れて歩みが遲くなつた。今にも姉夫妻か水原が後から追ひ縋つて來さうで、車の上で彼の女ははら／＼して居た。到頭我慢がしきれなくなつて其處で車を降り、彼の女は一人でぶら／＼公園の中を歩き廻つた。品川迄行かなくとも、死場所は何處にでもある樣に思はれたが、まだ日が暮れきらない、人通りの絶えない公園ではどうする事も出來なかつた。あてもなくあちこちとさうして歩いて居る中に、變な若い男がいつの間にか後をつけて來るのを見出した。彼の女が立ち留つて振り返ると、其の怪しい男は同じ樣に足を留めて、にや／＼彼の女に笑ひかけた。公園を拔けて廣い芝の大通りへ出ても、其の男はやはり尾行を緩めず、今にも肩へ手を掛けさうに直ぐ身近く迄接近して來た。其れが彼の女を知つて居る追手だか、其れとも見ず知らずの男だか、わからなかつたが、とにかく賓子は不氣味な感じに襲はれて身顫ひを續けた。そして其の怪しい男に後をつけて來られる限り到底死ねないと諦めて、すご／＼又本郷の家へ引返した――

姉夫妻の間にも其の日賓子が何處へ行つたかは今迄わかつて居なかつた。水原にだけ今其の日の行動を打開けてくれた賓子の心が彼にはひどく不憫だつた。何者かに危害を加へられようとして居ると云ふ一種の脅迫觀念を取り除いたら、彼の女はやはり彼を信じて居るのだつた。其の脅迫觀念が浮び出た時、彼の女は水原を疑つた。彼の行動の中にさ

へ、彼の女を行かしてやまない不安な空想の種を見出さうと努めた。

『私とにかく他處へ行くのはいやです。暑いし、何だか氣持が惡いし。』

『ぢやあ仕樣が無い。僕は歸らう。此處の家にいつ迄厄介になつちや居られない。』

水原はさう答へて默り込んだ。

暫くたつと實子は何處か近所なら一緒に見物に出てもいゝと云ひ出した。

『ぢやあ少し近所を歩かう。そして僕は今晩か、明日の朝立つから。』

水原が頷くと實子は直ぐ外出の支度を始めた。簞笥から取出された明石の單衣も、薄青い紗の帶も、大きなプラチナの金具が附いた帶留も、皆先の夫の山名が彼の女に買ひ與へた物だつた。藝者だつた彼の女が六年間の同棲生活の後、夫と別れて再び勤めに出て水原と戀に落ち、今年の春彼と共に家を持つ事になつた時、藝者家の二階から二棹の簞笥を新居へ運び入れて、先の夫が造へてくれた衣類をすつかり簞笥の抽斗から取り出して水原に示しながら、一々いつ、何處で新調したかを説明したので、彼は其等の品をまるで彼が買ひ與へたかの樣にすつかり覺えて居た。そして其の先の夫の山名に就ては、どんなに彼に愛され、どんなに睦まじい家庭生活を營んだ後で、彼の放蕩から遂に別れる樣になつたかを、彼が嫉妬や想像を廻らせる餘地が無い程委細に實子から聞かされて居たので、かうして山名が調へてくれた、從つて山名に就て多分の思ひ出を伴つて居る筈の晴着を身に纏つた實子を見ても、彼には殆ど不快の念が起らなかつた。山名の存在はもう單なる追憶として過去に埋れてしまつた。いや、爽かな晴着が實子の肉體を美しく見せる樣に、山名の追憶は彼の女の水原に對する愛情を一層複雜に、色濃く染め立てゝ居る樣にも思はれた。

下へ降りて、店に居た湯淺に近所を散歩して來るからと挨拶すると、湯淺は市の公園や、昔此の附近の幾個所かを治

めた藩主の祖先である、有名な武人の廟へ行く道順を委しく教へてくれた。

眞夏の晝時であつたが、東京よりは多少温度が低いらしく、往來には涼しい風が吹き過ぎて、さう歩くのに困難ではなかつた。家の前の大通りから横へ反れると大きな學校の建物があつて、直ぐ其の先にはもう畑が見えて居た。思ひの外市街が淋しくつて、さう廣くない事が、昨夜停車場の前で一瞥を與へた時より一層明瞭にわかつて來た。

溪川に架つた橋を渡つて、二人は欝蒼とした木立の中にある舊藩主の祖先の廟に詣でた。

『これから松島へ行つてみないか?』

茶屋で休んで居る中に水原はふと松島が此處から近い事を思ひ出した。數年前彼は友達と二人で奥羽地方を巡遊した歸りに松島へ行つた事があつた。そして實子は其れよりもつと前、まだ山名と一緒にならないで勤めに出て居た頃、旦那だつたSと云ふ男に連れられてやはり松島見物に來た事があるのを彼は聞いて居た。二人共以前に訪れた土地だつたが、そして二度行きたい程の魅力も感じなかつたが、かうして日中ぶらぶら市街を歩いて居るより、汽車で涼しい松島の海邊へ行つた方がましだと考へついたのだつた。

『さうね。行つてもいゝわ。晩迄に歸れるかしら?』

『歸れるとも。方々見物する程の事はなし、唯素通りして來ればいゝのだから。遲くなつたら泊る迄さ。』

先刻あれ程遠くへ行く事を拒んだ實子がどう氣が變つたか、案外素直に同意したので、彼は勇んで茶屋の腰掛から立ち上つた。

四

停車場へ行くと直きに下り列車が着いた。二人は其れで松島驛へ行つた。其處の停車場の瀟洒とした建物は外國の觀光客のために特に近頃新築されたもの物らしく、二人の記憶には無かつた。自動車で海岸へ出る道も二人は殆ど覺えて居なかつた。廣い、さびれた街道を自動車は一散に馳け續けてやがて海岸へ出た。波止場の近くの大きな旅館の前へ自動車はぴたり留つた。

番頭が出て來て、品物を受ける樣に自動車から降りた二人を引取つた。少し海岸を散歩して、直ぐ船で鹽釜へ渡るつもりだつた二人は、別に休息する必要も無かつたが、導かれるまゝに旅館の店先へ腰を下して茶を飲みながら汽船の時間などを問ひ合せた。

『私此の前夜汽車で着いて、パークホテルで休んで、モータアボートで鹽釜へ行つたんです。』

賓子は八九年前に旦那のSに連れられて此處へ來た時の話をした。

海は少し浪立つてゐたが、モータアボートの方が早くて氣持が良かつたので、水原はモータアボートを傭つて置いてくれる樣に番頭に賴み、賓子を促して一時間ばかりの豫定で散歩に出た。

瑞巖寺も、五大堂も、行つてみると昔の記憶が水原には微かに殘つて居たが、賓子はすつかり忘れて居た。五大堂の後ろの崖際の松の茂みに立つて、二人は暫く廣々とした海を眺めて居た。黑い木綿の單衣を來て尻をからげた近在からの遊覽客や、凉しさうな白い服を着た若い夫人を連れた西洋人などが時々二人の背後を靜かに歩いて行つた。そして賓子は其の度に疑はしさうな視線を彼等に向けて其れから水原を見返すのだつた。

『海の色が眞青で綺麗ぢやないか。時々するね。』

水原は彼の女の氣に引立てる樣に云つた。

『さうね。隨分深さうね。誰か來て、いきなり私を突き落したら其れつきりね。あなたが默つて居れば、其れで何もかも濟んでしまふわ。』

實子は眞顏になつて再びぢつと水原の顏を見つめた。

水原は默つて視線を海の面に向けた。浪は騷いで居た。浪は跳つて居た。其の十重二十重に連つた浪を蹴立てゝこれからモータアボートで鹽釜迄行くのだと思ふと、彼は何となく不安になつた。氣の狂つた實子が海へ飛び込めば其れつきりだ。

『いつそ汽車で仙臺へ引返さうか。其の方が安全だ。』

ひどく落着きを失つた氣持を持て餘しながら彼は旅館へ歸つた。

『お歸りなさいまし。もうボートの用意は出來て居ります。』

番頭が彼を迎へてさう云つた。

『今日は少し浪が高い樣だが船に醉ひはしない？汽車で歸らうか？』

水原は實子の心を探る樣に問ひかけた。

『大丈夫でせう。同じ道を歸るよりボートで鹽釜へ行つた方がいゝわ。』

彼の女が案外平靜な態度で答へたので、水原は少し安心して、やつぱりボートに乘る事に決めた。

番頭が波止場迄二人を送つて來た。丁度遊覽汽船も出るところで、船室に詰つた遊覽客たちが窓から首を出して、モーターボートに腰を下した二人の姿をじろじろ眺めて居た。水原は努めてゆつたりとした態度で實子と向ひ合つてゐたが、內心彼は少しも氣を緩めなかつた。そしてそんな風に互に警戒し合ふ心を抱いて小さな船の中に實子と對坐して居

る事が、彼にはひどく悲しかつた。何のために生じた疑惑だらう？何のために要する警戒だらう？もう一度賓子の本心を探る樣に彼は彼の女の顏を見つめた。昨日久しぶりで結つたと云ふ丸髷の髱が海風に吹かれて白い襟に垂れて居た。男の掌一つですつかり蔽はれてしまふ樣な、小さな、愛らしい其の顏は、岸を離れたボートの進行に連れて佼しく、小刻みに顫へ出した。

「パークホテルが見えるわ。綺麗ね。」

賓子は水原の力の籠つた視線を防ぎかねて、顏を反らしながらパークホテルの建物を指した。

「山名と一緒になる直ぐ前だつたから、丁度八年になるわ。隨分早い物ね。」

其れで話題を得て、水原は先の旦那のSの事をぼつ〳〵賓子に問ひかけた。Sは水原より三つばかり年上の商人で、投機事業に手を出し、一時はひどく豪奢な生活を營んでゐたらしかつた。Sの話は度々賓子から聞かされて居た。彼の女を愛した男たちは、皆命を賭けて彼の女の心と肉體の凡てを專有しようと試みた人だつた。そして其れを語る彼の女はいつも得意だつた。多少の誇張はあるにしても、彼の女自身の火の樣な烈しい情熱が、いつも男性をさうした境遇に迄引込まないでは居ない事は、略水原にも想像出來た。

薄黄ろい防水服を着た舵手は默々として舵を執つて居た。ボートは浪を蹴立てゝまつしぐらに突進した。同じ樣に鬱蒼とした松を頂いた幾つかの小島が後へ殘され、船の進んだ後へ驅された樣に平らに殘つた一條の海面は、直ぐ又左右から湧き起る浪のために掻き亂された。

桂島が直きに見えて來た。鹽釜から出た汽船が島の波止場を離れて汽笛を鳴らしながら進行して來た。

「あれが桂島だよ。もうこれで半分來た。」

『さうですか。』

實子は伸び上つて島の方を見やつたが、急に蒼白い顏をして前へのめつた

『どうしたの？』

水原はあわてゝ彼の女の二の腕を抑へた。實子は口をきつく結んで小鼻を脹らませながら、苦しさうに息をついた。

『何だか氣持が惡くなつて……』

『醉つたのだ。海を見ちやいけない。俯むいて居るといゝ。』

水原は膝の上へ實子の額を載せて、やさしく背を撫でゝやつた。丁度其の邊は外洋から來る激浪を泙で遮ぎる島が無いので、ボートはかなり動搖した。日が陰つて、風が西に變つた。ボートの中には浪の飛沫が遠慮無く飛び込んだ。

『お客樣、少しお醉ひでございますな。もう直きでございます。鹽釜が見えて居ります。』

水原の膝に凭れた實子の樣子を見ながら舵手が慰める樣に云つた。

『さう。もう直きだね。苦しいの？吐きたければ吐いた方がいゝ。』

水原は實子の口へハンケチを宛てがつてやつたが、彼の女は俯むいたまゝ首を振つた。そして此の世で彼の女の身を托すたつた一つの場處であるかの樣に、ぢつと水原の膝に凭れかゝつて居た。廣い海の上の、一坪に足りないボートの中央の仕切りの中で、彼はさうして實子の身體を抱いて居た　彼の女の小さな身體の溫もりを、彼は膝に、胸に、二の腕に、ぢつと優しく感じて居た。彼の女に對する警戒も、不安も、消えて、ひたすらに彼の女が不憫になつた。戀する男がかうした場合感ずる、身の中が熱くなる樣な強い喜びが彼を充した。別れても、いつ、どんな處に居ても、彼の女

を思へば最も鮮かに記憶に浮び出る場面だと彼は考へた。彼の膝の上で柔かな裏を見せた、白い花瓣の様な彼の女の耳も、時々船の動揺で身體がずれると、あわてゝ彼の腕を捉へる華奢な、だが力の籠つた指先も、黒い髮に明るい光澤を與へて落ちる日光も、森の様に船縁に飛び着いて、きら〳〵光つて居る浪の飛沫も、皆何かしら彼の眼に涙を浮ばせる様な魅力に縫はれて居た。濃い、厚い浪が左右からボートを眼がけて押寄せた。大空は頭上で跳つた。ボートはエンジンの響で其の浪と大空とを威嚇しながら、彼の歡びの爲めにまつしぐらに走り續けた。

鹽釜の港が近づくと浪は穏かになつて、ボートの動揺も静まつた。無數の帆船や石油發動機船が碇泊して居る間の一條の水路を、ボートは速力を緩めて徐々に入江へと迫つて行つた。町にはもう電燈がともり、後ろの山の裾からは夕霧が帶の様にするすると解けて出て、海の上に落ちて來た灰色の幕と繋がり合つた。

『さあ、もう大丈夫だよ。』

水原はさう云つて輕く實子の顔を持ち上げた。彼の女はまだ蒼白い顔色をして居たが、ちよつと極りが悪るさうに微笑して髮の毛を撫で上げた。

鹽釜も二人は始めて來た土地ではなかつたが、とにかく鹽釜神社へ參詣するつもりで、水原はどうやらうろ覺えに覺えて居る道を神社の方へと歩き出した。陸へ上つたので實子の船酔は直ぐ消えてしまつた。

『私二度とあんなボートへなんか乘らないわ。』

彼の女はさう呟いたが、もう氣がすつかり落着いたらしく、足取りも確かだつた。

二人が町の中程迄來た時、大粒の雨がばら〳〵降り出した。水原は薄い絹張りのステツキ傘を持つて居たが、そんな物では夏の夕方の驟雨から二人の身體を防ぎ様も無かつた。

『仕方が無い。旅館へでもはいらう。丁度御飯時だから、晩飯を食べて居れば雨は歇むだらうから。』

水原は實子を促し、停車場の前へ戻つて、綺麗さうな旅館へ馳け込んだ。

『お泊りでございますか？』

女中が二人を二階の表側の坐敷に導いてから問うた。

『いゝや、御飯を食べて、雨が歇んだら歸る。』

何一つ持物の無い水原は、手持無沙汰にぽかんと床の間の前へ坐つた。雨勢は一頻り烈しゝなつて、遠くで雷鳴さへ聞えて來た。廊下の外の空間を次第に濃く染めかけた闇を、銀色の太い雨脚が掻き亂した。

『もう少し遲いとボートの中で降られるところだつた。』

『さうね。早く來てよかつたわね。』

二人は廊下の方へ躄り寄つた。今ボートで走つて來たあの廣い、まだ明るかつた海面が一面闇に閉さゝれ、沛然とした豪雨の下で浪が怒號して居る光景を想像すると、如何にも物凄かつた。何か大切な役目を帶びて長い航海を果した後の様な、ほつとした氣持が水原の眼を潤ませた。

浴衣に着替へて湯にはいり、晩飯を食べるともう八時近かつた。雷は收まつたが、雨はなか〳〵歇まなかつた。

『どうする？歸りたい？』

水原は實子の顏を覗き込んだ。S市迄ほんの卅分程で行けるのだつたし、汽車はまだあつたが、彼はなるべくなら泊りたかつた。船暈が直つた後で、そして一風呂浴びて浴衣がけで打ち寛ろいで彼と二人晩飯を食べた後で、實子はかなり機嫌がよくなつた様だつた。此の大雨を冒して姉の家へ歸りたい程の苛立たしさを彼の女に與へる物は此處に無い筈

だつた。

『雨が歇まなければ泊つて行つてもいゝわ。泊るなら家へ電話をかけなくつちや。』

實子は案外無造作に泊る事を承諾した。

水原は女中を呼んでＳ市の湯淺の家へ電話をかけさせた。彼のステツキ傘と、實子のパラソルと、二人の持物は其れだけで、泊る用意は何もして來なかつたが、彼の女の氣分が和らいだ事が何よりも水原の氣持を落着けさせた。

五

少し小降りになつた雨の音を床の中で聞きながら、水原は夜更迄實子と語り合つた。

『どうせ今夜きりだよ。』

ふとさう呟きながら廊下を歩いて行く客があつた。實子は其の聲を聞くとあわてゝ枕から頭を擡げた。

『私の事だわ。私の命が今夜きりだつて謎をかけて居るんだわ。』

水原は又かと云ふ樣に顔を顰めた。

『困るね。さう他人の云ふ事を氣に懸けちや。一體何がそんなに怖いの？どうして殺される心配があるの？』

彼は實子の手を執つて、小鳥の樣におどおどした眼つきを見せて居る彼の女の顔に自分の顔を近づけながら、穏かな、だが心の籠つた言葉で、彼の女の生命を脅かす樣な者が決してあり得ない事を說いて聞かせた。

『どうしてだかわからないけれど私を殺さうと狙つて居る人が澤山あるのよ。いくらあなたが空とぼけたつて駄目だわ。私覺悟はして居るんだけれど、遠くへ引張り出して欺し討にするなんて卑怯だわ。』

『ぢやあ僕もぐるになつて居ると思つて居るんだね。僕がそんなに惡い人間に見えるの？』

『其れがあなたの氣持がはつきりわからないの。』

『頼りない事だね。』

凡そ馬鹿げた論爭だつた。だが實子が事實さうした脅迫觀念に惱まされて居る以上、水原は飽く迄も眞面目になつて此の論爭を續け、どうにかして彼の女を說破しなければならなかつた。夜更の寢床の中で彼がさうして熱心に彼の女を說き諭して居る樣子は實子を喜ばせたらしかつた。だが彼の女には彼の好意だけが酌み取れて、其の狂つた頭にこびりついた、えたいの知れない恐怖は容易に影を潛めなかつた。耳を澄まして彼の言葉に聞き入りながらも、時々遠くの座敷や階下の帳場の方で物音が聞えたりすると、彼の女は不安さうにびく／＼身體を顫はせた。

『ようく考へて見給へ。兄さんの處に居た一月の間、何も變つた事などはありはしなかつたぢやないか。誰が、何の恨みで君を殺すと云ふんだ？さあ、僕がちやんとかうして側に附いて居るから、安心して眠つたがいゝ。』

實子はぢつと水原の顏を見つめた。彼を信じようとして、だが又心の底に蟠つた暗い疑惑に惱まされかゝつた、弱々しい眼つきだつた。

二時過ぎになつて、どうやら彼の女は眠りに着いた。其の樣子を見定めてから水原も重苦しい眠蕩みに落ちた。

翌朝二人は十時過ぎに床を離れた。雨はどうやら降り歇んだが、また空には雨雲が低く垂れ下つて、もう一降りありさうな氣勢だつた。二人は夕方迄旅館で寢轉んで時を過した。そして晩飯を食べてからS市へ行く上り列車に乘り込んだ。

二等室は空いて居て、彼等の外には東京から來た遊覽客らしい、三人連れの若い商人が乘合したゞけだつた。彼等は

夜汽車で昨夜上野を立ち、今朝松島を見物して鹽釜へ着き、これからI溫泉へ赴くらしかつた。時々水原たちの方を見返りながら、彼等は大聲で旅の話を語り續けて居た。

水原はS市へ着いて、其れからどうしたらいゝか、ちつと考へ耽つた。實子の頭の病氣が直らない以上、東京へ彼の女を連れて行く事は危險だつた。一月前と同じ樣に附きつきりで彼の女の介抱やら、監視やらを續ける事は到底堪へられなかつた。やはり彼の女を姉夫妻の家に預け、病の癒るのを待つより外は無いと考へた。

『ぢやあ兄さんの家へ送つて行かう。僕は今夜旅館へ泊つて明日歸る。餘り兄さんの家へ厄介をかけても惡いから。』

汽車がS市へ着いて、二人がプラットフォームへ降りた時、水原はかう云つた。

『私、兄さんの處へ歸りたくないわ。』

急に實子はそんな事を云ひ出した。

『どうして？。』

『どうしてつて、兄さんの處へ歸つたつてつまらないんですもの。――歩きませう。何處か歩きませう。』

實子は改札口を拔けてすたすた歩き出した。仕樣が無しに水原も後から續いた。

霎雨の後で、往來はぬかついて居た。低い下駄を履いた二人は泥濘をよけつゝあても無く街をさまよひ歩いた。もう一年以上も前、始めて彼が實子と知つた頃、或る晩不思議な感激から二人で幾時間も東京の街を歩き廻つた事があつた。二人は其の時殆ど絕えず樂しげに語り合つた。そして熱い歡びと期待とが彼等の心にあつた。其れだのに今、何と云ふ變り果てた身の置場であり、心の置場である事だらう。知らない土地に居るのだと云ふ事が妙に水原を心細くさせた。彼は罪を贖ふ爲めの果ても無い旅に出た巡禮の身に自らを比べてみた。

二時間近く二人は歩き續けた。湯淺の家の方向へ行く事をどうしても實子は承知しなかつた。

『僕もう歩けない。旅館へ行つて休みたい。』

『ぢやあ私もさうするわ。』

二人は其れから停車場前へ戻つて旅館へはいつた。

三階の風通しの好い部屋へ案内された。三階には二部屋あつて隣室は空いて居たので、誰も廊下を通る者も無く、松島の旅館よりもずつと落着いた氣になれた。實子も前夜の樣にうろたへたり、怖がつたりせずに、安らかに眠つた。そして翌朝になると水原と一緒に東京へ行きたいと云ひ出した。

『一昨日の晩は殺されると云つて騷いだぢやないか。もう疑ひは晴れたの？』

水原は憐れむ樣に問ひ返した。

『いゝわ、殺されたつて。何處で死んだつて同じですもの。』

だが水原は直ぐに實子を東京へ連れて行く氣になれなかつた。彼の女が相變らず取り留めの無い、戀な事を云ふ樣なら、もう暫く湯淺の家へ預けたくてはたらない。暫く溫泉でども一緒に暮して、實子の擧動をよく見た上にする方がいいと考へた。其れに東京を立つた時用意して來た旅費はまだ大分殘つて居たし、勤め先の會社からは二週間の休暇を貰つてあるので、此のまゝ歸るのも惜しかつた。

『ぢやあ何處か溫泉へでも一週間ばかり行かないか。其の上で東京へ行つてもいゝ。』

『何處の溫泉へ行くの？』

『餘り淋しい處はつまらないから、I溫泉にしよう。汽車で四五時間かゝるが。』

『I溫泉で、昨日松島から一緒に汽車へ乘つた人たちが行つた處でせう。』

『さあ、どうだか。そんな話をして居た様だつたが。』

『をかしいわ。あの人たち、あなたと何か打合せをして先きへ行つて居るんぢやないの。』

『又始まつた。あの人たちを僕が知つて居る譯が無いぢやないか。あの人たちが先きへ行つて居るとしても、君に何をすると云ふんだ？』

『何をするか、行つてみなければわからないわ。』

そんな事を云ひながらも、結局實子はI溫泉へ行く事に同意した。

六

二人は旅館を出て湯淺の家へ戻り、急いで旅裝を準へて又停車場へ車を乘りつけた。上り列車でF驛へ着いたのは日沒頃で、其處からI溫泉場迄は自動車で三十分とかゝらなかつた。

夕闇に閉された淋しい田舍の風物が實子の神經を脅かして、再びえたいの知れない不安を募らせかゝつた。二人の乘つた自動車がF市の端れから暗い田圃に圍まれた人氣の無い街道へ出ると、實子はI溫泉に誰か彼の女を待受けて居て、殺してしまふのだと云ふ様な事を再び水原に訴へ始めた。蒼白い顏をして涙ぐんだ彼の女の様子を見ると、水原は唯苛立たしくなるだけでどうしてい丶かわからなかつた。S市で彼の女を湯淺の家へ歸さなかつた事が、いや、抑も彼が東京から彼の女を訪ねに來た事が、今更悔やんでも追付かない失策である事がわかつて來た。だがかうした狂ほしい妄想に閉された彼の女の心の何處かに、まだ彼を信じ、彼の愛情を繫ぎ留める物が殘つて居たが故に、彼は思ひきつて

彼の女と別れる事が出來なかつた。

空は一面曇つて、星の瞬き一つみえなかつた。自動車は暗い街道を急速力で馳け續けたが、眼指すI溫泉の市街の賑かな灯は山の裾に隠れてなか〱見えて來なかつた。

『いつそこれから引返さうか？』

水原はさうも考へたが其れは一層實子の疑惑を募らせることになるかも知れなかつた。此のまゝI溫泉へ行つて、其處で彼の女が怖れて居る様な何事も起らなかつたら、其れで彼の女は安心し、絶えず彼の女を惱まして居る不氣味な脅迫觀念から一時でも救はれるだらう。何處へ行つても彼女を護り、氣を落着かせるだけの努力をする事が、此の際何より必要だ、彼はさう考へ直して、自分を勵ました。

I溫泉の町端れへ自動車が乘入つた時、盂蘭盆の市で、町が賑やかに飾られて居る事が見出された。往來には露店が軒を並べ、粗末なイルミネーションの光を浴びながら浴衣がけの避暑客や、町の男女がぞろ〱と通つて居た。自動車は速力を緩めて其の群衆の中を割つて行つた。

土地の者とも、避暑客とも、見別がつかない一人の青年が、二人が乘つた自動車を覗き込んで、ちよいと帽子に手を掛けさうにした。車内の水原を誰か知人と思ひ違へて挨拶しようとしたらしかつた。

『そら御覧なさい。』

突然實子は水原を見返つて詰ぢる様に云つた。

『何さ？』

『だつて今の人、あなたに何か合圖したんでせう？』

『常談を云つちやいけない。人違ひでお時儀をしそくなつたんだらう。さう一々氣にしちや困るね。』

『だつてあなたの知つて居る人に違ひなかつたわ。屹度廻し者が大勢來て居るんだわ。』

實子は自動車の坐席の隅に小さく身を縮めながらも、往來を通る人々が車內へ注ぐ視線を一つでも見逃すまいとした。あいにく自動車は一番人通りの多い處を通つて居た。そして土地の若い者たちが立ち停つて、一々車內を覗き込んだ。妙におどけた顏をして、今にも聲を掛けさうに手を振つたりする者もあつた。そしてそれが實子には悉く意味がある樣に、つまり水原に何か合圖をしてゐるのだと思ひ込まれるらしかつた。

『君たち、どうか此方を見ないでさつさと通り過ぎてくれ。此處に病人が居る。人の眼を怖れる、不幸な病人が居るんだ。』

水原ははら〱しながら心の中でさう呟いた。

川沿ひの大きな旅館に自動車が着けられた。數年前水原は友人と共に泊つた事がある家だつた。

『なるべく靜かな坐敷へ。』

水原の注文に應じて女中が二人を離れの二階へ導いた。

『此の旅館へ屹度昨日汽車で一緒になつた三人連れの男が來て居るんだわ。』

實子はさう呟いて、探りを入れる樣な眼を水原に向けた。

『そんな事があるもんか。若し來て居たつて構はないぢやないか。』

共の三人連れの男は多分昨日此のＩ溫泉で一泊して、今日は東京へ歸つたに違ひないと水原は思つて居たが、ひよつとして此の同じ旅館にまだ泊り合せて居て、廊下ででも顏を合せないものでもないと考へると、彼は實子の言葉を強く

否定する事が出來なかつた。實子はぼんやり部屋の隅に坐つて、彼が着替へをする樣に、そして一緒に湯へはいる樣に懇ろに勸めても容易に動かうとしなかつた。

女中が二三度坐敷へ出入して、浴衣だの、お茶だの、お菓子だのを運んで來た。

『さあ、そんな風にぽかんとして居たら、女中にみつともない。』

再三促し立てゝやつと水原は實子を浴室へ連れて行つた。部屋へ歸つて來ると、間も無く御膳が運ばれたが、實子は氣分が惡いと云つて碌に箸を執らなかつた。

『あゝ向ふでも咳拂ひが聞える。又何か合圖をして居るのね。』

食後水原が咳をすると、殆ど同時に何度か遠くの坐敷で同じ樣に咳拂ひが聞えた。そして實子は直ぐに其れを氣に留め出した。

水原はもう何とも云ひ樣が無いので苦笑した。實子も同じ樣に笑ひかけたが、彼の女の顏面は異樣に硬張つて、眞黑な、冴々とした眼が大きく見開かれ、勢込めて駈出さうとする人の樣に左右の肘が胸の兩側に吊し上げられて、拳は堅く握られて居た。

『今夜屹度何かあるんだわ。屹度私此處で殺されるんだわ。』

彼の女の視線は不氣味に部屋の中を這ひ廻つた。夜更けの、靜まり返つた部屋の中で、有り得ない危險が身に迫つて來る怖ろしさの中に、彼の女は水原をも引き入れようとした。

『しつかりしなくちやいけない。そんな馬鹿な事があつてたまるものか。僕がちやんと側に附いて居るぢやないか。』

水原はあわてゝ彼の女の側へ躄り寄つて其の手を提へた。兩腕が板の樣に硬直して居る事が着物の上から感ぜられ

た。彼は實子を抱き上げて寢床の上へ寢かせた。

『そんなに怖いなら何故來ると云つたんだ。明日直ぐ兄さんの處へ歸らう。今夜は僕が寢ずに起きて居てあげるから、安心して休んだがよい。』

氣が靜まる樣に實子を諭して、それから彼はトランクの中へ入れて來た雜誌を取出し、彼の女の枕許に坐つて其れを讀み續けた。

『濟みません。濟みません。』

實子は熱い涙を一杯眼の中に溜めながら寢床の中でさう呟いた。

七

夜が明けてから水原も寢床に潜り込んだ。眼を覺したのは正午近かつた。頭が痛んで、ひどく重苦しい氣分だつた。

實子はもう起きて、水原が昨夜讀んだ雜誌を膝に乘せて緣先に坐つて居た。

雨が降つて居るのよ。』

彼を見返つて力の無い聲でさう云つたが、昨夜よりは幾分氣が落着いたらしかつた。

水原は頷きながら首を擡げて緣先を見た。此の離れの前にもう一棟、低い旅館の建物があつて、其の直ぐ下は川になつて居た。寢床の中から流れは見えなかつたが、早い瀨を渡る水流が緣先の廂に當る雨の音を消す程に高い響を立てゝ居た。對岸の小高い山は雨に煙つて、其の裾をうねつて居る街道を往來して居る人たちの濡れそぼつた傘だけが彼の眼に佗びしく映つた。

寝床を出て湯にはいつてから、水原は鏡に向つて安全剃刀で髯を剃つた。

『腭の處にまだ大分毛が殘つて居るわ。』

實子は側へ寄つて彼の顔を覗きながら注意した。

『うん。安全剃刀と云ふ奴はどうも僕には向かないんだ。幾ら剃つても殘る樣な氣がする。』

『何故普通の剃刀を持つていらつしやらなかつたの？』

水原はちよいと返事に困つた。今迄二三度實子と旅行した時、彼はいつも普通の西洋剃刀を携へた。だが今度に限つて彼はわざわざ安全剃刀を買つて持つて來た。本郷の家で夜中に突然實子が剃刀を抜いて咽喉に當てた事があつてから彼は彼の女の身の近くへ剃刀を置く事が怖くなり、旅行中も頭の狂つた彼の女に萬一の事があつてはならないと秘かな用意をしたのだつた。

遲い朝飯を濟ませて横になると彼は又眠くなつた。だが實子が絶えず彼の樣子に注意して、少しでもぽかんとして居ると、其れを彼が何か秘密な計略でも企てゝ居る樣に邪推するらしかつたので、彼は一刻ものび〳〵とした氣持になれなかつた。

『疲れた。實際疲れちやつた。』

彼は實子を見返つてさう呟いた。本當に今彼は疲れて居た。實子に家を持たせてから半年の間、彼はどんなに苦しまされた事だらう。仕事も、妻も、三人の子供も、殆ど一切を放擲して彼は實子と一緒に暮して來た。實子の熱情が彼にさうする事を强ひたのだつた。十年の間、善良な夫であり、父であつた彼のさうした變化を、妻も、子供も、悄み、憤つた。だがたまに彼が妻子の許へ歸ると、實子が後を追つて來て家の前を徘徊した。いつ、何處を歩いても、屹度實子

か、妻が、どつちかに尾行されて居る氣がして、彼の氣持には少しも休息も與へられなかつた。實子はさうした生活に堪へられなくなつて、彼を妻と會見し、彼を妻の手から完全に奪はうとさへ試みた。實子の氣が狂はなかつたら、今に彼自身の頭が變になつたであらうと思はれた程、其れは苦しい、息もつけない樣な切迫した狀態であつた。彼は全く手も足も出なかつた。實子か、妻か、どつちか死ななければ事件の結末がつかないであらう事を秘かに豫想してゐた。無論彼自身の生命をも、いつでも投出す事を惜しまない決心だつた。實子は到頭戰ひに負けた。だが負けたが故に、彼の爲に氣が狂つた彼の女であつたが故に、彼はどうしても彼の女を捨てかねた。其れは不幸な者へと牽かれて行く一つの不思議な魅力であつた。いや、不幸が愛情を一層美しい物に見せるのかも知れなかつた。氣の狂つた實子に對して、彼は自分の愛情が段々狂暴に募つて行くのを感じて居た。

『あら、彼處で又合圖をして居るわ。』

實子は突然伸び上つて欄干の方を指しながら叫んだ。向河岸の街道に白い浴衣を着た三人連れの男が傘を傾けて佇みながら、頻りに此方を向いて手を振つてゐた。

『あれは乾度一昨日松島から汽車に乘合せた三人連れの男よ。あなたに合圖をして居るんだわ。』

水原は緣先へ出て向河岸を見た。三人の男は此方を向いて手を振り續けたが、無論彼が知つてゐる筈がなかつた。眼の惡い彼にはよくわからなかつたが、汽車に乘合せた男とは年輩も違ふらしかつた。

『違ふよ。あの三人連れぢやないよ。其れに僕には關係の無い事だ。此方の坐敷に居る人にでも合圖して居るんだらう。』

彼等の居る離れから一段低くなつた崖際に建つて居る、同じ旅館の建物を指しながら水原は答へた。

『だつて此方を向いて居るわ。そら、又あなたに合圖した。』

實子は欄干の際へ乘出して向ふを見つめた。三人の男はなか〳〵手を振る事をやめなかつた。時々聲を揚げて何か叫んで居るらしかつたが、川の音に紛れて聞き取れなかつた。實際時々は水原に向いて手を振つて居る樣にも見えた。

『早くやめてくれ。何處かへ行つてくれ。何と云ふ間の惡い事だらう。』

彼はさう考へた。そして無理に實子を室内へ連れ込んで、障子を締めてしまつた。」

だが暫くすると實子はふら〳〵と立ち上つて又廊下へ出ようとした。

『出ちやいけない。何でもないんだから氣にしちや困るよ。』

水原はあわてゝ彼の女の手を抑へたが彼の女は强く其れを振り放つた。

『私あの人たちに會ひに行きます。あんな合圖をしたりして卑怯です。川が有るんだらうから此方から會ひに行つてやります。どうせ向ふは男三人だから敵ひはしません。殺さうと云ふんなら、手取早く殺して貰ひます。』

水原が抱き留める暇も無く、實子はもう廊下を降りて行つた。玄關でやつと追ひ着いたが、其處に居る番頭や女中の手前、彼は無理に實子を抑へて二階へ引き戻す事も出來なかつた。

『お出かけでいらつしやいますか。雨が降つて居りますから番傘をお貸しいたしませう。』

番頭が氣輕に走り出て、二人の爲めに番傘と足駄を出してくれた。

大きな番傘を翳して實子はすた〳〵出て行つた。傘が重なり合ふ程寄り添つて彼の女の顏を覗き込みながら、水原は急き込んで話しかけた。

『どうしたの？しつかり氣を落着けてくれなくつちや僕がやりきれない。あんな見ず知らずの男に會ひに行くなんて馬

鹿な話が無いぢやないか。會つてどうするんだ？』

『どうしたつてようござんす。會へばわかります。向ふであんなに合圖をしたんぢやありませんか。』

『あれは僕たちにしたんぢやないよ。知らない男が合圖をする譯が無いぢやないか。――そんな變な事を云はないで、さあ、旅館へ歸らう。そして此の土地に居るのがそんなに氣味が惡いなら、直ぐ立つて兄さんの家へ歸らう。』

彼は往來でそつと寅子の手を捉へたが、彼の女はきかなかつた。

『いゝんです。私どうしても今の人たちに會つて、何故あんな合圖をするか聞きたいんです。』

旅館や、物を賣る店が並んだ往來を寅子はずん〱歩いて行つた。緩やかな坂を下つた處に橋が架つて居た。彼の女は其の橋を渡つて向河岸へ出た。

其處にも賑かな旅館や商店が軒を並べて居たが、直きに家並が盡きて、道は川の高い岸の上に出た。丁度二人が泊つて居る旅館と向ひ合つた河岸に來た時、好い鹽梅に先刻の三人連れの男の姿は見えなかつた。

『そらごらん。もう何處かへ行つちやつたよ。始めから僕たちには關係が無いんだ。――さあ、旅館へ歸つて、直ぐ勘定して立たう。』

水原はもう一度寅子の腕を捉つたが、彼の女は動かうともせず、三人の男の行方を探す樣に頻りにあたりを見廻した。直ぐ足下には水嵩の増した河の流が濁つた面にところ〲段を作つて急速に走つて居た。其の河の面にも、對岸の眞正面に見える二人の泊つて居る旅館の屋根の上にも、綠草で蔽はれた後ろの小高い山一面にも、大粒の雨滴が一樣に單調な音を立てゝ落ちかゝつた。

『何處かへ逃げたんだわ。そして遠くでやつぱり合圖して居るんだわ。』

賓子は振返つて後ろの山を見上げた。山の上かも知れない、――さう思ひついたらしく、彼の女はいきなり其の山の裾から中腹へと這ひ上つて居る小徑を登り始めた。

『いけない、いけない。そんな處へ登つてどうする？』

水原はあわてゝ彼の女の帶を握み、引き戻した。赤土に足駄が上つて彼の女は轉んだ。上半身を辛うじて彼は抱き留める事が出來たが、下駄がぬげて膝から下が泥に塗れた。

『お放しなさい。』

賓子は腹立たしげにさう叫んで彼を睨んだ、眼がぐつと吊し上つて、強く噛んだ齒の間から苦しげに大きな息をついて居る、彼の女の蒼白い顔を見ると、水原は妙に氣が臆して手を放した。賓子は再び登り始めた。浴衣の背や、雨袖がみるみる雨で濡れそぼつた。片手で傘を傾げ、片手で折々長く伸びた路傍の草を捉へながら、かなり傾斜の急な坂を息せき切つて一心に登り詰めて行く彼の女の後姿を見上げて居る中に水原の眼には熱い涙が浮んで來た。どうしたら賓子の氣が濟むか、彼の女を安全に義兄の家へ連れ歸れるか、一切が彼に見當がつかなくなつた。賓子と同じえたいの知れない、物狂ほしい世界に次第に自分も引き込まれて行くのを感じた。

『駄目だ。一切がもう駄目だ。』

絶望の呻きを發しながら雨に濡れた、わびしい山の頂へと、彼は賓子の後をたゆまず追ひ續けた。

（完）



戯曲

道化役者？

中村吉藏

人物

郵便局員　杉森勇吉
その兄　龜藏
女給　黒田春枝
紳士
妾
仲買店員、甲乙
もぐり店員
給仕、客、
未亡人
寶石店手代

船長と稱する男
船長の妻　おせき
その子　庄吉
高利貸　田村
木挽　甲、乙

場所

T市取引所附近のカフエ、
O市のホテル
C山中

時

現代

第一幕

取引所附近の小いカフエ「萬兩」の階上、正面はガラス戸、そこから取引所の建物が威嚇するやうな巨大な影を見せてゐる、上手にはスタンド、赤銅のコーヒー釜が光り、その下には階段の上り口が見える、下手は小いガラス窓、室の中央には鑄物のストーヴ、椅子に圍まれた圓卓があちこちに配られてある、すべて裝飾の乏しい、むき出しにされた一室である、大きなボン／＼時計が壁にかゝつてゐる、

幕開くと女給黑田春枝は耳かくし、白のエプロン姿で、スタンドの中にゐる。前の圓卓の一隅に、カバンを置き、脊廣服の郵便局員杉森勇吉は、兄の鶴藏と向合つて話してゐる。鶴藏は頭髮も延びて、黑の安物のマント、田舍者らしい風采である。

鶴藏。……だから汝もう善い加減に切り上げて、家へ歸つて來たら何うだ？　人手はダンダン無くなるし、このまゝだと今に田畑が荒れてしまやアせんかと己らアそれを苦にしてるんだ、都會は賑かといへば賑かだが、何しろ埃りつぽくて、騷々しくつて、己らなんかたつた半日居ても頭がガンガン鳴りさア、やつぱりあの山の青々した杉林の眞ン中で暮らした方が壽命が延びるぜ、汝だつてこのまゝ此處でうろついてゐたつて、容易に頭は上りつこねえ、足許の明るい中に歸つた方が、汝の身の爲めだろうと思ふがなア……？

勇吉。（バットの烟を吹いて）さう兄さんの云ふやうにお手輕には行きませんよ、そりや僕が故國を脫け出したのは、一つはあの亡くなつた繼母とそりが合はなかつたせいもあるがそれ許しでもない、兄さんに田畑を分けてもらつてそのまゝ百姓になつて一生過したつて下らない、汽車でタツタ二三時間走つたら都會へでられるのだし、そしたら學問なり、好きな仕事なり何んでも勝手な事をして身を立てられるから、そうせなけや損だと思つて、やつて來たんです。もつと何うにかならなけや歸るなんて氣はチツとも出ませんね。

鶴藏。ところが誰も彼もさういふ考へで日本國中からウヨウヨする程、都會へ寄つて集つて來るつていふぢやアないか？　なか〱立身どこの沙汰ぢやアない、やつと飯の食ひ外づしがなけやまア善い方だろうが、それぢやつまらねえや。

勇吉。そんな手合も隨分多いには多いでせう。だが僕はずつと夜學にも通つてるし、局へ入つてからもまだ何年にもならないんだが、上役の人にウンと信用されてるんだからね…兄さんはこのカバンの中に何が入つてると思ひますか？
龜藏。大切なものだつて汝ん先刻つてたやうだが、やつぱり切手かい？
勇吉。（小聲でしかし強い調子で）お金です……現金貳萬圓入つてるんです……。
龜藏。（意外な樣子）ヘヱ……さうかい？
勇吉。これを僕が銀行から直に受取つて來る役目に廻されてるんです、一ケ月にしたら何十萬圓といふ額になるんですからね、隨分信用されなけれや任されまいぢやアありませんか？
龜藏。（硬張つた表情で）そんな大切なものをこんな處へ持込むつて法があるかい？　若し掏られでもしたら何うする氣だ？　己らはそんな事たア知らないから、汝の留守に局へ訪ねて行つて、敎へられた銀行の角まで來かかるとバッタリ汝に出逢つたもんだから、ついウカウカ話しながらこゝへ連れ込まれたんだが、それぢや一刻も早く、局へ持つて行くが善い、そんなずぼらな事をしちやすまねえ。…大膽過らア…。
勇吉。（輕く笑つて）何アに大丈夫でさ、……半時間や一時間局は遲れたつて構やしない、皆、信用してくれてゐます……春枝さん、もう一杯コーヒーを……。
春枝。ハイ……。
龜藏。己らアもう澤山だ。
勇吉。ぢやア、サイダーでも？
龜藏。イ、ヤ、腹がダブダブすらア。

春枝。(コーヒーを持運んで)貴方は何んに致しませう？

總藏。己らもういらんよ…勇吉、早く局へ持つて歸らんか……皆待つてるだらうに？

勇吉。(沈着いた調子で)、何に、心配せんでも善いんですよ。……春枝さん、景氣は何うだね？

春枝。(笑を作つて)この頃は大分直つたやうですよ、場がズツとよくなつたつて云ひますから。

勇吉。ア、さう〳〵、東株なんかズツと上げて來たやうだね。

(取引所の方でワツ〳〵いふ聲が聞えて來る)

春枝。何しろ、あの騷ぎですもの。

勇吉。チョッと凄くなるね。

(仲買の店員、マークを胸に附けた甲乙二人、ドヤ〳〵と上つて來る)

甲。(見廻して)ア、、こゝにも見えないね？

乙。もう善い氣になつて、何處かへしけ込んだものかも知れないぜ。

甲。何しろ一氣にあゝ上げやうとは思はなかつたね。この調子ぢや今日の一場で、五萬や十萬の成金はウヨ〳〵出來るぜ。

乙。お客の方は善いが、仲買はからだめだ。

(取引所の方では、ワツワツと蜂の巢でもつゝくやうな唸り聲が高まる)

甲。チと、小づかひ錢でも稼ぐか？

乙。指をくわへて見てるのは馬鹿だなハ、、、、。

(二人は又ドヤ〳〵と下りて行く)

春枝。指をくわへて見てゐて、眞實にさう云へばこつちらはさうだわ、杉森さん、私は折々不思儀な氣持がするんですよ………、ついお隣りではあゝしてお金が唸つて渦を卷いてるんでせう。こゝとは唯つた二三間しか距れてゐないのに、メッタにそのしぶきもかゝりやしない、まるで世界が違つてるぢやアありませんか?

勇吉。(微笑)ハヽア春枝さん、婦人雜誌からでも仕込んで來たのか、この頃は折々氣焔を吐くね。イヤ僕もチョット同感するが、此所へもしぶき位はかゝるだらう。ハタのカフエよりチップは善いに違ひない。

春枝。ところが駄目なんですよ、儲かりや儲かるで、又損をすりや損をするで、場の人たちはもつと贅澤な眞似をして遊ばなけや蟲が納まらないらしいんですもの、こゝなんか眞實の腰掛よ。

總藏。(いら〳〵して)勇吉、もう出やうぢやアねえか? あんまりノン氣過ぎらア。

勇吉。まだ大丈夫です……腰掛といへば成程腰掛だらうね、春枝さん、僕も折々腰掛にこゝへやつて來てるんだが、實は、自分が何れだけ、ハタの誘惑に打勝てる人間だか? 自分の心を試めして見てゐるつもりだ。傍にはあゝしてお金が唸つて大渦を卷いてゐる。自分はこんなカバンを抱へながらそれを尻目にかけて、平氣で、落付いて、コーヒーの一杯でも飮んで無事に歸る、大分修業が積んだとは思ふがね………。

總藏。(呆れた顏色で)汝はそんなにしげ〳〵此所へやつて來てるんかい? 大切な御川を抱へてながらそんなぶしだらな眞似をするつて事があるか? 氣を附けねえと、今にとんでもない間違ひをやるぞ……。

勇吉。(笑つて)イヤ心配はいりません。局と銀行との眞ン中に當るもんだからつい足が向く丈です。場の人だちがまるで氣狂のやうに血眼になつて騷立てるのを見てるとつい胸の動悸が高まつて來る事もないではありませんが、こゝだ

と踏ン張つて決して誘惑に負けません。それが眞實に勇氣があるのか？　臆病なのか、自分では何んとも云へないんですか、何しろこの邊へやつて來ると、獨りでに電氣にでもかゝつたやうなビリビリした氣持になるのが嬉しいんですね。

飛蔵。いけねえ、いけねえ。汝はもう何うかしてるんだ、尋常ぢやねえ、——やつぱり家へ歸つた方が善いぜ、そしたら己らも安心すらア。

勇吉。（苦笑）そりや取越苦勞ですよ、

春枝。杉森さんはチョツと變つた方ね、世間並みぢやないわ

勇吉。（嬉しさうに）君は僕をよく知つてくれるね。兄さんこの女給さんは中々悧巧なんですよ。」

春枝。（戯談口調で）毎度おヒイキに、ホヽヽ

勇吉。でも君は何より貧乏が大嫌ひだつて口ぐせのやうに云つてたけね。

春枝。そりや誰だつてさうですわ。

勇吉。いつかのダイヤモンド入の指環の話は何うしたの？　銀座のショウ・ウインドウで、六千三百圓の正札が附いてたつていふのは……。

春枝。（極り惡げに）アラまアよく覺えてらつしやるわね、私もう忘れちやつたのに……その十分の一……イヤ百分の一の金があつても助かるんだけども……。

勇吉。お母さんの病氣は何うだね？　チツとは快い方に向いたかね？

春枝。（愛嬌に）難有う……もういゝんですのよ。

組藏。オイ勇吉、もう行かう……己らも夕方までに家へ歸らなけやならねえ。汽車の時間もあるし、汝だつて一刻も早なく局へ歸るが善い。

勇吉。まア善いんですよ、何んならこゝで洋食でもやつて行つたら何うです？

組藏。イヤ、さうぐづぐづしちや居れん、汝だつて、大切な使に出されて、こんな所で道草ア喰つてる事が局の方へ知れたらすぐに免の字だよ。そんなけんのんな奴に大金を扱はせる者もよつ程何うかしてらア。

勇吉。この僕といふ人間が見込まれてるんですからね。そこは田舎と都會と違ふ處ですよ。

組藏。（強い調子で）そんな善い氣なことを云つてると、今に失敗つて了ふんだ。……何しろ家へ歸つた方が善い。人間つて奴は我身が我身でアテにならないもんだからな。

春枝。（しんみりした調子）それはさうね。

（ラッコ皮の襟附の外套を着た肥滿した赤ら顏の紳士ビロードのコートの、派風の中年婦を連れて上つて來る）

紳士。こゝの方が靜かだ（云つて椅子へ腰を下ろし）まづよかつた。あゝした舞ひで上げて來やうとは思はなかつたが、この調子ではまだまだよくなる。汝もア早く投げなかつたら、今頃は成金だがハヽヽヽ。

妾。惜しい事をしつちやつたわ。私、弱氣だつたもんだから、ついとんだ失敗をしつちやつて、今更容易には追附かないわ……。

紳士。（笑）私の云ふ事を信用しなかつた罰だ。自分でもう一ぱし黒人がつてゐるんだから、あんなヘマをやるんさ……。

妾。何んと云はれたつて、一言もありませんわ。

紳士。でも汝に、さう急に成金になられても今度は此方が困るう、尻くらへ觀音たんかきめられちや樣アないからなハ

ゝゝゝ。

妾。（媚を含んで）何處か御近所にもそんなのがあつたつてね。

紳士。女つて薄情なもんだからな。

妾。男だつてさうよ。

（春枝、聞きに來る。コーヒーとチヨコレートを命ずる）

紳士。そのコートはよくうつるよ、四つ五つは若く見える。

妾。（媚を見せて）さう…でもこれ丈ぢやイヤよ。もつもつと奢つてもらはなけや、…ね、いゝでせう。

紳士。（苦笑）慾が深いな、

妾。だつて旦那は大當りだもの、一人でかき込まないでもつと、もつとお福分けをなすつたつて善いわ。

紳士。汝の尻拭ひをさせられた上にかい、チツと蟲が善過ぎる。

妾。あれ位の事は、旦那には知れたもんだわ。

紳士。（戯談口調で）コリヤ御挨拶だ、…奢るのはいいがね。又あの芝居の連中切符丈は御免だよ。

妾（睨らむ眞似）イヤに疑ぐり深いのね、そんなんぢやないわ。この間、眞珠店のショウ・ウヰンドウでいゝもの見附けたの、とても素敵なの、それが欲しくつて欲しくつて……。

（春枝がコーヒーとチヨコレートを持つて來る）

紳士。（ながし眼に見て小聲に）あの娘は誰かに似てたツけ…眼色が善い…。

妾。（チラと見て）金魚眼だわ…イヤな人（とチヨツト相手を抓める）…アラ、まア忌だよ…こんなに髮の毛なん

か、入つてゝ隣音でもないわ。(とチョコレートの碗を押し出す)、女給さん、こんなもの、飲めるの？

春枝。(立戻つて)何うもすみません、取りかへて參ります。

妾。匙だつてサビが出てるわ…何んだか氣持が惡くつて仕樣がない……貴方何處かもつと氣の利いた處へ行きませうよ。

紳士。匙も取かへさせたら善いぢやアないか？

(春枝に向ひ)ね、君、サビの附かないのを持つて來てくれ？

春枝。ハイ、…何うも粗匆いたしました。

妾。イゝヤ、私はもういらない。…何んだか氣持が惡くなつたわ、貴方、出ませうよ。

紳士。ウム…(コーヒーを啜りながら)…汝のやうにさう氣六ツかし屋でも困る、こゝのコーヒーは味がいんだよ。…

(春枝に向ひ)ね、君は大分前からこゝにゐたんだつけね？

春枝。ハイ……出たり、入つたりしてゐましたので。

紳士。フム、さうだつたか？(煙草を取り出す、春枝は、マッチを擦る)

妾(少し焦々した口調で)ね、貴方行きませうよ……耳かくしなんかに結つて、今時の女給は皆ハイカラね。でもおメカシに許り身が入るからいけないのよ。かんじんの仕事はお留守になるわ……ほんとに隣音でもない、貴方行きませうていふに？

紳士。フム…ぢやア行かう(銀貨を投げ出して起上る)

春枝。何うも難有う、……すみません……。

姿。（獨言のやうに）ほんとうに濟むも濟まないもありやしないわ……段落でもない。（ブツ〳〵云つて下りて行く）
龜藏。（チツと見てゐたが、吐きだすやうに）ハヽヽあれが成金だね。…女の威張りやうつてねえな？
勇吉。（ムカついた調子で）癪に障る奴らだ……。
龜藏。女は藝者上りかい？
勇吉。お妾だろう。……春枝さん、何うしたの？
春枝。何うもしやしませんわ…（眼尻を拭いてゐる）
勇吉。あの女はずいぶんひどい事を云ふ奴だね？
春枝。こつちの粗匆ですけれど、…つい口惜くなつちやつて……。
勇吉。あんな奴こそひツぱたいてやりたくなるよ、妾のくせに、偉らさうな風をしやがつて。
龜藏。ウム、己らが相手だつたらなぐり附けてやるんだが……。
勇吉。（苦笑）兄さんもずいぶん短氣だからねハヽヽ。
（頭の禿げたもぐりの店員が、下から上つて來て、春枝にチヨツと眼禮、それから、龜藏等の方へ近づいて行く）
店員。旦那方、如何ですか？景氣は大へんよろしいですよ。今日なんかお買ひにさへなれば五萬、三萬の小金はイヤと云つても向ふから懐へ飛び込んで來やうてもんです、こんな時を外づしちや後悔なさいますよ。手前共の店では萬事勉强いたしまして、お客様の御都合の善いやうにお扱ひしますが、如何ですか？
勇吉。（戯談らしく）今日は買ひさへしたら大丈夫、儲かるかね？
店員。エヽもう三才兒がやつても儲かるに極まつてます。まるで拾ふやうなもんですから……旦那はまだでゐらつしや

いますか？　ぢやア旦那、手前共へ御用を仰り付けて下さいませ、十分に御勉强いたしますから。

龜藏。(つと起上り)さア行かう……行かう、さうぐづぐづしちやゐられん。

勇吉。(も漸つと椅子を離れ)とにかく行きませう。春枝さん、會計……。

店員。場へ行らつしやるのでございますか？では手前が御案内いたしませう。

龜藏。イヤ、もう故國へ歸るんだ。株なんかに用事はない。

店員。ヘエ。ではもう買つてゐらつしやるんで？

龜藏。(嘲り顔で)己らたちが株なんか買つたら田も畑も賣り飛ばさなけりやなるまいでな。そんな、けんのんな物に手は出せねえ。

店員。(しつこく)でも景氣を見にいらつしやつたのではありませんか？…唯お素見ですかな。

龜藏(相手にならず、)オイ、勇吉、もう善いかい。

勇吉。(春枝となにか話してゐたのが頷いて)。ぢやア行きませう。、(カバンを手にする)

春枝。何うも難有うございます。

勇吉。では又……。

龜藏。どうも御厄介になりました、(質朴に挨拶して兄弟づれて下りて行く)

店員。(春枝に近寄つて)……ありや一たい何んだらう？

春枝。あの若い方はちよい〳〵此所へ入らつしやるのよ。

店員。ぢや、君のお馴染つていふわけかね？

春枝。(唯、笑つて) まア、さうでせうね。

店員、(半ば眞面目になつて) 厭になつちまふな。賴むから浮氣をしちやいけないよ……己れもう一息だ、今日はこれで(手眞似をして) 一寸の間にこれ位儲かつた、この調子で行けや明日は萬にして見せる。そしたらね(と耳邊へ口を寄せて小聲になる)

春枝。まア當てにしないで、待つてませうよ。

店員。戯談にしちやいけない。此方はしんけんだよ。ね、善いだらう。何なら己がお母さんに直接談判に行く。

春枝。お母さんが善いたつて、私には私の考へがあるんですもの。これでね、チツと望みが大き過ぎるんだから……。

店員。何アにこの調子で行けや、汝さんの欲しがる例のダイヤの指環位は結納に上げられらア、大した上物とは行かなかろうが……。

春枝。(半ば戯談らしく)私のは、唯、身の飾りにしやうつていふのぢやないわ。若し困つた時に賣つたら一身上になるやうなのでなけりやね……。

店員。(苦笑) イヤ隅には置けねえ、若いくせに、なか／＼世帶じみてゐるんだね。……ぢやアあの噂は眞實なのかい?

春枝。噂つて?

店員。(ニヤ／＼しながら小聲で、)汝さんがお客を取るつていふ噂さ?

春枝。(プリ／＼して、)知らないわ、そんな事……誰がそんな出たら目をいふの?

店員。(怨み顔に) 私だつてそりやア出たら目だらうとは思つてるさ、誰か肱鐵を喰つた奴の口から出た事に相違ないんだ……しかし先刻の若い男なんかチヨツと氣になるね。

春枝。何して？
店員。若い者同士ぢやアあるが、二人で話してる時、どつちの眼もイヤにピカピカ光つて見えてたぜ春枝さんの方にも氣があるんぢやないかね？
春枝。(唯笑つて)さア、何うだか？
店員。これは御挨拶だな。……あれは一たい何處の誰だい？
春枝。よくは知らないの……でも堅いらしいわ。
店員。アヽテになるものか？　堅いのなら己の方が堅い。汝さんより他の女の事なんか此頃少つとも考へてやしないんだからね。
春枝。(笑を作つて)ホヽヽまア御禮を云つときませう。……でもね、私折々變な事を考へるのよ。この私が何處かの大金持の、私生兒だつたの、そしてその父さんの家を繼ぐ子供がないので、私を探がし出して迎へに來るの、私は急に大家の令孃になつて、ダイヤの指環をこの十本の指に皆嵌める、そして流行の洋服なんか着込んで何處へでも自働車を乘廻すの、髮はオールバックでもいゝわ。ダンス場へも出入するし、社交會といふ社交會へは片ツ端から顏を出して行く、何處へ行つても女王扱ひにされる……。
店員。(呆氣に取られて)まアまア待つてくれ。まるで憑き物でもしたやうに、さうまくし立てられちや面喰つて了ふよ、何んだな、何處かで見た活動寫眞の筋をおさらへしてるんだな、「白孔雀の夢」とか、「鵲鴣のひとり言」とか、そんなビラがこの節あつちこつちに出てるぢやアないか？
春枝。(フンと鼻で笑つて)夢…ひとり言…さうかも知れないわ。…でも善いぢやァないの、獨りで面白がつてゐられる

丈でも得だわ、でなけや全くやり切れないもの。

店員。やり切れない？　そりやお互ひさまだ。…だが春枝さんは今時のムヤミに浮ッ調子になつてる若い娘ッ子とは違つて、何處か堅氣でチヤンとしめくゝりが附いてゐる。そこが目つけものだと己は前から思つてたんだ。いろんな噂が立つても嘘だろう、萬更嘘でなくつても贅澤にやつてるんぢやァない、氣の毒だ、キズにはならねえ位に考へてたもんさ、それがなければ猶更だが、何うだね、戯談はよして己と世帯を持つ氣になつてくれないかね？　さう贅澤をさせる力はないが、まァひどい貧乏暮丈はさせないつもりだ。

春枝。本氣でお云いのなら、私考へて見ても善いわ。

店員。本氣も嘘氣もありやしない。こつちの心はもう大てい通じてゐさうなもんだがね……尤も、春枝さんは、引く手あまたで、戸迷ひしてるのかも知れんが、少し位年の行つた男の方が行く〳〵爲めになるよ。少し頭が禿げかゝつてゐるので、チヨッと氣は引けるが、そこが又若い女のつけ目だよ、惡い事は云やしない。

勇吉。（先刻から階段口へ半ば顔を出しかけたが此時、急にツカ〳〵と上つて來る、顏色が青ざめてゐる）

春枝。アラ、又入らつしつたの？

勇吉。（カバンを卓上に置いて默つて頷き、時計を見て）もうあと半時間……。

春枝。（近づく）兄さんはお歸りでしたの？

勇吉。（少し興奮した口調で）ア、あれは歸しちやつた…君、ウヰスキーか何かくれ給へ。

春枝。ハイ、ぢやァ下へ行つて取つて來ますわ

勇吉。（店員の方を見て）君は何處の店員か？

店員。（聲寄つて）はツ…こういふ店の者で（名刺を出す）旦那、何うか御引立を願ひます。せいぐ勉强いたしますから。

勇吉。（硬張つた口調で）景氣は何うだね？

（取引所の方でワイ〳〵騷ぎ立る聲が聞える）

店員。あの通りです、いよ〳〵わき上つてゐます。

勇吉。君はこゝで遊んでゝ善いのかね？

店員（狡るさうな笑顏で）善いつてわけはありませんが、人さまの儲けられるのを、指をくわへて見てるのもしやくですから…。

勇吉。君も指をくわへて見てる組かね？

店員。（薄ら笑ひして）イヤ、これでも手前はいくらかづゝ儲かつてる勘定です。こうしてゐても二萬や三萬にはなつてゐますからね…如何です旦那もチとお買ひになつては？　惡い事は云ひません。こんな時にお勸めしなくては、手前どもに罰が當りさうな氣がしますんで。

勇吉。（熱した調子で）大丈夫だね？

店員。大丈夫ですとも…

（春枝、ウヰスキーを持つて來る、勇吉は一息に飮む）

勇吉。（半ば嘲るやうに）こんな時に、金を抱へてゐてボンヤリ見て通るのは氣の利かん男だね？

店員、エ、エ、そいつアあんまり融通が利かなさ過ぎますさア、一生出世の出來ない男ですね。

勇吉。（卓をたたいて）よし、人のする事なら己にだつて出來る（カバンを明けて、札束を取り出す）君、こゝに金がある、これでチョツとの間に勝敗したい…。

店員。（煽てるやうに）へエへエ…よろしうございます、店へ入らつしやいますか、それとも…

勇吉。僕はこゝにこのまゝ居たい、出歩きたくはないんだ。

店員。よろしうございます…御名刺でも…へイ玉はいくつにいたしませう、新東二百か…それとも三百か…

勇吉。五百行かう…證據金はいくらで善い？

店員。へイ…せい〱御勉强いたしますが、始めての御方でございますから（小聲でかけ合ふ）

勇吉。（頷いていくらかの札束を渡す、指を二本見せ）のるか、そるかこれまでやつて見る、買ひに廻つたら大丈夫だ、さうだね、君？

店員。（愈々煽てるやうに）外づれつこはございませんとも、……では行つて參りますから（小走りに走つて行く）

春枝。（近づいて）貴方、まア何うなすつたの？

勇吉。（ヘンに笑つて）指をくわへて見てるのは馬鹿だ。やつて見るんさ……運試めしだ。ウヰスキーをもう一杯……

春枝。（心配さうに）もし損をなすつたら大變ぢやアないの？よくつて？とうとう誘惑に負けなすつたのね？

勇吉。（苦笑）何アに、誘惑に勝つなんて、聞えは善いが、考へて見るとあれは世間に負けて手も足も出ないで縮こまつてる臆病者の云ひ草さ、意久地なしの自己辯護さ、僕は誘惑に負けて世間に勝つてやりたい、……損はせんつもりだ、引までに二圓上つても千圓、五圓上りや二千五百圓……もつと玉を殖やしたら一萬圓も二萬圓も浮上るか知れない……善いかね、元手は土つかずで、浮上つた金丈がこの後に入る、時間はまだ四十分や五十分は構はないんだ、…

……この一寸の時間を利用しての戰爭だ……生きるか死ぬか、のるか、そるかの戰爭だ、勝敗は最後の五分間にあるんだ！

春枝。うまく行けば善いがね……うまく行くやうに祈つてゐますわ……あの人大丈夫か知ら？

勇吉。あの人つて誰だ？

春枝。いゝえ今の店員は人間は善いのですけれどあの店はいろんな風評があるんですよ……けれど大丈夫でせう、ウヰスキーを持つて來ますわ（下りる）

勇吉。（起上つて、取引所の建物に面し戰鬪者のやうな態度で、全身に力を漲らして徐々と歩いて行く、ワイ〳〵騷立る聲が聞える）

春枝。（上つて來る）ハイ、ウヰスキー、

勇吉。（振向いて一氣に飮み乾し）とう〳〵僕も大渦の中へ飛び込んだんだ、素つ裸だと云ひたいが、何んだか衣物を着たまゝ……捲き込まれたつて氣もするんだハヽヽ（悲痛な笑）

春枝。先刻までは何の聲が唯騷々しいとばかり思はれてたんですがこん度は私、何んだか胸がワク〳〵して來てよ。

勇吉。難有い……だが春枝さん、あの店員は先刻しきりに君を口說いてたやうだね、君は何か約束でもした事があるんぢやないかね、かくさず云つてくれ給へ。

春枝。何してそんな事を云つて？

勇吉。（眞面目に）白つぱくれても駄目だ、僕は梯子段を上りかけて、そつと聞いてたんだ。

春枝。（チョッと面を赧らめ）アラマア人が悪いのね…あの人、きらひよ、何處でもお構ひなしに人を口說くのですも

の、頭が禿げかゝつたくつて、そればかり氣にしてるんですから誰でも相手構はず、嫁さんの候補者にするつもりよ、きつと……

勇吉。ゴマかさんでも善い、眞實に何も約束なんかしてゐないのかね？　ハッキリ云つてくれ給へ

春枝。（無雜作に）約束も何もあるもんですか？　第一、歳があんなに違ふんですもの、私だつてやつぱり若い人が善いにきまつてるぢやありませんか？

勇吉。ぢやアこれから僕と直ぐ一緒に何處へでも行つてくれるかね…僕と夫婦約束してくれるかね？

春枝。まアだしぬけに、何してそんな事を云ひ出しなすつたの？

勇吉。（興奮した口調で）僕はもう何も彼も、指をくわへて見ちやゐられなくなつた、のるか、そるか、勝つか負けるか、何んでも自分の體で打つつかつて行くんだ、醉つていふんじやないが、今までは世間體だの、義務だの、責任だのいふもの許りに、縛られて、身動きもしないでゐてそれで正しい眞面目な男子だと自惚れてゐたがそんな縛り道具は、世間の多勢の臆病な人間を社會の隅の方へ堅く縛り附けて置いて、そして、少數の勇氣ある人間が勝手氣儘な眞似をして遊ぶ繩張りを成るべく廣く取らうとする手段から割り出されたもんだ。僕はもう欺されない、そんなものに縛られて馬鹿々々しい一生をフイにする事があるもんか、春枝さんだつてこんなカフヱなどで若盛りを縛られてちやダメだ、僕と一緒になつてのるか、そるかやつて見る氣はないかね？　僕は汝さんが氣に入つてゐる、馬鹿に好きだ、それを人手に渡したりしちや堪らない、もうボンヤリ見ちやゐないよ、いゝかね？

春枝。私のやうなものをかりにもさう云つて下さるのはうれしいわ、けれども……。

勇吉。けれどもは要らない、そんな廻りくどい事を云ふのは僕はもう嫌ひだ、一直線に行かうそれが今の世で眞實に生

きる道だ、正直に云つてくれ給へ、君は僕が忌か！

春枝。忌(いや)ぢやありません。

勇吉。忌(いや)でもない、好きでもないは困る。

春枝。(早口に) 好きだわ。

勇吉。(歡喜の表情) うれしい……今日といふ今日、僕は眞實に勇氣のある人間らしくなつた、男子らしくなつた、兄貴の奴はうまく捲いてやつたし、あの局の灰色の建物を見ると、監獄のやうな氣がして、心の中がカッとなつて爆烈彈がハヂけた氣持がした、僕の本心を外から搦めてゐたサビ附いた鐵のタガが、一時にパッと彈け飛んだ……うまく行つたら四五十分の間に、一二萬の金の持主になれる、そしたらもう黒い事務服のまゝで、卓の前で朝から晩まで、コツ〳〵器械のやうに動いてゐなくても濟むんだ、上役の前でペコ〳〵御辭儀をしなくつても善んだ、それこそ青空を戴いて、大地を踏んで、フーッと肺臓の底からくつろいだ大息が吐ける、好きな女は手に入れられる、自動車で脊かされて衣服に泥をはねかけられる代りに、こつちでも自動車でフンぞり返つて、泥をはね返してやれる、それから…それから…。

店員。(駈けて來て、指を一本出して) 今、一圓、上りましたもつと玉をふやしますか？

勇吉。(手を拍つて) やつたな……難有い……千にしやう……ある丈勝負するさ。(又札束を渡す)

店員。ハイ、かしこまりました (走つて行く)

勇吉。そーら御覽、もう五百圓儲かつたぞ、……こゝでこうして呑氣さうにお喋舌(おしやべり)をしてる間に、こつちは金持になつて來る、卓にかぢり附いて、ペンと算盤と首ッ引してるんぢや半年かゝつてもそれ丈お當てがひにならないと來てる。

春枝。オヤ、もうそんなに儲かつたの、いゝわねえ、萬歳よ、

勇吉。（頷いて）ウム、まア、萬歳だ。今までの僕は何う考へたつて恰悧ぶつた馬鹿だつたね、君だつてさうだよ。何アに、思切つて斧を突出しや、眼前に大きな岩石が立塞つてると思つても、ポコンと胴中へ穴が明いてそこから又前よりは廣い途が開けて來るもんだ。さう云へば田舍の芝居小屋でこんな事があつたさうだ。舞台へ飾つた岩組を、あれは本物と同じだから突きもくづしも出來ないものだつて道具方が威張つて云つたら、そんな事があるもんか、嘘を吐くなつて、一人の男が馳け上つて、踏んだり、蹴たり、滅茶々々にぶち毀して、ざまア見ろつて、凱歌を上げたんだつて、この男は馬鹿だとも云へるが、道具方がもつと大馬鹿だつた事は確かだ。世間で大きな岩石だと思つてるものが、芝居の道具立の張り子だつたりする事はザラにある。それが當世のからくりだからね：ハヽヽ、チト醉拂つたかな。

春枝。（しんみりした調子で）さうしたもんでせうね。

勇吉。いゝかね、君、大抵、勝てるとは思つてるが、萬一、敗けになつたつて、僕と一緒に何處へでも行く決心をしてゐてくれ給へ、假令何んな事があつても一緒に行くときめとくんだぜ、いゝかね：：場合によりや地獄の底へでも一緒に落ちてくれるね！

春枝。（熱情的に）落ちるわ：：けれども：：。

勇吉。（反撥的に）又けれどもか！そ奴ア忌な言葉だ。何も地獄と定まつてるわけぢやない。そこまで云つて置かなけやいざといふ場合に逃げを張られちや困るからさ、そこまで行き突くにしろこのカバンを空にはせん用意はチヤンとして置くから、大丈夫、面白い日も見せてあげる。好きな物に買つて上げる、斯のまゝで十年暮らすより、唯の三日で

も生甲斐があつたと思へた方が得ぢやないか?

春枝。(頷いて)分りましたわ……私、貴方を信用しますわ……任せますわ、

勇吉。よし、僕は君を背負つて行くよ。何處までも君を肩にかけて歩くよ、もう生命がけだ。

春枝。(興奮して)もう自分は何うなつたつて構はないわ、……眼の先がクラ〳〵して來たの……。

勇吉。(支へて)ドツコイ、今からさう興奮しちやだめだ、こゝが大切な瀬戸ぎはだ、戰は最後の五分間にある……。

店員。(アタフタと馳けて來る)旦那、何うも少し調子が狂ひ出しましたぜ、一氣に二圓下げました……

勇吉。(ハツとして)何に、下げた……

店員。チヨツとした狂ひです、こゝで一息ついて又棒上げに上げて來るかも知れません。何うです、こゝらで五百ばかりなんぴんしては?

勇吉。エ、なんぴんするて?

店員。つまり玉をふやすんですな、皆で千五百になる勘定です。

勇吉。いくらでも構はん、ヘコたれるもんか(時計を見て)まだ二十分間は大丈夫だ……もつと買つてくれ、もつと買つてくれ。

店員。(落着いた調子で)もう三千ばかり店へ持つて行かなけや、やかましく云はれそうですが旦那いゝですか?

勇吉。(紙幣束を、出して)さア、受取つてくれ。

春枝。貴方、善いの? こゝらが切上げ時ぢやアないでせうか?

店員。春枝さん、(と肩をたゝいて)怪しからんぜ、懐合が善いと見ると、急にこの旦那にしなだれかゝつたりなんかし

てさ……チツと氣がもめて來らア、先刻の約束を忘れちや忌だぜ？
春枝。約束つて何アに？　知らないわ。
店員。とぼけちや忌だぜ、考へて見るつて、云つてたぢやアないか？
勇吉。君、この金を受取つて行つてくれ。
店員。（ニヤ〳〵笑ひながら）ねえ、旦那、私ツやこの春枝の方から一つ極めたいんです、こう見えても（指を二本出し）二萬圓儲けてゐますぜ、これ丈で貰ひですぜ。
勇吉。（笑つて）そつちが二本ならこちらはこれだ（と指を三本出す
店員。貴はまだもつと出せますぜ、そつちが三本なら、こつちは五本だ（と片手そへる）
勇吉。そつちが五本なら、こつちはこれだ（と兩手を出す）
店員。旦那、現金で仕切れますか？
春枝。ホヽヽヽ人を馬鹿にしてるわ、私は株ぢやないわよ。
店員。（激しい調子で）だつて、金で賣るつていふ咋ぢやないか？
春枝（睨んで）馬鹿々々しい。
勇吉。（チョット暗い表情）：：オイ、もうアト十五分間だもう一息買つてくれ、そしたら總勘定だ。
春枝。汝さん、旦那の仰る事聞えないの？
店員。だつて己らア：：。
勇吉。君がぐづぐづしてりや他の人に頼むぞッ

店員。イヤ、イヤ、商賣ですもの、他の人にやらされちや適はない、おやアなんびんして來ます（札束を引つたくつて、下りて行く）

勇吉。さア、これで最後の運命が極まるのだ……今、あの男は妙な事を云つたけね、春枝さん！

春枝。何んな事を？

勇吉。イヤ、まアそれは後で聞かう。とにかくタキシー　を一つ命令けてくれ給へ、直ぐに……局へ馳け附けるか？それともステーションへ走らせるか？二つに一つだ。

春枝。（憂鬱な顔色で）何うなる事でせう。

勇吉。もう何うなつたつて構はない、時計はズン／＼早く廻る……アト十四分、局の時間に遅れたら僕は世間からも、社會からも締め出しを喰ふ……もう斯うなつたら度胸は据わつた、勝手になりやがれツ。（戸外の鈴の音が忙しくひゞく、取引の方はワツワツと騒立る）

春枝。何んでせう、私、とにかくタクシーを呼んで來るわ（下りて行く）

店員（入れ違いに、忙しく馳けて來る）大へんです、大へんです、ガラが來ました。

勇吉。（顔色をかへ）何う……何うしたんだ？

店員。先刻はニユーヨークから電報が入つたんださうですが、ところへ又支那の戰爭の號外で、六圓方の大からです、場は戰場のやうに沸いてゐます、とにかく店へ來て下さい。

勇吉。（沈痛な調子で）さうか？今行つて總勘定を附ける、……君は一足先へ行つてゝくれ。

店員。一しよに來て下さい。

勇吉。（冷かに笑つて）大丈夫だ、まだこのカバンの中には紙幣が唸つてゐる。

店員、それはさうでせうが、初めてのお客ですから。

勇吉、人を見くびるない、端夕金が何んだ。

店員（せき込んだ調子で）見くびるも何もない、勘定は勘定でさ。

春枝。（上つて來て）何うなすつたの？

勇吉。（チョッと眼配せ）アレはいゝかい？

春枝。エヽ、來てゐます。

店員。（詰るやうに）さあ一しよに來て下さい。

春枝。何うしたの？

店員。大がらが來たんだ、そこでこのお客さまは一萬圓ばかりお吐出しになる勘定だ、内金は戴いてゐるが、精算を附けに店まで御出でを願うてるところだ。

春枝。（青ざめた顔色で）オヤ、さう……ガラなの、眞實？

勇吉。勘定は無論附けるさ、だが一足先へ行つてくれといふになか〱強情なんだ。

店員。初めてのお客だもの、己が引負になつちや大へんぢやないか？

勇吉。（春枝へ眼配せ）ぢやアよし、行かう……春枝君もそこまで見送つてくれ、ね、善いだらう、善いだらう……。

春枝。（深く頷いて）・ぢやアお送りしませう。

店員。さう來りや文句はないさ。

（時計、三時を打つ）

（勇吉、ふり向いて、文字板を見て、ホツと息をついて、梯段口を下る、一人もつゞく）

（引ちがへに、ドヤ〳〵と十四五人ばかりの客の群が階上へ押上る、皆興奮した顔色）

甲客。まア〳〵よかつた、最後のドタン場で浮き上つちやつた。

乙客。己らアこれ丈（指を出して）行つたぜ。

丙客。まア今まで半死人だつたやつが、急に息を吹返して、ピン、ピンして踊り出したつて恰好だな、ヤレ〳〵。

丁客。あの電報が助けの神だつたが、そこへ又支那の戰爭とはよかつたね

（ワツ〳〵云つて、ビールを呼ぶもの、酒を呼ぶもの、給仕は階段を忙しく上り下りする）

萬才……萬才……我黨萬才……。（の聲が爆發する。）

（忽ち、ガラス窓の下の方で、騷がしい人聲が聞える）

乙客。（のぞいて見て）誰か自働車に敷かれたやうだぜ。

甲客。イヤ、突き倒しか、何うかしたんだ……店員ぢやないか？

丙客。喧嘩だ……喧嘩だ

丁客。何アに、貧すりや貪するつて奴等だらうさハヽヽ、

（自動車の警笛、罵る聲、叫ぶ聲一しきり）

（室內では……）萬才……萬才……萬才……我黨萬才……我黨萬才……。

（カーテン）

第二幕

〇市、ホテル内の一室、正面は扉、上手と下手の隅に二つの寝臺が据付けてある、カバンなどそこらに横はり、中央に卓、椅子、上手に姿見鏡、下手の一隅には。大きなガラス窓がある。

〇

サツパリした背廣服、ロイド眼鏡をかけて、青年紳士らしい扮装をした勇吉はガラス窓の處に立ち流行の洋服に、金革の腕時計、オールバツクの春枝は椅子に腰をかけて一人でトランプを弄んでゐる。

春枝。（トランプを弄りながら）貴方、そこでボンヤリして何を見てらつしやるの？

勇吉。河の流れを見てるんだ……橋の上を大ぜいの人が忙がしさうに往つたり來たりしてらア……。

春枝。（小い嘆息）ア、私たちも自由に羽をのばして出歩いて見たいわ、ホテルに閉ぢ籠つた限り、ロクに日の目も見ないで、三度三度同し洋食のあてがひで縮こまつて暮らすんぢや、善い加減、くさ／＼しちまひますよ、まるでお慈悲の監獄……刑務所、……貴方、さうは思はなくつて？

勇吉。（鼻先に苦笑を浮べて）さうかもしれない、あそこをア、して、平氣で歩いてる人たちが馬鹿に幸福さうに見えて來るからな、だが今の僕だちには、外の眩しい廣さうな世間が一番狭ツくるしいんだよ油斷もスキもならない恐ろしい處になつてるんだよ、あんなヘマをやつて今更本物の刑務所へ打ち込まれるなんざ、氣が利かなさ過るから、何んとかして朝鮮海峽を飛越すのさ、そしたら後は窮屈な目は見んでもすむだらう、まア、それまでの辛棒だ。

春枝。だから私、一刻も早くさうしたいのよ、ぐづぐづしてちや却つてけんのんだわ。
勇吉。だつてさう、ムヤミに焦れたつて仕方がない、又ヘマはやりたくないからな。
春枝（八つ當りに、トランプを切つて見る）…ア、ダイヤの一か……こん度は、……オヤ、ハートの一……。
勇吉（春枝の前の椅子に倚り倚）手附が馬鹿にうまくなつたな……あの男に…船長とかいふ男に大分仕込まれたんだな？
春枝。たいくつだからこんな遊び事習はなけや日が經ちやアしないわ。貴方も少つとして見ちや何う？
勇吉。僕は性來無器用で、あんな事は、とても駄目だ……だが汝もあんまり身を入れ過ぎちやいけないぜ、金を賭けたりなんかして。
春枝。（少し不平さうに）でもさうしなけりや面白くないのよ、あの人を相手にして、私、いつも勝つてるから善いでせう、三四度やつて、一度位しか負けた事アないわ
勇吉。（不機嫌な調子で）あの男がワザと負けてるんだ、それを汝が善い氣になるなんて馬鹿だよ、氣を附けるが善いぜ。
春枝。（鼻先で笑つて）だつて、ワザと負けて、金を取られるやうな間抜けはメッタにないわ、さういへば、あの金持の未亡人さんてのも、チと怪しい、……貴なた氣を附けるがいゝのよ、
勇吉。（嘲つて）何あんなもの……とにかくあの男はチョツと見ても人相が善くない、何を企んでるか、油斷はならないから、あんまり近しくせんが善い。
春枝。ホヽヽ、貴方だつて、傍から見たらさうよ、眼光がイヤにキョトキョトしてるんですもの。
勇吉。……（無言しよげる）

春枝。（機嫌を取るやうに）ホヽヽ、私だつてさうかも知れないわねえ、貴方、早くのう／＼して暮らされる處へ行きませうよ。このまゝぢやまつたく壽命が縮むわ。

勇吉。（自棄的に）死んぢまやア一番早くのう／＼すらア。

春枝。死ぬ程なら、何にも苦勞して、こゝまで逃げて來なくつても善いわ、……でもあの時の貴方は、ウヰスキーも廻つてゐたが、何んな岩石の胴中へでもポカンと穴が明くなんて、すばらしい元氣だつたわねえ、私もついカツとしてしまつたわ。

勇吉。（苦しさうに）もう過去つた事は云ひツこなし……汝にまで馬鹿にされる道化役者ぢや、堪らない。

春枝。ホヽヽ道化役者だなんて、馬鹿になぞしはしないわ、……貴方だつて始めツから惡氣があつてあんな事をなすつたんぢやない、唯運が惡かつたのよ、私だつてあゝなつちやもう夢中で、ふら／＼して附いて來ちまつたんだわ……。

勇吉。（憂欝に）それを恩に着せるのかい？

春枝。アラそんな忌味こそもう云ひつこなしよ、今更、何うしたつて取返しは附かないんですもの。

勇吉。（脅かすやうに）もう斯うなつちや、汝も己と同罪だぜ、逃げ隱れしたつてだめだ。

春枝。（頷いて）エ、エヽ、何處までゞもお尻へ喰ツ付いて行くわ、誰かのやうにさうビク、ビクはしてゐない事よ、……「お尋ねもの」なんて、何萬人の眼が皆私たちへ寄つて來てゐるんだと思ふと、何んだか本物の活動寫眞へでも出てゐるやうで怖くもあるし、チヨツと面白くもあるわ。

勇吉。（鼻で息をして）フーム、……汝の度胸の善いのには一寸參つた、……あのカフヱにゐた時は割に落着いた。一ぱ

し氣の强い女だ位にしか思はなかつたが、傍へ寄つて見ると、もつとガムシヤラな、何處まで膽が太いか分らないところがある……。

春枝。(ニツと笑つて)でも毒婦ぢやないわよ、これでも人は善いの。

勇吉。(苦笑)さア何うだか？

春枝。(又トランプを切りながら)オヤ、又ダイヤの一よ、……私、何うしたつてダイヤの指環丈は欲しいわ、始めツからの約束だつたんでせう。

勇吉。(額を蹙らせて)又おねだりか、もう現金だつて、いくらも殘つてやしない、そいつを使ひ減らしちや、これから先きが心細くなる一方ぢやないか？　まアもつと我慢しろ。

春枝。(つんとした調子で)まだ五千や六千はある筈だわ……私のは贅澤ぢやない、これなら身に着けてさへ居りや、愈々困つた時直ぐに融通が利くんでせう、現金よりもつと確かよ、それに同じ罪を着るのなら、私だつて、それ位なものは持たなけりや忌……。

勇吉。でも寶石屋なんかこゝへ呼ぶのからが不安心だ、こつちの隱れ家を廣告するやうなもんぢやないか？

春枝。(侮むやうに)あんまり臆病過ぎるわ、何も本名を云つてやしまいし、長澤なんて富豪の一家といふふれ込みで、ホテルの方もゴマかしてあるんぢやないの？　大丈夫よ。……指環位のもの貰へなけりやつまらないわ。

勇吉。(不承無承に)汝が何うしても欲しいて云ふなら、そりや貰つても善いがね……。

春枝。(强い調子で)眞先に貰つてくれるのが當り前よ、……これから、私、寶石屋へ電話をかけるわ。

勇吉。(蒼ざめた顏色で)だが僕は汝も知つてる通り何うかしてムラムラとするとつい發作的に何んな脫線をやるかも知

らない男だからね、時と場合に依つちや、寳石屋を此室(へや)で締め殺すやうな騒が持上らんとも限らないよ、善いかね？

春枝。（チツト見て）締め殺すんですつて？

勇吉（苦悶の表情）それから高飛びでもやらうと思つてる矢先だから、今、現金を減らすのが實に苦しい、自分で自分の首へ繩をかけてヂリ〳〵締め附けてるやうな氣がするんだ、それよりは寧そ一思ひにアカの他人の碌でもない寳石屋なんか締め殺してやる方が、まだましだからな。

春枝。（落着いた調子で）そんな勇氣があつて？

勇吉。（叱るやうに）見くびるない、已が口ばかりで何んにも出來ない意久地なしのほんとうの道化役者なら、こんな目にも逢やアしまい。

春枝。（輕く頷いて）それはさうね……いゝわ、もう斯うなつちや何んな事が出來たつて仕方がないわ、これから先、何うなるか分りやしないんだから勇氣がなけりやだめね。

勇吉。（ドキマギしながら）イヤ、僕だつて何もさうムヤミに惡事を働きたくはないさ今更附燒刄で自分は何處までも勇氣のある人間だと強がりたくはないんだ……まア成るべく安いので間に合せてもらひたいね、そしたらどつちも氣持よく行かうてもんさ。

春枝。（笑顔）ちやアさうするわ、あつちへ行つて電話をかけて來てよ、誰かに聞かしてやりたいわ。（出て行く）

勇吉。（頭を押へて）女にやかなわないな（起つて、扉のキーをかけやうとする、扉の外から聲がかゝる、ギヨつとして、暫らく耳をすまし、それから細目にあけて）ア、貴方ですか？

（女の聲。御邪魔をしても善いんですか？

勇吉。さア何卒……。

（四十歳位の、厚化粧、指輪にダイヤを光らせ、ゾロリとした身姿の、柳瀬と名乗る未亡人、ヒステリックに少しつり上つた眼にあらはな媚を見せて）オヤ、お一人？奥さまは？

勇吉。今、チョツと階下へ下りて行きました。

未亡人。ア、今のがさうでしたか？後姿がよく似てらつしやるとは思つたんですよ……。

勇吉。まアお入んなさい。

未亡人。眞實にお邪魔をしても善いんですか？

勇吉（言葉を濁し）イヤ……さア、何卒、（キーをかける）

未亡人。（馴々しく）、私、一度ゆつくりお話したい事があるんですが……貴方お一人の時がメツタに見つからないもんですから……いつも此室へお揃ひで、巣ごもり許りしてらつしやるんですものね。

勇吉。（苦笑）そんなわけでもないんですが……まア私たちはチと變人なんでせうね。

未亡人。奥さまは何ちらへ？

勇吉。電話をかけに行つたんです。

未亡人（輕い失望の色）オヤ、さうですか？貴方がキイをかけたりなさるもんですから、何處か遠くへでも、出てらつしやつたのかと思つたんですが……。

勇吉。（苦笑）イ、エ……だしぬけに他の人に入つて來られるのが忌ですから、いつもキーをかける事にしてゐます、習慣になつたんですね。

未亡人。眞實にさうですわ、ホテル住居もよろしいけれど、折々無作法な事をする人があるのは困りますね（…しなを作つて）ね、貴方、この前にもチョットお話したと思ひますが、……ホテルの客の中には私の事を氣狂ひだなんてふれ歩るく者もありますが何かチョッとした事を根に持つて、惡口を吐くのですから、信用なさらんで下さい、私が氣狂ひなら、こゝのホテルの客は、もつと輪をかけた氣狂ひ揃ひですよ、それはまア何うでも善いが、私のは眞實のお話です、嘘偽りぢやありません、……あのね、私はね、紀州に大きな山林を持つてるんですよ、ところが斯うして未亡人で暮らしてゐますと他で善い加減馬鹿にして、いろんな云ひがゝりを附けちや、横奪せうと企らむ者が後から後から引つきりなしに出て來るので眞實に困り切つてるんですよ、一たい相談相手になつてくれる筈の親戚までが、皆同謀になつて、向ふに廻つてるんだから堪りません。慾にかゝるともう義理も人情もないんですわね、いつそ遠い親類より近い他人だと思ひます、斯う云つちやだしぬけで、失禮のやうですが、貴方はお若くつてもしつかりした方だと、私は見込をつけてましてね、相談相手になつて下さらないかなアと思ひましてね…。

勇吉（頭を押へながら）ア、この間、パーラーの隅でそんなお話を伺つたやうですね、つい聞流しにしちまひましたが……。

未亡人。アラ、聞流しはかわいさうですわ。こつちは眞面目なんですよ、私には眞實に一人の味方もないんですからね。

勇吉。（好奇心的に）紀州で大きな山林を持つてらつしやるのなら、それ丈でも隨分大へんな財産ですね。

未亡人。まアいくら安く見積つても、百萬圓より下のものぢやないつて云ふんです、年代の經つた杉や檜許りですからね、それこそ善い買手が附けば、二百萬圓にも三百萬圓にもなるんださうですよ。

勇吉。（烟に卷かれた調子で）、大したもんですね。

未亡人。それを見す〳〵悪企みにかゝつて、ゴマかされて了つちや口惜しくてなりません、私には子供もないんですしね、今の中に何んとか處分して置かなけりや眞實に死んでも死切れないと思ひますわ。

勇吉。（相手の顔を見ながら）、さうした大切な御相談を持ちかけなさるなんて、貴方は私の何處を御信用なさるんでせう？

未亡人。（媚びる眼付）貴方はあの、長澤さんの御一家でゐらつしやるんでせう？

勇吉（一寸と躊躇して）……ヱ、、少し位親戚關係がないでもありませんが、今ぢやその、極く遠縁の方でしてね……あんまり買冠られちや困りますがハ、、、、。

未亡人。アラさうですか？……だけど、そんな事は、私何うでも善いんですよ、實は貴方といふ方が……（扉をたゝく音）

まア、締めちやつたの。（扉の外で聲がする）

未亡人。アラ、奧さんですか？

勇吉。ア、さうです（彈き返されたやうに起上つて、扉の方へ動いて行く）

（又扉をたゝく音）

勇吉。（そつと細目に明けて）ァ、汝か？

春枝。汝かもないもんだわ、電話をかけに行つた間も、キーをかけなくつちやいけないの（云ひ〳〵入つて）オヤ、お客さま。

未亡人。（振返つて）柳瀬です、お留守に上りまして、

春枝。(不快な顔色で、默禮する)

勇吉。來るといふのかい？

春枝。(不機嫌な調子で) エ、來ますわ。

未亡人。何方かお客さんでも？

勇吉。何に、別にお客さんといふわけでもないんですが。

春枝。(眼配で) だけど…私、ゆつくり見なけりや分らないわ、それになんでせう、あの…？

未亡人。(起上つて) お邪魔をしちや濟みませんから私又出る事にしませう、奥さまはトランプがお上手ですつてね、チと私の部屋へもお遊びに (勇吉の方を見入つて) 貴方もね…

春枝 (又默禮する)

(未亡人は出て行く)

春枝。(吐き出すやうに) いやらしい人ね、誰にでも彼にでもぢやらぢやらついて行く、色狂ひだつて、今もボーイたちが噂してましたわ…キーをかけたりなんかして、貴方、何うしたの？

勇吉。油斷がならないからさ。

春枝。どつちが油斷がならないの？

勇吉。(小聲に) 馬鹿……のんきな事を云つてられる場合ぢやアないよ。

春枝 (鼻先で笑つて) フン、貴方こそビクついてるくせに存外のんきよ、あんなものを引つ張り込んだりなんかしてさ。

勇吉。引つ張り込みやしない、向ふから話しにやつて來たんだ、たいくつだからだらう、……おれで二百萬圓とかの山林を待つてるつていふんだ、嘘つぱちにしても、こつち等の口からはメッタに出さうもない嘘つぱちだ、ドタが違ふんだね、タツタ一萬や二萬のはした金で、斯うして息をつまらせてるなんて馬鹿げて見えるなァ、やつぱりこつちは道化役者だなァ世間つて舞台は不思議なもんだ。……

春枝。(皮肉に)そんな金をこつちへ融通させりや、てうど善いわ。

勇吉。(苦笑)己に女たらしの腕がありや、何うせ罪の作り序だ、一つ勇氣を揮つてやつて見るんだが……こんな不器用に生れ附いてちやとてもだめだ、第一あんな女は蟲が好かない。

春枝。蟲が好くの、好かないのつて、云つてた日には、それこそ何一つ出來やしないでせうよ、こんな世智辛らい時節だもの……(ふとこみ上げるやうな笑を抑へて)でも貴方ぢやたらす氣でたらされる位が落ちよ、それに相手は何うしたつて氣狂らしいものまア止した方が善いわ。

(卓上電話のベル鳴る)

春枝。寶石屋がやつて來てよ(受話器を取上げ)ア…ア…さうですか…直ぐこちらへ……。

勇吉(室内をウロツキ廻る)

春枝(姿見鏡の前へ立つて、髮を撫で付けながら)…こゝへ首飾りでも下げたら、何んなに善いでせう。

勇吉。(嘲るやうに)まア活動女優さね、

春枝(ニッコリ笑うて)キネマ・スター……理想だわ、何處かの會社で、私を傭つてくれないか知ら?

勇吉。(神經的に)そんな口が見附かつたら、一人で逃げ出す氣かい?

春枝。（相變らず笑顔を鏡に見せながら）貴方を何處かへ匿まつて、養つて上げてよ。それとも道化役者でお交際なさる？

勇吉。馬鹿……己れたちはスクリーンの上で動き廻つてるんぢやアないよ。云はゞチヨツとしたはづみで世間のドブ板を踏み外づして今ぢや眞暗な下水道の中でアブ〳〵生命がけの輕業をやつてゐやうなもんだ、いくら女だつて、のんき過ぎらア。

春枝。いゝぢやアないの、少たアのんき……な事でも云つてゐなけりや、やり切れないわ。

（扉をたゝく音）

春枝。アラ來てよ……寶石屋さん、お入り……。

（寶石屋の手代、頭の禿げた男、洋服を着て、カバンを持つて入つて來る）

手代。へヱ……今日は……。

勇吉。さアずつと卓の方へ（云つて、扉にキーをかける）

手代。（妙な神經的な顔をして、チヨイ〳〵扉の方を見る）

春枝。（快活に）さア一通り品物を見せておくれ、早く目のお正月でもしたいわ。

手代。（警戒しながら）へヱ、へヱ……（二つ三つ函を取りだして開いて見せ）こちらがプラチナ製ダイヤ入りでお品は飛び切り上等でおます……こちらは金臺ですよつてお値段も安うなつとりますが細工に手間がかゝつとりますさかいに、何處へ指しても出はつたかて、立派でつせ。何卒まア御覽？

春枝。（手に取つて、眺めて見て）善いわ、これ……いくらなの？

手代。ヘイ…そちらは正札通り、二千七百圓でをます、それなら善ろうつりまつせ。
春枝。これも悪くはないわ（と嵌めかへて見る）…。
手代。ヘイヘイ、それは十八金、プラチナダイヤ入りで、六百七拾五圓では勉強になつとりますさかい、
春枝。こちらのは何んだか色が變ね？　銀ぢやないの？
手代。メツソウな、……それはもつと上等品でをますよつて四千三百圓になつとりますんや。
勇吉。（硬張つた表情で）チとドタが違ふよ……上等のは又、この次の事にして、今日はふだん差しで善いからせいぜい六七百圓臺のを見せて貰はふぢやアないか？
手代。ヘイ、ヘイ……今、御覧になつたんが六百七拾五圓……もつとお安いのは、五百圓臺のもをますが……（と取出して見せる）
春枝（チョツとのぞいて）やつぱり、値ほど餅ほどだわ。
勇吉。善いぢやないか？　立派なもんだ。
手代。ヘイ、ヘイ、こゝらのとこは、何れかて皆、上物だすさかい、何處へさしてお出やしても耻かしい事アおまへん、やつぱり舶來品ですよつてな……それから奥さま、眞珠の首飾つていふお電話かけはりましたな。生憎、上物は品切れになつとりますが、一通りのとこは持つて來ましたよつて何卒御覧なはつて……（と他の函を取り出す）
春枝。あらさう……（函の中から取上げて、首へかける、姿見鏡の前へ行つて）アラ。ほんとうに善いわ、貴方、チョツとこちらへ向いて御覧なさいよ。
勇吉。（苦笑）……駈出しのキネマ、スターかね、……正氣の沙汰ぢやアない。

手代。（笑を作つて）ほんまに善うお似合ひなさつせ、ついでにお買ひなはつて…勉強しときますさかい……へ、と、それは、三千五百圓のところを三千圓に引いときまひよう。

春枝。（媚びるやうに勇吉を見て）、指環はそれで我慢するから、これもついでにね、お願ひしますわ。

勇吉。（憤つた顔色）いけないッ、いけないッ。

春枝。ムダにはなりませんわ、體に附けてるんですもの、ね、お願ひしますわ。

勇吉（キッパリした口調）いけないつたらいけないッ（カバンから紙幣を出して）さア、指環代六百七十五圓……あれ丈貰つて置かう。

手代。ヘイ、大きに（受取證を出し）……首飾りの方は何うだすやろ？　ついでにお買ひなはつては？

春枝。（鼻を鳴すやうに）いゝでせう、貴方、……若し火事にでも逢つて御覧なさい、札束ぢや焼けッちまふわ、眞珠の首飾なら大丈夫、私が首にかけて持つて歩けるんですもの……。

勇吉。（眼を光らせながら）いけないッ……いけないッ……あんまり聞分がないぢやアないか？……いけないッ

春枝。（鏡に映る自分の姿に見惚れながら）私、何んな事をしたつて、これ丈は欲しいのよ、

勇吉。（慄えた口調で）汝がそんな強情を張ると、己が何うなるか知つてるかッ？

春枝。（ムッとした調子で）欲しいつたら欲しいわ。

手代。（わざとらしく笑つて）へゝゝゝゝえらうお氣に入らはつたで、あゝ仰つとりますんや、ほんまに善ううつりまんがた、ついでやよつてお買ひになはつたら何うでおます。

勇吉。（尖つた調子で）ぢやア君、あれ丈は少し貸して置いてくれ給へ、今夜か……それとも明朝までに、金は支拂ふ…

……。

手代。（ヒッタリしたやうな眼色で）ヘエ……いつもの御得意様なら搆やしまへんが、始めての御客様やよつてた、掛は何うもあきまへんのや、主人に叱られますさかい。

勇吉。（早口に）眞實に氣に入つたのなら金は今でも拂ふが、氣の變り安い女だから、後で又イヤ氣がさすなんか云出すと困る、それで暫らく貸して置いてくれ給へと云ふんだ。

手代。（無愛相に）そらあんたはんの方は都合善うをませうが、こつちは困りまんがな、……そいぢや又明日にでも持つて上りまひやう、今日は返しといてもらはんと、何うもなりまへんのや。

春枝。（默つて首を掉る）

勇吉。（顔面神經をピリ〳〵させて）コラ返しちまへ……返すんだ……己を困めるのかッ？

春枝。（冷い笑））返すのは忌、アラ、貴方は口ばかりで何んにも出來ない意久地なしなの？ 道化役者なの？

勇吉（カツとなつて、やにはに手代の咽喉へ手をかける）……君、このまゝにして一應歸つてくれ……大人しく歸つてれくでなければやどんな事になるか知れないんだ……己は頭がヘンになつて來たから……。

手代。（手をふり離さうとして悶へてゐたが、何時の間にか、ポケットからピストルを取出し、勇吉の額にさし向ける）

勇吉（ハツトして手をゆるめる）

手代。（慄えながら）打つぞ……馬鹿な眞似すると打つぞ……。

勇吉（手を放して、思はず後退す）

手代。品物を返さんと打つが、よろしか？

春枝。(慄えながらそれを投げ返す)
手代。(片手で拾うて箱に納め)この節は世間が物騒でこんな手が流行るよつて、此方もちやんと用意しとるんや、ヘン、人を馬鹿にしなはんな。
勇吉。(周章てた態度を強いて自制して)イヤ、別に惡氣があつてやつたんぢやアない、癇癪持だから、カツとしてつい手が早く出たんだ。勘辨してくれ給へ、
手代(片手にピストルを持つたまゝ、前の紙幣を出して見て)コリヤ僞紙幣やないかな……まア、よく調べんことにはあかん……ほんまにけつたいな眞似しよる、早くこゝのカギをあけはらんか?
勇吉。あけるさ、…だがこんな事を誰にも云つてくれるな、(思附いたやうに、紙幣を握らせにかゝる)
手代。馬鹿にしなはんな、僞紙幣なんか握まされたか? 後でとんだ災難や…早くあけなはらんか?
勇吉(扉をあける)
手代。どゑらい目に逢はしやがつた(睨んで、出て行く)
春枝。(ふと思附いたやうに)私、一寸と、そこまで附いて行つて、何んとか機嫌を取つて見ますわ、このまゝぢや大へんよ。
勇吉。(ホツトして)ウン、何んとか云つて、ゴマかしてくれ……とんだ失策をやつた……もうこゝにもぢつとしちや居れないからな。
(春枝は出て行く、勇吉は暫らく後を見送つて、扉を閉さうとする)
外から聲。君はどうしたんだい? 君の奥さんが蒼ざめた顔をして男子の後を追つかけて走つたやうだが?

勇吉。（扉を閉けて）何アにチョッとした事でね。

（船長と稱する五十男の髭面が、扉の口へぬつと出る）

あの男子は何んだい？

勇吉。寶石屋の手代だ。

船長と稱する男。ア、さうか、…君の奥さんが、己らにもよく話してたけ、ダイヤの指環が欲しくツて堪らないつてね、ぢやア己らが若しカルタに負けたら買つて上げやう、一つ賭をやらうかつて云つた事もある、ぢやア愈々買つたのか？

勇吉。（云澁りながら）買ふには買つたんだがね…。

船長と稱する男。ハヽヽ安物ぢやお氣に召さないとでもいふのかね？　女の子つて他に樂みはないんだから、同じ買つてやるんならウンと奮發するんだね…ぢやアまア失敬（と面を引ツ込める）

勇吉。（カバンなど片附け始める、春枝がなか〳〵歸らないので、扉をあけてのぞいて見たり、又卓の邊へ戻つて、物をさがしたりする）…何うしたんだらう…何をグズ〳〵してやがるんか？（又扉をあける）

未亡人の聲。貴方、何うなすつたの？

勇吉。イヤ、チョッとこゝを片附けてるんです。

未亡人。奥さまはゐらつしやらないでせう？

勇吉。ヱヽ……一寸と下まで行つたんですが……

未亡人。私は今、あそこで御目にかゝりました、向ふは御氣附きでなかつたでせうが…。

勇吉。（焦々して）何をグズグズしてゐるんでせう。

未亡人。（室内へ入り、小聲で）…貴方、お氣を附けなさらなけやいけませんわ。

勇吉。エ……何うしたんです？

未亡人。（勇吉を押附けるやうにして、卓の處へ進む）あのね、船長だつて云ふ男が、このホテルに泊つてるのを御存じでせう、五十位の、頬ひげの生えた眼のギヨロ〳〵した、色の青黒い男よ、マドロスパイプなんかいつもくわへて…。

勇吉。（頷いて）エ、、今もこの部屋をのぞいて行つたんですが、それが何うしました？

未亡人。奥さんは、よくあの男とカルタなんかやつてらつしやるて評判ですが、あの男はあれで仕様のない女たらしでしてね、眞實に油斷もスキもなりやしませんよ、ボーイなんか色狂だの狒々だの、ゴリラだのてひどいかげ口を利いてゐますわ。

勇吉。（眼色を動かして）ヘエ、さうですか？

未亡人。（調子づいて）向ふから馴々しくするもんですから、私も始めの中は氣のさくい、面白い男だと思つて、交際つてましたが、此方で少つと氣を許すとだん〳〵圖々しく持ちかけましてね終ひには厭らしい事を平氣で云ひかけるので私呆れツちまひましたわ、もう腹が立つてならないから小ッぴどく彈ね附けてやつたんです、するとこの頃は又奥さまにねらひを附けてるやうですからね、ほんとうに、貴方、お氣を附けなさらんといけませんよ。

勇吉。（ショックを感じて）ヘエ、そんな男子ですか？…前から少しヘンだとは思つてましたが…？

未亡人。今もね。奥さんの肩へ手をかけたりなんかして一緒に自分の部屋の方へ行きましたよ、御存じないんですか？

勇吉。(顔色が嶮はしくなる) へエ……?さうですか?

未亡人。(薄氣味惡い笑ひ方で) 奥さまはしつかりしてらつしやる方のやうですから御間違はありますまいが、とにかくあの男は性が善くないんです、何んでも、親が船乘稼業で、生れる時も海の上で生れ落たのだから、一生海で暮らすつもりだとか、世界中の海といふ海なら何處でも股にかけた、太平洋でも印度洋でも深い處が何萬呎で、淺い處が何千呎あるか、一々分つてゐるなんて、大きい言許り云つてるんですがね、それはそれはまア善いとして、あの地中海とかの海の底へ沈んでた百萬圓の金貨を引揚げた仲間も、實は自分の手下だなんて、隨分法螺を吹くんですそしてこん度は自分が大將になつて瀨戸内海の何處かへ沈んでゐる古金銀を引上るので今、あちこち奔走してるつて、ふれ歩いてゐますが、いつか部屋へ行つて見ると、貴方、虎の皮の上へ寢そべつてアヘンなんか吸つてるんです、キツと恐ろしい詐欺師ですよ。

勇吉。(蒼靑な顔色をして、つツ立ち、)妻は確かにあの男の部屋へ行つたんですか?

未亡人。私、後をつけて行つたわけではありませんが、何うもさうだろうと思ひますわ……何んなら私が行つて樣子を見て來て上げませうか?

勇吉。イヤ、それには及びませんが……何をグスグスしてやがるのか?

未亡人。(媚びた眼付で)、私が貴方お一人の處へ話しに來てゐますと、あの方、御機嫌が惡いのに、御自分では貴方をいてきぼりにして餘所の男子の部屋へ遊びに行つたりなんか、ずいぶんご勝手ですわね、それも相手があの、評判のよくない男子ですもの……こんな事までは誰も知らないでせうが、あの男子はね、まるで恥ぢも外聞もない、自分がしやうと思つた事は、獸のやうに飛びかゝりでもする恐ろしい人間ですよ、まア動物園のゴリラ見たやうなもんで

すね……。奥さんはそれまでは御存じないんでせうよ。キツと……

勇吉。(不安に戦されて) あの男の部屋は何處です?……何處です?。

未亡人。(媚びながら) アラ、まア、お顔色をかへたすつて……まア何もそんなに御心配なさらなくなつても。奥さまなら大丈夫でせうよ、貴方思ひでゐらつしやるんだから……それよりか、貴方、私の相談相手になつて下さらない?つまり財産の處分の事ですがね、ほんとうに何うしたら善いんでせう。子供も何もないんですから、心から私の力になつて戴ける方が斯うしろ、アヽしろつて、指圖して下さつたら、仰る通りにしやうと思ひますわ、貴方、善い知慧を貸して下さらない?お願ひしますわ。

勇吉。あの男の部屋といふのを教へて下さい……何をグスグスしてやがるのか?

未亡人。アラまア私の云つてる事はちつともお耳に入らないんですか?それぢやあんまり可わいさうだわ。……(大膽に) 貴方、善いぢやありませんか?あつちで勝手な眞似をするなら、こつちでも勝手な眞似をしたつて構やしないでせう?

勇吉。あなたには、あの女がそんなだらしのない奴に見えますか?……トランプをやりに行く時には、キツと斷つて行くのだが、今日に限つて默つて行つたのが、僕にはチョツと不安心な丈です……

未亡人。そりやね、斯う云つちや何んですが、堅さうな女に見えたつて、時と場合とで何んな事をするか知れやしませんわ。……これでこれで私の事を何の、彼の惡く云つて廻る者も居ります、私がだらしのない女に見えるかも知れません、何にさう見えたつて構はないと思ひますが、これでも元はね、そんなぢやアなかつたんです、恥を云ふやうですがまだホンの小娘の時、年の三十も違ふ老人の處へ無理やり嫁にやられられました……向ふは成金、こちらは、家

柄はよかつたんでせうがひどく貧乏して、何んでも借金のカタに人質に取られたやうなもんでしたろうね、ですから私は若い時の樂みなんてものは小指ばかりも知らないで過して來たんですよ、それで未亡人さんになつたを幸、斯うして折々この邊へ遊びに出かけて來ちや、氣儘な眞似をやつてゐるんですが、それ位な事ぢやなか〳〵埋め合はせはつかない氣がしてゐます……折々は死んで了ひたくなるんですよ（感傷的になる）

勇吉。（引入れられて）ア、さうでしたか？……さうした苦勞をなすつたんですか？……唯、氣樂な、羨ましい御身分の方だとばかり思つてましたが？

未亡人。（ソツと眼を拭いて）これで一たい、のんきには生れ附いて來てたんでせうね、親に命令られたら、自分の氣が進まなくつても、ハイつて、そんな老爺さんの處へ緣附いて行く位ですもの、今時の娘はさうは行きませんわ、イヤ私がのんきといふよりか、チツと馬鹿の方でしたろうねホホホ……（寂びしい笑）

勇吉。（ため息）さう云やア、いくら悧巧ぶつても、人間つて存外、馬鹿なもんですよ。貴方ばかりぢやありません。

未亡人。さうでせうか？……でも馬鹿と悧巧とは大てい人相で分りますわ、貴方なんかチツとも隙のない、目から鼻へぬけ通つたやうなお顏附をしてらつしやるわ、私はそこがたのもしいんですよ。

勇吉。（苦笑）ハヽヽ、キヨト〳〵して落附がなささうに見えるんでせうね。

未亡人。（媚びた眼付）アラ、まア、貴方もずいぶん皮肉やさんよ。

勇吉。イヤ、そんな皮肉や、しやれの云へる身分ぢやアありません。實は紀州で大きな山林をお持ちだと聞くと、いつそ社會事業か何かへ御寄附なさつたらとても立派なことを云ひたいんですが、それよりも今の僕は眞ツ先きに、その山奥の薄暗い檜や杉の木の眞ン中へでも逃込んで、十日でも二十日でもグツスリ眠込んで見たいと思ふんですね、この

まゝぢや二六時中、何か目に見えぬ者に追ッ掛け廻されてるやうで油断も隙もならないんです。

未亡人。（頷きながら）そんなに世間が忙しくなり過ぎたと仰るんですか、それはさうですわね……（笑顔で）何うでせう……その山林の一番奥へ館造りの別荘でも建てゝ、氣樂にお住ゐなすつては…熊や猪は出ませうが、人ッ子一匹寄り附きますまいよ、それもお淋し過ぎるでせうね？

勇吉。（眞面目に）イヤ、場合に依つたら、その山番でもお願ひしに行くかも知れません、その節はよろしく頼みます。

未亡人。（熱心な口調）イヤ、御戯談ぢやありませんわ、ほんとうに一度でもお遊びがてら入らつして下さいな？

勇吉。食ひつめたらほんとうに逃げ出して行きます。イヤ實はもうさうした場合なんですが…あいつまだ歸らない、何うしやがつたんだらう（焦々して起上る）

未亡人。（顔を緊張させて）ア、やつぱり奥さんの事が御氣にかゝるんですね……（急に戯談らしく）あなた、そんな不實な女は捨てゝ了つたらいゝでせうにホヽヽヽ。

勇吉。あの男の部屋を教へて下さい、この上だとは聞いてましたが…何號室ですか？教へて下さい。

未亡人。（肩先へ手をかけて）そんなに大切な、大切な奥さんですかねえ？

勇吉。（落ちつかぬ様子で）あんまりグズグズし過ぎてゐます…もう半時も經ちます。

未亡人。ホヽヽ、まだそんなになるもんですか……（鋭い口調で）ね、貴方、あの方は正式に結婚なすつた奥さんのやうに見えませんわ、……失禮ですが、もしや駈落ちでもなすつたのでは？

勇吉。エ、……何うしてさう見えます。

未亡人。（冷かに笑つて）唯何んとなくね……もし間違つたら御免なさいよ、序でに申しますと、何んだか貴方はあの方

の爲に世間を狹めてゐらつしやるのぢやアないかと、ふとそんな氣がして來ましたが、これは當推量でせうか？もし間違つてたらほんとうに御免なさいよ。

勇吉。（興奮した顏色で）、そんな風に見えるのなら、それでも構ひません、僕とあの女とは何處迄も離れる事は出來ないんです。まア、そんな運命だとでも云つたら善いでせう。

未亡人。（ヒステリツクな調子で）オヤ、まア貴方にそれほど思はれてる方はほんとうに仕合せですわ…けれどもあんまりやさしくされると、女つてものはとかくつけ上るものよ。

勇吉。まだ歸つて來ないツ……一體どうしやがつたんだらう？

未亡人。（ヒステリツクな調子）それに相手の男子はほうとうにけんのんですよ、…獸のやうな奴ですから…錚々ですから……ゴリラですから…。

勇吉。（叫ぶやうに）部屋を敎へて下さい…行つて見ます。

未亡人。（冷たい眼色）アラ私が御案內役ですか？いゝ役廻りね。

勇吉。（哀訴するやうに）失禮ですが、何卒賴みます。

（扉をたゝく音……それからあけて春枝が顏を出す）

春枝。（少し上氣した顏色）ア、こちらにもお客さま、こん度はキーがかけてなかつたんですね。

勇吉。（默つて顏を見てゐたが、爆發的に）今まで何をしてたんだ？

春枝。（落着いた調子で）イ、エ、別になんて事も？

勇吉。何處へ行つてたんだ、それを聽いてるんだ。

春枝。貴方がたこそ何なしてらしたの？
未亡人。今二人で貴方をさがしに行かうとしてた處ですよ。迷ひ兒になんなすつたつて、大さう心配なさつてるんです、いけませんよ、こんな善い方に氣をもませたりなんかして。
春枝。(負けず嫌ひな口調で)でも貴方が御相手だつたら、てうどよかつたでせうよ、…歸りやうが早かつた位ですわ。
勇吉。何處へ行つてたんだ？それを云へといふんだ。
春枝。分つてるぢやァありませんか？あの寶石屋の手代なぞうまく怒らせないやうにして返すのにはなか〳〵手間が取れましたよ、ほんとうに容易ぢやァなかつたんだわ。
未亡人。(薄氣味惡い笑顏)それはさうでしたろうね。
勇吉。何ぜ僕に默つてあの船長とかいふ男子の部屋へ行つてたんだ？今まで何をグズグズしてたんだ？
春枝。(チョツと顏色を動かし)アラ、誰がそんな事を云つて？…それはね、あの方が來合せて手代にうまく云つて、無事に濟ませて下すつたので、御禮かた〳〵行つてつい話し込んでしまつたんです…カルタもやつたわ。善いぢやないの？
勇吉。(慄え口調で)このホテルでもあまり評判の善くない男子の部屋へ、僕に默つて勝手に入り込むつて奴があるか？
船長と稱する男。(外から扉をコツ〳〵やつて、あけて入ろ)ヤァ失敬、己はこのホテルでも評判がそんなに善くないかなァ、そんな筈はねえんだがハ、、、、。(高調子に笑ふ)
勇吉。(ハツとして默ろ)
春枝。誰がそんな事を云ひふらすんでせうね。…こんな男子らしい、善い方をね。

未亡人。（苦笑）フヽヽヽ。

船長と稱する男。（マドロス・パイプをふかしながら）柳瀨の奥さん、汝さんはこの頃、この部屋へ入り浸りだつていふぢやないか？　藥喰ひにしても女はもつと控へ目の方が善かアないかなア、何しろこゝには斯うした、美しい、若奥さんが附いてらつしやるんだからハヽヽヽヽ。

未亡人。（ヒステリツクな調子で）私は唯、折々お話を伺ひに來てますのよ……汝さんこそチツと氣をお附けなさい、ホテル中の評判になつてるのを知らないんですか？

船長と稱する男。（白眼で笑つて）大きに……そんな評判なら汝さんがふれ歩いてくれたんだろうよ……己はコセ〳〵した事が大きらひで一たいのんき坊に出來てるから、何を云はれやうと、メツタにムキになつて辯解なんかせん流儀だが、愈々我慢し切れなくなつたら、これだ（と、毛深い握拳をつき出して見せる）

春枝。この方のお庇で、あの千代さんもスツカリ御機嫌を直して歸つて行つたのよ、旦那樣にもよろしく云つてくれたんて、お世辭まで云つてね……まア安心ですわ。

勇吉。（落着かぬ氣持で）フン、ぢやアその後で汝はこの……林君だつたな？　林君の部屋へ行つたのか？

春枝。（平氣らしく）エ、さうですわ……何んだか氣持がくしや〳〵するもんだから、遊びに來ないかと仰るのを、いゝ幸ひに、お邪魔に上つたのよ、貴方こそ禮を云つて下さいよ。

船長と稱する男。イヤ己はよく事情は知らないが、奥さんが蒼白な顏をして、あの千代の後を追駈けてるんだから、何事かと思つて、つい立入つて、まア仲裁役を買つて出たやうなわけさハヽヽヽ。

勇吉。（無表情で）さうか？……何しろとんだ御心配かけた。

船長と稱する男。何アに……何でもないさ、斯うして一つホテルの客になつて幾日か泊り合せてゐると、何の事はない遠洋航海に出た船の中で、乘客同士がつい親しくなるのと、同じ氣持で、アカの他人とも思へなくなるんだからね、これは己が永らく海でばかり暮らして來た習慣からかも知れんが、四海同胞つて、君、全く嘘でもねえな……。

勇吉。（默つてもゐられぬといふ調子で）誰もほんとうにそんな氣持になれると善いだろうが……。

船長と稱する男。（パイプを弄りながら）イヤ、そりや己だつて、ずいぶん自分の慾も渇く、仕たい三昧もやるにはやるがね、されぱと云つて萬更他人を見殺しにせうとは思はねえ。難船を見つけたら助け船を出すのが船乘仲間の掟になつてやうてものだ。だが、陸に長く居附いた人間は、その難船の荷物でも我がちに分取りにやつて來るんだから敵はねえハヽヽヽ。

春枝。（笑顏を見せて）この方はキツとさうですわ、……嘘なんか仰らない、約束はお守んなさる？

勇吉。（怪訝さうに）何んな約束をしたんだ？

春枝。（チヨツとドギマギして）何に、何んでもないの……あの手代が貴方に失敬な事をしたでせう、それも他へ云ひふらされや困りますものね、勿論、約束しなくつてもこの方は、そんな人ぢやない、ほんとに立派な、男子らしい方ですけれども……。

船長と稱する男。（半ば苦笑）ハヽヽヽ、そんなに云はれちやアてれ臭い……何しろ相見互見ですよ。

未亡人。（冷い調子で）ウツカリこの男の口車に乘つたら、とんだ事になりますよ、まア氣をお付けなさるが善いわ。

船長と稱する男。フン、イヤにケチを附けたがるな、汝さんに怨まれる筋もなささうだが……血の道のせいかい？

未亡人。（眉をキヽりと釣つて）フン、あるか、ないか、汝さんの胸に覺えがある筈だ？

船長と稱する男。(平氣さうに)そりやこれまで汝さんと關係はしただ。がもう一月程前に切れて了つた。それ丈は然えてゐるよ。その他には何んにもねえ。

未亡人。(いきり立てゝ)人を馬鹿におしでないよ、おやア何も彼も洗ひざらひ云つて上げやうか?

春枝。(顏をしかめて)この部屋で大きな聲を立てられちや困るわ。

勇吉。(横合から)あの、林さんは、地中海の底から金貨を引上げた仕事に、御關係なすつたとかいふんですか?

船長と稱する男。(輕く頷いて)イヤ、自分で現場へは行けなかつたが、費用とか、器械とか、いろ〱後援はしてやつたもんさ、あの男とは少さい時から懇意な仲だつたんでな。

春枝。(讃美するやうに)こん度は瀬戸内海の底へ沈んでゐる古金銀を御自分の手でお引揚げになるんですつて、……打ちやつて置いたら、何時までゞも海の底の石ころ同樣なものを、再び世の中へ浮き上らせて、人間の資に通用させなさるんだから、すばらしい御仕事ですわねえ。そつくり活動寫眞に撮つたら何んなに善いでせう?

勇吉。(思はず苦笑)汝のは活動寫眞になりさうだから、すばらしい御仕事なんだらう……(相手を見て)何時頃からお取かゝりになるんですか?

船長と稱する男。潮流の加減を見てもう直きに始める手筈ですが、器械の方がまだあれこれ整はないので此方へ來てせついてゐるんです、何しろ大がゝりで、金も集まる丈はかき集めなけや中途で挫けちや物笑ひだもんだからな。

未亡人。(刺すやうな調子で)ヘン、何が物笑ひだ、私のゐる前で、平氣でそんな大法螺がよく吹けたもんだわ、何處までづう〱しいか底が知れない。

船長と稱する男(苦笑)女つて、とかく氣が小い者だから、少し大がゝりな仕事なんか皆嘘つぱちだときめてるんだ、默

つて針を持つた方が似合つてるが、それも出來ねえのは困りもんだて

未亡人。（嘲を含んで）フン、私丈けはもう欺されやしないよ…でも世間にはお人善しが多いから。汝の口先に引つかゝつて、後で血の出るやうな痛い目を見るものも稀ぎれにはならないだらうね。私はそれがほんとうにお氣の毒だわ。

春枝。（眼を瞬つて）まア奥さんもずゐぶんな事を仰るわ。

船長と稱する男。（怒つた顏で）何アに、このいんらん後家が、云はせて置けば圖に乘りやがつて、口から出任せを喋舌りやがる、默らんと承知せんぞ、…己に肱鐵をくわされたのが口惜しくてならないんだらう。

未亡人。フン、そりや、あべこべだわ、汝こそ、動物園の狒々だの、ゴリラだのつて云はれてるのを知らないのかね？そんなものをこつちで寄せ附けるもんか、その腹癒せに、私の惡口をふれ歩くつて云ふぢやアないか？

船長と稱する男。（少し赧くなつて）何んと云はれてるか知らねえが、そりや己の女好きも一つの病氣見てえなものだらう、世間體も義理も忘れて、飛び附いて行くやうな眞似もやつたさ。これはよくねえ事に違ひないがしかし世間相手の仕事となりや、やつぱりこの氣合で行かなけや負けてしまふんだ。女よりもつと手強い相手だからな、もつと慾深だからな、ゴリラにでもならなけや人間は組み伏せられねえんだ、ハ、、、辯解せんつて云つて、とう〳〵こんな事まで云出したが、とにかく己は女なんかに不自由はしないから、イヤにケチ〳〵しやがつて、はした金の事をうるさくいふやうな女は女とは思はねえ丈さ。

未亡人。（愈々興奮して）汝には一萬圓も、一萬圓をタヾで捲し取られたんだ。これがはした金と云へるんかね？

船長と稱する男。そんなものはその中、利子を附けて返して上げるさ、何アに、金なんて廻つて來さへすりや右から左

りへパッパとまいてやらア、見損つて貰ふまいぜッ。

未亡人。よくもそんな大きな口を利くのね、小遣ひの五圓、十圓まで無心したぢやアないか？ 人間の皮をかぶつてるなら恥を知るが善いッ。

勇吉。(見兼ねたやうに)まア、まアそう一こくに云ふもんぢやアありません、いろ〳〵事情がある事でせう。

船長と名乗る男。(凄く笑つて起上り)ある事、ない事人様の前でよくも洗ひ立てしてくれた。こつちはもう、アカの他人だと思つてるのに、そッちであれ程嵩にかゝつて悪口を吐くのは、まだ未練があるんだらう、よろしい、もつと愚痴でも。未練でもさし向ひで聞いてやるから、己の部屋へ来い……サア部屋へ来い、(毛深い手を出して兩腕をつかむ)

未亡人。(叫んで)およし…イヤだよ、…ア、イタイ、…もう汝なんかの自由にされるもんか？

未亡人。イヤだつていふに……お放してば(身をもがく)

船長と稱する男。部屋へ来い、さし向ひになろう。…さア、つれて行つてやる(と力づくで引起す)

船長と稱する男。イヤ、何うでもつれて行つてやる…何うも御邪魔さま。(つかんで、引ずつて行く)

春枝。(扉口から後を見送つてゐる)

勇吉。オイ……まア此方へ来い……そこはキーをかけて置かう……。

春枝。(ボンヤリ、卓の處へ戻る)

勇吉。(力めて落着いた口調)一たい何うしたつていふんだ、己の許しも受けないで、コッソリあの男の部屋へ入つて行くなんて？そしてあの男が後から送つて来るなんて事も怪しいぢやアないか？ 何をしたのか？ 何んな事があつたのか、隠さず云ッちまへッ。

春枝。(平氣らしく)貴方こそヘンな事を聞くのね、今も云つたぢやアありませんか？お禮かた〳〵遊びに行つたのです。そしてトランプもやりましたわ、まだ囚徒になつてるんぢやアあるまいし、この室にばかり引込んでられやしないわ。

男吉。(少し機嫌を取るやうに)そりやこの室の内で許り暮らすのはたいくつだろう、だから他の室へ遊びにでも行く時には己に斷れと堅く云つてあるぢやアないか？第一、己の身を切るやうな金を投出して、そんな贅澤な、身分不相應な指環なんか買つてやつたのは何の爲めだ、御禮を云つて貰はふとは思はないが、汝だつて默つてても、難有いくらゐは思つてくれさうなもんだ、それに何んだ、自分の口から女好きが病氣だなんて平氣で云つてる男の室へ、半時間も、一時間も…

春枝。(遮るやうに)もう分つてます、分つてます、それは私が眞直に歸らなかつたのは惡かつたでせうが、眞實を云ふとね、貴方が、カッとしてあの手代の喉首へ手をかけなすつた時は、ふだんのビタビタした貴方とは別の人のやうでした。チョッとすばらしいと思ひました、すると、あの老耄れた手代がピストルを出したでせう、貴方はスッカリ度膽を拔かれちまつて、直ぐ手を引込めてマゴマゴするんぢやありませんか？あんまり意久地がないので、私はもうガッカリしました、見てゐられなかつたんです。

男吉。汝だつて周章てゝ品物を返したぢやアないか？誰だつて生命は惜しいからな。

春枝。私は女だもの、力づくぢや敵はないわ、けれど貴方は、現金を減らすのは、自分の首を締めるのと同じだから、寧そ人の首を締めてやると、元氣な事を云つてたぢやありませんか？それがあのザマは何んです、眞實に貴方は道化役者かも知れないわ、貴方の悄げた顏を見るのが忌だつたから、あの方に誘はれたのを善い事にして、行つて遊びました、あの方こそ眞實に男子らしいわ、男の中の男だわ。

勇吉。(憎げながら) 彼奴は獣だ、狒々だ、ゴリラだ。

春枝。さうかも知れません、けれども大膽ですわ、親切ですわ、そして女の氣持をよく呑み込んでゝくれますわ。

勇吉。(眼をクルクルさせて) 何うしてそんな事を云ふんだ。彼奴に欺されやがつたんだ。

春枝。イヽエ、女の私があの眞珠の首飾りを欲しがるのは、尤だ。男が名譽とか、位とかを欲しがるのと同じだといふんです。そして何なら自分で一時融通して上げてもいゝから買つて置けとまで云つて下すつたんですが、それは私が斷りました。

勇吉。そんな事を云つて、女をたらすのが彼奴の手なんだ。恐ろしい詐欺師だ。

春枝。まア先をお聞きなさい、それからカルタをやつて、賭をする事になつたんです、それからあの方がだん／＼負け越して、とう／＼あれを私に贈つてくれる約束をしました、……貴方、善いでせう、これなら何も恩に着るわけはないんだから？

勇吉。(だん／＼蒼白になつて、)それが、女の心を呑込んでるといふのか？大馬鹿、五円十圓の品物ぢやない、あんな高價なものを目的がなくつて……卑しい目的がなくて、誰が買つてくれる約束なんかをするものか？カルタなんてペテンだ、己を欺してるのか、それとも汝が欺されてるのか、どつちかだ、サア、その先を云へ、その先を云へツ。

春枝。(平氣らしく) その先つて何にも？

勇吉。あの男は恥も外聞もない、自分のしたい事は何んでもやる、獸のやうな奴だ、汝は、いつもの連れもなく唯つた一人そいつの部屋へ入つて、長い時間一緒にゐてそんな約束なんかまでしたといふんだらキツト體を自由にされたんだらう。なぐさみものになつたんだらう、云ツちまへ、まつ直に云つちまへツ。

春枝。（落着いた口調で）ホヽヽ、まアとんだ邪推を廻すのね、いくら何んだつて淫賣婦のやうな眞似が出來ますか？

勇吉。しらを切つたつてだめだ、いくら女が欲しがるからつて男が女から何の報酬も求めないで、高價な物品をムヤミにやつたり、くれたりするもんか？そんなお伽噺にはもう子供だつて欺されやしない、相手が殊に札附のあの男子と來てる、汝が弱味を見せたので、直にその隙に附け込まれたんだ。

春枝。それが私の弱味だつたら何ぜ貴方はそれを他人の目に見させたりするのです。札附の男子か何うか知らないが、あの人は金なんか何んとも思つてやしませんよ。こんなモノがある爲めに人間はせんでも善いよけいな苦しみをする、はては生命まで取られる、バカ／＼しい話だ、金ですむ事なら、自分は誰の爲めにでも、たとへ敵の爲めにでも、ありッ丈のものは投出して救つてやるつていふんです、金もよつ程お持でせう。二千や三千は何んでもないんでせう。

勇吉。フン、その男が、あの未亡人から五圓、十圓の小使錢をせびつたつていふぢやアないか？大法螺を吹いて恐らく見せかけやうていふんだ、それを眞に受ける大馬鹿があるか？

春枝。私の事をかれこれ云つたつて、貴方だつてあの未亡人さんに丸めかけられてるんぢやアないの？何しろ金には不自由しない女らしいから、乘換へて見やうかて氣が、チョトくらいないんでもないんでせうね？

勇吉。汝なんかとは違ふさ、女つて奴は、金だの、品物だの、眼前にぶらついてりや、餌を見附つけた魚か何ぞのやうに、后先見ずに飛び附かア。だが男つてものは、餌の後に喰附いてるつり絲に目を附ける、いくら金持だつて、あんな身を持くづした未亡人さんなんかに喰つ附けるか？汝がチョト氣に入つてこんなことになつたんだから、もうそれで押通さうて男の意氣地だ、そいつを忘れて、あさはかな、あんな奴の奸手段に引つかゝるなんて、腹が立つて堪らな

い、隠さずに皆、云つちまへツ……云はんか？

春枝。(冷静な口調)そりやあなたの氣持はよく分つててよ……だが貴方だつて、株ぢや失敗じつたんだわ。その釣針が喉にかゝつて、おかげで二人がもがいてるんでせう。

勇吉。大馬鹿、…今、何もそんな事を云つてやしない、…白状しろつて云ふんだ、…あの男子になぐさまれたどろ？云つちまへつて云ふんだ。云はんとひどい目に逢はすぞ。

春枝。(投げやりな調子で)そんな事はないて云ふに、信用せなけりや仕方がないわ……だがね私たちは世間を狭めた危い罪人ですよ。たとへ無事に逃げ延びられた處で、その先、何をして暮らして行けるか？それも考へて見なけりやなりますまいよ。

勇吉。だから贅澤な品物なんか買へないんだ、それが分らんのか？

春枝。それは大した事ぢやないわ…それよりか、生きる爲めには何をしたつて善いつて、貴方は何時か云つてましたね。私もスツカリさう思ひ込んでますわ、だからこの先き、愈に行詰まつたら私は體を賣つてでも貴方を養つて行く氣でゐるんですよ。

勇吉。［］は汝にそんな眞似はさせない、させるもんか？

春枝、キネマのスターなんて、そんな事はさし當り空想でせう、だから私はもう何處までゞも身を落すつもりよ。ほめられた事ぢやないがのたれ死するよりはズツとましだと思ふわ。

勇吉。(急に頭を押へて)アツ、ぢやア汝、あのカフエーにゐた時からそんな眞似をやつてやがつたんたな、思ひ當らア、

春枝。そんなことはないわ嘘です、嘘で、……。

勇吉。イヤ、そんな噂は己も信用しなかつたがやつぱり、嘘ぢやなかつたんだ、あの男の目出になる位何んでもないんだらう、この賣婦め…この女給め。…（つかみかゝる）

春枝。（抵抗ながら）さう云ア汝さんだつて公金を遣ひ込んだ局員ぢやないか？

勇吉。己のは、金に目がくれたんぢやアない、腹癒をた運試めしだ…日頃胸先に詰まつてた不平が…肝癪玉が破裂したんだ。

春枝。私だつてつまりは同じよ、日頃から惜しい、欲しいと思つてたものを、捥り取つて見たかつたからさ、それに汝さんは少とも私に滿足を與へてくれないぢやアないか！

勇吉。ぢやア汝は己をそんな手段には使ふとしたんか？

春枝。汝さんだつて、さうよ、私が唯、手近にゐたもんだから、女欲しさの道づれにしたんぢやないか！

勇吉。さうぢやアないていふに、やつぱりをまへといふ女が欲しかつたから、あんな眞似もやつたんだ、金さへありや己のものになる、そいつを他人に取られちや殘念だと思つて盲目になつてやつたんだ。

春枝。まア、さうした氣持もあるにはあつたでせう。だから私だつて、何處までも汝さんに忠實だわ、汝さんのためには何んな眞似でもする――自分で忌な事でも平氣でする、さういふ決心をしたのよ、分つて？

勇吉。何を云つてやがるんだい？、現在、品物のために、そんな自墮落な眞似をやつてやがつて、お爲めごかしにするとはづう／＼し過ぎら。

春枝。そりやア汝さんの爲めもあるが、私の爲めもあるのよ、そこは大目に見てもらはなけりやね。

勇吉。（ヘイキなり、なぐる）コン畜生。もう赦さんぞ。

春枝。まア、…ひどい人…まだ私、そんな事をしやしない。疑るのも大抵にしたが善いわ。
勇吉。口先でゴマかしたつてだめだ。
春枝。ぢやア云つて上げるわ、今晩あの人の部屋へ行つて、約束のものを貰つて、それから一緒にダンスへでも出かけませうと、それ丈の事は云つたの、マサカ空切手で體を自由になんかさせるもんですか？
勇吉。何？ぢやア今晩行くて約束をしたのか？
春枝。それまで、イヤだとは云へないわ。
勇吉。(睨み付けて)ぢやア貴様は己を見捨てる氣だな？
春枝。オヤ、何うしてそんな事を云つて？
勇吉。一たん、身を汚したから、もうそんな了見になつたんだ…今晩二人で何處かへ高飛するんだろう、己を縛らせるのかも知れない、そんな事をさせるもんか？(いきなり首へ手をかける)
春枝。(苦しさうに叫ぶ)しめ殺すつていふの？…汝さん、私を殺したら自分も殺されるよ…いゝかい……。
勇吉。(手をゆるめる)…さア白狀しろ……あの男に自由にされたと白狀しろッ。
春枝。(強情に)まだそんな覺えはないわ。
勇吉。何處まで剛情なんだ。
春枝。汝さんこそ疑ぐり深いんだ。
勇吉。人を馬鹿にするない、…己には汝が殺されないと見くびつてでもゐるのかい？
春枝。フンそりや殺せもせうがね。後ですまなかつた、はやまつたつて、後悔しても追附かんよ。

勇吉。(躊躇する)ぢやアほんとうの事を云へッ……隠さず云つちまへッ。
春枝。(凄く笑つて)私はほんとうの事を云つてるんだ、罪もないものを殺したけりや殺すさ……。
勇吉。ほんとうに罪がないのなら……ほんとうに潔白なら……己は頭がヘンになつた。
春枝。罪もないものをマサカ殺されやしまい、……何うしても殺さなけりや氣がすまないなら私が死んだ眞似をして上げても善い。
勇吉。(叫ぶ)己れは道化役者ぢやないぞ(いきなり飛びかゝつて、首をしめて、ねぢ倒す……)
(ドン〳〵と扉をたゝく音……やがてはげしくたゝく)
(勇吉飛び上つて、周章てながら、スヰッチを捻る、室内暗黒……大きなガラス窓越しに赤青の丸の中に生命保險のイリユミネーションが現れて明滅する、扉はドン〳〵と叩かれてゐる)

(幕)

第三幕

(山中、)

下手から正面、奥へかけて鬱蒼たる杉林、下手、前寄りには幾抱へもある老杉の巨幹がならんでゐる。前面から上手奥へかけて廣い斜面の畑地が遠く開け、その遙か向ふは又杉林になつてゐる。
空は青く、朝日が輝き、鳥がピロ〳〵と鳴いて飛廻つてゐる。

○

百姓姿で、鍬をかついだ龜藏、その後から同じ百姓姿で、鼻頬冠をした勇吉の姿が杉の間の小道から現れて來る。

龜藏。鳶が鳴いてやがる、……今日は善い天氣だ。

勇吉。（空を仰いで）さうだなア……斯うして晴れ晴れしたお日様を拜むのは善い氣持だ。ほんとうに生き返つたやうな氣がすらア。

龜藏。己ら、勿體ないが年中、慣れツ子になつてるだで、當り前のやうに思つてるが、成る程汝にはさうだらうな……あの穴倉に潜り込んでまるで、晏鼠のやうな目を見てたんだからなア、……外へ出て日の目が拜まれりや、後は何うなつたつて構はねえつていふ氣になるのも尤だ。無理のねえ事つた。

勇吉。兄さんがいろ〳〵心配してくれるのは難有いが、何、見附かりや見附かつたつて仕様がありませんや、あのまゝ潜り込んでたら、濕氣がひどいからそれ丈でもくたばりますさア。

龜藏。何アに、この裏山なら、人ツ子一人寄り附かねえ處だから、まア、大丈夫は大丈夫だ。己の方が大事を取り過ぎてた位なもんさ。（と切株に腰をかけて、烟管を出す）

勇吉。（も傍へ腰を下ろし）イヤ、私も斯うしていつまでもお探ね者で、追駈け廻されてるやうで日陰へばかりかゞみ込んで息を詰まらせて暮らしてるんぢや、生きてるのやら死んでるのやら分らない、いつそ自首して出て、一思ひに首でも絞められた方が、氣樂だと思ひますよ。ハタへ迷惑のかゝらん丈でもましでさアね。

龜藏。イヤ斯うなつちや、汝が自首して出たつて、マサカ首を絞められる心配丈はあるまいよ。絞め殺したと思つた女

が、息を吹返したと見えて、汝の事を問合せの手紙なんかよこしてるんぢやアないか？　確あの女の手跡だつていふんだろう。向うも悪運は強いが、これで汝も助かつたんだ、未遂罪ならこつちの生命にも別條はないからな、己らアホツとしただ。神棚へお燈明を上げて拜んだぜ。

勇吉。（俯向いて）兄さんたちは喜んで下さるが、私は私の意久地なしに、ホト〳〵愛相を盡かしたんでさア、ヘマ許りやりつゞけて空元氣や、空威張りする事しか、自分には出來ないかと思ふと情けなくなつて來まさア。しまひには、自分の手で首を縊る事さへ出來ないのぢやないかと思ひましてな、やつぱり政府の手でやつて貰つた方が確かだから自首して出て序でに絞殺して下さいつてお願ひしやうと思つて居るです。

熊吉。何て馬鹿な事を云出すん、少しヘンだよ、汝は一たいそれ程弱音を吹く男ぢやなかつたぜ。いつか東京で會つた時も、なか〳〵威勢は好い、大きな口は利くが、やつぱり確かりしてると思つて、己は安心した、尤も己と別れてから後でとんでもない失策をやらかしたが、あゝした金の大渦卷を見てりや、誰だつて目がくらくらして落込むのに不思議はねえ。汝一人悪いんぢやねえ、見殺しには出來ねえと思つて、己は四苦八苦の目には逢つたが汝の使ひ込んだ金丈は辯償してその方の罪の輕くなるやうに、チヤンと願ひは出してあるんだぜ…。

勇吉。（つらさうに）ア、ア、もうそれを云つて貰つちや堪らなくならア…そりやね、あの時、私の運が善かつたら、こんな事にはならないし、兄貴にとんだ大迷惑をかけいでもすんだんだが、私といふ人間にはやつぱり運がない。イヽ意久地もないんだ、そう思ふと、スツカリ自信も何も無くなつちやつて、何一つ出來ない男子だ。生きる事も、イヽ死ぬる事も出來ない男子だと思へて來て仕樣がなくなつたんだね。そりやあの女を殺したのを、後悔もしたし、苦んだり悶えたりもしたが、それさへ何うやら殺し損つたんだ、やツぱり生きてゐやがるんだと分ると、自分は男子ぢ

やない、當り前の人間ぢやない、まア生れ附の道化役者だ。人に笑はれる爲めに生きてるんだ、人を笑はせる爲めに生きてるんだ、そんな情ない、悲しいイヤな氣持がして、頭がダン〳〵ヘンになつて來るんでさア。

鵜藏。オイ、確かりしてくれ、失策をやつたり、ヘマをやつたりしたつて、別に恥にやならねえ、それは汝が、ほんとうに根性骨の曲がつた惡人でねえて證據になる位なもんさ。己には唯つた一人の弟の爲めだから、と思へばこそ、苦勞も苦勞にしちやゐねえんだよ、己の氣持が分りやもつと確かりしてくれ、下らん事を考へるな。

勇吉。そりや兄さんの御恩は忘れやしない、……忘られるもんですか？ア、して村の高利貸にさん〴〵虐められてゐなさるのも皆私がさせたんだ。私のせいだと思ふと、只濟まないと許り云つちやゐられない。……こんな生命なんか要らないから飛出して、彼奴と刺し違へて死なうかと思ひつめる事もあるんだが……。

鵜藏。馬鹿を云へツ、そんな事は己に任せてをけ、何に、彌々となりや素ツ裸になる了見なら、マサカ身の皮まで剝いで行かうたア云ふめへツ。

勇吉。私はあの高利貸の顏をソツとのぞいて見たが、或る程、人鬼つて面相をしてまさア……ホテルで逢つた船長つて男にも何處か似てやがる、……人鬼だの、ゴリラだの、でなけやとても世間には勝てないんだ。自分なんかダメだと思ふて獨自に涙が出て來てね。……

鵜藏。女々しい事許り云つてちやいけねえ、まア考へても見な……失策つたり、ヘマをやつたりしたにしろ、とにかく汝は公金で株をやる……不貞腐れの女を殺す……いかにも大膽不敵な事をやつて來たんだ。己れだつて何うせ一生だ、思切つた事をやつて見たい〳〵と思ひながら何かつい此の歳まで、土にかぢり附いてぐつぐずに老ひ込んで了つた。つまらないなと後悔する事もあるんだぜ。

勇吉。(兄を見て) 兄さんもそんな事を考へてゐましたか？

龜藏。(苦笑、)そりや汝、人間一匹が心の中で考へてゐる事を一々行つた日には、何んな事が持上つて來るか知れやしねえさ。ヤレ世間體だとか、義理だとか、面倒臭いとか、その中でも、まかり間違へば自分の生命にかゝる、女房子が不憫だ、さういふ事から後ろ髪を引かれて、ついそれなり、グズ〳〵ベツタリで、その日、その日を無事安穩に暮しさへすりや善いで納まつて了ふんだ。それがほんとうに善いか、惡いか一口に云ひ切れねえ、汝はまア一通り、それとは違つた眞似だけでもやつて來たんだから善いとしとけ。

勇吉。(兩手で顏を蔽ふ) 眞似だけだから倚みじめだ。どつち附かずの人間だもの…イヤ、やつぱり道化役者なんだらう

龜藏。(小首を傾け、)イヤ、何うも汝はヘンだぞ、……考へ込むのは體の毒だ、一つ仕事にかゝらうよ、働くのが一番善い。

(鍬を揮つて、畑を打出す、勇吉もそれに倣ふ)

龜藏。…はゝ、少い時、持つた丈あつて、鍬の持ち樣がうまいや……

勇吉、(土を掘返しながら) 子供の時覺え込んだ事はなか〳〵忘られんもんぢや……やつぱりこの方が性に合つてるかも知れんね。

龜藏。(土の塊を碎きながら) 汝もさうやつてつゞけて來てたら、あんな失策もせずに濟んで來たゞらうにな……尤もこんな事ばつかりやつてるだと、くさ〳〵する時もあるにはあるが……まア何ちも下らねえと云やア下らねえだ。

勇吉。押しつめて見りやそんなものかも知れねえが何しろ、こうして黑土の匂を嗅ぐのが嬉しくて堪らない……(しきりに鍬を揮ふ)

龜藏。…ハヽ……コラ、見ろ…去年の馬鈴薯の掘殘した奴が、土の下でこんなに青々した芽を吹いてやがらア、可笑なもんだ（と摘み上げる）

勇吉。（見返つて）さう云やア天道樣つて眞つ當なもんだなア……。

龜藏。（しきりに土を掘返しながら）ウム、…そりやこつちが正直に汗流して働いたら、チヤント之れだけの御當がひはあるんだからな、よくしたもんだよ。

（二人は默々として鍬を動かす）

勇吉。私もいつそこのまゝ百姓で居附きたくなつた、刑を受けるなら受けて來てな……。

龜藏。ウム、そりや善い考へだ…己も勸めるぞ。

勇吉。だがね……邊が斯うシンとしてると何んだか物に襲はれるやうで、ゾツとして來るがなア……。

龜藏（振返つて見ながら）そりや汝がこんな山ン中に馴れないせいだぞ……ア、蝸牛の甲羅が鍬先にかゝつて、みじんに破れやがつた……。

勇吉。（默つて、鍬を杖について立つてゐたが）兄さん、あそこの向山の杉林の中から絲のやうな烟が立つてるぢやないかな？

龜藏。（頷いて）ウム、あれは炭燒の烟だ。

勇吉。ア、さうか…成る程あんな處にでも、住めば住めるんだな。

龜藏。家の炭竈は、あの山の尾根を越した向の雜木山の中だ、この頃はあのつんぼ爺さんに預けツ放しだが、何うなつたかな？

勇吉。私はもう何うせ二度と世間へ顏出しは出來ないし、又、出したくもないんだから、いつそそんな山奥へでも行つて、猿や鹿の友だちになつて暮さうかな。

龜藏。(快活に) ウム、そいつも善いか知れんぜ、人間交際つてイヤなもんだ。

勇吉。だが、邊があんまりシンとしてるのも何んだか恐い、……こゝでさへ山だの、木だの、それから空だの、雲だの、皆默り込んで、ひつそりし過ぎてるので、こん度は、自分の氣のせいか耳の中の方からいろんな、ヘンな響が出て來やがる、蓄音器の圓盤見たいに、都會の眞ン中で吹込んで來たらしい、いろんな機械のガタゴトかみ合ふ音だの、ギーく軋る音だの……それはまだ善いが、こん度は眼の前にまでゐの男……あの女の、あの時の顏までが……

龜藏。(氣遣はしげに) コレ…コレ…又してもそんな事を……何も考へないで、せつせと土をほじくるんだ、一生懸命に、働いてりや、いろんな妄念なんか出て來る隙はねえや、……な……。

勇吉。(狂へるやうにせツせと鍬を動かし始める)

父さんよー……父さんよー…(と叫する聲)

龜藏。(耳を傾け) 己らの事かな……誰だろう?

勇吉(鼻頰冠をして)…何うしませう?

○。父さんよー……父さんよー。の聲

龜藏。ア、、嫁めだ……辨當でも持つて來やがつたかな、彼奴、頓狂だから大い聲なんか出しやがる。仕樣のねえ奴だ

……(杉林の中をのぞき込んで相圖らしく鍬を高く上げて振る)

おせき。(頭に手拭をまいて、出て來る、四十恰好の古女房、尻端折つてゐる、こちらを見ると息せき切つて近寄る) 父

さん――こゝだかね、己ら又、向ふの畑かと思つただで……。

鬼藏。(叱るやうに)何んで又、大い聲なんか立てるだい、とんまな奴……

おせき。(ハア〳〵云つて、近づきながら、)汝さん、大へんだぞ、大へんだぞ…何うしたらよかつぺゑ。

鬼藏。何が大へんだい(云ひながら四邊に氣を配る)

勇吉。己ア何處か隱れたが善からうか？

鬼藏。まア、ヂツとして、しやがんでろ、…そこの茶の木の陰が善い。

おせき。(息せき切つて)汝さん、大へんだ……。

鬼藏。何が大へんだい、周章くさらんで早く云へッ。

おせき。あの女がやつて來たゞ、いつか手紙よこした女がとう〳〵押しかけて來たゞ、…もうズン〳〵こゝまで上つて來るだよ。

鬼藏。エ、女が來たゞ？　何處の誰だ？

おせき。ソレ、勇吉さんが何うかしたつていふ女だ……

勇吉。(ドギマギしながら)エ、姉さん、ほんとうかい？

おせき。ほんとうにも何んにも……あつちから二度も三度も間合せの手紙よこしても、こつちで何の返事も出さなかつたで、しびれ切らしてとう〳〵、自分で尋ねに來たつていふんだ。そしていろんな事根掘り葉掘り聞くだで、まア待つてくらッせ、家の人に聞いて來るからつて、裏口からそつと拔けて山へ上ると、何時の間にか、その女が、見え隱れに後をつけて來るだ。私、何うせうかと思ふて、いろ〳〵途をかへたりして見たが、何うもこゝへやつて來さうだ

から、聲を立てゝ父さん呼んだんだよ…勇吉さん、隠れんでも善いかい？

龜藏。刑事らしいものでも連れて來はせんかい？

おせき。イヤ、たつた一人だよ。

龜藏。何んな風をしてるんだ？

おせき。あんまり善い身姿(みなり)でも無い、病氣上りのやうで顏色も青いが、チョツと別嬪は別嬪だ、勇吉さん、逢ふても善いかい？

勇吉。(當惑さうに)何しに來やがつたんか？……己には殺せねえんだつてからかひにでも來やがつたんか？…それとも犬かな？何に、もう逃隠れするもんか、逢つてやろ……

龜藏。ウム、何しろ逢つて話を聞いて見るが善い、とにかく、本人がまだ生きてるなら、汝に人殺しの罪はかゝらねえんだからな。

おせき。ぢやア逢つても善いんだな…。

勇吉。(呟く如く)たしかに絞め殺してやつたと思つたんが…やつぱりピン／＼してやがるのかなア…逢ふのも面目ないなア。

おせき。呟レ、あそこの杉の木の蔭に、チラ／＼衣物が見えらア……ア、此所が分つたらしい、(手を上げて)オーイ……。

龜藏、トンチキ奴…大(でか)い聲を出すでねえ。

おせき。でもこつちに罪はかゝらねえつて、汝さん、云つたでねえか？

龜藏。でもまだ大(でか)い聲なんか出せねえんだ。

(勇吉は、瞳をすえて見てゐる)

(春枝は絹傘を杖いて、杉の幹の間に現れる)

春枝。(暫らく見つめて) マア、貴方……チョツと見違えるわ……(近づいて來て) 私も死損ねたんですよ。

勇吉。(ボンヤリして) ウム……己ら何んとも云へねえ。

春枝。(笑を作つて) でもマア善いわ、二度御目にかゝれたんで……私、嬉しいんです。(感傷的に泣く)

勇吉。己を怨んでるかい?……それとも笑つてるかい?

龜藏。(横合から) 己ら、この勇吉の兄だ、汝さんには一寸と會つた事もあるな……何しろ勇吉が汝さんを締め殺したつていふんで、取返しの附かねえ事をやつてくれたと、己らひどく心配したが、幸ひ助かつてお互に何よりよかつた、でも未遂罪つて奴はかゝつてやらうな。

春枝。(快活に) イヽエ、私が係の役人にうまく云つときました、……殺された眞似をしたつてね。

勇吉。何に眞似をしたツ?

春枝。貴方だつてさうでせう、本氣で……殺す氣でなさつたんぢやアないわね……。

勇吉。ほんとうにさう思つたのか?

春枝。(愛相よく) まア、さうしてをきませうよ、でなけりや後が面倒よ。

龜藏。始めから殺す氣ぢやなかつた。ウム、それが善い、それが善い、……まア、そこらへ腰を下ろして、休んだが善いだらう。

おせき。ぢやア汝さん、一寸と氣絶したゞね、勇吉さんはそれを死んだと思違ひしたゞな……。

春枝。(腰をかけて) まアさうなんですよ……よくある夫婦喧嘩よ。

おせき。若い者同士だでなハ、、、、、。

勇吉。(苦い顔をして) 今更、云ふのは耻ちだから默つてやうとは思つたが、一たいあの時、汝は已に嘘を吐いたのか? 眞實を云つたのか?

龜藏。殺された方で、怨みを云はない中に、殺した方が愚痴を云ふのはまア止しとけツ。後でゆつくり聞いたら善いぢやアないか?

おせき。それはさうだ、まア皆水に流して仲直りしたら善いだろうに……なア。汝さんもその氣でワザ〲訪ねて來たんだね。

春枝。(頷きながら) 何うしても、一度逢つていろ〱話したいから方々心當りを探がしてたんですが、今日はまア眞實によかつたと思ひますわ。

龜藏。手紙には細々書いてあつたやうだが、汝さんも隨分苦勞しましたな?

春枝。エヽもう、ホテルから警察やら檢事局へやら方々引張られて、勇吉さんの事でいろ〱責附けられました。公金横領の共謀の嫌疑がかゝつてるとか云つて、ひどく脅かされましたが、やつと私には罪がない事になつて放免はされました、けれどもさし當り食べるのに困つてカフェなど方々流れ渡りましてね。

勇吉。あの書長つて云つてた男は何うしやがつたか?

春枝。やつぱり詐欺師だとか、山師師だとかて、一旦察警へ擧げられたさうですが、うまく云ひぬけて放免になつたといふやうな事ですわ……でも貴方は、私を殺したと思つて隨分悩んぢやゐなかつたんですかな?

勇吉。若しや己の邪推ぢやアなかつたかなと、悔まん事はなかつた……。

おせき。なかつたどころぢやない、それは傍で見てゐられん程、沈み返つて、殺してくれの、悪かつたのと、言ひつゞけてね。

勇吉。（極り悪げに）罪のない者を殺したらこつちが悪いのだが、あべこべなら殺すのが當前だ、誰だつて氣迷ひはすらア……だが殺したんぢやないと分つたから、もう己は何も云ひたくない……。

春枝。（顏をのぞいて）貴方まだ怒つてゐらつしやるの？　私に愛相がつきて？

勇吉。イヤ、自分で自分に愛相が盡きたんだ。己はダメだ……己はダメだ？

總藏。（宥めるやうに）折角あゝして尋ねて來たんぢやアないか？汝ももつと打解けて物を云つちや何うだらう……（春枝に向ひ）マサカ汝さんだつて、勇吉の在り家が知れたら警察へ知らせてくれて、云附けられて、犬にやつて來たんでもなからうが？

春枝。いくら何んだつて、そんな眞似が出來ますか？さうまで見くびられちやしやくだわ。

おせき。マサカねえ、……こゝへも刑事は折々やつて來たが、今日までうまく逃れてたんでねえ……

總藏。ぢや汝さんは、元々通りに、縁を戻さうて氣でやつて來たのが本心だね？

春枝。（領いて）さうですとも、一度殺されたとしたら、二度殺さうとはなさるまいからたとへ私に悪い事があつても、それで帳消しにして戴いて、何卒元々通りにね。

總藏。元々通りにと云つても、勇吉は此から一度出る處へ出て所刑を受けて來なけりやならないから、直ぐとは行かねえし、その上、もう世間交際、人間交際なイヤになつたから、山奥へでも入つて、一生炭燒で暮さうなんて云つてる

が、汝さんもそこで一緒に朽ち果てる了見にでもなれるかね？

勇吉。（快活に）春枝、何うだ、一緒に炭でも燒く氣にはなれんかい？　そりやワザワザ尋ねて來てくれたのが、已だつて。決して嬉しくない事はないんだよ。

春枝。（驚いた眼色）炭燒ですつて？……それも善いか知れませんが、も一度、都會へ出て奮發して見ちや何う？貴方が所刑を受ける間、私は待つてゐますわ。

勇吉。（冷笑）フン、二度、道化役者をやらせるか？イヤだいイヤだい。

春枝。イヤ、堅氣な商賣でもして、こん度はジミに暮しやいゝわ……それにつけてあのダイヤの指環ね、貴方持つてらつしやるでせう？

勇吉。（ハツトして）あれがそんなに氣にかゝるのかい？……ハヽアあれに執着が殘つてやがるんだな。

春枝。さうぢやないのよ、あれは始めから萬一の場合の用意だつたんですもの…何うなすつて？

勇吉。（冷淡に）ありや神戸で賣拂つて了つたんさ。マア二束三文に……。

春枝（眼色をかへ）エ？　まアほんとう？

勇吉。神戸から外國船へ乘込まうと思つて、支那人にいろ／＼世話を賴んでる中、欲しいといふからタヾ同樣でくれてやつた。だが乘込もうまく行かなかつたんで、とう／＼この山ン中へ舞ひ戾つて、穴倉へもぐり込んでたんだ。

春枝。ぢやアあの眞珠は？……首飾りは何うなすつたの？

勇吉。（眼を睜つて）何をとぼけてやがる……。

春枝。貴方こそとぼけてるんだ…ぢやア云つちまひます。あの時にね、私、あの男の部屋で默つて自由にされました

わ……向ふでも品物で釣る氣だつたでせうが、こつちも承知で云ひなり次第になつたんです、……ア、した場合だから、少しでも金目の物は取込んで置かなけや先が氣がゝりだと、もうその思ひで一ぱいだつたもんですから。

勇吉。(カツとなつて) 汝れツ、今になつて白狀しやがつた、も一度殺してやる (とつかみかゝる)

飛藏。何するんだ、止せツ (と遮る)

春枝。(冷笑) フン、汝さんに人が殺せるかね？ ほんとうに道化役者だよ！

勇吉。兄貴、こんなに馬鹿にされちや生きちや居れないツ。

飛藏。こんな賣女なんか相手にするなツ。

春枝。賣女なら賣女でも構はないわ、……眞珠を……首飾を返しておくれ、私の體で買つたんだ。

飛藏。そんなものを持つてりや投げ付けてやれツ。

勇吉。夢を見てやがるんだ、空約束をして欺されやがつて。

春枝。……夢ぢやない、慥かに後から部屋へ持つて來てくれたんだ。

勇吉。慾に焦れてやがる……ぢやア死んでる中に、夢を見やがつた。

春枝。そんな筈はないわ、汝さん、隱して持つてるんだらう。

勇吉。(嘲る) 死んでる中に夢を見やがつた、慾に憑かれるんだ。

春枝。ヘン、さう云へば汝さんだつて、あんなに逆せ上つて、私を締め殺したと云ひながら、行がけに死人の筈の私の指から慥かにダイヤを拔いて行つたぢやないの？ 慾に憑かれちやゐなかつたんですか？

勇吉。(頭を抑へて)…………ウム己はダメダ……何一つの取柄がない、己はダメダ。

おせき。勇吉さん、確かりしなさいよ。

勇吉。頭がだん〳〵ヘンになる…己はダメだ…己はダメだ。

飛藏。(扶けて) コラ、確かりせんか、あんな賣女が何を云つたつて、相手にならんで置けや善い……(春枝に向ひ) ちや汝は、金目の品物が欲しいので、ワザ〳〵やつて來たんだな……それが本心だらう?

春枝。(硬張つた表情で) なけりやないで仕様がない……あきらめるさ。

飛藏。何をあきらめるんだ?

春枝。何んでも善いわ…體が資本さ。

飛藏。ハヽヽそこまで行けや女つて强いもんだなア……

春枝。强くても弱くても仕様がないさ。

(沈默がつゞく、鳶がピロヽと鳴いて飛廻る)

春枝。アラ…子供の歌が聞えるわ。

おせき。(耳傾け)…エ、…成る程…うちの子だらう…もう學校が退けたんだな。

飛藏。子供つて奴が一番のん氣で善いや。

(がつぽん〳〵(呼子鳥)の歌が次第に近づく。

(鳶がピロヽと鳴き廻る)

(沈默がつゞく)

庄吉。(十歳位の少年、筒袖) 父ちやーん…母アちやーん…ゐるのーッ! (遠くから呼ぶ)

龜藏。(應へて) オーイ…庄吉かい…學校はもうひけたか？

庄吉。アゝ！…餘所の伯父ちやんが來たよ」。

龜藏。エ…(云つて、勇吉に耳打する)

勇吉。(頭を抑へながら) イヤもう誰が來たつて構はない…誰かゞ來て、己れを絞め殺してくれりや非い…。己はダメだ…己はダメだ…。

おせき。餘所の伯父さんて、誰だらう！。

(庄吉が先に立つて、後から村の高利貸田村、六十ばかりのぼけ悸の老人、脊廣服、折りカバンを手にする、大鋸を負ひ、斧を手にした二人の木挽を從へ杉林の間から出て來る)

庄吉。(走り寄り) この伯父さんが、父ちやんに逢ひたいて待つてたのよ、大方、山の畑だらうて、一しよに來たら、やつぱりさうだつた。

田村。今日は…一家内で山の畑打ちかな？お客さんもあるなハゝゝ。

龜藏。(無愛相に) まだ利子を入れる日でもなささうだが？

おせき。ほんとうに、まだそんな筈はねえだが…。

(少年庄吉は、春枝の傍へ行つて立つ、春枝はニッコリ笑つて手招きして、そこらの蓬など摘む)

田村。(鼻で笑つて) イヤ利子ぢやない、元金の方だ…こゝの杉山の抵當の分は、返濟期限がもう二ケ月も前に切れてるのに、何の彼の話がゴタついて切りがないからな、今日は木挽を引張つて來て、目ぼしい杉へ斧目を入れさせる事

にした。製材會社の方でもヤイ／＼云うてせついてるのでな……。

龜藏。(顏色をかへ)それは利子を入れたんで、話は一たん附いた筈ぢやないか？一たい挨拶も無しに、人の山へ木挽を引張つて來るなんて、あんまり無法過ぎらア。

田村(冷酷に)どつちが無法だ、……期限が過ぎても、何ぢや彼ぢや云つて、いつも引張られて許り居る。あの利子で一ケ月け待つたが、…それは疾に過ぎたんぢや、さうさうふみ附けにされちや此方が堪らん……今日はこの杉の木の中の一番大きなのを二三本、木挽に挽かせに來た、急に入用なんだ……元利きれいに持て來てもらへや又話はその時にせう…オイ、汝たち、かゝつてくれ。

(木挽二人、烟草を吸ひながら、勇吉の方をヂロ／＼見て耳許き合つてゐたが、田村に聲をかけられ)へイ、ぢや取りかゝりすすべえ(手早く斧を揮つて、コン、コン打つ)

龜藏。(眞赤になつて、その方へ突進する)コレ、汝たち何するだ、…誰れが云ひつけて、己らのとこの木を伐るんだ？

田村。(遮つて)構はん、やれ、やれ……汝たちも忙しい體を、やつと己が引張つて來たんだからな。

龜藏。(興奮した口調)こゝの杉の木は、何代か前の先祖様が植え付けて、こんな大きな幹になるまでには百年も二百年も經つてるだ。無斷で先祖様の魂を伐るやうな眞似すると、承知せんぞッ。

田村。(冷かに)貸した金のカタだ、文句がありや金の耳を揃えて返しや善いんだ、借りる時には人助けだとか、何んと云つて泣付くやうにしやがつて、濟す時のえんま顏なんか見つともなかろう……先祖様を振り廻したつて、當世ぢやビタ一文にも通用せんからな。

龜藏。(慄え聲で)こつちや我慢に我慢して來たんだが、あんまり大きな口を叩くと、そのまゝにはして置かんぞ……こ

のあたりの百姓の生血を吸つてる人鬼め、たゝき殺しちやつた方が功徳だ……木挽衆止めろつていふにまだ止めんか？木挽、甲。へイ／＼……イヤ、實は手前共も、少々借錢がありましてな、利子拂が滯つたので、まア無理やり働かされてるんでございまさア

同　乙。やかましく云はれるので、泣く子と地頭であきらめて、仕事に來ましたんや。

田村。（險はしい人相になつて）己の云ふ事を聞かなけやひどい目に逢はせるぞツ、構はず早くやれ…やれツ……。

龜藏（やにはに鍬を振上げて）この人畜生めツ（打かゝる）

田村。（身をはし、杉の小楯に取つて）何するんだ、氣狂ひめツ……オイ木挽たち、この男は手向ひするから縛り上げろツ

龜藏。何んだと？（又打かゝる）

勇吉。（此時、ガバと起上つて、猛然駈來る）兄貴、退きなツ、こゝに要らない生命が一つあらア……何一つ取柄のない己だが、も一度やつて見らア……意氣地なしに、も一度やらせて見てくれ。

龜藏。汝こそ引込んでろ……こ奴は己が相手だ。

勇吉。汝は大切な人だ……女房子がある……引込んでゐなさい。……姉さん……あつちへ連れてお行き……。

おせき。短氣をしちやいけねえだよ（二人は前から押し、後から引張る）

庄吉。父ちやん、どうしたゞね？

龜藏。馬鹿め（頰を打つ、庄吉、ワーッと泣く）

春枝。さアこつちへお出なさいよ……いゝ子だから。

勇吉。(この間に、木挽の手から斧を奪つて)さア來いッ……こん度はヘマはやらんぞ……

田村。(大聲で脅すやうに)汝は誰だい?

勇吉。巳らは兇状持ちだ。

田村。ぢやアあのお探ね者の亀藏の弟だな。

勇吉。兄貴は巳のおかげで借錢したから、巳れがこれで拂つてやる……こん度こそ立派に拂つて見せるぞ(斧を振上る)

田村。アッ(と叫んで逃出す、杉の間を追ひまくつて駈入る。

木挽。コリヤとんだ事になつた……。カヽリ合になつちやかなわん(周章てゝ逃げ出す)

(杉林の奥の聲でワッと叫ぶ聲)

亀藏。ア、……とう〳〵やつつけたのか?

おせき。アッ……何うなる事だろう

春枝。ア、私もこん度こそ、ほんとうに殺されるかも知れないわ、何うせう〳〵(ウロ〳〵する)

勇吉。(血に染んだ斧を提げて、現はれて來る)

亀藏。(近寄つて)何うした?

勇吉。(朗かに笑て)やつつけた……こん度こそ見事にやつつけた……二度と生返らねえやうに頭の皿をメチヤ〳〵に叩きこわしてやつた……。

おせき。また大へんな事になつただね……。

庄吉。母ちやん、何うしたの？何したの？

おせき。まア默つておいで。

勇吉。（見廻して）あの女は何處へ行きやがつた？これでも人が殺せんと思つこやがるか。

鍋藏。ウム見事にやつたらしい……だが己が自分で手早くやつけたら汝にこの罪はかゝらんにな

勇吉。己は直に自首して出らア……汝たちにかゝり合になつても困るからな……行くよ兄貴、たつしやにな……姉さん世話になつた……庄吉、大きくなれ……あの女は何うしやがつた？

春枝。（慄えながら出て來る）今度こそ一思に殺しておくれ。

勇吉。（朗からに笑つて）見事にやつつけたぞ、これでも道化役者か？

春枝。一思に殺しておくれ。

勇吉。汝なんか殺してやる値打もないんだハヽヽ（鍋藏が手を握る勇吉も默つて顏を見てそれから一さんに杉林の中へ駈入る）

庄吉。伯父さんは何處へ行くの？

（おせきも、鍋藏も春枝も暫らく無言唯凝立して同じ方向を見送つてゐる、）

（鳶がヒルル、ヒルルと鳴廻る）

（幕）

編輯だより

◇金權の附馬ではなかつたが、金權の婿であり、それのために榮達の早かつた加藤君の死は意外ではあつたが、さて其死が果してどう云ふ感激を我々に與へたか？　時代は恐ろしいものだ。彼はさしたる經綸もなく、抱容力も少なかつた。理想の低いことは原敬と五十歩百歩ではあつたが、嘘をつかぬことのみが際立つ。して見ると、今の政治家の常識は嘘つきといふことになる。

◇若槻君は苦勞人と云ふのが取柄であるが、聰擾といふ舊時代では誇らはしいずるさは原と比較すべきである。その財政眼もちう舊時代ものであり、そして經綸のない點は加藤、田中、床次等皆お互樣で、こう云ふ連中がいつまでもウヨ〳〵蠢いているのが心細い限りだ。所で、不思議なことに思想も、時代も違つている大學卒業生が就職する際、理想の政治家はと試驗官に質問さるると若槻とか、床次とか濱口とか云ふのだそうな。オベツカもここまでくると愛嬌ものだ。イヤ生存するための嘘の效用でもあらう。

◇武者小路氏の「愛慾」は世界的の力作である。夏目さん等の持たない雄大なものに我國の小說家の手がついたやうで、肩身の廣さを感ずる。これ程感激をなげかけた大作は近頃にはないと云つても差支あるまい。近く本社より出版される。

◇社會科會三月號の竹内謙二氏のモンテスキューの研究は堂々百四十枚の學究的大論文で讀者必讀の文字だ。

◇「解放」二月號の片山潜氏の通信中、本誌に寄稿されし稿料不齎のこと及本誌が一部も贈つてないとのことがあつたが、あれは全然の間違ひである。稿料は北京及倫敦の加納氏米國の石垣氏等に宛てて送つてあり、又、本社員鏡平名君を通じても送つてある。そして本誌は在米の石垣君に宛て每號片山氏の分二册づつ、及北京の加納氏宛に贈つてゐる。何かの手違ひで氏の許に未着であれば甚だ遺憾である。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	增大號共 郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	增大號共 郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發す
▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾五年二月廿日　印刷納本
大正拾五年三月一日　發行

（價八十錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　山本三生
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷人
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

經濟學博士 本庄榮治郎著 （新刊）

近世農村問題史論

定價貳圓參拾錢
送料二十二錢

日本社會史の姉妹篇出づ

國民の大多數を占むる農民の歷史が國史に缺如せる事は久しく指摘された所であるが、遺憾ながら我が學界に此の缺を滿たすべき良書がなかつた。本書は嚮きに「日本社會史」を公にして學徒の渴を醫した本庄博士が上述の缺陷を補ふべく著されたもの、內容は左記の如く主として德川時代以來の農村問題を事實の示す所により解明せんと企てられしもので、正確なる史實を經とし透徹せる史論を緯として、近代日本の農村生活、其社會經濟制度、幕府の政策等細大洩さず論述されてゐる。日本國民の眞の歷史を知らむと欲する士。殊に現代農村問題社會問題に於て正鵠なる論據に立たんとする學徒の必讀の良書たるを信ず。

（內容）
（一）農村問題の意義（二）農業土地租稅制度（三）農民政策の根本問題（四）農民生活の困難（五）人口の減退及び勞力の缺乏（六）田地の兼併及び荒廢（七）小作制度及び小作問題（八）凶荒に對する政策（九）農民暴動（一〇）近世農村問題の特質

本庄榮治郎著

日本社會史（廿四版）

定價貳圓五十錢
送料廿四錢

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可



株式會社秀英舎印刷